

He have gone to Gensokyo.

風峰 虹晴

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺は死んだ…。そして、新たに幻想郷で第2の人生を送ることになった……………

→炎火の立ち絵です。保存は遠慮頂きます。

→友人のA・Hさんに書いていただきました！こちらも保存はご遠慮頂きます。

→凜乃の立ち絵です。勿論保存はご遠慮願います

# 目次

Part 1	転生	1
Part 2	初戦闘①	3
Part 3	戦闘②	6
Part 4	永遠亭	8
Part 5	初仕事	11
Part 6	てる	14
Part 7	紅霧異変①	18
Part 8	紅霧異変②	20
Part 9	紅霧異変③	24
Part 10	紅霧異変④	28
part 11	宴会	33
part 12	再び訪れる異変	40
part 13	春雪異変①	44
part 14	春雪異変②	47
part 15	春雪異変③	50
part 16	春雪異変④	55
part 17	宴会（春雪異変編）	58
part 18	日常の中	73
part 19	狂気	77
クリスマス特別編	メリークリスマス	82
キャラ設定	紅魔郷以前までのキャラ	86
キャラ設定②		90
part 20	悪魔の妹、フラン	99
part 21	特訓と取材	103

正月特別編 あけましておめでとーございます!!

part 2 2 妹紅とのデート

part 2 3 ケイドロ

コラボ編① 出会い

コラボ編② 霊夢の面倒ごと

コラボ編③ 妖怪の山攻略

コラボ編④ 守矢神社と新生活

コラボ編⑤ いつもと違う日常

コラボ編⑥ 新しい面倒ごと

コラボ編⑦ 地底へ

コラボ編⑧ キスメとヤマメ

コラボ編⑨ 鬼の四天王

コラボ編⑩ 地底の奥深くへ……

コラボ編 1 1 地底の八咫鳥

コラボ編 1 2 宴会の知らせ

コラボ編 1 3 騒がしい宴会

コラボ編最終話 出会いあれば別れあり

コラボ編 再開の兆し

コラボ編 再開の前に……

コラボ編 向こうの宴会

コラボ編 グッバイ!!

part 2 4 能力の発覚

part 2 5 凜乃の急成長

part 2 6 妹

part 2 7 焰兄妹

part 28	兄の生活	232
part 29	妹は悩む	237
part 30	私と神様	242
part 31	環境の変化が激しい	247
part 32	突然の訪問	252
part 33	突き進め。恋する人間とその仲間達	257
part 34	その心を貫き通せ	263
part 3rd	エスカルゴの妻と子供	271
part 35	男を魅惑してしまう女の子	283
part 36	魔法と虫	287
part 37	家事係蜜音さん	293
part 38	虫の意地	298
part 39	救援	303
part 40	5年の年月と炎火達	308
part 41	退院	317
番外前編	仮面の戦士	323
番外後編	初戦闘と勇氣	331
part 42	蜜の糖度を高める為に	341
加工貿易に混じる不純物		345

## Part 1 転生

俺、焰 炎火はいつも通り普通に学校に行って、普通に授業を受けて、普通に友達と話して、普通に帰って…とにかく普通の生活を送っていた。しかし、ある日の下校途中、そこで俺の記憶は途切れた。

炎火「……………あれ？ここはどこだ？俺は一体……………」

俺は気がつくといつも下校するときの道ではなく、真っ白な空間に立っていた。そして、目の前には、美人のお姉さんがこちらをじつ…と見ていた。

「あなたは誰ですか？」

「私は神ですよ。」

…え？神？どういうこと？意味がわからないんだけど。なんで俺なんかの前に神様がいるわけ？そんで神様と話してるわけ？早々意味わかんないんだけど。

「まあまあ、お気になさらず。」

気になるでしょ!!？っていうかここどこ?!俺になにがあったんだ!?

「…その様子だと、自分に何が起こったか理解してないようですね。」

「俺の身に何があったんだ？」

「あなたは死んだんですよ。小さい子供をかばって。」

そうだ…俺は…なんで忘れてたんだろ…轢かれそうになった子供を助けて…死んだのか…………

「思い出したようですね。では、あなたに質問します。あなたはまだ生きたいですか？」

……………勿論!!当たり前だろ!?

「…なら、あなたを転生させてあげましょう。しかも、3つ、要件を受け入れましょう。」

……………マジかよ…めっちゃいいじゃねえか…

「じゃあ1つ目、ちゃんと体と記憶はそのままにしておいてくれ。」

「わかりました。2つ目はなんですか？」

「そうだな…じゃあ、2つ目は転生場所、東方Projectの世界に転生させてくれ。」

「…………オタク」ボソツ

「なにか言いましたか？」

「いいえ何も…」

「？一体なんなのだろう…まあ神様だし、何かあるのかな？」

「それで、最後の3つ目は？」

「んー…じゃあ、俺に特殊能力をくれ！」

「そうですか…わかりました。しかし、どのような能力かは、自分で見つけ出してくださいね？」

自分で見つけ出すか…中々難しいことを言うなあ…まあ、別にいいが。

「ああ、わかりました。」

「では、送りますよ…………。…次の世界では、せいぜい死なないように努力してください。」

すると、足元に魔法陣のようなものが現れる。そして、俺の目の前は真っ白な光に包まれ、目の前が見えなくなった……………。

「…………んお…………」パチパチ

俺は目の前に光が消えたと思い、目を開け、何回か瞬きをする。目の前に広がった光景…それは…………

竹。竹竹竹竹…………竹ばっか!!多分この場所は…………『迷いの竹林』だ……………。

「最悪じゃねえかあああ!!!」

## Part 2 初戦闘①

「はあ……………はあ……………」

転生してこの迷いの竹林に来てから数時間。いつになっても竹しか見えない。出口なんか見つからない。もうダメ挫けそう……………」

「はあ……………はあ……………」

でも、とりあえずここから出ないと何もできない。最悪の場合妖怪に殺されるかもしれない。だから、俺はひたすら歩き続けた。しかし……………」

「もうダメ！疲れた〜！」

俺は根を上げ、地面に座り込んだ。いつまで経っても景色が変わらない。そんな状況で歩き続けたら、マジで気が狂う……………」

「ここで少しの間休もう……………」

俺はバッグの中から水筒を出して飲んだ。ちなみに服装は俺の通っていた制服。持ち物は教科書やら弁当（空）やらなんやら…。水筒のお茶だつて多分もうすぐなくなる。そうなる前に、人里に行っておきたい。

「さて……………、頑張りますか。」

俺は再び立ち上がり、歩き出そうとしたとき、何処かで茂みがガサガサと揺れる音がした。

「ッ!？」

俺の体と思考は臨時体制に入り、周囲を警戒していると、目の前の竹林の中に、人影が見えた。

「?誰かいるのか?」

俺の緊張はさらに高まった。めっちゃ心臓がバクバク言ってる。そして、ついにその人影が正体を現した。

「……………?」

「……………?」

白い髪に白と赤の服とリボン。間違いない……………この人物は……………」

!

「藤原……………妹紅……………」



ヤバイヤバイヤバイヤバイ……!!いきなりEXキャラとか……  
「おい人間……なんで私の名前を知ってるんだ……?」

妹紅がそう言うのと、周りの空気が張り詰めて、少し気温が上がっていた。そして、俺は全身に大量の冷や汗をかいていた。なんかわかんないけどキレてる……

(早く……逃げないと……!!)

俺はそう思って走ろうとしたが、足が動かない。今になって足の疲れが……?いや、もしかしたら……いや、もしかしなくても……

(怖い……)

恐怖。その感情が俺の足を止めていた。

「なんで私の名前を知ってるのかって聞いてるんだよ……」

一歩ずつ、ゆっくりと、しかし確実に距離を詰めてくる。一歩一歩進むたびに気温が上がって暑い。けど、俺は暑さと恐怖による汗で、全身が冷たかった……

「……チツ、答えねえみたいだな……」

そう妹紅が言うのと、妹紅の周りに火の玉がボツ、ボツ、と現れ始めて……その数、ざっと数えて100以上。

「なら、力づくで吐かせてやる!!」

そういうと、妹紅は火の玉の弾幕を俺に向けて発射していった。……折角この世界に来たんだ……簡単に死にたくない……生まれ……生まれ……

「生まれえええええ!!」

俺は目を閉じて叫び、死を覚悟した……しかし、いつまでたっても火の玉が来てる様子がない、恐る恐る目を開けると……全ての火の玉が止まっている。妹紅も驚いてその様子を凝視している。……俺の声が火の玉に通じた……?なら……

「行け!!」

俺がそう叫ぶと、火の玉は一斉に妹紅に向けて発射され、妹紅は間一髪で躲す。

「てめえ……ふざけんな!!」

妹紅は完全にキレたみたいで、さつきよりも大量に火の玉を作り出

す。そして、俺は1つのことを試す。

「出てこい!!」

俺がそう叫ぶと、俺の周りにも妹紅と同じぐらいの火の玉が現れる。

(よくわかんないけど……やるしかない!!)

そして、俺と妹紅は同時に火の玉を発射し始めた。

## Part 3 戦闘②

「うおおおおおおおおおあ!!」

「はあああああああああ!!」

俺と妹紅はひたすら火の玉の弾幕を打ち続けていた。現在の戦況は……いや妹紅がリードしていた。妹紅が撃つ弾幕はある程度はこの力で妹紅に返すことができる。しかし、返しきれない弾幕は、俺は撃つことと跳ね返すことに集中していて、たまに体を少し掠つていく。しかも妹紅は弾幕が当たっても、不老不死なので回復してしまい、中々先に進まない状況だった。けど、このまま戦い続けていると、俺は負けてしまう可能性が高い。しかし、俺は戦い続けた。ただ、ひたすらに生きるために。

「チツ!!しぶとい人間だ!!スペルカード発動!!『インペリシヤブルシューティング』!!」

「す、スペルカード!?くそっ!!」

俺は妹紅のスペルに対し、俺は火の玉の弾幕の密度を増やし応戦する。しかし、スペルと通常弾幕では、流石に限界があり、俺は一発被弾してしまい、吹き飛ばされてしまう。

「ぐっ………はあ………はあ………」

「しぶといなああ!!」

俺は再び立ち上がり、諦めずに弾幕を打ち続けるが、何度も被弾し、何度も立ち上がり、その繰り返しが続いていた。けど、俺は妹紅のように不老不死ではない。だから、傷により、弾幕も薄くなり、それに伴って被弾数も多くなった。しかし、俺は諦めない。立ち上がり、抗い続けた。

「ツ!!しつこいなああ!!なんなんだよお前!!」

妹紅は何度も立ち上がってくる俺という人間に苛立ちを感じ、更に密度を増やして攻撃してくる。けど、俺は諦めない。諦めない。何度も、何度も地面に伏せても、大量の傷を負ったとしても、俺は……俺は……

「何度だって……立ち上がって……絶対に諦めない!!」

その俺の気持ちに呼応するように、俺の中に力が溢れる。俺の諦めない気持ちに、この能力が応えてくれる。今なら……勝てる!!

「喰らえ!!これが俺の……諦めない気持ちだ!!」

「チツ!!うるさああああい!!」

妹紅は俺の言葉にブチ切れ、自身の持てる力の全てを、俺にぶつけてきた。だから、俺だって全力で応えてやる!!

「スペルカード発動!!」

「!？」

一度も発動したこともないスペルカードを、自分の思いつきだけで発動しようとした。しかし、俺の力は応えてくれて、俺の周りに数個のマシガン形の形をした炎が現れる。それを見た妹紅は怖気づく。

「……ッ!!一体なんなんだお前は!？」

「俺は……!!今を一生懸命生きる人間だああ!!炎符『ファイアーマシガン』!!ファイア!!」

俺の周りに浮いている炎のマシガンが、とてつもない数の炎の弾幕を発射し続けた。あまりの速さに妹紅の再生能力も追いつかず、妹紅は気絶してしまう。

「勝った……のか……?」

俺は勝利を感じ取った瞬間、プツンと意識が途切れ、倒れた。

## Part 4 永遠亭

「……………ん……………ここは……………?」

俺の体は地面ではない、フワフワした何かの上にあつた。目を開けると、天井と、照明が俺の目に映つた。俺は上半身を起こし、自分の状況を確認する。俺は……………ベッドの上にあった。……………ここはどこだ?俺は確か……………妹紅と戦つて……………そうか、その後気絶したのか。

俺は頭の中で状況を整理していると、扉が開き、人が入ってくる。その人物は……………俺と戦つた妹紅であつた。

「!?なんでここにっ!?っていったあああああ!!?」

「動くなよ、お前傷だらけなんだから。」

俺は妹紅の忠告を素直を受け止め、ゆっくりベッドに上半身を横にする。そして、俺は妹紅に、気になって聞こえていたことを聞いてみた。

「ここは……………いったいどこなんだ?」

「ここは永遠亭つて名の病院だ。私がお前をここまで運んだんだ。感謝しろよ。」

妹紅は自慢げに俺に向かってそう言った。俺がボロボロなのはあなたのせいだがね!!俺はそう思いながら、ため息をつく。

「それより、お前は一体誰なんだ?なんで私のことを知ってるんだ?」  
妹紅が真剣な目で俺に向かってそう言った。その質問に俺はとても困つた。この事を言ったとして、果たして妹紅は信じてくれるのか?また襲つてくるかもしれない。……………まあ、他人の建物だから、暴れないと思うし、妹紅はそんな悪い奴じゃないと俺は信じてる。だから俺は話すことにした。

「俺は元いた世界で死んだ。そして神様が俺をこの世界に転生してくれたおかげでここにいるんだ。……………妹紅達のことを知っているのは、その元いた世界でこの……………幻想郷のことを知っていたんだ……………。これ……………信じてくれるか?」

妹紅は真剣な目で黙つてこつちを見ている。その目に少しビビつてしまうが、表情に出ないように、頑張つて感情を抑えた。

「まあいいや。お前が悪い奴じゃないことはわかった。さつき戦った時、お前に……その……何かしようとかさそういうのを感じなかった。だから、ひとまずはお前を信じてやる。」

「あ、ありがとう。」

俺は妹紅に、信じてくれたことを感謝した。まあ、最初は俺のことを襲ってきたんだがな……するとその時、再び扉が開いて人が入ってきた。学生服のような服に紫色の髪。しかし最大の特徴は赤い目と頭のうさ耳である。入ってきたのは鈴仙・優曇華院・イナバだった。

「あつ、目を覚ましたんですね。怪我以外に、何か異常はありませんか？」

鈴仙は、身をかがめて俺に言った。妹紅もそうだけど、東方キヤラはやっぱ美人ばつかな。俺はそれを痛烈に感じた。

「特には……大丈夫ですかね。」

「わかりました。師匠を呼んできますね。」

鈴仙はそう言うと、部屋を出て行った。俺は妹紅はその待っている時間に打ち解けようと必死に話しかけてみた。すると、案外あっさり打ち解けることができ、残りの待っている時間は妹紅とずっと話し合っていた。すると、扉が開き、鈴仙ともう1人、銀髪に、赤と青の看護師のような服を着た女性、八意 永琳が部屋の中に入ってきた。「こんにちは、私は八意 永琳と言います。ここで医者をしていきます。」

永琳先生が話しかけてきた。永琳先生と言えば、とても強い実力の持ち主だ。機嫌を悪くしないよう。俺は上半身を傷に触らないようにゆっくりと起こし、自己紹介をする。

「俺は焰 炎火といいます。」

永琳先生は、俺の顔を覗き込み、じつと眺め続けている。正直言って少し恥ずかしい。しかし、俺はそれを我慢する。

「ふうん……顔は悪くないのね。」

この発言に、正直俺は反応に困った。しかし、俺は永琳先生……いや、女性にそう言われたことが嬉しかった。

「あなた、かなり実力のある人間なのね。妹紅と戦って勝つなんて。」  
「あ、ありがとうございます。」

でも、正直言つてあの戦いはほぼほぼ運に助けられた。だから、もう一度戦つても、正直勝てる気がしない。

「あなた、ちゃんと住むところとかある？」

永琳先生は少し顔を微笑ませながら質問してきた。勿論俺にはちゃんとした住む場所などない。転生してから竹林ですつと迷つただけだから、住む場所など確保する時間がなかったのだ。

「いいえ……ありませんけど……」

すると、永琳先生は驚きの質問をふっかけてきた。

「あなた、ここで住み込みで働くつもりはある？」

「……………え？」

## Part 5 初仕事

「ど、どういうことですか？」

俺はここで働くか質問され、俺は途轍もなく混乱していた。それと同時に、かなり迷っていた。ここで働かせてもらえて、しかも住むところまで確保できるとしたら、俺にとってはかなりありがたい話だ。しかし、なぜ俺なんだ？

「ここには人間がいないんだ……そんな時、君がここに来たんだ。君は実力もあるし、人間である君がいると、人里の人間からの信用も、今よりかは手に入れられる。どうだ？お互いにメリットがあるだろう？」

うーん……確かに……けど、ここは妖怪兎ばかりなはず……まあいいや、贅沢は言わない言わない……

「なら、ここで働かせてもらっていいですか？」

「ええ、よろしくね、炎火君。」

永琳先生は右手を俺に出したので、俺も右手を出し、握手をする。そして、ここで働くことを決心する。……まあ、仕事は慣れれば大丈夫なはずだ……頑張るぞ!!

「じゃあ、とりあえず明日来るわ。まだ怪我也治ってないからね。」

永琳先生と鈴仙は扉を開けて部屋から出て行く。妹紅は、どうするかという……

「私はお前に怪我させた原因だしな。今日は泊まるよ。」

………らしい。ちなみにちゃんと許可を取っているみたいだ。結構責任感を持っているらしい。現在は夜。俺は怪我の回復に体力を使ってるみたいく、俺はすぐに眠気が来て、寝てしまった……。

翌朝

「ん………よく寝た………!」

俺は目を覚まし、体を伸ばす。窓から朝日が入ってくる。怪我はほとんど治ってるみたい……だが、まだ完全ではなく、昨日比べたら全然だが、痛い。妹紅はというと……椅子に座りながら寝ている。



「妹紅、朝だぞ、起きろ」

俺がそう声をかけると、妹紅は目を覚まし、俺と同じように体を伸ばす。妹紅も俺と戦った時の疲れは取れたみたいだ。そして、朝から妹紅と喋っている、永琳先生と鈴仙が部屋の中に入ってきた。

「おはよう炎火君、よく眠れたかな？」

「はい、おかげさまで……」

「ちよつと怪我の様子を見させてもらおうよ」

そういうと、永琳先生は俺の包帯を外して怪我の様子をチェックする。永琳先生の手が少しくすぐったいが、俺は我慢する。

「うむ……ほとんど治ってるみたいだ、素晴らしい回復力だね。だが、あまり無理はしないように。」

「はい……」

俺がそう返事すると、永琳先生は微笑み、怪我が治っていない部分にのみ包帯をする。包帯を巻くとき、痛かったが我慢した。包帯を巻き終え、永琳先生が離れると、俺はベッドから降りて、立ち上がる。

「さて……じゃあ炎火君。早速仕事をして貰えるかな？」

「は、はいー」

早速仕事か……一体どんな仕事なんだろう……俺は緊張しながら、仕事内容を聞く。その仕事内容とは……

「……この妖怪兎達の世話係をしてもらうわ。」

……ええええええ!!俺は口を開いてポカーンとして永琳先生を見つめる。……正直言って予想外だ。俺はてっきり、医療関係の仕事をするのかと思って身構えていたが、予想外すぎてびっくりだ。

「……ちよつと予想外って顔ね。……ここには普通の薬より危険なものもあるから、まずあなたには兎達と交流を深めてもらうわ。」

ああ……なるほど。確かにそりやそうか。まあ、折角の仕事だ。それに、別に嫌じゃないしな、驚いただけだし……

「わかりました。それで、どんな仕事内容で？」

「兎達の食事や、ちゃんと仕事してるかとか色々ね。あ、そういうば忘れているわ。優曇華院、自己紹介忘れてるわよ」

あ、そういうばそうだっけ。忘れてたよ。(作者も)まあ、俺は原作

知識で知ってるんだけどな…

「鈴仙・優曇華院・イナバよ。鈴仙でいいわ。あと、敬語じゃなくてタメ口でもいいからね。」

「おお、タメ口OKですか。その方が俺も気楽で助かる。」

「よろしく、鈴仙。」

そう言つて、俺と鈴仙は握手する。まあ、大事な仕事仲間だから、仲良くしていきたいな。そうだ、妹紅にどうするか聞かなきゃ…

「妹紅はどうする?」

「じゃあ、私は炎火の仕事風景でも眺めてるかな。」

ええ……まあ、別にいいか。気にせず仕事すればいいか。

「じゃあ、頼むぞ。部屋を出て、左に曲がって、1番端っこの部屋が兎達の部屋だ。頼んだぞ、炎火君。」

「わかりました。」

そう言い俺は部屋を出て行こうとすると、永琳先生が何か思い出したかのように俺を呼び止める。

「なんですか?」

「いや、これは1つ注意してほしいことが……兎達はいたずら好きだ。特にてるというやつがな……それだけだ。」

「わかりました。肝に銘じておきます。」

俺はそう言い、扉を開けて俺と妹紅は廊下を歩いていく。そして、その悪戯好きの兎達の部屋に着き、俺は部屋に入る。すると……

ビュン!!

「危なっ!!」

高速でボールが飛んできて、俺は間一髪で受け止める。そしてボールが飛んできた先に、小さい身長に黒髪、人参のペンダントにうさ耳の、因幡てるがクスクスと笑っている。

(これは……想像以上に面倒な仕事になりそうだ……)

俺は顔をため息をついて、それを確信した。

## Part 6 てゐ

兎達の世話係就任から数日

「お前ら!!サボってないで仕事しろおお!!」

俺はあれから頑張つてこの兎達の世話をしている……が、はつきり言つてめっちゃ疲れる。わがままだし、いたずら好きだし、なにより俺の言うことを聞いてくれない。その原因は、紛れもなく因幡てゐである。この兎達のリーダー格であるてゐが、俺の命令を聞かないように言っているようで、兎達が俺のいうことを無視している。しかし、中には真面目な兎もいるみたいだが、てゐに逆らうのを恐れて、俺のことを無視する。

「いやだね。誰がお前の言うことなんか聞くもんか!」

そう言つて、てゐは仕事をサボつて逃げていく。それを俺は追いかけていく。

「あ!!逃げんなこのいたずら兎いいいい!!」

今日もこんな調子で、一日が過ぎた。そして兎達が全員寝て、俺も貸してもらつている自分の部屋に戻り、布団を履いて、その上に寝っ転がる。

「ああ……今日も疲れた……」

そろそろ寝ようとしていた時に、俺の部屋の扉が開き、永琳先生が部屋の中に入ってくる。俺は焦つて身を起こし、正座をする。それを見て永琳先生はクスツと笑つた。……正直何がおかしいのか分からない。そして、永琳先生も正座をする。

「お疲れ様。どう?あの兎達は。」

その質問に対し、俺はため息をついてから答える。

「正直言つて初日に比べて全く関係は変わっていません。特にてゐが問題児すぎます……」。

その回答に対し、永琳先生もため息をつく。

「そうよね……。あの子は私もずっと手を焼いているのよ……」。

あ、あの永琳先生が手を焼くとは……。やはりあのいたずら兎、なんとかする必要があるな……。そうだ。あいつがリーダーなら

……

「永琳先生。」

「ん？何かしら？」

俺は少し顔を笑わせて、永琳先生に、発言する。

「1つ、提案があるんですが……………」

翌日

「おはよう!!お前ら!!」

俺は朝早くから、思いつき扉を開け、兎達に朝の挨拶をする。兎達は全員起きていて、俺を無視して自由に遊んでいる。

「おいてる、お前に話がある。ちよつと外まで来い。」

てるはそんな俺の言葉に耳を貸さずに無視し続ける。しかし、俺には魔法の言葉がある。

「永琳先生からの命令だ、外に来い。」

俺がそういうと、てるは動きをピタツと止め、俺の方を向いて、軽蔑するかなような目でこちらを見ている。

「……………わかったよ……………」

てるは渋々外へ出て行く。他の兎達も外に行くように言い、全員外に行ったのを確認すると、俺も外へ向かう。

「で、お師匠様、何の用ですか？」

「あなたには、今から炎火と弾幕ごっこで勝負してもらおうわ。」

これが俺の提案。てるとの対決で、どちらが上かを示すという作戦だ。しかし、これには俺だけの力だと無理だと判断し、永琳先生にも協力してもらった。永琳先生もてるには手を焼いていて、迷惑していたので、快く承諾してもらった。

「……………なんで私がそんなことしないといけないんですか？」

「あなたは炎火の言うことを全然聞かず、無視し続けているみたいですね。その行為が目に残ったので、どちらが上かはつきりさせようと思っただけ。てる、もしあなたが負けたら、炎火の言うことを聞くんですよっ。」

「……………わかりました。」

てゐるは諦めたようにこちらを向いて、弾幕を撃つ準備をする。……さて、妹紅には一応は勝てたが、あれはほとんどマグレだ。あまり自分の力を過信すんなよ。俺。

「では永琳先生。お願いします。」

俺はそう言うのと永琳先生はうなづき、手をあげる。そして……

「はじめっ!!」

その掛け声と同時に永琳先生、鈴仙、兔達に見守られながら、弾幕ごっこが開始された。俺とてゐるは弾幕を放ち続ける。流石妖怪と言ふべきか、永いこと生きているので、慣れている。それに比べて俺はまだ2回目の弾幕ごっこ。夜中とかに修行はしているが、回避能力とかは信用できない。なので俺はゴリ押しによる短期決着を目指していた。

「さっさと終わらせるぞ!! スペルカード発動!! 炎符『ファイアーマシンガン』!!」

俺がそう言うのと、俺の周りに炎のマシンガンが現れ、全部のマシンガンが脅威の速度で炎の弾を連射していく。

「人間のくせにやるね!! スペルカード発動! 『エンシエントデューパー』!!」

俺がスペルカードを発動して、不利だと思ったのか、てゐもスペルカードを発動させる。そして、スペルカード弾幕の撃ち合いが続いた。俺は弾の数でどんどん攻めていく。

「オラオラオラオラ!!」

「くううっ!」

だんだんとてゐるは押されていく。ここで、俺は決着をつけるためにスペルを中断した。

「!? スペルを中断するなんて、降参かい!」

てゐるは弾幕を更に強めて攻撃してくる。その光景に……俺はニヤリと笑った。

「いいや……これで俺の勝ちだ!! スペルカード発動!!」

俺の体が炎で包まれる。その光景に、てゐと、周りで見ている全員が驚く。

「炎爆符『ウルトラダイナマイト』!!」

俺は体を炎に包まれながら突進していく。てるの弾幕が体に当たり、被弾する……かと思われたが、弾は俺の体を突き抜けていく。

「!?いい、一体なんなんだよ!?」

「これで終わりだ」

俺は勝利を確信した笑顔でてるに突進し、衝突し……爆発した。爆風によって、兎達の何人かが、少し後ろに吹き飛ばされ、倒れる。爆炎が消えた時には、てるが気絶していて、俺はその場に立っていた。そして俺は、永琳先生に向かって、ピースサインを送った。

「……………ん……………」

「お、ようやく起きたか。」

「!?」

俺は気絶したてるを病室のベッドまで運び、起きるまでずっと待っていた。そして、俺の隣には、永琳先生がいた。

「……………負けたわね、てる。」

「……………はい、お師匠様。」

てるはため息をついて永琳先生の発言に返答した。その顔は悔しさで、同時に満足したかなような顔だった。そして、てるは俺の方を向いた。

「あんたには負けたよ…。私に勝つ人間なんて、滅多にいないから驚いたよ。約束通り、あんたのいうことをちゃんと聞くよ。」

「じゃあ、早速一つ……………」

俺はてるに近づき、手を差し出して、こう言った。

「俺と仲良くしてくれ。」

俺がそう言うと、てるは呆れたような顔をして、そして、笑った。そしててるも差し出し、握手をし、

「仕方ないな。仲良くしてやる。」

そして、今日の昼から再開した仕事は、ちゃんとてるも、他の兎達も、ちゃんと俺の言うことを聞いて、仕事をした。

Part 7 紅霧異変①

てると戦い、そして仲良くなつてから早くも一ヶ月が経った。妹紅やてゐ、鈴仙ともあれからもっと仲良くなり、兎達も俺と仲良くしてくれて、中には俺のことを慕っているやつもいる。そして、永琳先生からの信用も得て、兎達の世話係以外の仕事も任されることも増えていった。そして、ある日……

「よし、お前ら休憩していいぞ。」

『は〜い』

俺は兎達の仕事を手伝いながら、ちゃんと仕事を見守り、休憩の時間になったので、休憩の合図を送った。そして、兎達が休憩しに部屋に入つていこうとしていたそのとき、異変は起こった。空が段々と赤色の霧に覆われていった。そして、俺を含め、兎達の調子が崩れていった。俺は兎達よりかは進行は軽度だったが、調子がおかしいのは自身で気づいていた。少しすると、永琳先生も異変に気付いてたみたいで、俺らのいるところに来てくれた。

「炎火、これを飲みなさい。」

俺は永琳先生に渡された薬を飲んだ。すると、俺の体の調子は元に戻った。永琳先生は兎達にも薬を飲ませた。すると、俺と同じように兎達も調子に戻した。

「永琳先生。この薬は？」

「あなたが調子を崩したのはこの霧のせいみたいです。なので、即興のものですが、霧の効果は消えるでしょう。」

「ありがとうございます！永琳先生。人里にも、きっと被害が……。」「分かっています。私と鈴仙と兎達は薬を配って回ります。あなたには、原因を突き止めて、この異変を解決してください。きっと博麗の巫女も解決に向かうでしょう。」

「……わかりました!!任せてください!!」

そう言うと、俺は異変を解決するために、竹林に入つていった。流石にこの竹林にはもう慣れた。もうすぐで竹林を抜けるところで、妹紅がいた。

「妹紅……。」

「この異変を解決しに行くんだろ？ 私も連れて行け。」

「……ああ!!頼むぞ、妹紅!!」

俺と妹紅は竹林を抜け、妹紅と俺は空を飛ぶ、ちなみに俺は、足から炎をロケット噴射のようにして飛んでいく。そして、普通の霧がそこから中に漂う湖、霧の湖に着いた。俺はこの異変……紅霧異変のことを知っているの、奥に薄っすら見える真っ赤な館に向けて飛び続ける。すると、横から氷が飛んできたので、俺は間一髪で躲す。氷が飛んできた方向を見ると、背中に氷が浮いている、水色の髪と水色と白の服の女の子、チルノ（もとい⑨）がそこに浮いていた。

「やい!!ここは通さないぞ!!」

それを見た妹紅がチルノと戦おうとするが、俺はそれを止める。

「炎火……。」

「ここは俺に任せろ、すぐに終わらせてやる。」

俺のその発言を聞いたチルノはイラつときたみたいで、氷の弾幕を放ってくる。それを俺は余裕で避けていく。

「お前やるな!サイキョーのアタイの弾幕を全部避けるなんて!」  
「これならどうだ!!凍符『パーフェクトフリーズ』!!」

チルノはスペルを使い、俺を攻撃してくる。しかし、俺は冷静に弾幕を回避していく。そして、ようやく俺は攻撃をする。

「じゃあ、これで終わりだ。」

「え?」

俺はいつもより温度の強めの炎を使ったレーザーをチルノに放つ。レーザーはチルノの弾幕を溶かしてチルノの方向に突き進んでいく。  
そして……

ピチューン

「よし、終わり。」

チルノはレーザーにあたり、地面に落ちた。そして、俺と妹紅は再び赤い館へと向かう……。



## Part 8 紅霧異変②

「うわあ……目がチカチカする……。やっぱり赤は目に悪い色なんだな……。」

俺と妹紅は霧を抜け、真っ赤な館、紅魔館に向けて飛んでいた。俺は紅魔館を見ていて、正直目が疲れていた。マジで目に悪い。なんでこんな真っ赤なデザインにしたんだろ……。

「さっさと慣れろ。」

慣れろと言いましても……。そう思いつつ、俺は飛び続ける。そして、門に着くと、俺と妹紅は降りる。そこには、赤い髪に帽子を星のマークの入った帽子にチャイナドレスを着た女性……。紅 美鈴が立っていた。

「あれ……博麗の巫女じゃないんですね……。妹紅さんと……。隣の人是谁ですか?」

「悪かったな博麗の巫女じゃなくて。俺は焰 炎火っていうんだ。」

「私は紅 美鈴と言います。」

「さて……。すまないがこの館の主に用があるんだ……。そこをどいてくれないか?」

俺は鋭い目つきで美鈴を睨みつける。しかし、美鈴はそれに怯まず、

「ダメですね……。わたしはレミリア様にここを死守しろと言われてるので……。」

美鈴が構え、それを見た俺も構える。美鈴は拳法を使うし、妖怪だから普通の人間よりも耐久力も強い……。遠距離から攻撃するしか、俺には勝ち目がなさそうだ……。

「……はあ!!」

「!?」

美鈴が一気に距離を詰める。俺の予想以上に速かったが、咄嗟に炎を噴射して後ろに飛んだので、初撃命中を免れることができた。しかし、あのスピードで動かれるとなると、弾を命中させるのは難しいそうだ……。なら……!!

「はあああ!!」

俺は美鈴の周りに炎を出現させて、美鈴の動きを閉じ込める。

「あ、熱い……!」

どうやら効いているみたいで、俺は一気に決めるべく、足に炎を纏う。そして、ロケット噴射で空に飛び、急降下する。

「これでトドメだ!!炎脚『レオキック』!!」

俺はウルトラマンレオさながらのキックを、美鈴に命中させた。

「うわああああ!!」

美鈴は急降下による落下スピードと炎が合わさったキックで大きく吹き飛ばされ、そのまま門に吹き飛ばされ、その勢いで門が開く。俺は立ち上がり、体に着いた埃を払った。

「お、門も開いた。んじゃ、行こうか、妹紅。」

「おう、わかった。」

そして、俺と妹紅は紅魔館に入った。俺は衝撃によって気絶した美鈴をそのままにするのは可哀想だと思い、壁に寄りかかるように美鈴を移動させ、ついに紅魔館の中に入った。

「うわ、中まで真っ赤かよ。最悪。」

俺はそう言い、中を歩いていく。妖精のメイドが俺たちに襲いかかってきたが、妹紅が軽く倒してくれる。俺はさっきの戦いで少し力を使ったので、妖精メイドは妹紅に任せることにした。そして、俺と妹紅は大きな扉の前に立っていた。

「……無駄にでかいな。……ここに何かありそうだ。」

俺はそう思い、その無駄にでかい扉を開いた。その部屋の中には………本。本本本………大量の本があった。その数は全部で何千……いや、何万………下手したらそれ以上だ。ここは紅魔館の大図書館であろう。つまりここには………

「……誰?」

紫の髪、三日月を模した形のものが付いている帽子に白い服の女性と、その隣には頭と背中にコウモリのような翼、赤い髪、白と赤のメイド服の女性がいた。この2人は、パチュリー・ノーレッジとその従者、小悪魔だ。

「俺は焰 炎火、んで、俺の隣のやつは藤原 妹紅だ。」

「私はパチュリー・ノーレッジ。隣の子は小悪魔って言いわ。」

「そうか。ここの館の主に話があるんだけど……どこにいるか知ってるか？」

「レミイのこと？それなら上の階にいるわ。」

「そうなのか、ありがとな。行くぞ炎火。」

俺と妹紅はその情報を聞いて上の階を指し部屋を出ようとしたとき、後ろから弾幕が飛んでくる。それをいち早く察知した俺も妹紅は弾幕を出して弾幕をかき消す。

「誰がそう簡単に行かせると？」

「だよな。妹紅、小悪魔ってやつの方頼む。」

「わかった。負けんじやねえぞ。」

「当たり前だ。」

そういうと、俺と妹紅は弾幕で攻撃し始め、パチュリーと小悪魔も攻撃する。妹紅は……大丈夫そうだな。問題は……俺だ。俺は炎の弾幕を飛ばし続けているが、パチュリーは水属性の弾幕を撃ってきて、俺の炎の弾幕数発で、やっとパチュリーの弾幕の一発が消せるので、俺は苦戦を強いられていた。

「異変解決しに来たっていうのに、私に手こずってちゃレミイには勝てないわよ。」

「わかってるよ!!」

しかし、このままでは確実に負けてしまう。何か……チャンスは……。

「これで終わりよ、水府『プリンセスウンディネ』。」

パチュリーは水属性のスペルを使ってきた。万事休すかと思われたその時……。

「!?ゴホツゴホツ!!こんな……時に……ゴホツ!」

パチュリーは咳き込み、弾幕が止む。俺はそのチャンスを逃さず、炎を使って飛び、足に美鈴の時よりも高温で、激しく燃える炎を纏った。

「ゴホツ……させないわよ……」

パチユリーはそれを止めるべく再び弾幕を放とうとする。しかし……。

「させねえよ!!」

「!?ガハツ!!」

小悪魔との戦闘を終わらせた妹紅が、パチユリーの腹に蹴りを入れる。それにより、少し後ろにパチユリーが飛ばされる。

「サンキュー妹紅!!炎脚『レオキック』!!!」

俺は思いつきりパチユリーに向かい落下していき、当たった瞬間……爆発した。爆炎の中からパチユリーが吹き飛ばされ。壁に激突する直前で止まる。流石に気絶しているみたいだ。爆煙が晴れると、俺は膝について荒い呼吸を繰り返した。

「はあ……はあ……。」

「お疲れ、炎火。」

「おう……サンキュー、妹紅。」

俺と妹紅は拳を突き合わせた。そして、少し休んだ後に、上の階に向かうために、部屋を出て行った。

Part 9 紅霧異変③

「……………」

「……………」

俺と妹紅はパチクリーから聞いた情報を元に、妖精メイドを倒しながら探索を続ける……が。

「見つからねえええええ!!」

探し始めて約30分程度……俺と妹紅は倒しながら歩き回り、部屋を開けて回っているが、まだ終わらない。流石に進展が欲しいと俺と妹紅は思いながら歩き回っていた。すると、俺と妹紅はある人物に出会った。黒い髪に大きなリボン。そして特徴的な巫女服……。ついに俺は、この世界に来てから初めて、博麗の巫女、博麗 霊夢と出会った。

「あら、竹林の……あんた誰?」

霊夢は俺の目の前にまで来て、俺のことを睨んでくる。

「俺は焰 炎火。この異変の調査と解決をしに来たんだ。」

俺がそう言うと、霊夢は意味がわからないと言わんばかりの顔で俺のことを睨んでくる。……まあ、異変解決が主な仕事の霊夢にとつては、俺の発言は意味わからないのかもしれない。

「……異変解決?あなたが?」

「俺は永琳先生に言われて来たんだ。妹紅は俺に協力してくれてるんだ。」

「ふうくん、私は博麗の巫女、博麗 霊夢よ。私も異変解決に来たの。」  
そう言うと、霊夢は俺から離れる。永琳先生からの推薦ということで、俺の実力を認めてくれたのだろうか?まあ、とりあえずは探索を続けるとしよう。

「じゃあ、俺は探索を続けるよ。霊夢はどうするんだ?」

「そうね……………あんた達についていこうかしら。」

「……………まあ、好きにするといいよ。」

そして、俺と霊夢と妹紅の3人で探索を続けた。しかし、その数分後……。3人で歩いていると、どこから現れたかわからないが大量

のナイフが後ろから飛んでくる。しかし、霊夢がとっさに結界を張って防いでくれたので、被弾せずに済んだ。

「あら、塞がれてしまいましたか。」

銀髪に青と白のメイド服を着た女性……十六夜 咲夜がそこにいた。咲夜の右手にはナイフ、左手には懐中時計が握られていた。

「私はこのメイド長、十六夜 咲夜です。以後お見知りおきを……。」

「俺は焰 炎火。隣のが藤原 妹紅、その隣が博麗の巫女、博麗 霊夢だ。」

「そうですか。ご丁寧ありがとうございます。」

俺は言葉を交わしつつも、警戒を一切解かず話していた。隣の2人も警戒した様子で咲夜を見ていた。

「さて……その重要そうな部屋……。そこにこの館の主がいるのか?」

「ええ、そうです。我が主、レミリア様はここにいらつしやいます。」  
「そうか、俺達はここの館の主の話があるんだ。そこを通してもらうぞ。」

「ええ、いいですよ……。」

咲夜がそう言うのと、俺たち3人はその扉に向けて歩き出す。すると……。

「ただし、私を倒すことができたのならね!!」

咲夜はそう言うのと、ナイフの弾幕を放ってくる。

「霊夢!!先に行け!!ここは俺達が食い止める!!」

「わかった!!」

霊夢は返事をするのと、部屋の扉に向けて走る。それを阻止しようと咲夜は霊夢の方へ向かうが、俺と妹紅で炎の壁を作り、それを阻止する。

「お前のあいては俺たちだぞ。」

「……いいでしょう。なら、さっさとあなた達を倒してお嬢様に加勢するとしましょう!!」

咲夜は数本のナイフを投げる。すると、その数本のナイフは百何十

本の数に増える。俺は道を防ぐための炎の壁を維持しつつ、自分の前にも弾幕を防ぐために炎の壁を出現させている。だが、このまま持久戦に持ち込むと、俺と妹紅は既に戦闘を経て、消耗している。しかも、2人で炎の壁で道を塞いでいる。元々消耗しているのに、更に消耗を早める行動をしている。だからさっさと終わらせなければならぬ。

「ふふっ、疲れているようですね。そんな調子では私には勝てませんよ！」

咲夜は消えては現れ、大量のナイフを投げってくる。このままでは負ける……。……こうなったらダメージ覚悟でやるしかない!!

「うおおお!!炎爆符『ウルトラダイナム……』」

「待て、炎火……私に任せろ……。」

妹紅は俺の前に出て、そのまま弾幕を放たずに、咲夜に突進していく。咲夜の放つナイフが体に刺さる。

「ぐううう……いー！」

それでも妹紅は前に歩き続ける。そして、力を振り絞り、

「惜命『不死身の捨て身』!!」

妹紅は炎を纏って、思いつきり咲夜に激突する。咲夜はとっさに後ろに下がって直撃は免れたが、少し後ろに吹き飛ぶ。

「くうう……。」

妹紅はその場に倒れる。炎による煙がそこらを漂う。

「ふっ、残念でしたね。無意味だったみたいですね。」

「いいや!!無意味じゃないぜ!!妹紅!!」

俺は煙の中から咲夜に突進する。

「獄炎拳『ノア・インフェルノ』!!」

俺は超高熱の炎を右手に纏い、咲夜に拳をぶつける。咲夜は勢いで壁にぶつかり、壁が砕け、外へ落ちる。俺は咲夜を飛んで受け止めると、そつと地面に下ろし、元いた場所に戻る。殴った右手は己の超高熱の炎で火傷していた。普段は手に纏ったとしても火傷などはしないが、今俺の使える最高温度の炎を纏ったので、流石に手がやられたみたいだ。右手がかなり痛い。今はどうでもいい。俺は倒れた妹紅を持ち上げ、壁に寄りかかせた。

「……………ありがとな、妹紅……………」

そして、俺は右手の痛みを抑えながら部屋に入る。部屋の中では……………霊夢が一方的に攻撃されている光景が目に入って来た。



Part 10 紅霧異変④

俺が咲夜との戦いを終えて、この紅魔館の主の部屋に入ると、霊夢が紫の髪、赤い目、赤いリボンのついた白い帽子に、白と赤の服の小さい女の子、レミリア・スカーレットに一方的に攻撃されていた。

「くっ……予想以上の強さね!!」

「あなたこそ、思ったよりも弱いよね。」

霊夢はレミリアの弾幕を避けきれてはいるが、避けることに精一杯で、反撃できていない。

「大丈夫か霊夢!!」

俺は横から炎の弾幕を放つ、レミリアは弾幕を放つのを中断し、突然飛んで来た炎の弾幕を回避した。

「あら……新しいお客さんね……。私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主よ。」

「俺は焰 炎火。永遠亭で働いてる。あんたに話がある。この赤い霧は何のために出してんだ？」

「私は……いや、私達は太陽の光が弱点なの。だから、この霧で太陽の光を防げば、昼間でも外に出れるってわけ。」

「……そんな自分勝手な理由でやったのか……。」

「ええ、そうよ？何が悪いの？」

俺は怒りを込めて足に炎を纏う。

「そのためなら他人を犠牲にしてもいいのか!？」

俺は炎を使い、大きく飛んだ。

「そんなクズみたいな発想!!俺が打ち砕いてやる!!炎脚『レオキック』!!」

俺はレミリアに向かって思いっきり飛び蹴りする。しかし……。

「あなたみたいな実力の人間が、私に口ごたえするなんて生意気ね。」

「!？」

レミリアは俺の攻撃を避けて、俺の足を掴んで思いっきり壁に叩きつけた。俺は衝撃で何本か骨が折れ、口から血を吐く。そしてレミリアは俺を布切れのように前に投げ捨てる。

「ぐっ……いつてえ……。」

「大丈夫!? 炎火!!」

「俺は大丈夫だ!! 霊夢はさっさとあいつを倒せ!!」

「……………わかったわ!!」

霊夢はお札を手に取り、弾幕を放ち続ける。しかし、レミリアは余裕の表情で回避していき、弾幕の隙間から弾幕を放つ。……ちっ! さっさと立て! 俺!! 永琳先生に任されたんだ!! 妹紅も頑張ってくれたんだ!! 俺も頑張らなくちゃいけないだろうが!!

「……………うあああああ!!」

俺は持てる気力を振り絞り、立ち上がる。

「あら、まだ立てるのね。なら、とどめを刺してあげる。神槍『スピア・ザ・グングニル』!」

レミリアは赤い槍を投げる。赤い槍霊夢の弾幕を破壊しながら俺に突っ込んでくる。

「あああああ!!」

俺は火傷で怪我している右手に炎を纏い、自分の出せる全力のパンチを槍にぶつける。そこら中に閃光が広がる。槍は消えていて、俺は死んではいなかった……が………。俺の右手……いや、右腕も一緒に消えていて、右肩から大量の血が溢れ、下に血溜まりができる。

「あんた……右腕……。」

霊夢は俺の腕を目を見開き、口を開いている。俺は、ダメージが大きすぎたらしく、痛みがなく、肩に痺れのようなものを感じる。

「……………しぶといわね。でも、本当にこれで最後よ。」

「……………ああ……これで決着だ。」

レミリアの手には槍、俺は体を炎に包む。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」

「炎爆符『ウルトラダイナマイト』!!」

レミリアは槍を投げ、俺はそのまま突進する。そして……

グサツ

俺の腹部に槍が刺さる。俺は槍を通り抜けさせるほど力が余ってなくて、全てを爆発に威力を注いでいた。俺は槍が腹部に刺さったと

しても突進し続けた。

「何っ!？」

「これで……終わりだッ!!」

俺はレミリアに思いつきりぶつかり……大きな爆発を起こした。霊夢は爆風を防ぐために、結界を張った。爆発による煙が晴れると……レミリアは横たわっていて、俺は、普通なら爆発後、再生して、そのかわりに俺の体力を削るが、俺は、その再生さえも捨て、威力に注いだ。なので、右腕がなく、腹に大きな穴が空いたまま、立っていた。「あんだ……。」

「……俺達……の……勝利……だ……。」

俺はVサインを霊夢に送り、そのまま血を吐いてぶっ倒れて、気を失った。気を失う直前、霊夢と、目が覚めたらしい妹紅が俺に駆け寄っていた。

「……………あ……………」

俺は目を覚ました。前にも同じようなことがあったな。……………あの時は、妹紅と戦った時か。今は……夜か。どれくらい寝ていたんだ？俺は右を見ると……、妹紅が座りながら寝ていた。

「妹紅……妹紅……。」

「んあ……………?」

妹紅は目を覚まし、欠伸をして体を伸ばす。そして、俺の方に目をやる。すると、目を覚ました俺をみた瞬間、俺に抱きついてきた。

「!?!?!」

「心配……したんだからな……。」

妹紅はポロポロ涙を流して俺を抱きしめる。正直言って苦しい。するとそこに、鈴仙が扉を開けて入って来た。鈴仙も目を覚ました俺を見て、驚いた顔で俺のことを見てくる。そして……

「師匠……!!炎火が!!炎火が目覚めましたよ!!」

鈴仙を勢いよく扉を閉めて走って言った。そのすぐあと、鈴仙と、鈴仙が連れて来たであろう永琳先生が勢いよく扉を開けて部屋に入ってきた。

「炎火!!大丈夫!?!あなた三ヶ月寝たつきりだったのよ!?!」

「……………え?」

はああああああ!!日単位でもなく、週単位でもなく、三ヶ月!?!俺は驚きで思いつきり体を起こすと、腹部に気を失いそうになるほどの激痛が走る。

「いつてえええええ!?!」

「動いちやダメよ!まだ腹に空いた穴が塞ぎきつたわけじゃないんだから。」

俺はそれを聞き、ベッドに横になる。そして、右腕に目をやる。……流石に、永琳先生でも、腹に空いた穴を塞ぐことはできても、右腕を再生させるのは、無理だったみたいだ。

「ごめんなさいね。腕を治すことが出来なくて…………。」

「いえ、大丈夫です。なんとかかなると思いますから。」

「なんとかって…………どうやって?」

俺は右腕があつた場所に神経を集中させる。すると、炎が肩から伸びていき、腕の形になる。試しに手を閉じたり、開いたらしてみよう。動きには問題ないみたいだ。しかし…………俺は妹紅に頼んで飲み物を渡してもらおう。しかし、俺はそれを受け取ることができなかった。

「ありや…………無理か…………。」

「なるほど…………そうだわ。うどんげ、最近私が作った手袋持って来て。」

「はい。」

鈴仙は永琳先生にそう言われ、部屋を出て行く。数分後、鈴仙が黒い手袋を持ってくる。

「炎火、それをつけてみなさい。」

「?はい。」

俺は疑問に思い、黒い手袋を炎の右手にはめる。俺はそのままもう一度飲み物を持ってみる。すると、俺は持つことができ、そのままそれを飲む。

「それは私が作った特殊な手袋なんだけど…………、どうかしら?」

「すごい…………。ありがとうございます!!」

「それは良かったわ。あなたが無事でよかったわ。しつかり傷を治してね。」

そう言い、永琳先生と鈴仙は部屋を出ていく。その後、妹紅はもう一度俺に抱きつく。

「炎火……もう、危険な真似はしないでくれ……。」

妹紅に力が入る。俺は、右手を使い、妹紅を撫でる。

「……………わかったよ。もう無茶はしない。だが、妹紅も、危険な真似はしないでくれよ。」

「……………ああ…………。」

そして妹紅は、涙が目にとまっていたまま、笑った。その笑顔はとても、眩しく、綺麗なものだと俺は思った。そして、俺は妹紅と別れを告げ、妹紅は部屋を出ていった。

一ヶ月後

「さて……………頑張りますか!!」

俺の腹の穴は完全に塞がり、新しく服も新調してもらった。服は、俺が幻想郷に来た時に来ていた制服の見た目、服には、防刃、防火、更に打撃を和らげてくれる効果のある服を永琳先生が作成してくれた。そして俺は休んでいた合計四ヶ月分を取り戻すべく、兎達の世話係の仕事が再開された。

## part 11 宴会

「宴会？」

俺は永琳先生にそう聞いた。俺は仕事に戻ってから数日後、永琳先生に急に宴会があると言われた。

「異変解決を祝って宴会が開かれるの。」

「……聞きたいことが2つあるんですがいいですか？」

「ええ、構わないわよ。」

「ではまず1つ目、宴会はいつ行われるんですか？」

「今日の夜。後2時間ぐらいね。」

「ええ……。」

早っ!!っていうかなんでこんな時間まで教えてくれないんだ!? 準備とかあるんじゃないの!? そういえばやたら調理場から調理音聞こえると思ったらそういうことか……。

「……じゃあ2つ目、なんで異変から四ヶ月経ってるんですよね? なんでそんな時にやるんですか?」

「勿論それは……。」

そう言うと、永琳先生が俺の方に手を置いた。……なんだか嫌な予感しかしない。

「あなたが主役だからよ。」

「………え?」

さ、最悪だ……!!俺はたまたま目に入った新聞を手取る。すると、今日の夜の宴会のことがかなり大きく記事にされていた。そして……主役である俺のことも……。記事の内容は宴会の宣伝と内容。そして、主役である俺のこと。外で美鈴と戦っていた時の写真や、紅魔館の外から俺と咲夜の戦いの写真が撮られていた。……いつの間撮ったんだ? この写真。……こんだけの広告だ。かなりの人や妖怪が来るだろう……プレッシャーが物凄い。

「まあ、頑張ってね♪」

永琳先生は俺にウインクをする……が、今の俺にそれに反応する余裕はない。俺は人生史上最も緊張していた。俺は転生する前は目立

たずに生きてたからそこまで緊張する場面はなかったから、緊張しすぎて多分顔が引きつっていると思う。

「ほら、早く用意しなさい、兎達も連れて行くから、炎火、よろしく。」  
「はあ……わかりました。」

俺はそういうと、自分の部屋に戻り、まず自分の用意を始めた。

一時間半後

「ここか……って人多!？」

俺ら永遠亭一行は早めに出発し妹紅と合流し、準備の手伝いをしようとして宴会が行われる、博麗神社に来ていた。まだ宴会は始まってないのに、100人ぐらいの人数がいる。

「あら、あなた達、来るの早いのね。」

上から声が聞こえて上を見ると、霊夢が上から降りてきた。

「よう霊夢、異変ぶりだな。元気だったか?」

「それはこっちのセリフよ。右腕もなくなっ……て……」

俺は俺の右腕を驚いたように凝視する。あ、そつか。永遠亭にいるやつと妹紅ぐらいいしか俺の腕のことしらないもんな。

「右腕なら大丈夫。」

「そう……ならよかった……」

霊夢は安心したかのように肩の力を抜く。

「おい霊夢……準備サボって誰と話してんだ!？」

霊夢の後ろから1人の少女が歩いてきた。金髪に大きな魔法使いのテンプレとも言えるような白黒の帽子に、白黒の服、そして右手には箒が握られている。霊夢と同じ、東方Projectの主人公、霧雨 魔理沙だ。

「霊夢、時間ないんだからさっさと準備し……ろ……」

魔理沙は俺を見ると同時に動きを止める。しかしそれはすぐに終わった。魔理沙は目を輝かせながら俺の目の前に来る。

「お前焰 炎火だよな!?!私は霧雨 魔理沙、普通の魔法使いだ!」

やっぱり『普通の魔法使い』なのか。そういえば、異変の時は魔理沙はいなかったな。……まあ、魔理沙は厄介ごとに首を突っ込みたい

性格だから、めんどくさいことになりそうだから、来なくて正解だったかもな。しかも、俺が殆ど全部倒しちゃったしな。そして、魔理沙はその後俺の両腕を掴もうとしたが……左腕はちゃんと掴んだが、右腕は掴むことができず、シャツだけを掴んだ。

「お、お前……右腕……。」

「……なるほど、そういうことね。」

さすが霊夢、勘が強い。そう思いながら、俺は永琳先生特性の黒い手袋を脱ぐ。すると、炎の右手が魔理沙の目に入る。魔理沙は目を輝かせて俺の右腕を見ている。

「スゲエエエ!!どうなってんだ!?!お前の右腕!!」

このことは、多分来ると思うレミリアが来たら言おうかな。そして、俺は霊夢と魔理沙の準備を、兎達といっしょに手伝った。(てゐが途中でサボったが脅迫して手伝わした。)そして、宴会が始まる五分前……殆どの人数が集まったみたいだが、人里の人間が殆ど全員来ていた。そして、妖怪達も大量に来ていた。その中には、紅魔館のメンバーも見えた。

「こんばんわ、レミリアお嬢様。」

「……レミリアでいいわ。それより、調子は大丈夫だったかしら? 派手に右腕を失ってたからね。」

俺は右腕を見せる。レミリアは右腕を見るとクスツと笑った。

「……なるほどね。そんな能力の使い方があるなんて思いつかなかったわ。それほど心配しなくてよかったようね。」

……なんで俺の右腕が能力で作ったってわかったんだ? あ、そういえばレミリアの能力って『運命を操る程度の能力』だっけ? まあ、いや。すると、レミリアの後ろに、レミリアと同じくらいの背、赤いリボンのついた帽子、赤と白の服、金髪に赤い目、そして宝石のようなものがついた異形の翼、紅霧異変の時には出会わなかったが間違いない。レミリア・スカーレットの妹、フランドル・スカーレットだ。  
「フラン、挨拶しなさい。」

「……………」

フランはレミリアに隠れて出てこない。ってか出てきて大丈夫



だったの？確かフランってレミリアに地下に幽閉されてたんじゃなかったっけ？すると、俺の後ろから霊夢が再び来る。すると、フランが霊夢に反応してピクツと体を動かす。

「炎火、そろそろ宴会が始まるわよ。主役が何やってんの……ってそいつも来たのね。」

「？霊夢、知り合いか？」

「そいつと異変の時に戦ったわよ。なんとか勝てたけど、そのせいでレミリア相手に劣勢になったけど。」

なるほど……霊夢と戦ってたのか……。多分、俺とパチュリーが戦った後かな？確か図書館に地下室があるんじゃないかな？俺と会った時はあんまり疲れてる印象なかったがな。俺はフランに近づき、かがんでフランと視線を合わせる。

「……俺は焰 炎火って言うんだ。気軽に炎火って呼んでくれ。」

すると、フランは恐る恐るレミリアの後ろから出てきて、俺の前に来る。そして、やっと口を開く。

「……私、フランドール・スカーレット。フランって呼んで！」

良かった。正直仲良くなってくれるか不安だったが、これなら仲良くなれそうだ。おっと、そろそろ宴会が始まる。俺は一度レミリア達紅魔館組に別れを告げ、宴会の始まりを告げる挨拶をするべく、前に立つ。うわ……。めっちゃ人が多い。緊張で心臓がバクバクしてる。……まあ、諦めるしかないか……よし!!やるぞ!!

「え……皆さん、集まっていたいただき、ありがとうございます！今夜は楽しませよう!!それでは、乾杯!!」

『かんぱい!!』

俺が宴会の始まりを告げると、全員酒を飲んだり、大量の宴会飯を食べたりしてる。さて、俺は挨拶回りでもするかな。俺はまず、霊夢と魔理沙、紅魔館組ともう1人……金髪に赤いカチューシャ、赤と青と赤のリボンのようなものがついた白、そして近くに人形が浮いていて、人形は普通の人のように動いている。魔理沙と同じ魔法使い、アリス・マーガトロイドだ。霊夢や魔理沙達、アリス酒を飲んでるが、紅魔館組は殆どがワインを飲んでる（パチュリーとフランはどっち

も飲まず)。

「ようお前ら、楽しんでるか?」

「お、よう炎火、こっちは楽しんでるぜ。」

魔理沙はそう言つて、酒をグビグビ飲む。俺は正直言つて酒に抵抗がある。まだ飲んだこともないし、転生する前の世界、つまり外の世界では、20歳未満は酒は禁止なので、20歳になってない俺としては、ちよつと飲むのを遠慮している。

「炎火、あんたはお酒は飲まないの?」

「お、俺はいいよ。まだ飲んだこともないし……。」

「何事も経験なんだぜ!だから飲んでみるんだぜ!」

そう言つて、魔理沙は俺に酒の入った杯を、俺に渡してくる。俺はそれを渋々受けとつた。

「さつさと飲んじやいなさい。別に死にはしないわよ。」

霊夢が早く飲むように急かしてくる。俺はついに諦めて、一気に酒を飲み干す。味は美味かったが、俺はフラついてしまった。頭がクラクラする。体が熱い。やつぱり酒飲むのは良くないのかも……。

「大丈夫?」

フランが俺を心配して俺のところまで来る。可愛い(確信)。

「ありがとう、フラン、俺は大丈夫だよ。」

俺はフランを撫でる。フランは目を細め、翼をパタパタさせて喜ぶ。周りから軽蔑の目で見られているのは気のせいだ。しかし、レミアからの厳しい視線は間違いではなさそうだ。赤い目が光って見える。俺は危機を感じて別の場所に挨拶に行く。そしてその後、十何組ぐらいの人里の人のグループに挨拶に行った。お酒を勧められたりしたが、丁重にお断りさせてもらった。酔ったら挨拶回り断念しそうだから……。そして、最後、永遠亭のみんなのところ。兎達が酔つて、騒いでいる。てる、鈴仙、永琳先生はあまり酔つてないらしく、楽しく会話をしていた。が、1人、俺に飛びついて来る。

「炎火♪」

「も、妹紅っ!?お前酒臭っ!!どんだけ飲んだんだ!」

妹紅が俺に飛びついてきた。妹紅が息を吐くたびに酒の臭いがす

る。っていうか状況!!妹紅性格変わってないか!?え!?こんなに甘えるやつだっけ!?ちよつと永琳先生!!笑ってないで助けて!!

「今までどこ行つてたのー!?寂しかったよ〜……。」

やべえ、可愛い。可愛すぎる。いつもは男勝りな性格な筈なのに!!めつちや可愛い!!何この可愛い生き物!!……おいてる、何笑つてんだ。後で炎の牢獄に閉じ込めてやろうか?

「はいはい……ごめんごめん。」

俺は酔った妹紅を撫でる。妹紅は更に甘えてくる。……もう持ち帰つちやダメ?

「炎火はお酒飲まないの……?」

「う、うん。酒はちよつと苦手で……。」

妹紅は抱きついたらまま、上目遣いで俺に聞いて来る。……マジで可愛い。妹紅じゃないんじゃないかってぐらい。おつと鈴仙よ。そんな軽蔑の目でこつちを見ないでくれ。俺が実質1番困ってる。

「……じゃあ飲ませてあげる……。」

「……え?」

妹紅はそう言うと、口に酒を含み始めた。俺は妹紅が今からする行為に、俺は全く気づかずにいた。周りには大量の人がいるのにも、俺は全く気づかなかつた。すると、妹紅は俺の頭を掴んだ。すると……

「ん〜♪」

「!?」

妹紅は俺にキスをして、俺の口に酒を流し込む。うつわ!!この酒キツツ!!っていうかなんで人里の人とか霊夢とか魔理沙見てんだ!!?見てないで助けるおおおお!!

「プハッ……どう?美味しい?」

美味しい、美味しいけど周りの視線が痛いからあんまり味を楽しめない……(泣)そんなこんなで宴会は進んでいった。妹紅はあれからも酒飲んで俺に絡んで来るし、もちろんてゐるは俺がこんがり焼いた。霊夢と魔理沙に焼けコールが来たんだ。俺は悪くない。『上手に焼きました〜♪』まあ、あのバカ兔、すぐに回復したかな。あと射命丸が俺に取材してきたが断った。妹紅とのこと聞いてきたときは焼いた。

てると同じ目に合わせてやるぜ! 『上手に焼けました〜♪(2回目)』  
そして宴会は次の日の朝まで続いた。と言っても、残ってる人は最初の十分の一ぐらいだった。俺と永遠亭のみんなは宴会の片付けを終わらせ。帰った。妹紅?俺に背負っていますよ?飲み過ぎで力入らないみたいで、俺が背負ってる。しかし、こんな状況でも甘えて来るから困る。そして、俺は永遠亭につき、疲れが一気に出たのか、俺は一瞬で眠りに落ちた。そして次の日の朝……………。

「ん…………ふわあ……………」

俺は目を覚まし、布団から出ようとすると、何か違和感を感じた。俺は思いつきり布団をめくると、妹紅が俺の布団で寝ていた。

「妹紅…………。なんで俺の布団で寝てるんだ?」

「んにゃ…………?ハツ…………!!／／／」

妹紅の顔が真っ赤になる。そして、妹紅はなぜかモジモジしている。俺には意味がわからない。

「…………炎火…………。」

「ん?」

「もし…………私が付き合ってたって言ったらどうする?」

「…………付き合うに決まってるだろバーカ。」

「じゃあ…………／／／」

妹紅は顔を赤くしながら俺の前に来て…………俺の頬にキスをした。そして…………

「私と付き合って…………くれるか?」

「…………喜んで。これからよろしくな♪妹紅♪」

そして俺と妹紅は付き合うことになった。俺と妹紅は部屋から恋人つなぎで手を繋ぎながら部屋から出てきた。

## part 12 再び訪れる異変

紅霧異変後の宴会から一年……。

「はあああああ!!」

「ふっ!!隙ありだぞ鈴仙っ!!」

「しまっ……」ピチューン

俺は鈴仙と外で弾幕ごっこをしていた。俺は鈴仙に修行に付き合ってもらっていた。前までは鈴仙にずっと負けていたが、最近はどうんどん勝てる回数が増えていった。

「痛たたた……。」

「大丈夫か鈴仙?」

「ええ、大丈夫……。」

俺は手を差し出し、鈴仙は俺の手を掴んで立ち上がる。

「2人ともいい勝負だったぞ〜♪」

「妹紅ありがと〜♪」

妹紅は戦い終わった俺に飛びついてきて、俺はそれを受け止める。……どこか痛い視線を感じる気がするけど、気のせいだよな……(多分)。俺は妹紅から手を離し、妹紅を撫でる。妹紅は嬉しそうにしている。……お前だったか鈴仙、俺のことをキツツイ視線を俺に向けてるのは。

「それにしても……。」

俺は空を向いて、呟く。

「一体どうなってるんだ……この天気……。」

今日は雪が降っている。今は3月の終わり頃だ。春が訪れ、永遠亭に植えられている桜が咲いている……はずなんだが、何故か気温も上がらない。雪もしょっちゅう降る。明らかに俺はおかしいと思った。すると、中からドタドタと走ってくる音が聞こえる。

「炎火〜!」

「げっ……。」

妹紅はその声を聞いて嫌そうな声を漏らす。そして足音が近づき、その姿が見える。黒く、長い髪。そして昔の貴族を思わせるようなピ

ンクと赤の服。ここ、永遠亭亭主、蓬莱山 輝夜だ。その輝夜様が、なぜ俺のことを呼んでいるかというところ……

「輝夜様、どうしたんですか?」

「もー! 『様』をつけて呼ばないで輝夜って呼んで! あと雪が積もってるみたいね! 雪遊びしましょ!」

「様はつけないと俺永琳先生に殺されます……。」

俺は輝夜様のお世話役になったのだ! 永琳先生が忙しくなったのと、輝夜様が俺に興味を抱いて駄々をこねたみたいで、俺は世話役になった。……正直言つて中々厄介な相手だ。あの悪戯によつて体が構成されているかのような、てると仲がとても良く、2人揃つて俺や鈴仙に悪戯してくるのだ。悪戯をしたら、輝夜様に強めのデコピンを、てゐの方は炎の牢獄に閉じ込める。え? てゐへの対応が酷い? 仕方ないことなんだ。悪戯は全ててゐが企てたことだし、しかもあいつは本当に懲りない。炎の牢獄に閉じ込めた回数なんてもう覚えてないぞ……。

「……………」ギョツ

「どうした? 妹紅。」

「そんな警戒しなくてもいいのに。」

「うるさい、お前のいうことなんか信じられるか。」

「妹紅、輝夜様、喧嘩はするなよ?」

妹紅と輝夜様の仲は……とても、ではないが悪い。しかし、永琳先生、鈴仙、てゐが言うには、前はもっと悪かったらしい。そして、少しだけ仲良くなったのは俺のおかげだと言う。俺は2人が仲良くなるように努力して、俺が見てる時は喧嘩はしなくなった。しかし、少し目を離すと喧嘩してることがあるので、なるべくこの2人が揃った時は目を離さないようにしている。

「さて……じゃあ、雪遊びするか。何して遊ぶ?」

『雪合戦!!』

「息ぴったり!? っていうかなんでてゐいるんだ!」

「楽しそうだから私も混ぜてもらえる?」

「永琳先生!」

こうして、俺、鈴仙、妹紅、輝夜様、てゐ、永琳先生の6人で雪合戦することになった。そして、俺、鈴仙、妹紅のチームと、輝夜様、てゐ、永琳先生のチームに分かれた。

「能力の使用は禁止、制限時間は10分、それじゃあ始め!!」  
そして、両チーム同時に雪玉を投げ始めた……。

10分後

『はあ……はあ……。』

雪合戦終了後、全員疲れて雪の上で寝転がっていた。この雪合戦、正直言ってハイレベル過ぎた。1人も被弾してない。フルで回避しながら雪を作りつつ投げる……。こんな争いが行われていた。

「さて……炎火。」

「?なんですか?永琳先生。」

俺と永琳先生は起き上がる。永琳先生は真面目な顔をして話をしようとしている。

「これは異変よ。……しかも、何か嫌な予感がする。だから解決に向かってくれない?」

俺は永琳先生に異変解決に向かうよう、永琳先生に言われた。

「……わかりました。」

俺は準備をするために部屋に向かう。準備をしていると妹紅が部屋の中に入ってくる。

「炎火……。」

「大丈夫だよ妹紅。俺はちゃんと帰ってくる。」

「……行くなら、1つ条件があるんだけど……いいか?」

「?いいぞ?」

妹紅は俺に近づいて、上目遣いで俺のを見てくる。俺は妹紅に、少しドキツとする。

「私も……連れてってくれ……。邪魔にはならないから……。」

……俺はその質問に少し困る。異変解決では危ない目に遭うかもしれない。それは、前回の異変解決で右腕を失った俺は確信でき

る。……が。

「わかった。妹紅がいるなら百人力だな♪」

「……！頑張ろうな、炎火！」

「おう!!」

前回の異変では、妹紅がいなかったら俺はここにはいないはずだ。不本意だが……妹紅はいてくれるととてもありがたい。なので、俺は異変解決をしに空へと飛び上がった。絶対に妹紅を守ることを心に決心して……。



part 13 春雪異変①

「ううう……寒い……。」

「大丈夫か？妹紅。」

俺と妹紅は、異変解決をするために、まず何処に首謀者がいるのか空を飛んで探していた。……確かに寒いかもしれない。そもそも気温が低いのに、さらに気温の低い空。しかも飛行しているからさらに寒い。

「……妹紅。ちよつとこつち来て。」

「？なんだ？」

俺と妹紅は空中で停止した。そして、俺は妹紅の手をギュツと掴んだ。俺は手を繋ぎながら神経を集中させる。

「え、炎火なにやってるの？／＼／＼」

「………よし!!妹紅、まだ寒いかな？」

「………寒く……ない……。」

「よかった♪手は離すなよ？効果がなくなるからな。」

俺が妹紅に何を言ったかと言うと、俺と妹紅に薄く、外の寒さを中和出来るぐらいに炎を纏わせた。ちなみに凝視しないと炎は見えない。俺に触れてないと調整が細かすぎて難しいから手を繋いでる。妹紅は寒さが消え、搜索を続けた。すると、氷が飛んでくるが、右手に炎を纏って殴る。氷は消え、飛んできた先には氷の妖精、前に一度戦った、チルノがいた。

「やいお前！またあったな!!あたいと勝負しろ!!」

「はあ………しょうがないな……。妹紅、ちよつとごめんかな？」

「ひあ!?!／＼／＼」

俺は妹紅をお姫様抱っこをしてチルノと勝負する。チルノは氷の弾幕を放つ。俺はそれを回避続け、反撃のチャンスを待つ。しかし、チルノの放つ氷は、前回より氷の大きさと速さが全然違う。冬だからだろうか？かなり強くなってる……が。

「妹紅！ちよつと飛ばすからしがみついてろよ！」

「え？うわああああ!!」

俺は全力で炎を噴出し、炎を右手に纏ってチルノを殴る。この間、三秒。

「ぐうえっ！」ピチューン

「ふう……妹紅、大丈夫か？」

「うん、大丈夫♪」

「よかった♪なら、探索を続けようか。」

俺は妹紅にそう言い、探索を再開しようとする……が、また氷。しかし、その氷はチルノよりも強力なもので、俺は妹紅をまだ抱きかかえているので、回避する。

「あら、躲されちゃった。」

そこには、白い肌、白い髪に、青と白の服。一目見たときの印象は『雪女』、レテイ・ホワイトロックがいた。

「……何の用だ？」

「さつきチルノを倒してたわね。同じ冬を楽しむ仲間として、あなたを倒すだけよ。」

「……つまりは敵討ちつてところか。わかった。相手してやる。妹紅、ちよつと後ろに下がっていてくれ。」

「わかった。負けるんじゃないぞ！」

俺は妹紅にピースサインを送り、レテイの方を向く。そして、俺とレテイは同時に弾幕を発射し続ける。……が、圧倒的に俺の方が有利。俺は修行で弾幕の物量もかなり多くなったし、炎と氷。属性的にも相性が俺の方が有利で、弾幕と弾幕がぶつかり、俺の炎の弾幕の一発と、レテイの数発が同レベルに持ち込まれていた。

「くっ！怪符『テーブルターニング』!!」

「スペルか！物量で押し切る！炎符『ファイアーマシガン』！」

俺とレテイはお互いスペルを発動し、攻撃をする……。そして、数分後……。

「きゃー!？」ピチューン

「ふう、全く、連戦は流石に疲れるなあ……。」

「お疲れ様、炎火♪」

「ありがと、妹紅♪」

そして、再び俺と妹紅は手を繋ぎ、異変解決に向けて探索を再開した……………。

part 14 春雪異変②

「……………どこだ?ここ。」

俺と妹紅は、チルノ、レティの2人を倒し、探索を続けていたが、今俺のいるところがわからず、迷っていた。それに加え、妖精達も襲ってくる。とりあえず、俺と妹紅は妖精たちをあしらいつつながら、探索をしていた。すると、目の前に、猫耳と二本の尻尾があり、緑色の帽子、茶髪で、赤と白の服の小さい女の子、橙がいた。

「誰だお前は、人間がここに何の用?」

「俺は焰 炎火。春が訪れないこの異変を解決しに、来たんだが、迷ってしまったんだ。一体ここはどこなんだ?」

「ここはマヨヒガ。残念ながらここは異変には関係ないよ。」

「そっか、ありがと。」

俺は橙にそう言つて、その場を立ち去ろうとする。しかし、俺達は、橙によって、呼び止められる。

「ねえねえ炎火さん。私暇だから勝負してくれない?」

驚きの提案だった。キャラのイメージ的に橙は好戦的ではなく、癒し系キャラのイメージがあるから、そんな提案してくるとは思ってなく、硬直してしまう。

「……………いいよ。じゃあ、始めようか。」

俺はさっさと終わらせ、異変を解決しようと思つていたため、先制攻撃を仕掛ける。しかし、橙の素早い動きによって次々と躲されてしまう。橙は、俺の弾幕を回避しながら、弾幕の隙間に弾幕を撃ってくる。

「ちっ、やるな!」

「陰陽『晴明大紋』!!」

「スペルか!なら、ちよつと本気だそうかな!」

俺は橙の放つスペル弾幕を避けつつ、チャンスを伺う、そして、弾幕が止んだ一瞬の隙に、足に炎を纏う。そして、あつという間に炎を使い上昇する。

「はああああ!!炎脚『レオキック』!!」

俺は炎を纏った足で飛び蹴りをする。

「にやつ!?」ピチューン

「よし、終わりっ!」

俺はスペルによって気絶した橙を、安全なところまで運んだ。霊夢や魔理沙が来るかもしれない。霊夢なら、妖怪だからと問答無用で襲う可能性はなくはない。

「炎火♪お疲れ様♪」

「ありがと妹紅♪寒かっただろ?ほら、手。」

「うん♪じゃあ、頑張ろっか!」

「おうっ!」

そして、俺は再び妹紅と探索を続ける……………。

↳約1時間後↳

「ダメだ……………全く手がかりがない……………」

「そうだな。っていうか炎火と妹紅は寒くないのぜ?」

「俺の能力で寒くなくしてるんだ。」

「へえ、便利だなお前の能力。っていうか名前決めてないんじゃないか?決めといた方がいいと思うんだぜ。」

「うーん…………。じゃあ、『炎を支配する程度の能力』かな。妹紅の生み出した炎だっつて操れたし。」

俺は魔理沙と話しながら探索を続けていた。魔理沙とは、探索をしている途中で、魔理沙も異変解決のために探索をしていたので、一緒に探索することになった。魔理沙はちゃんと、寒さ対策でちゃんと着込んでいた。すると、俺ら3人の前に、1人の女性が現れた。宴会の時にも出会った、アリス・マーガトロイドだった。

「ようアリス、久しぶりだな。」

「そうね魔理沙。魔理沙はこの異変の解決に?」

「ああ、そうだぜ。アリスは?」

「私もよ。もしよかったら、私も付いて行ってもいいかしら?」

「炎火、いいか?」

「いいぞ。戦力が増えるのは嬉しいことだからな。いいよな?妹紅。」

「……………いいぞ、よろしくな、……………えっと……………」

「アリスよ。よろしく、妹紅さん。」

「ああ、よろしく。」

妹紅とアリスは握手をする。……ちよつと驚きだ。アリスは原作だと敵。ステージ3のボスだ。だから、仲間になるっていうのは本来とは少し違うのだ。……もしかすると、この場に俺という存在がいることで、ちよつと出来事が変化したのかもしれない。っていうかなんてそんな他人行儀なんだ？ 宴会で会わなかったのか？ 多分会わなかったんだろうな。妹紅、めっちゃ酔ってたし。

「……妹紅さん、ちよつと変ね。あなたに触れた瞬間体全体が暖かくなつたわ。」

「妹紅でいいぞ。多分それは炎火のせいだと思う。炎火は寒さ防止のために私と炎火の周りに炎を張ってるからな。」

へえ、俺だけじゃなく、俺に触れている人に触れると、その人にも俺の炎が張られるのか。いいことを学んだ。

「じゃあ、私も。正直言って寒かつたんだぜ。」

魔理沙はそう言うと、俺の右手を握る。……正直、俺の右手にはあんまり触られたくないんだがな。まあ、右手の正体、魔理沙は知ってるだろからいいんだが。

「さて、頑張つていこー！ー！」

『おおお!!』

俺の掛け声に、他のみんなが応答し、高い気分で再び探索を再開した……。

part15 春雪異変③

「はあ……はあ……。こ、ここか。」

俺はついに、犯人がいそうな結界の前にいた。アリスと合流してから30分ぐらいが経っていた。その30分の間にあつたことといえ  
ば……。

「霊夢、この結界なんかかなんないのかぜ？」

「……………ちよつと黙つてて、集中してるから。」

「……………ちよつと静かにしてましよう、魔理沙。」小声

「わ、わかつたのぜ、咲夜。」小声

霊夢と咲夜と合流した。ついでに言うと、騒霊のプリズムリバー三姉妹と友達になった。霊夢に攻撃されていて、「助けて！」と言われたので、三姉妹を助けた。なんでも、楽器で演奏していたら、「うるさいから。」という理由で襲われたらしい。……………霊夢、お前自分勝手過ぎだろ……。咲夜は、レミリアに異変解決に向かうよう、命令されたりしく、そして、俺と合流したらしい。

「……………出来た！みんな、準備は大丈夫？」

ついに、結界をなんとかすることに成功したらしい。霊夢の目の前には、結界に裂け目のようなものができている。

「大丈夫だぜ!!」

と、魔理沙。

「大丈夫よ。」

と、アリス。

「大丈夫です。」

と、咲夜。

「大丈夫だぞ。」

と、妹紅。

「大丈夫だ、問題ない。」

と、俺。そして、俺達は、異変解決に向けて、霊夢によって出来た結界の裂け目に突入する……………。

「……………ここか。」

俺は気がつくのと、さつきとは変わった景色が広がっていた。辺りを見回すと、幽霊が大量にいた。目の前には、気が遠くなるぐらいの長さの階段。幽霊が近くを通ると、凍傷になるかのような寒さが身を襲う。しかも、そもそもが寒い。多分ここに来る前よりも寒い。いくら俺と妹紅以外は防寒してきても、寒さは貫通すると思う。

「……………ちよつと時間もらうぞ、静かにしていてくれ…………。」

「ん？何なんだぜ？」

「……………はあつ！」

俺は全員に炎を纏わせる。直接触れずに、しかも全員にやっているため、少々体力の消費が見られるけど、大丈夫だろう。

「あつ、暖かくなった。」

「便利だろ？こいつの能力。」

「なんで魔理沙が誇らしくしてるんだ？やったのは炎火だろ？」

「そうよ。っていうか、レミリアお嬢様に勝ったんだから、凄いのは当然じゃない。」

「おいお前ら、さつきと行くぞ。さつきと行かないと俺の体力がやばい。」

そして俺達は、長い階段を走り登り始めた。…………正直言つて長すぎる。そして、半分ぐらいのところを、登り始めていた時、目の前に1人の少女が、道を塞いだ。白髪に、緑と白の服。黒のカチューシャに、側には幽霊のようなものが浮いている。半人半妖の庭師、魂魄 妖夢だ。

「ここを通すわけにはいかない！」

「ちっ！お前らは先に行け!!ここは俺が食い止めておく!!」

「……………わかった！やられるんじゃないわよ！」

「さつきと倒すんだぜ!」

「ここは任せるわ。」

「信じてるぞ、炎火！」

すると、みんなは一斉に走り出す。すると、アリスが俺の近くに來



る。

「蓬莱。」

「ホラーイ！」

「何かあったらこの子に言って、私の上海に情報が伝わるから。私達に何かあったら蓬莱が伝えてくれると思うから。」

「……わかった。」

そして、アリスもみんなに合流して、上を目指す。

「っ！行かせませんよ！」

「お前の相手は俺だ!!メビウムブレード!!」

俺は左腕から、炎を使って剣を作り、妖夢に斬りかかる。妖夢は、それを刀、『楼観剣』でそれを防ぐ。

「お前は剣を使うんだろ?だったら俺もそれで対抗してやる！」

「……いいでしょう!受けて立ちます!!魂魄 妖夢、参るっ!!」

「焰 炎火!!勝負だっ!!」

妖夢は2本目の刀『白楼剣』を抜刀する。俺はそれを見て、メビウムブレード一本では不利だと思い、右腕からナイトビームブレードを生成する。

「……………」

「……………」

この場には静寂な空間が生まれる。ピリピリと張りつめていて、気をぬくと負けるような、そんな感覚だった。そして、ついに勝負の火蓋が切られる。最初に仕掛けたのは……………妖夢だった。

「はああああ!!」

妖夢が2本の刀で連続攻撃を仕掛けてくる。俺は、自分の剣2本で剣撃をいなしていく。その攻撃は、流石と言わざるを得ないものだった。とても洗練されていて、無駄がなく、鋭く速い。そんな攻撃だった。

「……………っ!!」

俺はこのままだと負けると思い、足に力を込めて、回転しながら攻撃し、後ろに下がる。攻撃は避けられたが、距離は取れた。そして、俺の2本の剣が消滅する。

「やっぱり、剣勝負では勝ち目がないな。あとなんか俺に合わない。やっぱり俺は、こつちだなっ!!」

俺は下がりながら大量の炎の弾幕を放つ。今の弾幕の密度と速度。初めて使ったときのファイアーマシンガンと同じぐらいだ。

「くっ!!中々厄介ですね!!」

妖夢は俺の弾幕を斬って防ぐ。しかし、あまり前に進めないように、距離は全然詰められないようだった。

「獄神剣『業風神閃剣』!!」

「ちっ!スペルカードか!!」

妖夢はスペルカードで俺に攻撃をしてくる。俺はそのスペルの弾幕をなんとか躲す。しかし、このままでは押し切られる。俺は前方向に最大出力で熱風を放つ。すると、一瞬、弾幕が消える。俺はその隙に、妖夢の動きを炎で封じる。

「……くっ!?!う、動けない!」

「これで終わらせる!!炎熱線『メビウムシユート』!!」

俺は両手で十字に組み、光線を放つ。その光線は、動けない妖夢に命中し、爆発を引き起こす。爆発による煙が晴れると、妖夢は気絶していた。俺はある程度妖夢に手当てをし、階段を登ろうのすると、蓬菜から、アリスの声が聞こえた。

「炎火!!炎火聞こえる!?!」

「アリス!!こつちは終わったぞ!そつちはどうだ!?!」

「緊急事態よ!!早く来て!!」

「!?!一体何があった!?!」

「それは……きやつ!?!」

「アリス!?!大丈夫か!?!」

アリスとの通信がアリスの悲鳴とともに途絶える。……何があったんだ?ともかく、早く行かないと。

「蓬菜、行くぞ!」

「ホラーイ!」

体力が結構やばいが今更そんなこと言ってらんない。俺は全速力で飛行し、上に登る。そして、登りきったそこには、そろそろ満開に

なりそうな桜の木が、みんなを襲っていた。

part 16 春雪異変④

俺は全速力で上に登ると、桜の木によってみんなが襲われていた。妹紅は背中に1人の気絶した女性を背負っている。ピンクの髪、水色の帽子にありふれた幽霊が頭につけているものに、水色の着物。亡霊の姫君、西行寺 幽々子だ。そして、全員……というより、その幽々子さんを狙って攻撃しているのが、西行寺 幽々子の亡骸によって封印されていた西行妖だ。西行妖は枝を伸ばして幽々子さんを狙うが、妹紅達がそれを阻止する。

「くっ!!こいつらしつこいつ!!」

「お前ら、大丈夫か!」

「炎火!!こいつ、明らかにやばいわよっ!!」

「わかってる!!お前ら、桜の花びら持つてるか!?あつたら俺に渡せっ!!」

俺は炎の壁を作り、一時的に安全地帯を作る。けど、数分したら消えるだろう。

「よし、この花びらは焼却だ。これであの桜は満開にはならない。」

西行妖を目にした時、とてつもない悪寒が俺を襲った。とんでもない禍々しい妖気。あんな桜を満開にしたら、本当に幻想郷が終わる。

「さて……この時間で、俺にできること……一か八かやってみるか。」

俺は両手を地面に置き、精神を集中させる。すると、薄く、本当に薄く魔法陣のようなものが現れ、段々と濃く光る。俺は顔から大量の汗を流し、顔は蒼白になっている。体力がやばい。しかし、集中しないと成功率は0だ。すると、赤い魔法陣が強く光る。

「はあ……はあ……で、できた……。」

その魔法陣の中から、小さい龍が出てくる。

「炎火、そいつは?」

「この前、紅魔館の図書館で見つけた。火龍(サラマンダー)。見た目はこんなんだが、中々強いらしいし、火を扱う、つまりこの戦いではかなり役に立つ。」

「あなたがよく紅魔館に来ていたのはそういう理由ですか……。で

は、その龍を信じますよ。」

「ああ、さて、そろそろ来るぞっ!!」

俺がそう言うと、炎の壁を西行妖の枝が突き破って、襲ってくる。俺は炎の壁を解除すると、一斉に全員横に跳ぶ。元いた場所には、大量の枝が突き刺さっていた。

「あつぶねえ……さて、行くぞっ!火龍『ヘルファイアブレス』!!炎符『ファイアーマシガン』!!」

俺は火龍に攻撃のためのスペルを発動。そして、自分もスペルで攻撃する。

「弾幕はパワーだぜっ!!恋符『マスタースパーク』!!」

魔理沙はスペルで枝を破壊しつつ、本体にダメージを与える。効いているらしく、少しだけ、しかし確実に攻撃が弱まった。

「今っ!!メイド秘技『殺人ドール』!!」

「ええっ!白符『白亜の露西亜人形』!!」

その隙に、咲夜とアリスが攻撃する。すると、数秒、西行妖の攻撃が止まる。

「今だっ!!時効『月のいはかきの呪い』!!」

そして、その隙に妹紅も攻撃する。流星に西行妖といえど、この攻撃の嵐には耐えられないらしく、かなり弱っている。

「はあ……はあ……今だ霊夢っ!!」

「ええっ!!夢符『二重結界』!!」

「よしっ!!獄炎拳『ノア・インフェルノ』!!」

霊夢のスペルによって、動きが封じられ、俺は超超高熱の炎を左手に纏う。ジュツと焦げるような音と、激痛が走るが、この際気にしない。俺はそのまま思いつきり殴る。

「霊夢!!封印っ!!」

「わかってるっ!!霊符『夢想封印』!!」

そして、封印効果のある霊夢の十八番、夢想封印が西行妖に命中する。そして、西行妖の桜の花びらが散り、封印が完了する。

「やったわ!!」

「やったんだぜっ!!」

「やったぞ!!」

「やったわね。」

「任務完了です。」

みんなが喜ぶ。西行妖の封印に、みんな喜ぶ。その時、俺の視界がぼやける。頭がクラクラする。体が倒れていくのがわかる。

(流石に……体力……切れか……。)

その直後、俺の意識はプツンと切れた。

「はっ!!」

俺は目を覚ます。周りを見渡すと、俺の部屋で、俺は布団の中にいた。……が、頭の感触が枕ではない。もつと柔らかかった。上を見ると。妹紅の顔が見えた。寝ている。が、数秒後に目を覚ました。……つまり俺はあれか?妹紅に膝枕されてたの?

「妹紅、おはよう。」

「んあ……ああ、炎火おはよう……。」

妹紅はまだ眠そうだ。大きく欠伸をする。俺は起き上がり、窓から外を見る。月はほぼほぼ真上、もう深夜だ。確か、結界内に突入する前は真昼間の2時くらいだったな。で、西行妖と戦い終わるまで、大体二時間ぐらいかな?階段が長過ぎた。つまり、俺は約9時間も寝てたのか?

「妹紅、ずっと膝枕してくれてたのか、ありがとな。」

「んん……?ああ……どういたしまして……。」

流石に眠いみたいだ。俺は妹紅を布団に寝かせた。すると、肩に火龍が乗ってくる。……あれ?結構懐かれてるの?まあいいや。俺はそのまま部屋を出て、月を眺めた……。

part 17 宴会（春雪異変編）

「え？また宴会ですか？」

俺は永琳先生にそう聞き返す。異変解決から約一ヶ月。今回の異変を解決したことによって、再び解決後の宴会があると云われたのだ。

「そうよ。まあ、今回は主役はあなただけじゃないのが前回との違いね。」

「で？いつなんですか？宴会は。」

「安心なさい。1週間後よ。」

俺はそれを聞いてホッと安堵のため息をついた。前回は唐突だったから、もしや今回も……と思ったが、そうではないようだ。主役が俺1人だけじゃないのもありがたい。プレッシャーが全然違う。まあ、主役であることには変わらないがな……。

「とりあえず、仕事お願いね。」

「はい。わかりました。」

そして俺は仕事に戻った。兎達の世話と輝夜様のお相手。……が、さらにこれはめんどくさいことになった。

「輝夜様覚悟っ!!」ビシッ

「いてっ!!」

「次は……てゝゐ〜?」

「逃げるが勝ちっ!!」

てると輝夜様のイタズラが加速した。イタズラの矛先は間違いない俺か鈴仙。鈴仙は輝夜様には何もせず、てゐを捕まえて罰を与える。まあ、輝夜様はてゐの考えに悪ノリしてるだけだから、正しいわな。俺の場合、輝夜様には思いつきりデコピン。てゐには、炎の牢獄。そしてもう1つは……

「行けっ!!サラ!!」

「キュオオオオオオオオ!!」

「やめてっ!!そいつだけはやめてっ!!」

火龍（サラマンダー）、愛称はサラ。異変の時に呼び出したサラに追

いかけさせてる。ちなみに、サラの餌は炭。だから餌は竹炭を妹紅からもらってる。売り物なので勿論金は渡すぞ？すると、てるがサラに噛み付かれていた。サラの牙は、正直やばい。鋭い+灼熱の牙。普通の人間だったら皮膚が焼けただれる。けど、妖怪兔であるてるはそこまではいかない。が、流石に痛いらしく……

「痛い痛い痛いっ!!熱い熱いっ!!」

「炎火、そろそろ勘弁してあげたら?」

「……しようがないですね。サラ、戻ってこい。」

「キュオ〜。」

サラは噛み付くのをやめて、俺の方に飛んで来て、俺の頭の上に乗る。サラは俺の頭の上が気に入ったらしく。寝る時以外は大体俺の上に乗っている。

「ううう……ひどい……。」

「よかったなてゐる、輝夜様に助けてもらって。ひどいと思うんならイタズラすんな。」

俺はジト目でてるを睨み付ける。てるは苦笑いでどこかへ走っていった。……絶対またするんだろうな……。ま、その時はまた苦痛を味わってもらうがな。そして、俺はその日をそんな調子で終えた……。

### 一週間後

え?時間が飛びすぎ?いいんだよ。あれから1週間。特に何もなかった。そして、今……。

「うおおおおおおお!!」

「叫んでないでさっさと手を動かして!!」

「さーせん……。」

現在、ここ永遠亭では朝から料理の量産が開始されていた。ことの発端は昨日。俺が宴会に来る幽々子さんが俺達の予想をはるかに超える量を食べる可能性があると言ったところ、こうなった。なので、主役である俺も料理を量産している。ちなみに俺は意外



と料理はできる。いつも兎達に毎日料理を作っているから上達した。料理をしているメンバーは、俺と鈴仙の2人。……………正直難易度が高すぎる。だが、やるしかないっ!!そして料理開始から五時間……………

「ひい……………ひい……………」

「え、炎火……………お疲れ様……………」

「おう……………けど、昼ご飯作らないと……………」

「……………あんた大変ね……………」

ついに大量の料理を作り終わった。そして、俺は兎達の料理を作る。さつきまでの労働に比べたら全然楽。そして、兎達の料理を作り終えた俺は兎達の部屋に入り、兎達に昼ごはんを兎達に配り、自分の部屋に行く。自分の部屋に着くと、俺はバタツと横になる。

「っ、疲れた……………」

俺は荒い息で呼吸していると、扉が思いっきり開く。すると、そこには輝夜様が立っていた。その理由は大体想像がついていた。それは……………

「炎火!!なんで今日宴会があるって言うってくれなかったの!?!」

「永琳先生に止められてたんですよ……………。で、その情報を誰から聞いたんですか?」

「え?てゐるだけど?」

……………やっぱりあのバカ兎か。よし、後でサラの食料(炭)にしてやる。

「私も行きたい行きたい!!」

輝夜様は俺にしがみついて駄々をこねてくる。

「でも、永琳先生の許可がないと……………」

「あら、もうとつたわよ?」

ああ……………。頼みの綱が一瞬にして消えた……………。まあ……………永琳先生がいいって言うならいいか……………。

「……………なら、いいですよ。」

「え、いいの!?!やっつ」ただし!!」?」

「妹紅と喧嘩しないと約束するんです!」

「うっ……………」

今回の異変。妹紅も主役の1人だ。主役は俺、妹紅、霊夢、魔理沙、咲夜、アリスの6人。このみんながいたからこそ、西行妖は封印出来たと思う。だから、妹紅と喧嘩しないと約束してもらわないと、色々困る。

「……わ、わかったわ。妹紅とは喧嘩しないわ。」

「ありがとうございます。じゃあ、出発の時間になったら部屋に伺いますね。」

「はい。」

俺がそう言うと、輝夜様は部屋を出て行った。さて、妹紅のところに行つてサラの竹炭ストックしとかないと……。

#### 4時間後

「さて……着いた……もう疲れた……。立つてるのが奇跡……。」

俺達は宴会の始まる一時間前に開催地、博麗神社に着いた。ちなみに俺がここまで疲れてる理由は、大量の料理にある。俺は5時間以上もかけて作った料理を全て俺1人で持っている。え？そんなに大量に持てるのかつて？低温の炎で包むようにして持ってた。けど、体力がとんでもなく消費してしまった。まあ、宴会を楽しんでたら回復してるでしょ。

「炎火く、その料理こつち持つて来てく。」

俺は霊夢にそう言われ、言われた場所に料理を全て置く。置いた瞬間ドンツと少し地面が揺れた。……流石に作りすぎた？いやいや、今回の宴会は前回よりも規模がでかい。よって、人数も多いから、これで十分なはずだ。

「おお、炎火もう来たのかぜ。」

「よう魔理沙。俺は前の宴会もこんな時間に来たぞ。」

「あ、そうだったな。」

俺は疲れて座り込む。そして、兎達に霊夢や魔理沙達の宴会の準備を手伝うよう言う。すると、俺の頭の上にサラが乗ってくる。

「お前も飛び続けて疲れただろ。休めよ。」

「キュオ〜♪」

サラは嬉しそうに鳴く。俺は頭の上に竹炭を投げる。その竹炭は丁度サラのところに落ち、それをサラは口でキャッチしてポリポリと食べる。

「どうだ、美味しいか？私の作った竹炭は。」

「キュオ〜♪」

妹紅はサラを撫でる。サラは妹紅にもかなり懐いていて、気持ちよさそうにしている。すると、サラは自由に飛び立っていく。まあ、数分好きに飛ばせといたら、ちゃっかり頭の上に戻ってくるから、そこまで気にすることないだろう。

「あの子、異変の時に呼び出した子？」

後ろから声が聞こえ、振り返ると紅魔館の皆が来ていた。

「あの龍……本に載っていた火龍(サラマンダー)ね。よく呼び出すのに成功したわね。私でも呼び出さなかったのに。」

パチュリーさん、よく来れたな……。つていうか、サラのこと呼び出したことあるのか。まあ、魔法使いだから当たり前か。

「珍しい生き物ね……。」

「お嬢様、あれは珍しい超えていますよ？伝説上の生き物ですからね？くれぐれもペットにしようとは思わないでくださいよ？あの一匹、しかもあの火龍は炎火のもんですからね？」

「わ、わかってるわよ！」

すると、サラは俺の頭の上に乗る。どうやら、満足したようだ。すると、フランが俺の前に走ってくる。

「ねえねえ炎火お兄さん！その子触ってもいい!？」

「いいけど……大丈夫かな……。」

サラは中々人懐っこい。初対面で撫でてでも、普通に嬉しそうにする。俺が知ってる中でサラが嫌ってるのは1人だけ。てみだけだ。俺はフランが撫でれるように屈む。そして、フランがサラを恐る恐るなでる。

「キュオ〜♪」

どうやら、鳴き声的に大丈夫なようだ。そして、それから続々とメンバーが集まってくる。アリスも来て、人里の人達も大量にくる。そ

して、妖夢と幽々子さんも。……幽々子さん、そんなに大量の料理見て目を輝かせないでください。となりの従者が困ってますよ？そして、俺も体力が回復し、準備の手伝いをする。そして、宴会が始まる予定時間の数分前。俺達異変解決組の6人+サラは既に集合していた。

「誰が始まりの乾杯するの？」

「炎火でいいんじゃないですか？前回もそうでしたし。」

「ええ!?俺プレッシャーで死ぬっ!!」

「そんなんで死なないでしょ。蓬菜が戦つてるときのこと話してくれただけど、そんなに危なげない戦いだっただみたいじゃない。精神面であなただは死んだりしないでしょ。」

「じゃあ、炎火がいいと思うやつは手を挙げるんだぜ!!」

『はい。』

「嘘だドンドコドン!!」

というわけで、俺が始まりの乾杯をさせていただくことになりました。……結構無理矢理だったよね？まあ、いつか。おつとそろそろ時間か。俺は神社の本殿の前に立つ。全員の視線が俺に集まる。ひー、緊張するく……。

「えー……今回も無事に異変を解決することができました。堅苦しいのは無しで、楽しみましょう!!かんぱーい!!」

『かんぱーい!!』

そして、ついに宴会が開始された。さて、飯だ飯。腹が減った。俺は一直線に永遠亭のみんなのところに行く。

「ふう……。」

「お疲れ様。炎火、これ美味しいわよ。」

「おつ、輝夜様、ありがとうございます。じゃあ、頂きまーす。」

俺は輝夜様に勧められた料理を一口食べる。すると……

「辛……」

俺のその反応を見て、輝夜様とてゐが大爆笑をする。それよりも

水っ!!水っ!!

「炎火!!これ水!!」

「ゴクゴクゴク……………ぷはあ……………あゝ、死ぬかと思った……………」  
「大丈夫か？」

「ああ、ありがとう妹紅。それより……………ふくたくりくとも……………?」  
俺は満面の笑みで輝夜様とてゐるに近づく。しかし、その瞳は真っ黒で、死んでいる。その笑顔を見て輝夜様とてゐるは笑うのをやめ、苦笑いする。

『や、やつほ〜♪』

「やつほ〜♪じゃねえええええ!!炎牢『獄炎牢獄』!!そこで反省しろおお!!」

俺は2人を閉じ込める。このスペル。ただただイタズラをする2人にお仕置きをするためだけに作ったスペルだ。輝夜様がいるから、五分たったら解除するように仕掛けた。

五分後

「こ、これにはなれない……………」

「え、炎火……………、なんで私も……………」

「当たり前です。」パクパク

俺は2人を閉じ込めてる間、飯を食べてた。スペルを維持してる時間、俺は体力を少しずつ失うから、お腹が減る……………。妹紅?牢獄に閉じ込められてる輝夜様を見て大爆笑している。

「あははははははは!!」

「妹紅、そろそろ落ち着こうか。」

「う、うん、ひい……………ひい……………」

「ただ面白かったんだよ……………。ちよつと永琳先生、なんであなたは笑いを一生懸命堪えてるんだ。一目瞭然ですよ?」

「さて……………炎火、他のところも回って来たら?」

「……………うーん……………わかりました。ありがとうございます、永琳先生。」

俺は永琳先生に言われて他のところを回ることにする。ちよつかり妹紅も付いて来てる。もちろんサラもいるぞ?竹炭を上投げながら歩いてる。まずは……………おつ、チルノいるじゃん。俺と妹紅はチルノのいるところに行った。

「よう。楽しんでるか？」

「あつ!!お前はあたいを2度も倒したやつ!!」

あつ、そういえば俺チルノに自己紹介してないな。まあ、そんな時間なかったしな。なんか悪いな……。

「あ、自己紹介がまだだったな。俺は焰 炎火だ。」

「あたいはチルノ!!お前強いな!!どうやったらそんなに強くなれるんだ?」

「うーん……毎日欠かさず鍛錬かな?よかつたら一緒にまたするか?永遠亭つてところに来れば、俺はいるから。」

「いいのかつ!?ありがとう!」

チルノは俺に笑顔を向けてくる。人に善意を向けるのは、悪いことじゃないよな。すると、チルノの後ろから、1人の小さい女の子がこつちにくる。金髪に赤のリボン、そして黒と白の制服に似ているような服を着ている。宵闇の妖怪、ルーミアだ。

「ねーねーお兄さん、一緒にご飯食べよう?」

「ん?いいぞ?」

そして、俺はルーミアとチルノとご飯を食べることにした。つていうな、中々美味しく作れたな。チルノとルーミアも美味しそうに食べてくれている。ちなみにこの宴会の大体六割は俺と鈴仙が作ったものだ。流石に多すぎかな……?俺はそれから20分ぐらい食べた。……まだ満腹にならない。消費と供給が釣り合っていないのかな?

「じゃあ、俺は別の場所に行ってくるよ。ルーミアも永遠亭に遊びに来ていいからな。」

「わかったのだー。」

そして、俺はルーミアとチルノのいた場所から離れ、上に竹炭を投げながら、今度は紅魔館組のところに行く。ちなみにこいつは普通の食べ物も食べるが、サラ的には炭の方が美味しいらしい。

「あら炎火、来たのね。」

「咲夜さん、レミリア様、隣いいですか?」

『いいわよ(ですよ)。』

俺は咲夜とレミリア様の隣に座る。紅魔館組は持参した料理を食

べ、楽しんでる。

「俺も食べてもいい？」

「ええ、いいわよ。」

「じゃあ、いただきまーす……。!!? うつま!!」

美味い……。美味すぎる……。こんな美味しい料理、転生する前にも食べたことないぞ?!

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね。」

やっぱり咲夜でしたか。もうね、料理でお金を稼げても全然いい。つまりプロ級ですよ。

「どう?うちのメイド長はすごいでしょ?」

「おう……。というより、予想以上でしたね。」

また料理教えてもらおうかな?そういえば、頭の上からサラがいなくなってるな。右前を見ると、サラはフランと戯れていた。すっかり仲良しか、よかったな。さて……。

「じゃあ、俺は別の場所に行つてきます。」

「あら、もう?まあ、あなた人気者だものね。」

「咲夜さんからかわないください……。サラ、行くぞ。」

「キュオゥ。」

俺が呼ぶと、サラは俺の方に飛んでくる。それに合わせて俺は竹炭を投げ、それをキャッチして頭の上に乗る。

「思うんだけど、首とか痛くない?」

「え?特に痛くないですけど?」

「へえ……。変わってるわね。」

「?じゃあ、俺行きます。」

さて……。次は……。そうだ。あの場所に行つてみよう。

「こんばんは、楽しんでますか?」

「あ、炎火さん!」

俺は幽々子さん、妖夢のいるところに来た。……。流石幽々子さん、食べっぷりがえげつない。周辺を見ると、料理の入れ物が大量に置かれている。勿論、空で。

「もう、幽々子様!炎火さん来ましたよ!!」

「ん〜？ゴツクン あら、いらっしやい。」

「どうも……。それより妖夢さん、怪我とか大丈夫ですか？」

「妖夢でいいですよ。あと敬語はなしで自由に。私もそうしますので。」

「敬語じゃないですか……。」

「癖みたいなもんです。怪我なら炎火が手当てしてくれたのもう治ってますよ。」

「そっか、ならよかった。」

結構本気でメビウムシールド撃つたからな。流石半人半霊、怪我の治癒力も違うな。

「ねえねえ、この料理ってあなたが作ったんでしょ？美味しいわよ〜。」

「あり？妖夢も料理持って来てなかったっけ？見た感じ結構な量。」

「もう全部幽々子様が食べちゃいました……。」

ええ……。流石……って感じかな？あれぐらいよ量、しかも1人で食べたなら、俺だったらもうギブだな。

「それより……。」ゴツクン

「？なんですか？」

幽々子さんは俺の方を見て、正座する。俺も座り、正座する。すると……。幽々子さんが俺に頭を下げる。

「……西行妖を止めてくれてありがとう……。今考えたら、あれが満開になってたらとんでもないことになっていたわ……。」

「……頭を上げてください。俺は異変を解決するよう言われて、原因となるあの桜を止めただけです。」

「そう……なら、宴会を楽しみましょうか。」

「はい、そうですね。」

そう言うと、俺達3人は料理を再び食べ始めた。……ここまではいい。が、30分後……。

「ふう……美味しかったわ……。」

『食べ過ぎです!!』

料理を食べ終わった幽々子さんに、俺と妖夢が本気で突っ込む。あ



れからおせち料理4個分ぐらいの量を1人で食べた。

「いいじゃない。折角の宴会なんだから。」

「はあ……まあ、それもそうですね。さて、霊夢達のところに行こうかな……。」

「行つてらっしゃい。」

俺は立ち上がり、霊夢達のところに向かう。……嫌な予感。俺の予想では霊夢、魔理沙、そしてアリスの3人だと思うんだが……。

「よう霊夢。楽しんでる……か……。」

そこにいたのは霊夢、魔理沙、アリスの3人……のはずが、6人。イレギュラーな存在が3人もいる。1人は小さい女の子。茶髪で白い服に青いスカート。腰には瓢箪をつけていて、頭に角が生えている。地底の鬼、伊吹 萃香だ。2人目は緑色の髪に赤いシャツに赤いチエツクの上着。フラワーマスター、風間 幽香だ。そして、最後は、金髪で、赤いリボンのついた白い帽子、そして白と紫が中心の服。妖怪の賢者、八雲 紫。……嫌な予感的中。っていうか状況がカオス。どうしたらいいの？

「あら炎火。一緒に飲みましょう？」

「そうだぜ……一緒に楽しもうぜ……。」

霊夢は普通だが、魔理沙はかなり酔っているみたいだ。かなり顔が赤い。

「あなたが焰 炎火ね？私は八雲 紫よ。よろしくね。」

「私は風見 幽香よ。よろしく。」

「私は伊吹 萃香だ！よろしくなく！」

「ほ、焰 炎火です。よろしくお願いします。」

や、やべえ、心臓の音がうるさい。俺はとりあえず、霊夢と魔理沙の間に座る。流石に大妖怪クラスが隣だと俺の心臓がもたない。

「お前顔暗いなく♪ほら、これ飲め！」

「あ、ありがとうございます。」

俺は萃香から盃をもらい、飲む。

「あつ！炎火、そのお酒……。」

「ゴク……ゴク……!?!」

急に体が熱くなる。頭がクラクラする。やばい、この酒キツすぎるだろ……。

「萃香！あんた鬼用の酒飲ませたでしょ！」

「にやはは〜♪」

うう……なんとか耐えたぞ……。まあ、味は美味しかったな。もう少し酒というものに慣れたら飲みたいな……。

「ねえ、それよりあなた……。」

幽香さんが俺に話しかけてくる。……俺の命が危険な気がする。いや、勘だけど。

「な、なんですか？」

「私と戦わないかしら……？余興だと思って……ね？」

……もう俺の人生詰んでね？相手が悪すぎる。しかし、俺は幽香さんの威圧に圧倒される。

「……わかりました。しかし、ここでは危ないんじゃない？」

「大丈夫よ。紫。」

「はいはい、わかったわよ……。」

紫さんがパチンツと指を鳴らす。すると、中々の大きさの結界が張られる。流石紫さん。結界の扱いもかなりだな。

「じゃあ、やりましょうか。」

「……わかりました。相手になるかわかりませんが、やるだけやりましょう。サラ、やるぞ。」

俺は構える。相手はあの大妖怪のフラワーマスター、風見 幽香だ。本気を出させてもらうぞ……。

「私の張った結界だから安心しなさい……。じゃあ、開始！」

俺と幽香さんと俺は同時に弾幕を放つ。弾幕と弾幕がぶつかり合い、小さな爆発が起きていく……。そして、わかったことがある。

(……パワーが凄い……！)

俺の1つ1つの弾と向こうの1つ1つの弾の威力が違う。まあ、当たり前って言っちゃ当たり前か。……これは、体力全部削つてでもやらないとな……。

「行くぞサラ!!火龍『獄炎の鉤爪』!!炎符『ファイアーマシンガン』!!」

俺はサラのスペルと、俺のスペル、同時に2つのスペルを使用する。  
……くっ！流石に体力の消費がやばい！

「へえ、面白いことするじゃない。じゃあ……。」

幽香さんは自分の日傘を前に突き出す。……まさか!!

「サラ!!こつちに来い!!」

俺はスペルを中断して、サラを呼び寄せる。すると、サラもスペルを中断し、俺の頭の上に乗る。俺はサラが頭の上に乗った瞬間、炎の噴射を使い、思いつきり右に移動する。

「元祖『マスターパーク』。」

幽香さんは、日傘の先から極太の虹色光線を放つ。元いた場所を見ると、地面がえぐれている。あれ当たってたら死んでたな……。

「あら、避けたのね。その調子で避けてちょうだい。」

幽香さんは極太の虹色光線を連発する。俺はそれを炎の噴射を使い、避けていく。が、光線が俺の掠る。

「ぐっ!」

掠ったところから出血する。が、今はその程度で止まっている場合じゃない。俺は炎を噴射し続け、極太の虹色光線を躲し続ける。

「めんどくさいわね……!幻想『花鳥風月、嘯風弄月』!」

幽香さんは別のスペカを使ってるくる。弾幕の密度が濃すぎる。躲すのが難しすぎる。次々と体を掠っていく。

「くっ!」かハか!炎爆符『ウルトラダイナマイト』!!」

今まで強敵を倒してきた俺の中で1番の火力のスペル。これに賭けるしかない!!俺は炎を纏い、幽香さんに突撃して行く。

「ふっ、面白そうね!でも、ここに来る前に倒させてもらおうわ!」

スペル弾幕が次々と飛んでくる。そして、1つの弾幕に当たってしまう。小さな爆発が起き、爆煙が発生する。

「……変にあつさり終わったわね。」

「それはどうか?」

俺は幽香さんの後ろにいた。そして……爆発。流石にあれを食らった、幽香さんと言えど、あれを食らうのはまずいだらう。俺は少し離れた場所で、体を再構築する。すると、爆煙が薙ぎ払われ、そこ

から幽香さんが現れる。

「ふふっ……♪流石の威力ね。ガードが間に合ってなかったら大変なことになっていたわ……。」

「あれでも無理かよ……。」

俺は再び回避の体勢になった……。が、目の前が薄暗くなってぼやける。平衡感覚が消え、俺は地面に落ちてるのがわかった。多分、掠ったことよって出血したのが重なったのだろう。そして、俺の意識は途切れる。

「ハッ!!」

目を覚ますと、まだ夜だった。宴会もまだ終わっておらず、まだまだ活気にあふれていた。そして、俺の目には目を閉じ、寝ている妹紅の顔があった。そういえば、頭の感触が地面じゃない。そうか……これが膝枕ですか……。

「妹紅、起きろ。」

「んん……?あ、炎火!大丈夫か!」

「ああ、俺は大丈夫だ。」

俺は起き上がり、軽く体を伸ばす。すると、そこに幽香さんが後ろから現れる。

「お疲れ様。あなた……中々悪くないわね。楽しかったわよ。あなたとの戦い。観客も盛り上がったみたいだしね。また戦いましょう?」

「……次戦う時は、もっと強くなっているよう、努力しますよ。」

俺は幽香さんと握手する。って、幽香さん力強っ!?痛い!痛いです!!なんとか表情と声には出さないように我慢してるけど痛い!!

「ふふ、よろしくね♪」

「……………ひい、手痛い…………。」

まあ、死ななかつただけマシだ。次は負けないように頑張らないとな……。

「よしっ!じゃあ妹紅!まだ楽しむぞー!」

「おー！」

「じゃあ、私達も仲間に入れてもらえるかしら？」

声が聞こえ左を見ると、霊夢、魔理沙、アリス、咲夜がいた。……折角だ。異変を解決したこの6人で、一緒に飲みたいな。

「ああ、いいぞー！じゃあ、楽しもー！！」

『おおー！！』

そして、宴会は次の日の朝まで続き、俺の中で、この幻想郷での思い出が、また1つ増えた……………。

part 18 日常の中

「ふわあく……。。」

俺は起き、大きく欠伸をする。今は……。大体5時。いつもこれぐらいの時間に起きる。仕事のために、早めに起きないといけないのだ。俺は起き上がり、服を着替え、洗面台に向かい、顔を洗う。水が冷たい。冷たい水によって目が覚める……。が、眠い。

「キュオ〜。」

「サラ、おはよう。また竹炭か。部屋に戻るか……。」

サラは俺の頭の上に乗る。ちなみに、サラは水が大っ嫌いだ。火属性だからなのかは知らないが、とにかく嫌い。もちろん風呂も嫌い。……。サラはあまり汚れないから別にいいのだが……。サラは無意識的に自分の体についたゴミを焼却する。だから、ほぼほぼ常にサラは綺麗な状態だ。俺は部屋に戻って、竹炭が大量に入っている袋を取り出し、その中から竹炭を1つ取り、上に投げる。後は、サラが自分で口に咥え、ボリボリ食べる。

「キュオ〜♪」

サラは嬉しそうに鳴く。どんなに美味しい食べ物でも、炭系が1番美味しいらしい。ちなみに1番好きな炭は石炭。……。けど、あまり手に入れないのが現状。でも、たまに食べるからこそなのかもしれない。俺はその後、もう何個かサラに竹炭を食べさせると、食事を作る。兎達の分と、輝夜様の分。大体……。20人分ぐらいかな？まあ、そんな生活にも慣れた。っていうか嫌でも慣れる。料理の腕も上達する。「よし……。できた。じゃあ、兎達を起こしに行くか……。」

俺は料理を作り終わると、俺は兎達の部屋に向かう。今は大体6時ぐらい。転生する前の俺だったらまだ寝てる時間だな。確実に。そんな俺が今はそんな時間に起こす立場になるとはな……。俺は勢いよく扉を開ける。

「お前らー！起きろー！起きないとサラの火炎放射だぞー！」

俺がそう言うと、兎達は飛び起きる。よほど火炎放射が嫌なのか……。まあ、流石に俺でも火炎放射は嫌だ。初めて見たときは俺も

びつくりした。……これでもまだ子供なんだよな……。大人になつたらどうなるんだろうな？ サラの上に乗れたりできるのかな？ そういうのは、やっぱり男のロマンだよな。そんな中、起きない兎が一匹……。

「てゐー!!起きろー!!」

「嫌だ……。」

「よし、サラ行け。」

「キュオー!!」ガブツ

「いったあああああ!」

てゐが中々起きないので、サラに嘯まさせる。俺が何回も言つてやってるんだ。可哀想とか、思わないでくれ。

「炎火、おはよく……って、いきなり?」

部屋の中に鈴仙が入ってくる。鈴仙には、俺が作った朝ご飯を運んでもらっている。鈴仙は、てゐがされていることについては、何も言わない。鈴仙自身もてゐにイタズラをされたり、言うことを聞かなかつたりで、色々と困っているから、逆にありがたいと思つているらしい。

「よし。サラ、もういいぞ。」

「キュオ〜。」

「うう……痛かつた……。」

「てゐが悪いのよ? 炎火の言うこと聞かないから……。」

そんなこんなで、兎達に朝ごはんを配り、一緒に朝ごはんを食べる。うん。まあまあ美味しい。たくさん料理して来たら、流石に料理の腕は上達する。そして、数十分後……。

『ごちそうさまでした。』

全員食べ終わり、食器を片付ける。そして、兎達は仕事を開始する。

俺の仕事はこれを見守りつつ手伝う……なのだが。今日は休み。

「炎火、今日は紅魔館に行くんじゃないやなかつたっけ?」

「あ、そうだった。鈴仙サンキュー。」

俺は鈴仙が言ってくれたお陰で、今日何をするか思い出し、外に出る。そして、俺は空を飛んで紅魔館に向かう。ちゃんと途中で妹紅と

合流した。妹紅も行く約束だったからな。そして、最近靈力によつて飛ぶことを覚えた。そもそも、俺の生み出す炎は、体力と靈力を消費して生み出すものだったみたい。靈夢に教えてもらい、靈力での飛び方で、かなり体力の消費が抑えられた。まあ、早く行きたい時は炎の噴射による飛行で行くが、今回はあまり急いではいないので炎を使つては飛ばない。まあ、これでもまあまあ速く飛べるので、別に気にしない。約十分後、紅魔館に到着した。

「よつと……。妹紅、お疲れ様。」

「おう、炎火もお疲れ様！」

「お二人共お待ちしてました。通つてもいいですよ。」

「お、美鈴が起きてるなんて珍しいな。」

「私どんなイメージなんですか!?!」

『いつも寝てるイメージ。』

「息を合わせないでください……。」

美鈴はため息をついて、門を開ける。美鈴をイジるのは、反応が良いから面白い。ちなみに、妹紅と息が合ったのは偶然だ。俺達はまず、図書館に向かった。

「ようパチュリー。」

「あら炎火、来たのね。」

「ああ、色々調べさせてもらう方がいいか？」

「ええ、いいわよ。その変わり、その火龍と一緒にいいかしら？」

「ん？いいぞ。妹紅はどうするんだ？また漫画でも読んでるか？」

「ああ、そうするよ。」

俺はとりあえず、サラをパチュリーに預けることにした。パチュリーは、サラのことが気に入っているようで。よく愛でて和んでいる姿を見ることがある。そして、俺は本を読んでいると……。

ドゴーン！

「!?何があつた!?!」

「フランが暴走したみたい!!」

「ちっ！抑える方法は!?!」

「一回気絶させないと無理よ!?!」



「難しい注文出しやがって……！行くぞ妹紅!!」  
「おうっ!!」

俺と妹紅は何故暴走したかわからないフランを抑えるべく、戦闘準備をした……。

## part 19 狂気

俺は暴走したフランのところに行く。そこでは、フランが狂ったように周囲の物を破壊していた。

「アハハハ!!」

「確かに、会話でなんとかなる感じじゃないな。」

「ああ。炎火、どうする?」

「戦うしかないだろ……! 炎纏『ファイアエンハンス(対吸血鬼ver.』。』」

俺は拳と脚に炎を纏う。中々の高熱だ。しかも、対吸血鬼用に太陽光の力を含ませている。俺は普通の人間よりかは圧倒的に身体能力は高いが……吸血鬼相手にはこれがないと流石にキツイ。

「アハハ!! 遊ンデクレルノ!? 玩具ミタイニスグニ壊レナイデネ!! キュツとして……………」

「ああ! 遊んでやるよ!!」

俺はそう言うのと超高熱のレーザーを放つ。フランは『キュツとしてドカーン』の構えを解いて、横に移動してレーザーを回避する。その隙に、パチュリーが水属性の弾幕で攻撃する。そっか。確か吸血鬼って流水も弱点なんだっけ……。強いものには弱点は多いものなんだな。

「アハハハ!! 禁弾『スターボウブレイク』!!」

「妹紅!! 対処頼む!!」

「わかった!! 不滅『フェニックスの尾』!!」

フランがスペルを発動し、それを妹紅がスペルで掻き消す。その掻き消されたところから、俺が炎の弾幕(対吸血鬼属性あり)を放ち、パチュリーが水の弾幕を放ってフランを追い詰めていく。

「アアアアア!! モウイイ!! 壊レチャエ!! 禁忌『フォーオブアカインド』!! 禁忌『レーヴァテイン』!!」

「チツ!! めんどくさいことしやがって!! 妹紅とパチュリーはキツイかもしれないけど一対一で戦ってくれ!!」

「炎火は!」

「残りの2人をなんとかする！」

「!?無茶よ!!」

「やるしかないんだ!!炎人符『炎のドッペルゲンガー』!!」

俺は炎で自分そっくり……というより、もう1人の自分を作り出す。もちろん多少俺よりかは能力は劣るけど自立行動。けど、体力と霊力がかなり持っていかれる。今の状況だとこれしか対処方法がない。

「行くぞフラン!!」

俺はフランのレーヴァテインの攻撃を紙一重で躲す。もう一方は気にしてはられない。俺は至近距離から炎の弾を放つ。流石に吸血鬼でも、無傷では済まないはずだ。俺の読みは当たり、ダメージも入り、ノックバックで後ろに少し下がる。

「グウウ……ウアアアアああ!!」

再びフランは突進して斬りかかってくる。俺はその攻撃を炎の噴射で避けていく。さつきよりも速度が速く、鋭い。あれに当たったことを考えると……いや、今は余計なことは考えないようにしないと!

「炎剣『聖なる青い炎の剣』!!」

俺も剣を創り、炎の噴射で速度を上げて剣を迎え撃つ。ガアアアアと高い音がする。……なんで炎と炎でそんな音がするかわからないな。俺とフランは衝撃で後ろに下がる。本当に、吸血鬼って身体能力やばいな……。剣を持っている手がビリビリと痺れる。俺はそれをこらえ、ギュツと強く剣を握る。

「アハハハ!!オ兄サン面白イネ!!モット私ヲ楽シマセテ!!」

「じゃあ、さつきと終わらせてやる!!」

体力と霊力もやばい。さつきと終わらせないと持たない。

「はああああ!!」

「グツ!？」

俺は全力で炎を噴射させ、超速で斬りかかる。そして、腕を噴射で速度を上げた斬撃をフランに浴びせる。これで一度でも当たれば、分身なら消滅し、本体なら狂気を抑えられるはずだ。

「はあああああ!!」

「!?」

俺は出せる最大の速度で斬る。その速度に流石のフランも間に合わず、俺の攻撃が当たる。しかし、分身だったようで、体が消滅する。

「はあ……………はあ……………も、もう1人は……………」

俺は自分の方の戦いを終え、俺の分身が戦っている方を見る。

「ちく……………しよう……………」

「アハハハハ!!」

そこでは、俺の分身が消滅し、笑いながらこつちを見ているフランの姿があった。

「オ兄サン、強カッタケド惜シカッタネ! ジャア、バイバイ!!」

フランは俺に斬りかかる。俺は突然のことだったので、体が動かなかった。死ぬ。その考えが俺の頭を支配する。不思議にその光景がゆっくりに見えた。すると……………

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!」

横から紅い槍がフラン目掛けて飛んで来るのがわかった。フランもそれを察知したらしく、咄嗟に後ろに飛び、槍がフランを掠る。向こうのほうで槍が壁に激突したらしく、ドゴーンツ!と音が聞こえる。……………本は無事だといいな。すると、紅い槍を投げた張本人、レミア・スカーレットが走って来る。

「炎火、大丈夫?」

レミアは俺に手を差し伸べる。俺はその手を掴み、立ち上がる。残りの体力も霊力も本当にやばい。立っているのもやっとだ。

「炎火、私も協力するわ。今のあなたじゃ、フランには勝てない。」

「……………ああ、頼むぞ、レミア。」

俺は再び剣を構え直し、レミアも構える。この剣をあと何分持たせることができるか……………

「オ姉チャン! 邪魔シナイデ!!」

「無理よ。あなたを元に戻すために私も戦うわ。」

レミアという姉を目にし、フランに初めて怒りという感情が見える。確かフランって地下に幽閉されてたんだっけ……………。表のフラン

は気にしてないみたいだけど……。狂気は幽閉されていたときに生み出されたもの。そりゃ幽閉した姉に怒りを感じるのかもな。俺にはわからんが。

「ブツ壊シテヤル!!」

「来るわよ、炎火!」

「わかってるよ!」

フランは怒りに身を任せ、力任せに剣を叩きつけて来る。俺とレミアは横に飛び、その攻撃を回避する。剣が叩きつけられていた場所を見ると、大きなクレーターののように穴が空いている。あんなのが当たっていたら死ぬる……。さて、妹紅達の方は……。

「その程度か? 悪魔の妹は。」

「ウルサイ!!」

妹紅……。めつちや余裕そうだな……。EXキャラとEXキャラの戦いとかものすごいな……。パチュリーの方は……。

「水&火符『フロギスティッククレイン』!!」

パチュリーもなんとかなってる。なら、心配無用だ。俺は俺の戦いに集中しなきゃな……!

「アアアアアアアア!!」

フランは力任せに剣を振り続けながら、弾幕を放つ。剣を一回振るたびに、かなりの風圧が発生する。しかし、俺とレミアは冷静にそれを回避していく。……そろそろ決着を決めないとな。

「レミアア! 弾幕を破壊してくれ!」

「わかったわ!……はあ!!」

レミアアは手に持った紅い槍を思いっきり投げる。それにより、弾幕が破壊され、フランまでの道ができる。

「これで終わらせる……!! 炎剣波『聖なる清き炎』!!」

俺は手に持ったスペルの剣で、全部までギリギリの範囲の量の霊力で、たった一太刀。しかし強大な炎を放つ。

「負ケルカアアア!!」

「フランは返してもらおうぞ!!」

そして、ついに炎はフランに命中する。無傷だが、狂気は消えたは

ず。フランは気絶し、分身も消えた。

(へへ、やった……ぜ……。)

流石に霊力を使いすぎた。俺の視界は暗転していき、体が倒れるのがわかった。そして、俺は意識を失った……。

## クリスマス特別編　メリークリスマス

今日は12月25日。つまり……

「クリスマスだああああ!!」

『イエーイ!!』

そう、クリスマス。ちゃんとクリスマスというものの文化は幻想郷にあるのかヒヤヒヤしたが、ちゃんとあるようだ。その証拠に、先程人里に買い物に行ったが、クリスマスムード漂っていた。さて、転生前の俺なら明らかにクリぼっちだったが今回は違う。今、俺は永遠亭のみんな(ちゃんと妹紅も)＋主人公組の2人と、紅魔館のみんな、白玉楼の2人とアリスで、永遠亭にてパーティをしている。……はつきり言うと、『どうしてこうなった』だ。元々永遠亭のみんなだけでやるつもりだったのだが……。まあいいや。楽しいことには変わらない。『それじゃー！かんぱーい!!』

最早パーティではなく、宴会に近い雰囲気がこの場を包む。まあ、この雰囲気は嫌いではなく、逆に好きだ。俺は人数が多くなったぶん、大量のチキンとホワイトシチューを用意した。ええ、死にかけたよ、重労働で。

「このチキン、美味しいんだぜ!」

「このシチューも美味しいわ!」

……どうやら、喜んでもらえたようだ。かなり急ピッチで作業したので味には自信なかったが、なんとかなったようだ。

「炎火♪構って♪」

「妹紅早々にどんだけ酒(シャンパン)飲んだの!」

「どれくらいでしょ?♪」

「少なくともこれだけ酔うぐらいだな……。」

はい。いきなり妹紅がかなり酔いました。妹紅はこういう時アルコールを大量摂取するの忘れてた……。春雪異変の時は飲まないように努力したが……。今回忘れてた……。おいてる、その空のシャンパンのボトルはなんだ?

「てる……。お前まさか……。」

「な、ナンノコトカナー……」

「とぼけんなああああ!!お前が原因かああああ!!」

俺はそのままてゐるを追いかけた(約5分)。そして、今はサラの遊び相手になっている(強制的)。うーん……どうしよう。まあ、いっか。可愛いし♪

「炎火、おかわりももらえるかしら?」

「わ、わかりました。」

永琳先生も喜んでくれてる……のか?けど、おかわりをしてくれるということは、それほど美味しかった……という解釈でいいだろう。よかったよかった。

「炎火さん。」

「ん?なんだ?」

妖夢が俺に話しかけてくる。妖夢との交流は、まあまあある。というより、協力を要請される。俺はお手伝いさんが何かですかね?まあ、俺は喜んで手伝っているが……。

「後で私と勝負してもらえませんか?酔い覚ましに。」

「ああ、いいよ。」

というわけで、数十分後、妖夢との弾幕ごっこ。

「2人ともがんばれー!!」

「負けた方お賽銭お願いねー!」

霊夢よ……。どれだけ金が欲しいんだ……。クリスマスぐらいいんじゃないか……。?そして、観客達に囲まれながら、俺と妖夢は距離を取る。

「では、行きますよ……。」

「ああ、いつでも来い。炎剣『聖なる青い炎の剣』。」

俺はスペルで剣を召喚し、構える。相手は剣士。異変の時は違ったが、やはり剣VS剣で勝負したい。妖夢も2本の剣を鞘から抜き、抜刀斬りの体勢になる。張り詰めた空気と冷たい空気が肌を刺激する。その雰囲気、オーディエンスのみんなも静かになる。

「ハアアアアアア!!」

「うおおおおおお!!」



俺と妖夢は同時に斬りかかる。妖夢は抜刀切りなので超高速だが俺も負けない。速くない代わりに剣を受け止めることに神経を集中させて前に出た。そのおかげで、俺の剣と妖夢の剣がギィィィィン!!と嫌な金属音を発しながらぶつかり合う。2人はバツクジャンプし、お互いに攻撃と回避を繰り返していた。俺と妖夢は偶に掠るだけで、斬られてはいなかった。

「クリスマスなんだから受け取れ!!妹紅!!」

「りよーかい!!」

妹紅は俺に無骨だが、切れ味の良い上物の刀を両手で思いつき俺に投げる。その刀は俺が妖怪の鍛冶屋(多々良 小傘)に頼んで作ってもらったものだ。俺はそれを受け取る。

「今日限りのクリスマスプレゼントスperl!!聖炎『キリストの炎』!!」

俺は刀の刀身をゆっくりと撫でる。すると、撫でた数秒後、撫で始めたところから炎が出現する。

「弾幕勝負だから、弾幕使わないと……なっ!!」

俺は妖夢から離れたところで大きく刀を振る。すると、炎が飛ばされ、炎は分散し、弾幕になって妖夢を襲う。

「嬉しくないクリスマスプレゼントですねっ!!」

妖夢は俺の弾幕を回避し、たまに躲しきれないものは刀で斬って対処している。が、俺がそれを見逃すはずがなく、俺は抜刀切りの体制になる。そして、足にどんどん霊力を溜める。

「これで……終わ……りっ!!」

「!?!」

俺は溜めた霊力の炎で一気に前進し、妖夢に斬りかかる。妖夢はギリギリそれを受け止める。が、流石に威力が高かったのか、2本の刀は弾かれ、地面に突き刺さる。

「俺の勝ちだな。どうだった?俺のクリスマスプレゼントは?」

「……フツツ。中々なプレゼントでしたよ。」

俺は刀を下ろし、妖夢は地面に突き刺さった刀を抜いて、自分の鞘に収める。

「さて、パーティ再開だー!盛り上がっていいこー!!」

『おー!!』

部屋に戻り、再びパーティを開始した。料理を食べたり、誰かが暴走したり……そんな感じでパーティを過ごした。何かあったといったら霊夢と魔理沙が酔って弾幕ごっこを部屋の中で始めた(俺と鈴仙が頑張つて鎮めたが俺がマスパ喰らった) ことくらいかな?そして、クリスマスを過ごした……。そして、深夜10時。パーティは終了し、全員各々の家に帰った。妹紅も帰ろうとしていたが……。

「あ、妹紅、ちよつと待って。」

「ん〜?何〜?」

まだ少々酔っている妹紅を俺は呼び止めた。今日はクリスマス。ならば、俺が妹紅にすることはただ一つ。

「ほらっ!!クリスマスプレゼント!!」

「え……?」

俺はプレゼントの入ったギフトを妹紅に渡す。

「あ、開けてもいい?」

「もちろん!」

妹紅は急いでギフトを開ける。その中には、赤と白の色のマフラーが入っていた。もちろん、俺の手編みだ。アリスに手伝ってもらい、なんとか完成させた。妹紅は嬉しそうな表情でマフラーを手を持っている。

「炎火……ありがとう!!」

不老不死で今までずっと一人ぼっちで生きていた妹紅。その今までの寂しさを、俺は+の感情で埋めてやりたい。そして、妹紅は嬉しそうに帰っていった。その首には、プレゼントのマフラーが巻かれていた……。

## キャラ設定 紅魔郷以前までのキャラ

焰 炎火（ほむら えんか）

性別 男

種族 人間

年齢 転生時 16歳 現在17歳

能力 炎を支配する程度の能力

子供を庇い、車に轢かれ死んだが、転生して幻想郷に来た。転生する際、神に3つ条件を出し、そのうちの1つで能力を得た。紅霧異変の際、右腕を失い、能力で右腕を作り永琳先生特性の服と手袋で隠している。永遠亭では兎達と輝夜の世話係をしている。妹紅とは恋人関係。

スペルカード

炎符『ファイアーマシンガン』

周囲に複数の炎のマシンガンを出現させ、そこから超高速で炎の弾を発射する。妹紅との戦いの途中、即興で作りに出され、今では威力と連射力が上がり、霊力の消費も抑えられた。

炎爆符『ウルトラダイナマイト』

体を炎を纏い敵に突進し、自爆する技。てゐとの戦いにて初めて使われた。敵に突進する際、弾幕はすり抜けるが、それさえも威力に注いで使うケースもある。一撃の威力では最高級。ウルトラマンタロウのウルトラダイナマイトを真似て作られた。

炎脚『レオキック』

炎で大きく飛翔し、脚に炎を纏って相手を蹴る技。紅魔異変で美鈴に初めて使われた。ウルトラダイナマイトほど威力はないが、中々の威力を持ち、霊力消費もそこまでせず、中々愛用している。ウルトラマンレオのレオキックを真似て作られた。

獄炎拳『ノア・インフェルノ』

炎に最高級の温度の炎を纏い、相手を殴る技。紅魔異変で咲夜に初めて使われた技。纏う炎の温度が高すぎて、纏った自分の腕もダメージを負う。そのため、あまり乱用はしない。威力、消費霊力量が炎爆

符『ウルトラダイナマイト』並み。ウルトラマンノアのノア・インフェルノを真似て作られた。

炎熱線『メビウムシユート』

特定のモーションを取ってから両腕を十字に組んで光線を放つ技。春雪異変の妖夢との戦いでのみ使われた。炎爆符『ウルトラダイナマイト』や、獄炎拳『ノア・インフェルノ』には劣るが、代わりに攻撃にリーチがある。だが、威力は炎脚『レオキック』より少し上。消費霊力は、リーチがあるので炎爆符『ウルトラダイナマイト』並。ウルトラマンメビウスのメビウムシユートを真似て作られた。

炎牢『獄炎牢獄』

相手を炎の牢獄に閉じ込める。てゐに制裁を加えるために使えるためだけに作られ、戦闘では使えない。

炎纏『ファイアエンハンス』

四肢に炎を纏う技。今の所通常verではなく対吸血鬼verのみが、フラン戦にて使われている。攻撃技ではなく、自己強化、もしくは仲間の強化に使われる。纏っている間、少しずつ霊力が消費される。

炎人符『炎のドツペルゲンガー』

炎によって自分とそっくりな自立人形を作る。自分と考え方、戦い方がほとんど同じだが、能力と身体能力が本人より少し低い。使う際、半分霊力を消費する。なので、あまり使われない。

炎剣『聖なる青い炎の剣』

青い炎の剣を霊力を消費して召喚する。属性表示だと炎＋聖、闇や狂気、影の相性が良く、炎なので水に弱い。フラン戦にて初使用された。

聖炎『キリストの炎』

刀を撫でて炎を纏わせる技。炎を纏った刀は、直接斬ることもでき、弾幕を放つことができる。クリスマスで妖夢と戦った時に使われた。炎剣『聖なる青い炎の剣』と重複して使うことはできず、使う際は通常の刀を使う。

神

性別？

年齢？

種族 神

能力？

死んだ炎火を3つの条件をつけて転生させた張本人。見た目は女性だが、性別は不明。それ以外不明な点がとても多い。

スペルカード？

藤原 妹紅（ふじわらのもこう）

性別 女

年齢？

種族 蓬莱人

能力 死なない程度の能力

転生した炎火がいた迷いの竹林で炎火と会った。最初は何故か自分の名前を知っている炎火と戦ったが、そんな炎火と恋人関係。口調は男勝りだが、酔うと炎火に甘えるようになる。

スペルカード

『インペリシヤブルシユーティング』

惜命『不死身の捨て身』

時効『月のいはかさの呪い』

不滅『フェニックスの尾』

名前 鈴仙・優曇華院・イナバ（れいせん・うどんげいん・いなば）

性別 女

年齢？

月の兎

能力 狂気を操る程度の能力

永遠亭の住人の1人。てみのイタズラに困らされていたが、炎火のお陰で回数が減った。よく炎火の修行に付き合っつて弾幕ごっこをすることがある。永琳先生を慕っている。

スペルカード

八意 永琳（やごころ えいりん）

性別 女

年齢 ？

種族 蓬莱人

能力 あらゆる薬を作る程度の能力

永遠亭の住人の1人で医師（薬剤師）。炎火から永琳先生と言われ、慕われている。兎達も永琳先生を慕っている。

スペルカード

名前 因幡 てゐ（いなば てい）

性別 女

年齢 ？

種族 妖怪兎

能力 人間を幸せにする程度の能力

永遠亭のリーダーの1人で兎達のリーダー。マイペースで、好奇心旺盛でイタズラ好き。よく鈴仙と炎火にイタズラを仕掛けているが、炎火にイタズラを仕掛けると、よく炎の牢獄に閉じ込められる。炎火と決闘して負けたため、仕方なく炎火の言うことを聞いている。

スペルカード

『エンシエントデューパー』

## キャラ設定②

名前 チルノ

性別 女

年齢 ?

種族 妖精

能力 冷気を操る程度の能力

紅霧異変の際、1番最初に炎火が遭遇した。妖精の中ではとびきり力が強い。強くなりたいとも思っており、自分と能力の相性が悪い炎火に鍛えて欲しいと志願し、現在ではよく修行している。

スペルカード

凍符『パーフェクトフリーズ』

名前 紅 美鈴（ほん めいりん）

性別 女

年齢 ?

種族 妖怪

能力 気を操る程度の能力

紅魔館の門番であり住人。紅霧異変で炎火が二番目に戦った相手。武術に長けている。門番としての仕事を放棄して居眠りをよくしており、咲夜によくナイフで刺されて起こされる。

スペルカード

名前 パチユリー・ノーレッジ

性別 女

年齢 ?

種族 魔法使い

能力 火水木金土日月を操る程度の能力

紅霧異変で3番目に炎火と戦った。大図書館にいつもいる。炎火

の苦手な属性である水の弾幕で炎火を苦しめた。異変後も炎火と交流があり、よく炎火は大図書館に来ている。体がとても弱く、よく咳をする。

スペルカード

水符『プリンセスウインディネ』

水&火符『フロギステイツクレイン』

名前 小悪魔（こあくま）

性別 女

年齢 ?

種族 悪魔

能力 ?

炎火がパチュリーと戦っている間、妹紅と戦っていたパチュリーの使い魔。戦闘力は低く、かなりドジっぽい。炎火はよくこの紅魔館の大図書館に来るため、小悪魔とも仲がいい。炎火によく本の片付けを手伝わしている。

スペルカード

名前 博麗 霊夢（はくれい れいむ）

性別 女

年齢 ?

能力 主に空を飛ぶ程度の能力

紅霧異変時に紅魔館の中で炎火と初めて遭遇し、一緒に異変解決をした博麗神社の巫女である博麗の巫女。春雪異変でも、炎火と一緒に異変解決に向かい、弱らせた西行妖を封印した。人間だが、実力はかなり高い。宴会で神社を提供するなどで人望も一応あるが、お賽銭は貰えず貧乏らしい。炎火とは仲が良く、炎火は博麗神社に遊びにいたり、紅魔館で紅茶を咲夜や炎火と飲んでる時もある。

スペルカード



夢符『二重結界』  
靈符『夢想封印』

名前 十六夜 咲夜（いざよい さくや）

性別 女

年齢 ？

種族 人間

能力 時を操る程度の能力

炎火と4番目に戦った相手。時を止めてナイフを投げる戦法で妹紅を失神まで追いやり、炎火も苦しめた。時を止めている時間と靈力の消費量は比例しているらしい。レミリアの左後ろによくいる。異変解決後、宴会や一緒に異変解決などを通して、仲は良くなった。が、炎火は少し苦手意識があるようなないような。だが、一緒にお茶（靈夢や魔理沙がほぼほぼ確定）する時がある。

スペルカード

メイド秘技『殺人ドール』

名前 レミリア・スカレット

性別 女

年齢 500

種族 吸血鬼

能力 運命を操る程度の能力

紅霧異変の首謀者で、炎火と異変で最後に戦った相手。消耗していた靈夢（靈夢はフランと既に戦っていた）を不利な状況まで追いやり、炎火の右腕を失わせ、腹に大穴を開けた。吸血鬼なのでパワー、スピード、耐久力、妖力、再生力にとっても優れている。炎火とは右腕を失わせ、腹に大穴を開けた割には仲が良く、普通に炎火は紅魔館に遊びに来てる。

スペルカード

神槍『スピア・ザ・グングニル』

名前 霧雨 魔理沙（きりさめ まりさ）

性別 女

年齢 ？

種族 魔法使い（人間）

能力 主に魔法を操る程度の能力

宴会で炎火と初めて知り合った。異変時にはいなかった。いなかった理由は、霊夢に置いていかれたからだそう。しかし、春雪異変では異変解決に参加し、炎火達と西行妖と戦った。紅魔館の大図書館にたまたま本を盗みに行くが、その半分は炎火に捕まえられている。炎火とは仲がよく、ノリがよく、男勝りな性格が仲良くなるポイントらしい。

スペルカード

恋符『マスタースパーク』

名前 フランドール・スカーレット

性別 女

年齢 495

種族 吸血鬼

能力 ありとあらゆるものを破壊する程度の能力

宴会で炎火と初めて知り合った。レミリアの妹で、人見知りの部分がある。紅霧異変の時は、霊夢と戦い、負けた。炎火が大図書館に遊びに行った時に狂気にて暴走し、狂気は炎火によって消えた。現在では狂気で暴れることはなくなった。炎火とは最初人見知りだったが、今は仲はいい。

スペルカード

禁弾『スターボウブレイク』

禁忌『フォーオブアカインド』

禁忌 『レーヴァテイン』

名前 アリス・マーガトロイド

性別 女

年齢 ?

種族 魔法使い

人形を操る程度の能力

紅霧異変後の宴会で出会った(会話シーンはない)。そして、春雪異変の際、炎火達と出会い、一緒に異変解決に取り組む。一時的に炎火に蓬莱を託し、西行寺幽々子と戦いに行った。一緒に異変解決をしただけあり、炎火と仲はいい。

スペルカード

白符 『白亜の露西亞人形』

名前 レティ・ホワイトロック

性別 女

年齢 ?

種族 雪女

能力 寒気を操る程度の能力

春雪異変2番目の相手。しかし、炎火との能力の相性により難なく撃破された。宴会等にも出演せず、異変でしか姿を現していない。なので、炎火達との交流は殆どない。冬にしか殆ど姿を見せない。

スペルカード

怪符 『テーブルターニング』

名前 橙(ちえん)

性別 女

年齢 ?

種族 式神

能力 主に妖術を操る程度の能力

炎火と3番目に戦った相手。マヨヒガにいて、炎火に戦いを持ちかけた。八雲 紫の式の式なので、本当にたまたまに炎火と会い、サラと遊んでいる。

スペルカード

陰陽『晴明大紋』

名前 プリズムリバー三姉妹（ぷりずむりばーさんしまい）

性別 女

年齢 ？

種族 騒霊

能力 手足を使わずに楽器を演奏する程度の能力

騒霊の三姉妹。霊夢に理不尽で襲われているところを炎火に助けられた。（描写はされていないが）宴会にも参加しており、演奏は高評価だったらしい。炎火に助けられた恩もあり、炎火をコンサートに招待することもしばしば

スペルカード

名前 魂魄 妖夢（こんぱく ようむ）

性別 女

年齢 ？

種族 半人半霊

剣術を操る程度の能力

異変で炎火と4番目に戦った相手。剣術で炎火を圧倒したが、あえなく敗退。しかし、異変解決後は炎火と仲良くなり、クリスマスにも弾幕ごっこをすることも。幽々子にいつも振り回されている。

スペルカード

獄神剣『業風神閃剣』

名前 西行寺 幽々子（さいぎようじ ゆゆこ）

性別 女

年齢 ?

種族 亡霊

能力 死を操る程度の能力

炎火と妖夢が戦っている間、霊夢達と戦っていた。西行妖が幽々子を狙っていた。とても大食いで、妖夢も普段から大食いに困らされていて、宴会でも大量に食べていた。

スペルカード

名前 サラ

性別 不明

年齢 0（呼び出された時が0年0月1日目）

種族 火龍（サラマンダー）

能力 炎を司る程度の能力

春雪異変で炎火によって呼び出された。小さい幼体だが、かなり強い。好物は炭系で、毎日炎火から妹紅製の竹炭を食べさせてもらっている。ほとんどの人には有好的だが、てゐが嫌い。炎火の頭の上に乗るのが好き。

スペルカード

火龍『ヘルファイアブレス』

口から超高熱の炎を吐いて相手を攻撃する。スペルを使うときは主人である炎火が使用しなければならぬ。

火龍『獄炎の鉤爪』

爪形の超高熱の炎を放つ。もしくはそれを纏って直接相手を攻撃する。これも使用する際は主人である炎火が使わなければならない。

名前 ルーミア

性別 女

年齢 ?

種族 妖怪

能力 闇を操る程度の能力

宴会の時、チルノと一緒にいるときに出会った。宴会の日からチルノとの修行にたまに混ざったり、博麗神社で遊んだりしている。人喰い妖怪だが、あまり人を喰うことはない。

スペルカード

名前 伊吹 萃香（いぶき すいか）

性別 女

年齢 ?

種族 鬼

能力 疎と密を操る程度の能力

宴会で炎火と会った。大妖怪クラスでかなり強く、そしてかなり酒が好き。なので、いつも酒を飲んでいて、いつも酔っている。よく博麗神社に遊びに来る。

スペルカード

名前 風間 幽香（かざみ ゆうか）

性別 女

年齢 ?

能力 花を操る程度の能力

萃香と同じく大妖怪クラスの妖怪。能力は飾りのようなもので、人の身体能力と妖力はかなり高く、戦闘面ではほぼほぼ上に立つものはいない。戦闘好きで、炎火と戦い倒した。

スペルカード

元祖『マスターズパーク』

幻想『花鳥風月、嘯風弄月』

名前 八雲 紫（やくも ゆかり）

性別 女

年齢 ？

種族 妖怪

能力 境界を操る程度の能力

萃香、幽香に並ぶ大妖怪。炎火と幽香の戦いで結界を張った。その結界から実力がうかがえる。スキマという空間の裂け目から現れたり、変えたりととても神出鬼没。

スペルカード

part 20 悪魔の妹、フラン

「ううん……。」

目を開けると赤い天井。硬い床や廊下ではなく、柔らかいベッドの感触。確か、フランと戦って気を失ったんだっけ。俺は体を起こす。「いっつ……。」

体を起こすと、体中に痛みが走る。まあ、動けないほどの痛みではないから、気にしないでおう……。そうだ！フランはどうなった!?「炎火、お目覚めか？」

俺の左から声が聞こえる。俺は声の聞こえた左を見る。すると、妹紅が椅子に座って俺のことを見ていた。

「ああ、おはよう妹紅。」

「ああ、おはよう、炎火。」

妹紅にはまた迷惑をかけてしまったな……。はあ、もっと強くなつて迷惑かけないようにしないと……。俺はどれくらいの間寝てた?」

「えっと……二時間ぐらいかな?」

二時間か……。短いような長いような……。長い間寝てる時があったから、気絶してた時間の感覚が狂ってる……。これって普通に良くないことだよな。だって長い間寝てることが多いってことだろ? 流石になりすぎだろ。

「そうだ！フランは!? 狂気はどうなった!? っていつつ……。」

「炎火、無理しちゃダメだ！フランは無事だ！狂気もお前が取り除いただろ！」

「そ、そっか……。」

俺は気を抜いてベッドに身をまかせる。はあ、なんで俺は無茶ばかりするかな……。すると、サラが俺の頭の上に乗ってきた。サラは嬉しそうに体を俺にスリスリしてくる。スリスリされるのは嬉しいが、鱗が痛いし熱い。流石火龍だな。

「サラは炎火のことをずっと心配して鳴いてたぞ。」

「そうか……。ありがとな、サラ。」



「キユオ〜♪」

俺はサラのことを撫でてあげる。すると、サラは嬉しそうに鳴く。そういえば、こいつ大人になったらどうなるんだろう……。この甘えん坊な性格のままなのかな？まあ、それはいつかわかるよな。すると、部屋の中に誰かが入ってくる。

「お兄さん！大丈夫？」

「大丈夫だよ、フラン。フランこそ大丈夫か？」

「うんっ！私は大丈夫だよ！」

部屋の中に入ってきたのはフランだった。どうやら、フランは無事なようだ。俺の攻撃のせいでフランに何かあったらどうしようかと……。あ、そうだ。

「フラン、狂気はどうなった？」

「お兄ちゃんのお陰でなくなっちゃたよ！ありがとう！お兄ちゃん！」

「そっか……。よかったな。」ナゲナゲ

「えへへ♪」

俺はフランの頭を撫でる。フランは目を細めて嬉しそうな顔をする。よかった……。狂気は消えたのか……。あの時のフラン、俺にはとても苦しそうに見えた。だから、救いたくなかったのかもな。俺はフランを撫でていると、左から鋭い視線を感じた。恐る恐る左を見ると、妹紅が俺を睨みつけていた。

「えつと……。妹紅さん、どうしましたか？」

「ふーん……。炎火ってそういう趣味あったんだ……。」

「なんか変な誤解されてる!?ごめんなさい許してえ……。」

「じゃあ、私も撫でろ！したら気がすむ！」

「ええ……。しようがないなあ……。」ナゲナゲ

「ふふっ♪」

俺は妹紅に命令され、妹紅を撫でる。右手ではフランを撫で、左手で妹紅を撫でて。2人とも嬉しそうだ。これこそ、両手に花だな。転生前だと考えられないような光景だった。すると、再び部屋に誰かが入って来た。

「炎火、調子はどうって何やってるの!?!」

「あ、お姉ちゃん。」

部屋の中にレミリアが入って来た。が、今の光景にかなりびっくりしているようだ。まあ、仕方ないとは思うが……。それでも、俺は撫でるのをやめなかった。

「えええ炎火！何してるの!？」

「動揺すぎだろ……。ほら、嬉しそうだから問題なし。」

「おおお大有りよ!!」

かなり声が震えてる。相当動揺してるな……。っていうか、どんだけ妹を撫でられてるのに動揺するんだ？相当妹好きなんだな、レミリア。これだけ動揺されると流石に俺も悪いと思い、2人から手を離す。

すると、レミリアはすぐ元気を取り戻した。

「……まあいいわ。それより炎火。」

「ん？なんだ？」

「その……ありがとね。フランの狂気を消してくれて。」

「礼を言われるほどじゃないよ。俺はフランの暴走を止めたかっただけだからな。」

「そう……でも、ありがとね。」

レミリアは俺に礼を言ってくる。他人に「ありがと」って言われるのは、嬉しいことだよな。転生する前も、誰かの為にとって感じで行動してたし……。まあ、それで命を落としたんだがな。まあ、それそれはそれで俺は後悔してないがな。

「さて……そろそろ帰るかな。今何時？」

「6時よ。」

「やばい!!早くご飯作らないと!!そうだ、全員食べに来るか？腕によりをかけるぞー!」

「あらそう？じゃあ、みんなを連れてお邪魔するわ。」

「やったー!♪」

「じゃあ、私も食べに行くー!」

「じゃあ、帰りますか!」

そして、俺はベッドから降りて、窓を開いた。そして、妹紅の手を

強く握る。

「?窓を開いてどうするの?」

「こうするんだよっ!!」

「ぎやああああああ!!?」

俺は窓から外に出て、飛行を開始した。妹紅からいつもからは想像出来ないような高音の悲鳴が聞こえた。ちよつと刺激が強かったかな。あとで謝っておこう。そして、俺は永遠亭に帰って行った。

## part 21 特訓と取材

「うおおおおおお!!?」

「あははー頑張れー!」

俺は現在、霊夢、魔理沙、鈴仙の3人と弾幕修行。で、今やってこ  
とは回避の上達。俺が回避役で霊夢、魔理沙、鈴仙の3人で俺に弾幕  
を放ってくる。……はつきり言っていていいか?これ普通にやばすぎる  
!!なんで俺はスペル使い放題とかいう謎行動に出た!?!お陰で回避が  
めんどくさすぎる!!半分回避半分弾幕破壊だよ!走り続けて体力が  
やばい。

「霊符『夢想封印』!」

「ここに来て高威力追尾弾幕とか本気で殺しに来てるだろ!」

「お金のためならなんでもするわ!」

ちなみに一つ賭け事をしていて、十分間俺が回避し続けたら俺に1  
000円、十分間の間に俺が一発でも被弾したら3人ともに千円を払  
うことになっている。この提案をしたのはてゐだ。あとでサラに噛  
みつかせるか。

「すばしっこいわね!さっさと当たりなさいよ!」

「当たれって言われて当たるやつはいない!!炎走『炎爆走法』!!」

俺はスペルを発動する。すると、俺は爆発による爆風で加速し、で  
弾幕を回避しつつ、爆発から弾幕を出して弾幕を相殺していく。

「よそ見は禁止だぜ!恋符『マスタースパーク』!!」

「うおっ!?あつぶねえ……。」

俺は魔理沙の放った極太七色光線を間一髪で躲す。そして、再び  
爆風で加速して弾幕を躲していく。そろそろ十分!あともうちよい  
で千円だ。

「よし!全員で決めるわよ!」

『了解!!』

「はあ!?それはずるい!!」

「勝てばいいのよ!!霊符『夢想封印』!」

「炎火!今日は負けてもらおうわ!波符『赤眼催眠(マインドシエイ

カー』!」

「うわああああ!!?」

俺はなんとか2人の弾幕を回避していく。しかし……

「油断は禁物だぜ! 彗星『ブレイジングスター』!!」

「!? うわああああ!!?」ピチューン

俺はスペルによって突進して来た魔理沙に気付かず、衝突し、ピチューってしまう。

「やったー! 千円〜!」

「炎火ー! 約束の千円渡すんだぜ……って……。」

「ああ〜……。」気絶

「や、やり過ぎたわね、流石に。」

俺は流石に魔理沙の攻撃に気絶してしまった。すると、そこに1人の人物が高速で飛んで来た。その人物は4人の近くに着陸した。

「どうもー! 取材に来ましたー! ……って、これ、どういう状況ですか?」

「気にしたら負けよ……。」

数分後

「魔理沙あ!! お前やりすぎだあ!!」

俺は目を覚まし、魔理沙にキレていた。ちなみに全員にちゃんと千円渡した。約束だから、渡さないわけにはいかない。かなり霊夢は喜んでいた。……ああ、俺の三千円……。

「いやあ、すまないんだZ E ☆」

魔理沙は舌を出してウインクをし、いかにもテへって感じで俺をみる。そんな魔理沙に俺がする行動は一つ。

「ぬんっ!!」ゴンッ

「いだっ!」

俺は魔理沙の頭を一発殴った。当たり前だ。あんな一撃食らったら死ぬ確率があるからな。

「あの〜……。」

俺に1人の女性が近寄ってきた。白シャツに黒のミニスカ。黒髪

で、天狗らしい靴と帽子。パパラッチ新聞記者、射命丸 文だ。文はペンとメモ帳を持って俺に近づいてきた。何回も文の文々。新聞を見たり、噂を聞いたりするが、憶測や妄想が多く、内容に語弊が多く、人里などでもあまり評判が良くない。……まあ、詳しい性格はわからない。が、今から文が俺にすることは、大体予想がつく。

「焰 炎火さんですよね？」

「断る。」

「まだなにも言ってますんよ!？」

「どうせ取材だろ！ペンとメモ帳持って近づいてくる時点でわかるだろ！」

「そんなこと言わずに。」

文は俺にグイグイ近寄ってきて取材を求めてくる。うーん……中々の粘着質な取材の求め方だな。一体どうしたらいいんでしょうね……。俺は文からの取材を断りどうしようか考えていた。

「十分だけ!!十分だけ!!」

「ああ!もうしやあねえな!!十分だけだぞ!!」

「!ありがとうございます!!」

俺は十分という条件付きで取材を始めた……。

二十分後

「……はい!ありがとうございます!」

「……どうも……。それより……。」

「そ、それでは私はこれで……。」

「どこが十分だああ!!二倍だぞ!」

「し、失礼しましたああ!!」

文は急いで超高速で飛んでいく。しかし、俺はそれを逃すはずもなく、右腕を手を開いて前に出し、左手で右腕を支える体制になる。

「試験段階だから、お前で試させてもらうぞ……。」

俺は手の平に力を貯める。しっかりと文に目標を決めて……。

「行くぞ!炎砲『サラマンダーの息吹』!!」

俺は右腕の手の平から炎の極太光線を放つ。反動で俺は後ろに下が  
る。が、それに耐えて放ち続ける。

「えっ!？」ピチューン

文はそれに当たり、ピチューリ、地面に落ちる。これぞ、焼き鳥。上  
手に焼けました〜!この後、ちゃんと文は救助した。そして、手当て  
したあと、文は帰っていった。後に聞いた話だが、体が焦げていて心  
配されたらしい。まあ、俺に光線を当てられたことは黙っていてくれ  
たらしいが……。そして、次の日、俺について書かれた新聞が発行さ  
れた。その新聞には、ちゃんと嘘や妄想がなかったという……。

## 正月特別編 あけましておめでとうございます!!

「それではー! かんぱーい!!」

『かんぱーい!!』

現在、12月31日。ちなみに午後9時。紅魔館にて大晦日パーティ。大晦日ってパーティ系だっけ……? まあ、そこは気にしない。料理? 流石に俺1人じゃもう無理なので咲夜に手伝ってもらった。咲夜さん、やはり作る速度とか料理の腕が本当に凄い。さつきまで何も手付けてなかったはずなのにいつの間にか完璧に切られてるの。初めて見たときはびっくりしたね。うん。

「妹紅! 飲み過ぎるなよ!」

「うんわかつた〜。」

あれは絶対に飲むタイプだな。覚悟しておこう……。さて、メンバーを紹介しよう。今回は霊夢はいない。大晦日と正月だけは忙しいらしい。まあ、あいつの唯一の収入が手に入る時期だから、俺は何も言わん。そして、魔理沙はいる。そして、紅魔館の全員。紅魔館のみんなに関しては全員いなかったら逆におかしいが……。そして、チルノ、ルーミアに、永遠亭の面々。そして、萃香、幽香さん、紫さんだ。よくこんだけの面々が集まったもんだ……。特に大妖怪の面々。いきなりスキマから現れました。全員騒動もんです。

「炎火〜! 飲んでるか〜?」

「俺はそもそもあんま飲まない! 魔理沙も酒の飲みすぎには気をつけろよ〜。」

「はいはい、わかってるよ〜♪」

魔理沙はそう言って酒を飲む。うん。心配しかない。

「炎火く〜ん。」

「うおっ?! なんですか? 紫さん。」

いきなりスキマが現れ、紫さんが顔だけ出して来る。ちなみに、紫さんからは『炎火くん』と言われている。まあ、変とは思ったが、今では慣れてる。

「こっちで飲まない? 3人だと寂しくて〜。」



「ええ……。……はあ、しょうがないですね……。」

3人とは大妖怪3人。そんなところに入り込むのは正直嫌だ。特に幽香さん。あの威圧感というかなんとというか、そんな感じが本当にやばい。俺は紫さんに連れられてスキマの中に入る。すると、そこには紫さん、萃香、幽香さんの3人が飲んでる場面が目に入る。

「あら炎火。来たのね。紫が急にいなくなったのはそのせいね。」  
「どうもです、幽香さん。」

俺は緊張していた。どうにも幽香さんには慣れない。いつもはい人なんだけどね。花畑さえ荒らさなければ。けど、ちよつと血気盛ん過ぎやしないですかね？まあ、気にしたら負けだと思えます。萃香に関しては……

「よう炎火ー！じゃんじゃん飲んじやおー！」

「そんなに飲まんよ俺は……。っていかお前は飲みすぎじゃないか？」

「ニヤハハ〜！大丈夫大丈夫〜！」

そういいながら、俺は萃香の酒の勧めを断り続ける。ちなみに勧めてくるお酒は鬼殺し。こんな人間の俺が飲んだらマジで死にます。萃香との関わりは、博麗神社にいたところで話したら仲良くなりまして。大妖怪で仲良い人ができるのは中々嬉しいです。っていかいなかったら絡みにくいです。

「萃香。そのぐらいにしておきなさい。」

「ちえ〜。炎火と飲みたかつたな〜。」

「せめて鬼殺し以外の酒にしてくれ……。」

酒を勧めてくる萃香を、紫さんが止めてくれた。感謝。そして、俺は少しずつだが、酒を飲む。勿論、鬼殺しではなくアルコール度数の低い酒。こんなんじゃないと飲めない。

「さて、ちよつと他のグループのみんなと楽しんでできます。」

「あら、寂しいわね。いいのよ？ここにいて。」

「いえ、ありがたいですが遠慮しておきます。」

「じゃあな〜炎火〜。」

俺はそうして別のグループに行く。俺が次行くグループは……。

「よう魔理沙。それにみんな。」

「よう炎火！楽しんでるかー？」

「そうだな。まあ、楽しんでるな。」

俺がきたグループは紅魔館組+α(魔理沙)のグループだ。まあ、このグループはさっきの大妖怪グループに比べたらまだ居心地はいい。

「あら炎火。今年はありがとね。フランのこと。」

「ああ、別にいいよ、レミリア。」

「あ、炎火お兄ちゃん！」

「ようフラン。楽しんでるか？」

「うんっ！楽しんでるよ！」

「そりやよかった。」

ふう、やっぱり落ち着くな、紅魔館のみんなは。

「ねえ炎火。」

「？なんだ？パチュリー。」

パチュリーは俺に近づいて来る。そして、一つの本を開き、俺に見せる。

「ここを見て。」

「えっと……なんて書いてるんだ？これ。」

パチュリーが見せてきた本には、意味不明な文字がひたすら書かれていた。多分、パチュリーには止めているんだろう。

「やっぱり、読めないのね。これは魔法に精通してる人にしか読めないの。」

「へえ、そうなんだ……。」

「これには、火龍を強化する方法が書かれているわ。」

「!？」

俺はそれを聞いて驚いた。火龍を強化。つまりはサラを強化することができるということだ。これはかなり嬉しい。最近、サラも俺たちに混じって戦闘訓練をしたりしている。サラにも『強くなりたい』という気持ちが芽生えているらしい。なので、サラにとっても、勿論俺にとっても嬉しい。……まあ、こんな宴会でする話ではないが。

「で、どうやったら強化できるんだ？」

「これには、火龍を使い魔としている前提で話すけど……大丈夫よね？」

「ああ、一応……。」

「じゃあ続けるわね。この本には『札による力で10分、火龍は本来の姿で顕現する。』と書かれていたわ。」

「札……というと、スペルカードか？」

「多分そうよ。試しにやってみて。」

「わかった……サラ!!」

「キュオー!」

俺はそう言われたので、サラを呼んだ。すると、サラは俺の目の前で滞空せる。そして手にスペルカードを持ち、発動させる。初めて使うので、不安だが……。

スペルカード!火龍『本来顕現』!!」

そして、俺はスペルカードを発動すると、サラは炎に包まれた。みんなサラに注目していて、その光景をまじまじと見ている。そしてその数秒後、サラが姿を現す。大きな翼、たくましい後脚、鋭い目に大きな牙。そして赤い鱗。誰がどう見ても『火龍』という姿だ。大きさは……全長20mぐらいだろうか。かなり大きい。

「グオオオオオオオ!!」

サラはいつものキュオーという鳴き声とは違い、龍らしい大きな咆哮をした。その咆哮により、風圧まで生まれる。

「サラ、よかったな!」

「グオオオオオオ!」

サラは俺に近寄ってくる。俺はそんなサラの頭を撫でてあげる。サラはそれで嬉しそうにする。すると、遠くから重い鐘の音がする。つまり……

『新年!あけましておめでとうございまーす!!』

そう、ついに年を越したのだ。新しい年。そして、この新しい年を、この幻想郷で過ごす。この第2の人生、まだまだ頑張って過ごすぞ!!

「さて、みんなで博麗神社に行こうか!!初詣だー!」

『おー!!』

俺がそう言つて、みんなが呼応する。すると、サラが動き出す。

「ん？サラ、どうした？」

「グオオオオオオ!!」

サラは俺に近寄り……俺の服を加え、後ろに投げた。

「うおおおおお!!」

俺は宙を舞う。そして……サラの背中に跨っていた。

「おお!!これは!!」

サラに乗つてもいいということ、全員が乗り始める。幸い、サラもそれを受け入れていて、更にな。大きいので、全員乗ることができた。俺はその1番前に座っていた。

「サラ！行くぞ！博麗神社に!!」

「グオオオオオオオオ!!」

サラは俺の掛け声に反応し、空を飛んで行った……。

数分後の博麗神社

「ありがとうございます!!」

霊夢は博麗神社の巫女として働いていた。一応信仰はあるらしく、このように年末年始は忙しい。霊夢は頑張つて働いていた。

「なんだ!?あれ!」

霊夢は神社で働いていると、1人の客が空を指差し声を上げる。霊夢はそれを不思議に思い、空を見る。その空に見えていたものは……

「あけましてー!!」

『おめでとうございまーす!!』

空から大きな赤い龍と見覚えのある人物。その龍とその背中に乗った人達が空からやってくる。そして、その龍は境内に着陸し、その背中に乗っていたみんなが降りて来る。

「よう霊夢。忙しそうだな。」

「ええええええ炎火!!なに!?この龍!!」

「見ての通り、サラだよ。」

すると、サラは炎に包まれる。そしてその数秒後、いつものサラに

戻った。

「ほ、本当みたいね。で、何しに来たの？」

「勿論、初詣！」

「はあ……お賽銭入れてってよ！」

「ああ！勿論！」

そして俺らは初詣と称して、ほぼほぼ祭りと言ってもいいようなことになり、料理（俺が即興で作った）で、初詣は例年より盛り上がった……。

## part 22 妹紅とのデート

保存日時：2018年01月05日（金） 19:36

「ふわあああ……。」

「炎火、まだ眠いのか？」

「うん……ちよつとな……。」

俺は今、いつも通り朝ご飯の準備をしていた。いつもと違うところといえば、妹紅が隣にいることだ。今日、妹紅と人里に遊びに行く（デートに行く）約束をしていて、妹紅が待ち切れなくて来たわけだ。まあ、朝ごはん作りも手伝ってくれるから、とてもありがたい。そして、数分後、俺と妹紅は料理を作り終え、兎達に配り終えた。

「じゃあ、行こうか妹紅。」

「うんっ♪」

そして、俺と妹紅は永遠亭の外に出て、飛んで迷いの竹林を超えた。そして、人里に到着した。さて、何をしようか……。

「あつ！炎火炎火！」

「どうした？妹紅。」

妹紅が指差す方向を見る。すると、そこには団子屋さんがあった。そういえば、妹紅は甘いものとか好きだったな。……お金は十分ある（つていうか有り余ってる）から、団子食べるか。

「食べるか？妹紅。」

「うんっ！」

……ハッ！やばい。可愛すぎてボーツとした。俺は少し妹紅に遅れたので少し走って妹紅に追いつき、団子屋に着く。

「いらっしやい！何をご注文で？」

「妹紅は何にする？」

「じゃあ……私はみたらし団子！」

「じゃあ、みたらし団子2つ。」

「あいよ！」

そういうと、団子屋の店主はみたらし団子を作り始める。……うん。いい匂いがする。俺はチラッと妹紅の方を見る。妹紅は団子が

作られている風景を目を輝かせながら見ている。そんだけ甘いものが好きなのか……。可愛らしいな全く……。

「できたぞ兄ちゃん！」

「ありがとうございます。」

俺は店主から団子2本を受け取り、一本を妹紅に渡す。そして、俺と妹紅はみたらし団子を食べながら人里をぶらぶらしていた。人里に来る時といたら仕事で薬を渡しに来た時ぐらいだから、こうやって人里に遊びにくるのは久しぶり……。いや、初めてかもしれない。俺はそつ……。と妹紅を見てみる。妹紅は右手に団子を持ち、口の中に団子を含んでとても嬉しそうに顔を緩ませている。やばい、めっちゃ今の妹紅可愛い。やっぱり、団子を買ってよかった。妹紅にこんなに喜んでもらえて嬉しい。

「キュオ〜……。」

「あつ……。すっかり忘れてた。」

そういえば、サラのぶん買ってなかったな……。しやあない。俺のぶんあげるか……。

「サラ、この団子食べていいぞ。」

「キュオ〜♪」

俺が団子の刺さっている串を差し出すと、サラは串ごと丸々食べた。そして、嬉しそうに頭の上で羽をパタパタさせる。その光景を珍しそうに人里の人が見ている。ちなみにサラは串ごと食べても大丈夫らしい。っていうか有機物ならなんでも食べれるらしい。

「ねえねえ炎火。」

「ん？なんだ妹紅？」

妹紅は顔を赤くしながら俺のことを見てくる。何かあったのかな？俺には妹紅が何を考えているのかがさっぱりわからなかった。

「炎火……。その……。サラに団子あげたでしょ？」

「ん？まあ……。そうだけど……。」

「だから……。えつと……。私の団子あげる！だから、あーんして！」

「ええつ!?えつえつと……。」

「いいから！」

「わ、わかった。あーん……。」

俺は妹紅に言われるがまま口をあーんと口を開ける。妹紅は団子が残り一個刺さった団子を俺の方に近づけてくる。そして……

「あーん！」

「んぐつ……モグモグ……。」

俺は妹紅から差し出された団子を口に含んだ。美味しい。さつき自分で食べていたのと同じ味なはずなのに、こっちの方が数倍美味しい。

「ゴクン……。」

「どう？美味しい？」

「ありがとう妹紅、美味しかったよ♪」

俺は妹紅にお礼を言うと、妹紅は嬉しそうな笑顔で俺のことに見ていた。そして、俺の妹紅（十サラ）で、人里を楽しんだ。今日はとても楽しかった。そして帰り道……。

「炎火炎火!!」

「ん？なんだ妹紅？」

「肩車して！」

「か、肩車？別にいいけど……。」

俺は妹紅にそう言われ、地面に屈む。すると、妹紅は俺の肩にまたがった。そして、俺はそのまま立ち上がった。肩車は妹紅にたまにしてるし、輝夜様からもねだられてやるので慣れている。っていうかやっぱり妹紅の方が軽いな……。

「じゃあ、帰るぞ、妹紅。」

「おうっ！今日は楽しかったな、炎火!!」

「そうだな、妹紅。」

そして俺は、妹紅は肩車したまま帰っていった。



## Part 23 ケイドロ

「あはは〜♪捕まえてみる〜♪」

「輝夜様!逃げないでくださいー!」

「逃げないと鬼ごっこじゃないでしょ〜♪」

「正論はズルいです!!」

「正論なのにな?」

俺はてると輝夜様と俺の3人で鬼ごっこをしていた。……まあ、嫌な予感はあるよ。うん。だってこの2人はイタズラの常習犯。何かがないわけがない。

「待てー!っつうわあああ!?!」

『イエーイ!引つかかったー!』

「ちくしょう!落とし穴か!」

やっぱりか。落とし穴が仕掛けられていて、俺はそれに引つかかってしまった。ルールでは飛ぶことが禁止されている。が、そんなこと関係ない。俺は足に靈力を溜め、爆発を起こし、爆発の爆風と一緒に跳躍し、穴の中から脱出した。

「ええ〜!?ズルい!」

「能力を上手く使ったと言ってください!!」

俺は再び2人を追いかける。元々輝夜様の運動不足改善で永琳先生が提案した遊び。いつも運動(弾幕ごっこ)をしている俺に比べたら、明らかに輝夜様と俺の運動能力は違う。つまり……。

「輝夜様捕まえた!」

「ああ〜……捕まっちゃった。」

「じゃあ、この円の中にいてくださいね。」

「はあ〜い……。」

そして、地面に円が描かれている中に輝夜様は入る。そう。この鬼ごっこは普通の鬼ごっこではなく警泥(ケイドロ)だ。だから、輝夜様を捕まえたから今度は見張りつつあるを捕まえなきゃいけないのだ。まあこれがなんとも厄介。このケイドロ、大体30分ぐらい続けている。流石に俺も疲れた。さっさと終わらせたいんだが……てゐ

が厄介すぎる。いたる所に罫を仕掛けてあるらしく、うかつに動けない。足を縄で吊られたり……。ちなみに縄を焼いて脱出した。

「うーん……どこに潜んでるんだ……?」

「(ふふ……もらった……) タツト……」

「ついに捕まえた!!」

「えっ!？」

俺は一体何をしたかというと、右腕を伸ばしたのだ。右腕は炎だから伸縮可能だから、この距離でも捕まえられる!

「危なっ!？」

「チツ! チャンスを取り逃がした!」

俺の渾身の不意打ちも、てるにはギリギリ及ばなかった。ちくしよー! 変なところで回避がうまい奴め……。てるは輝夜様を解放し、再び逃げる。

「やつほー炎火、なにやってるの?」

「おお、妹紅。……ってなんで魔理沙?」

「暇だから遊びに来たんだぜ♪」

「神社行けや……。」

3人で鬼ごっこをし、俺が苦戦している時に、魔理沙と妹紅が来た。妹紅は別に全然いいんだが……。なんで魔理沙までいるんだ……。

「何やってるんだぜ?」

「ケイドロをやってるんだ。輝夜様の運動不足改善でな。」

「面白そうだから私もやるんだぜ! じゃあ、私はドロボウの方やるんだぜ。」

「お前まんまじゃねえか。」

「私は盗んでるんじゃないやなく死ぬまで借りているだけだぜ。」

「はいはい……はあ……捕まえる数が増えた (泣)」

「じゃあ、私警察の方やる。」

「おお! 妹紅ありがとう!!」

というわけで、ドロボウの方に魔理沙を追加、警察の方に妹紅追加で3:2になった。よし! 2:1よりも楽だ! これで終わらせるぞ!! 「妹紅、輝夜様を頼む。俺の他の2人を……。」コソ

「うん。わかった。」コソ

そして、俺はてると魔理沙を。妹紅は輝夜様を捕まえるために動き始めた。さて……警察側は2人といったが、正確には2人十一匹。ちやんとサラはこつち陣営。なので……。

「サラ、上空から探索頼む。輝夜様を見つけたら妹紅に知らせてくれ。他の2人のどちらかを見つけたら俺のところに帰ってこい。」

「キユオ〜。」

俺がサラにそう伝えると、サラは俺の頭から離れ、空高く飛んでいく。別にサラの飛行は禁止されてなかったし、これでなんとかしなけりや……。

数分後

「輝夜捕まえた!!」

「妹紅に捕まるなんて屈辱だわ……。」

数分後、輝夜様は妹紅によって捕まえられた。多分サラがちやんと仕事をしてくれたな。後は残りの2人か……。

「妹紅。妹紅は輝夜様の警備を頼む。俺は捕まえに行く。」

「わかった。」

俺が妹紅にそう伝えると、妹紅は輝夜様を連行していく。この光景はまさに警察とドロボウだな。さて、俺は残り2人を捕まえるか……。

数分後

「うわああああ……。」

「へへっ、今度も引つかかった引つかかった。」

「うおおおおお!!」

「ええ!?これも登ってくるの!?!」

「てる!確保!!」

「ああー!!」

俺はサラのお陰でてるを見つけたが、また落とし穴に落とされた。しかもさっすきの落とし穴より深い落とし穴。だが、俺はそれも脱出

し、それに動揺したてゐるを確保した。俺はてゐるを連行し、魔理沙確保に再び走り出した。

十数分後

「待てー!!」

「へへっ!!この私を簡単に捕まえられると思つたらいけないんだぜ!!」

俺はサラが見つけた魔理沙を、追いかけて回していた。魔法使いのくせに逃げ足だけは速い……!流石本職のドロボウ、本当に速い……。

「このまま逃げ切るんだぜ!!彗星『ブレイジングスター』!」

「あっ!!」

魔理沙はスペルを使って逃げていく。確かに魔理沙自身は飛んでないな。箒に捕まっているだけだ……。どんどん距離が離されていく。このままじゃ捕まえられない……。そうだ!!

「サラ!魔理沙の前に壁を作れ!」

「キュオーー!!」

「おわっ!?!ズルいんだぜ!!」

「ルールの穴を突いたと言つてくれ!魔理沙確保!!」

「ああ~~~~~!!」

ふう……ようやく終わった……。約一時間のケイドロ……。こんなに疲れるとは思わなかった……。

「炎火!お腹空いたわ!お昼ご飯!」

「あ!私にも作つてくれなんだぜ!」

「炎火♪私も♪」

「はいはい……全員の分ちゃんと作つてやりますよ……。」

俺たちはケイドロを終え、お昼ご飯を食べに、永遠亭に戻つていった。

## コラボ編① 出会い

「永琳先生、博麗神社に出かけてきますね。」  
「わかったわ。気をつけなさいね。」

俺は永遠亭での仕事を大体終え、特にやることもなくなったので、博麗神社で暇を潰そうとした。サラも特に面白いこともなく、欠伸をしている。俺は妹紅も誘い、俺と妹紅、そしてサラが珍しく自分で飛び、博麗神社に向かった。

ギイイイイイン!!

「うううううう!!」

「うるさああああああい!?!」

「キュオー!!」

俺は博麗神社に向かう途中、突然大きな金属音のような、しかしそれとは違う音が聞こえ、全員耳を塞ぐ。

「妹紅、サラ、大丈夫か?」

「だ、大丈夫……。」

「キュオ……。」

サラはゆっくりと飛んで、俺の頭の上に乗る。全く……また首が痛くなる……。まあ、いつものことだから気にしないが……。俺達は謎の音が気になり、音が聞こえた方に飛んでいく。そこには、フラン……だけど、フランとは何かが違う……。それともう1人。吸血鬼のような羽が生えていて、フランと手を繋いでいる。

「グオオオオオ……。ソイツ……食ウ……。」

「チツ……吸血鬼の力に引き寄せられて来た低級妖怪かな……。妹紅、何もしなくていいぞ。その2人守っていてくれ。」

「わかった。さっさと終わらせてね。」

「わかった。サラ、やるぞ。」

「キュオー!!」

俺は爆風による加速で妖怪を翻弄する。それに合わせ、俺とサラは混乱効果を持つ弾幕を放つ。流石に殺しはしない。ちよつと気絶しただけだ。

「さて、終わらせるか。炎脚『レオキック』！」

俺は飛び上がり、足に炎を纏って飛び蹴りを当てた。妖怪は吹き飛び、気絶したようだ。さて、運ぶか……。

「妹紅。とりあえず、永遠亭に運ぶぞ。」

「わかった、炎火。」

俺と妹紅は、協力して永遠亭まで運んだ。途中からめんどくさいなだったので、スペルでサラを本来の姿にして運んだが……。

「ん……ここは……？」

「あ、目が覚めた。炎火ー！男の人の方、目が覚めたよー!!」

「お、サンキューてる、お前もたまには役に立つじゃないか。」

「たまには余計。じゃあ、私は仕事に戻るよ。」

「わかった。サボるんじゃないぞ。サボったらまた炎牢獄の刑な。」

「わ、わかったから……。」

てるは逃げるように仕事に戻っていった。……まったく、本当にあのイタズラ兎は……。サボってるの見つけたら報告するように他の兎に伝えておこう……。

「えつと……あなたは誰ですか？」

「俺は焰 炎火。永遠亭で働かせてもらってるものだ。」

「え、永遠亭？」

その男は首を傾げ、俺のことを見ていた。うーん……人里でも永遠亭は有名だとは思っただけだな……。まあ、いいや。この人から色々聞かないと……。

「えつと……あなたの名前はなんですか？」

「吸血鬼のエスカルゴ・スカーレットだ。……そうだ。フランはどこだ!？」

「フランなら向こうの部屋で寝ている。……まったく、何なんだこの状況。」

「?…?…どうということだ。」

俺はフランに違和感を覚え、てるに2人のことを見張っててもらい、紅魔館に行った。そしてらやっぱりおかしいと思った通り、紅魔

館にはちやんとフランがいた。永遠亭でてるが見ているはずなのに。  
「推測ですが……あなたの言ってるフランと、俺の知ってるフランは違います。」

「? そうなのか……。あと、なんで敬語なの?」

「仕事だからです。」

「じゃあ、敬語じゃなくていいよ。堅苦しいの嫌いだし。」

「じゃあ、遠慮なくさせて貰うよ。俺も堅苦しいの嫌いだしな。」

この患者さん……。じゃなくて、エスカルゴが堅苦しいのが嫌いらしいので、堅苦しいのはなしですることにした。さてと……。問題点は沢山あるんだが……。さつさと博麗神社に行かなきゃ……。霊夢、怒ってるかな……。……。やめよう。想像すると良くないことしか考えられない。

「じゃあ、炎火。フランが違うってどういうことだ?」

「その前に……。紫さーん! いるんでしょ!?!」

「はいはい、何の御用……。って、要件なんてわかりきってるんだけどね。」

「うわっ!」

俺が紫さんのことを呼ぶと、紫さんは後ろからスキマで出て来た。スキマでの登場はビビっちゃったみたいだけど……。

「紫さん、これはどういうことなの?」

「それが、私にもよくわかってないのよ……。」

「え? それってどういうことですか?」

「わかってることは、あなた達2人が、この幻想郷の住民ではなく、他の幻想郷の住民ってことね。」

『……………はい?』

「だから、この2人の吸血鬼はこの幻想郷じゃなくて他の幻想郷の住民ってこと。」

『はああああああ!!』

「それで、何か思い当たることとかない? 2人とも。」

つまり? 別の幻想郷から来た? でも、別の幻想郷とかあるの? 何か思い当たること……。あ。

「紫さん、俺と妹紅がこの2人を見つげる前、かなりの音量の金属音みたいのに会ったんだけど、何か知らない？」

「あ、俺もその金属音みたいなのに会いました。フランとレミリアと散歩したら、その音が鳴って、そしたら目の前に歪みみたいなのが現れて、俺とフランがそれに巻き込まれて、意識を失って、気がついたらここにいました。」

「！そう……辻褃があつたわね。」

「？どういうこと？」

あの金属音に秘密があつたつてことか？いや……音じゃないか。音の発生源に問題があつたつてことかな……？

「その金属音みたいなのは、多分時空とか空間の歪み。発生時に大きな金属音のような音が鳴るの。多分……数百年に一回の回数で起こるかしら？」

「前例あるんかい。」

つまりは、空間の歪みにエスカルゴとフランが巻き込まれて、意識を失つてこつちの幻想郷に来たつてわけか……。めんどくさいなあ……。それに、そうだったとしたら、もう一つ問題が起こる。

「俺達2人はどうなるんですか？」

エスカルゴは紫さんにそう聞いた。そう。エスカルゴ達だつて向こうの生活があるだろうし、ここに長くいるわけにもいかない。紫さんの能力ならなんとかなると思うんだが……。

「正直、すぐには帰れないわね……。少なくとも1ヶ月は必要だわ……。」

「1ヶ月か……。長いですね……。」

「仕方ないわ。色々と準備があるのよ……。」

「あつ!! 霊夢と約束してたんだつた……。ヤバイ……。てゐ！」

「はいはい……。で、何？」

「フランの面倒見について。俺神社行かないと殺される……。」

「じゃあ、後で何かくれ。」

「はいはい。」

「俺も見てるよ。心配だからな……。」



俺は紫さん達にそう伝え、永遠亭を出ようとした。しかし……。

「じゃあ、いつてきまらあだっ!?!いって……って、霊夢!?!」

「炎火、ちよつと手伝ってもらえる?..」

「ん?..」

何だか……まためんどくさいことが起こりそうだ……。

## コラボ編② 霊夢の面倒ごと

俺は霊夢に相談を持ちかけられていた。なんでも、知らない新しい神社の巫女に「信仰を分けて欲しい」と言われたので、その神社に乗り込もうと言うらしい。そして、それに協力してほしいと俺は言われている。……別にいいっちゃいいんだが、結構自分勝手だな。

「ね？お願いっ！」

「別にお前1人でも大丈夫だろ。」

霊夢なら、いつものマイペース会話で話し合いなんて大丈夫だと思うし、戦闘が発生したとしても霊夢の実力なら大丈夫なはずなんだが……。

「今回行く神社って妖怪の山の頂上なのよ。妖怪の山は天狗とか河童とかばっかだから、私1人だとめんどくさいのよ……。」

「要するに、1人だと時間かかってめんどくさいから俺に手伝えってことだな。」

「う、うん。まあ、そういうことよ……。」

全くこの墮落してる怠惰のマイペース巫女は……！こっちだって暇じゃないんだがな……。……まあ、手伝ってやるか。霊夢にとっては大切な問題であることは変わらないからな。

「……しゃあないな、手伝ってやるよ。」

「ありがとう！流石炎火ね！」

絶対今しか思っていないタイプだな……。まあ、いいか。これが霊夢だからな。今の霊夢にとやかく言うつもりはない。……まあ、流石に言うときはあるが……。俺は早速妖怪の山に行くために立ち上がると、てゐがこっちに來る。

「どうした？てゐ。」

「もう1人の方が目を覚ましたよー！」

「サンキューてゐ。」

「どういたしました。後でなんか頂戴ね。」

「はいはい、わかってるよ。さっさと元の仕事に戻ってくれ。鈴仙の言うことちゃんと聞けよ。」

「へいへい。」

俺はてゐにそう言うと、てゐは走っていった。まあ、サボったらサボったで炎牢獄かサラに噛みつかせればいいか。さて、出かける前に、永琳先生に言わなきゃな。あと、一応エスカルゴ達の様子を見にいこう。

「じゃあ、ちよつと待っていてくれ。色々と用事を済ませてくる。」

「いいけど、さつさと終わらせてよね。」

「はいはい、待ってる間その煎餅食べていいから。」

「あら、気が効くわね♪」

霊夢は早速その煎餅をボリボリと食べ始める。霊夢の機嫌を損ねると、色々とめんどくさいからな。さて、まずはあの2人の方を訪ねるか……。俺はエスカルゴ達の部屋に向かう。そして、部屋の前に着き、部屋に入る。

「失礼するぞー!」

俺が部屋の扉を開いて入ってきた光景は、エスカルゴがフランの頭を撫でている様子だった。

「えつと……何してるの?」

「フランの頭撫でてる。」

エスカルゴは開き直ったように俺にそう言った。まあ、別にいいか。見つけた時も、手を繋いでたから、恋人かなんかなだろう。

「それより、博麗神社には行かないのか?」

「霊夢の方から来たよ……。あの怠惰巫女が……。で、なんか妖怪の山の神社の巫女が信仰を貰いに来たから、物申しに行くのを手伝って欲しいらしくて、俺も行くことになった。あ……妹紅誘わないと……。」

そういえば、妹紅のこと忘れてた……。サラも多分妹紅と一緒にだろう。あとで迎えに行つてあげないと……。

「ねえエスカルゴ!」

「何だ?フラン。」

「私もこの人に着いていきたい!」

「ええ……。え、炎火、俺達も着いて行つて大丈夫か……?」

「あー……ちよつと聞いてくる……。」

俺は部屋を出て、霊夢のところに行く。霊夢は一体何て言うんだろ  
うな……。

数分後

「聞いた来たぞ。」

俺は再びエスカルゴ達のいる部屋に戻ってきた。……まあ、霊夢は  
予想通りの反応をしてくれたから、さつさと終わった。

「なんて言ってた？」

『「人手が多い方が楽に終わるからいいわよ。」って言ってた。」

理屈は通ってるから別にいいんだが……流石楽園の怠惰の巫女だ  
なあ……つと思つた瞬間だった。

「わーい！」

「よかったな、フラン。」

俺は喜んでいるフランを見て、微笑ましく思った。やっぱり、何処  
の世界でもフランは無邪気なんだな。あ、そうだ。

「エスカルゴ、ちよつと頼みがあるんだけど……。」

「ん？何だ？」

「一回、俺と手合わせしてくれないか？一応実力は見とこうと思つて  
……。」

「そんなことしなくてもエスカルゴは強いよ！」

「一応だよ、一応。」

「……わかった。どこでやる？」

「いつも鈴仙達と模擬戦してる庭でも行くか……着いてきてくれ。」  
「わかった。」

俺はエスカルゴと手合わせをしている庭までエスカルゴとフラン  
を案内した。数分経ち、庭に着いた。この庭は日光が遮られてる  
し、大丈夫でしょ。さて……やるか……。周りには兎達やてゐ、永琳  
先生に鈴仙、妹紅が観戦していた。

「じゃあ、やるぞ！炎纏『ファイアエンハンス（吸血鬼ver）！』」

俺はとりあえず、吸血鬼対策用の炎を纏い、エスカルゴに攻撃を仕

掛けていく。

「喰らわなきや意味はないぜ!!雷鎧『サンダーアーマー』!!」

「うおっ!？」

俺は攻撃の手をやめ、後ろに下がる。雷系の能力……。あれに触れるのは危険そうだな……。俺はとりあえずファイアエンハンスを解除した。近接が効かないなら、意味はない。それなら、解除して霊力消費を抑えないと……。

「雷武器『雷銃』!!」

エスカルゴは鎧を纏いながら雷の銃を召喚した。いい戦術だな。だったら、俺も銃を召喚してやる!

「喰らえ!!雷銃操法『スパークショット』!!」

俺はエスカルゴの放つ雷の銃弾を走って躲していく。真つ直ぐ飛ぶから、なんとか避けているが……。流石雷。速すぎる。けど……。

「銃なら負けないぜ!!炎符『ファイアーマシガン』!!」

俺は一つだけ銃を持ち、それ以外の銃は空中に浮かして撃ちまくる。一発一発の威力は流石に劣るが、こっちはかなり物量が多い。けど、あの鎧……。かなり厄介だ。こっちの弾幕があれによって消える……。

「くっ……。雷速『クイック』!」

エスカルゴの足がピリピリつと音がして光る。すると、エスカルゴはかなりの速度で動く。けど、見えない訳じゃないし、動きが単調になった。

「こっちだつて!炎走『炎爆走法』!!」

俺は手に持った銃以外のマシンガンを消し、爆発で移動する。これでどつちも高速移動だ!!俺は手に持った銃も消した。

「炎剣『聖なる青い炎の剣』!!」

俺は炎の剣を召喚し、爆風による移動で相手に攻撃していく。しかし、エスカルゴも流石に抵抗してきた。手に持った銃を消し、新しい武器を召喚した。

「雷武器『雷斧』!」

エスカルゴは雷の斧を召喚し、しばらく剣と斧の打ち合いが続い

た。

「行くぞ！炎剣技『燃え盛る焰の荒ぶり』!!」

俺はスペルを発動させ、怒濤の連続攻撃を繰り返す。すると、エスカルゴが少しづつ追い込まれていく。

「雷斧『雷撃一振』!!」

俺の渾身の最後の一撃と、エスカルゴのスペルによる斧の振り下ろし攻撃が打ち合い、数秒拮抗する。すると、2人とも剣が崩れる。

「……これでいっか。多分、どっちも強さがわかったでしょ。」

「ああ……そうだな。」

エスカルゴは汗を結構書いてた。まあ、無理もないでしょ。今回、エスカルゴは不利な状況で戦わせた。使用した炎は全て対吸血鬼。何回か掠ってたし、炎による暑さもある。はあく……疲れた。中々あんな強さの相手なんていないし、疲れた疲れた。

「さて、強さは申し分ないから、大丈夫だな。さて、じゃあ、行くか。」

「わかった。フラン！」

「凄かったよ！エスカルゴ！」

「ありがとう。」

フランはエスカルゴに撫でられ、嬉しそうにする。さて、こっちも……。

「妹紅！サラ！」

「流石炎火だったよ！ねえ、サラ。いつもの通り炎火のどこ行きな。」

「キュオゥ♪」

「うわっ！り、龍!?!」

「あ、紹介まだだっけ。こっちは藤原 妹紅。俺の恋人だ。」

「大体霊夢から聞いたわ。よろしくね！」

「ああ、よ、よろしく。」

「で、こいつはサラ。火龍（サラマンダー）だ。」

「キュオゥ♪」

さてと……自己紹介も終わったことだ……。めんどくさいけど、ついて行ってやるか。

「じゃあ、行こうか。」

俺達は妖怪の山に向けて、出発した。霊夢の面倒ごとを片付けに。

## コラボ編③ 妖怪の山攻略

「さて、あれが妖怪の山だ。」

「やっぱり結構でかい山だな。」

俺達は山の近くに着陸する。さて、ここから登山だ。まあ、一気に駆け上がると思うけどな。すると、下っ端である哨戒天狗が大量に現れる。

「お前達！妖怪の山に何の用だ！」

「人間と吸血鬼が何の用だ！」

「私達はここの頂上の神社に用があるの。別に天狗に用があるわけじゃないわ。はっきり言って邪魔。」

「おい。」

「なっ！なんだとー!？」

おい霊夢。お前は怠惰巫女の称号だけじゃなく挑発巫女にまでなるつもりか。霊夢のその発言は、哨戒天狗を怒らせたらしく、襲いかかってくる。

「この挑発怠惰巫女があああ!!」

次々と天狗達が集まってくる。結局、こうなるのか。まあ、大体は予想していたが。俺達はそれぞれ自分の能力等を使い、天狗達を倒しながら走り抜ける。なるべく被害は最小限にしたい……。すると、天狗とは違う、2人の少女が現れる。片方は秋の紅葉を象った服を着ていて、金髪。紅葉の神、秋 静葉。もう片方は、稲のデザインが描かれている服に、赤い帽子にブドウの飾り。豊穰の神、秋 穰子だ。

「何よあんた達。通してくれる？」

「妖怪の山で暴れられると困るのよ。折角の紅葉なのに……。」

妖怪の山は紅葉で溢れかえっていた。あまり意識はしてなかったけど、結構綺麗だな……。

「だから、これ以上暴れないでもらえる？」

「それは無理ね。こっちは自己防衛なんだから。」

「じゃあ、力尽くでも帰ってもらおうわ！」

秋姉妹は連携して弾幕を放つ。俺達はそれぞれが自由に弾幕を回



避していく。

「妹紅！一緒にやるぞ！3人は先に行つててくれ！」

「あつ！待ちなさい！」

「お前達の相手は俺達だ！行くぞ！妹紅！」

「うん！わかった！」

俺と妹紅は連携して弾幕を放っていく。秋姉妹も弾幕を放つが、力量が違うようで、こつちがどんどん追い詰めていく。けど、流石秋の神様。この程度じゃ終わらない。

「スペルカード!!葉符『狂いの落葉』!!」

「スペルカード!!秋符『秋の空と乙女の心』!!」

秋姉妹はスペルカードを使って攻撃してくる。しかし、俺と妹紅はそれをしっかり見極めて、回避していく。二重の弾幕はキツイが……なんとかなる！

「妹紅！終わらせるぞ！」

「うん！わかった！」

『火龍&不死鳥『吹き荒れる炎の嵐』!!』

俺と妹紅は息を合わせ、2人でスペルカードを発動する。スペルカードの弾幕は向こうの弾幕をかき消していく。そして、秋姉妹に命中する。

「キヤアアアアアアア!?!」

秋姉妹は俺と妹紅の弾幕に命中し、気絶する。さて、割と早く片付けたな。これなら、なんとか追いつけるかもな。俺と妹紅は再び山を駆け上がり始める。もちろん、天狗達がいるので、天狗達を倒しながら進んでいく。

数分後

「おつ、エスカルゴ達だ。おーい！」

「よう炎火。あつちは終わったのか？」

「おう、そつちはこんなところで何してるんだ？」

「ちよつと厄神に出会っただけだ。」

そこには、黒と赤の服に緑色の髪。赤いリボンをつけた少女、厄神、

鍵山 雛が横たわっていた。多分、エスカルゴに気絶させられたんだろう。まあ、そうそうエスカルゴ達が倒されるとは思わないがな。

「そうだ、霊夢は？もう先に行ったのか？」

「おう。霊夢は先に行ったぞ。『ここで戦うのはめんどくさい。』とか言ってたな……。」

「言ってたね。いつもあんなんなの？」

俺は頭を抱えた。あのマイペース巫女お……！……はあ、さつさと追いかけないとな。……あ、そうだ。大図書館で見つけたあれを試してみよう。

「ちよつとやりたいことがあるから、少し離れてくれ。」

俺がみんなにそう言うと、みんなは少し後ろに下がってくれた。俺は片手を地面に起き、炎で魔法陣を作る。サラの時に比べて、小規模なものだが……。

「出てきてくれ……炎の妖精……。」

俺がそう言うと、辺りは小さな光に包まれる。その光が消えると、魔法陣は消えていて、魔法陣があつた場所には、小さな赤い妖精が横たわっていた。

「炎火、これは？」

「炎の妖精だ。今の状態だとずっと昏睡状態だけど、契約を交わせば、起きるはず……。」

俺は右手で妖精に触れ、炎を妖精に纏わせた。すると、妖精は炎を取り込み、目を覚ます。

「ふわあく……。ここはどここれですか？」

「俺のことがわかるか？」

「マスター……ですよね？」

「ま、マスター？」

ま、マスターって……見た目は小さな可愛い女の子。そんな妖精にマスターって言われるのは……。後ろで妹紅が笑いをこらえてるのがわかる。なんか……。まあ、いいや。気にしないでおう。

「君の名前は？」

「スカーレットです！これからよろしくお願いします！マスター！」

「よろしく……あと、俺のことは炎火って呼んでくれ。マスターだと堅苦しいから嫌いだ。」

「わかりました!」

何だか、無邪気で真っ直ぐな妖精だな。無邪気なのは妖精共通? まあ、俺の知ってる妖精はみんな子供の見た目をしてるから、内面も無邪気な子供なのかな……。

「じゃあ、早速お願いなんだけど。この先にいる赤と白の服の人の方向とかわかる?」

「ちよつと待っててください……聞いてみますね!」

スカーレットは目を閉じ、耳を澄ましている。聞く……? 一体誰に聞くのだろう……。まあ、任せてればいいだろ。

「あつちです! 着いてきてください!」

「よし! 行こうみんな!」

俺達はスカーレットに導かれて道を進んでいく。霊夢が通ったつて一発でわかる。本当に、ここを通ったんだな。天狗が倒れまくってる……。お陰で、天狗達に襲われない。俺達は進んでいると、天狗ではなく、水色の服と髪、そして緑の帽子にバックを背負っている。河童のエンジニア、河城にとりだろう。とりあえず、横に移動させておこう。

「スカーレット、あとどれくらいだ?」

「えつと……あつちで誰かと戦ってるって言ってます!」

「じゃあ、さっさと行くか。」

俺達は再び足を進める。戦ってる……か。まあ、霊夢なら大丈夫だろう。

「もうすぐで着きます!」

スカーレットの速度が速くなる。さてと、あの怠惰巫女はどうしてるかな……。

「霊符『夢想封印』!!」

「うわああああ!」

……決着ついたみたいだな。まあ、怠惰といっても博麗の巫女だ。負けるとは思ってなかったよ。

「よう霊夢。お疲れ様。」

「あんた達、追いついたのね。そこまで遅かったかしら……。」

「まあ、そっちは2回ぐらい中々の戦闘をしたらしいし、こっちはお前との合流最優先で怠惰巫女さんの方角に一直線で突き進んだからな。」

「誰が怠惰巫女よ!!」

霊夢は俺に殴りかかってくる。俺はそれを間一髪で躲す。こいつのパンチは女とは思えないほど重いからな。食らいたくない。霊夢が戦っていたのは、哨戒天狗の服装だが、頭に犬の耳が生えている。白狼天狗の犬走 椀だ。

「炎火、そろそろ移動しようぜ。また天狗が集まってくる。」

「そうだよー!弱い天狗と戦うのは飽きたー!」

「スカーレット、山の上の神社までどれくらい?」

「えっと……あともうちょっと山を登ったら……です……。」

「どうした?スカーレット。」

スカーレットは空中でフラフラしていて、目が半分閉じている。

「ふわあああ……炎火……眠いですう……。」

「サラの上にも乗るか?」

「うーん……あつ!」

スカーレットは俺のところまで飛んできて、胸のポケットの中に入った。どうやら、ここが気に入ったようだ。

「炎火……私は寝させていただきます……。おやすみなさーい……。」

スカーレットは頭を引っ込め、寝てしまった。まだ目覚めたばかりだったし、眠かったんだろうな。つまりはあれか、頭の上はサラで、胸ポケットはスカーレットの居場所になったわけか。

「じゃあ、あともう少し、目的地までさっさと行くぞー!」

『はいー!』

そして、俺達はあともう少しの目的地を目指し、足を再び前に繰り出した。

## コラボ編④ 守矢神社と新生活

「ふう……やつと着いたな。」

「ずいぶんと疲れたわ……。さっさと終わらせたいんだけど。」

俺達は妖怪の山を登り終え、頂上にある神社、守矢神社に到着した。さて、怠惰巫女と一緒に考え方になるのは癪だが、まあ、さっさと終わらせたいんだけどな。もちろん、穏便になんだが……。

「ちよつとー！誰かいらないのー!?!」

霊夢は守矢神社に向かって、大声で呼びかける。すると、中から1人の人影が出てくる。白と青の巫女服に、緑色の髪にカエルの髪飾り。風祝の巫女、東風谷 早苗だ。早苗はこっちに駆け寄ってくる。

「あつ！霊夢さん！信仰をついに分けてもらえるんですか!?!」

「無理よ。こっちにも分けれるほどの信仰はないのよ。だから、力尽くで理解してもらおうわ。」

「……仕方ありませんね。神奈子様と諏訪子様の為に私、頑張ります！」

うわあ……。なんとという戦闘遭遇率。この勝負、観戦させてもらうか。俺達が首を突っ込む必要はないな。巫女VS巫女、この勝負の行方を見させてもらおうか。

「霊夢ー、お前がふっかけた勝負だから、一対一で頑張れよー！」

「はあ!?!なんでそんなめんどくさいこと……!?!」

「やっぱりめんどくさいと思ってたんだ……。」

「全く……しようがないわね……。」

いいツツコミだエスカルゴ。まあ、いつもあいつは楽を追い求めるから、いつも通りだな、いつも通り。

「行きますよつ!!奇跡よ!!」

早苗は弾幕を霊夢に向けて撃ちまくる。しかし、霊夢はそれを器用に躲していき、間を縫ってお札を投げまくる。流石博麗の巫女ってところだな。しかし、早苗の方も負けてはいない。早苗も負けじと弾幕を発射し続けていく。霊夢も少し弾幕が掠る時はあるが、被弾はしていない。戦況は、どちらも被弾することはないが、早苗の方が掠る回

数が多い。霊夢の方が有利だった。そして、ついに早苗はスペルカードを使う。

「スペルカード!!奇跡『神の風』!!」

早苗はスペルカードによる弾幕で、霊夢を追い詰めようにする。しかし、この程度で負けるほど霊夢は甘くない。

「霊符『夢想妙珠』!」

霊夢もスペルカードを発動し、早苗に攻撃する。その中の一発だけ、早苗に届き、早苗は被弾してしまう。

「ぐううう……!」

早苗は踏ん張り、なんとか耐えたようだ。しかし、かなり体への負担は大きいようだった。

「これで決着です!大奇跡『八坂の神風』!!」

早苗は先ほどのスペルカードの上位互換にあたるスペルカードを発動し、霊夢に攻撃をする。言っていた通り、決着をつけるつもりだな。けど、多分早苗の勝利という決着ではなく……。

「これで終わりよ!霊符『夢想封印』!!」

霊夢も、先ほど発動したスペルカードの上位互換スペルカードを放つ。お互いの弾幕がぶつかり、風圧がこちらまで届く。しかし、霊夢のスペルは早苗の弾幕を貫通していき、そして……。

「きやああああ!!」

早苗はもろに弾幕を喰らい、気絶してしまう。……やりすぎじゃね?俺はそう思った。まあ……向こうが悪いっちゃ悪いんだが……。とりあえず、話し合いをするために起こすか……。

数分後

「あ、ありがとうございます!」

「じゃあ、そういうことでよろしくね。」

「全く……話し合いの方が簡単だったじゃないか……。」

俺は回復の炎で早苗を回復させた。この能力、どんな炎も起こすことができるんだな。その分、消費霊力多くなるけど……。結局、早苗を起こして話し合った結果、博麗神社に守矢神社の分社を置くことで

話がついた。……なんで最初っからこうしないのかな？話し合いの時間約10分、明らかにこっちの方が楽だったな……。

「そうだ。エスカルゴ達はこの一ヶ月、どこで過ごすんだ？」

『あ……………』

やっぱり、考えてなかったのか……。まあ、当たり前だよな。考える間もなく、これに駆り出されてたからな……。

「じゃあ、永遠亭に来るか？紅魔館だとフランが2人でややこしいし……博麗神社はあの怠惰巫女が面倒をちゃんと見れるとは思わないし……。なら、うちに来た方がいいんじゃないか？」

俺はエスカルゴ達2人にそう提案した。理由は言った通りだ。永遠亭なら、部屋も結構空いてるし、飯なら俺が用意するし……。特に問題はないはずだ。

「……なら、そうさせて貰おうかな。」

「わーい！お泊まりお泊まり！」

「炎火ー、今度私も泊まりに行きたーい！」

「はいはい、わかったわかった。」

これからまた、忙しくなりそうだな……。まあ、いいか。楽しくないそうさ。俺達はみんなで永遠亭に戻った。とりあえず、永琳先生に許可取らないと……。

### 一分後

「どうだった？」

「即答でOKだって。三食ちゃんどついてるぞ。俺が料理するだけだけど。あと、妹紅も泊まっていって。」

「わーい♪」

「お世話になります。」

「私エスカルゴと同じ部屋♪」

各々、泊まれることが決まり、喜んでいた。けど、ちゃんと条件はある。この条件は俺にとって嬉しい内容ではある。……まあ、ちよつと可哀想ではあるが。

「一つ、条件を永琳先生に言われたんだ。」

「ん？条件ってなんだ？」

「まあ、簡単に言うところこの仕事の手伝いかな。そこまでの内容じゃないし、俺みたいに、休める時間がかかなり多いけど。」

「それぐらいなら、お安い御用だぜ！」

「フランも頑張るー！」

「妹紅もお願いできるか？」

「うん！頑張る！」

「じゃあ、全員、部屋に案内するな。」

『はい。』

俺は3人を部屋に案内した。エスカルゴとフランは同じ部屋で、妹紅は俺から頼んで俺と同じ部屋にもらった。そして、夕食等を終え、就寝時間……。

「えへへ……。炎火と同じ部屋♪」

「俺も妹紅と一緒に寝ることができて嬉しいよ♪」

「じゃあ、炎火。おやすみ♪♪」

「ああ、妹紅、おやすみ。」

そして、俺の濃い一日は、幕を閉じた。一ヶ月間、楽しくなるが大変になる予感がするな……。



## コラボ編⑤ いつもと違う日常

「ふわあく……。やっぱり、早めに起きたからいつもの寝起きより少し眠いかな……。」

俺は目を覚まし、布団から出る。洗面台に向かい、顔を洗う。秋に入り、中々水が冷たい。おかげで俺はバツチリ目を覚ました。さて、全員起こしに行くか。……そうだ。ポケットの中に……。

「スカーレット、起きろ。」

「ふわあく……。おひやようございませしゅ炎火……。」

スカーレットはポケットから顔を出し、欠伸をして目をこする。あれからずっと寝ていたのか……。どんだけ寝るのが好きなんだ……。まあ、いつか。

「スカーレットはサラと妹紅と一緒にいてくれ。」

「わかりました〜♪」

スカーレットはポケットから抜け出し、ゆっくりと俺の部屋まで飛んでいく。……さて、2人を起こそうかな。俺はエスカルゴと

「エスカルゴ、フラン、起きろー！早速仕事を教えていくぞー！」

「んん……。」

「んんーっ……。おはよう、炎火。」

2人とも、手を繋いで寝ていたようだ。仲がいいのはとてもいいと思う。2人とも寝起きで眠そうだった。けど、仕事だから、起きてもらわないと困る。

「早速仕事やるぞ。」

『はい。』

俺はとりあえず、いつも朝起きたら行く仕事場の部屋に行く。さて、今回はエスカルゴの能力を使ってもらおうか……。俺達はその部屋の前に着き、部屋の中に入る。その部屋の中に入る。部屋の中には兎達が寝ていた。

「俺の仕事、そして、これからのエスカルゴ達の仕事は、『兎達の世話』だ。で、早速なんだけど、兎達を起こしてくれない？こう……ビリビリっと広範囲に……。」

「ええ……大丈夫か？」

「大丈夫、静電気ショックぐらいでいいから。それに、妖怪兎だし。」  
「じゃあ……えいつ！」

エスカルゴは兎達に向かって弱い電撃を浴びせる。すると、兎達は驚いたり、声を上げて起きる。

「おはようみんな♪」

『何するんですか!!』

「ごめんごめん、今日だけだから……。それと、これから一ヶ月、この2人にも俺の仕事を手伝って貰うから。」

『はーい。』

兎達は全員起きて着替えを始める。さて、今のうちに朝ご飯作ろうかな……。俺達は兎達が着替える前に部屋を出て、台所に向かった。

「さて、俺は朝ご飯作るから、適当に時間潰してて。」

「い、いきなり休憩ありかよ……。っていうか、俺作るのが手伝うぞ。」

「いいのか？言っとくけど人数多いからな？えっと……大体30人分ぐらい？」

「さ、30人分!?毎日そんなに作ってんの!？」

「まあ、慣れだよな。宴会とかはマジで死ねるけど。」

「ええ……。じゃあ、フランは何かしてて。」

「はあ〜い。」

そして、俺とエスカルゴは料理を作り始める。エスカルゴは野菜炒めとかが得意らしいので、そっちは任せて……。それ以外は俺担当だ。いつもより楽だ。

数十分後

「お、終わった……。」「

「お疲れエスカルゴ。じゃあ、早速……。そうだ。」

俺は空中に小さな魔法陣を炎で描いた。すると、そこからサラと、その背中に乗ったスカーレットが出てきた。

「うわっ！」

「サラ、スカーレット、兎達に朝ご飯運ぶように言ってくれないか？」

「はーい！サラ兄行こう！」

「キョオー！」

サラとスカーレットは兎達の部屋に飛んでいった。……あの短時間で何があつたんだ？サラ、妙にスカーレットに懐かれてるな……『サラ兄』って……。

「さて、永琳先生と鈴仙、それとかぐ……悪戯姫に朝ご飯届けに行こうか……。その後、俺達も朝ご飯を食べようか。」

「い、悪戯姫って誰のことだ？」

「この亭主の輝夜様のことだ。」

「い、いいのか？亭主さんにそんな呼び方して。」

「本人から許可貰ってるから大丈夫。」

「ええ……。」

そして、俺達は朝ご飯を配り、自分の部屋に戻ってご飯を食べ始めた。そういえば、こうして妹紅と2人でご飯を食べるのってあんまりなかったな……。

「ねえねえ炎火。」

「はいっ！あーん！」

「ええっ!?あ、あーん……。」

俺は妹紅にあーんしてもらった。……なんかいつもより美味しい気がする。そして、俺と妹紅はご飯を食べ終わった。俺と妹紅は食事の後を片付けて、2人でエスカルゴ達の部屋に仕事のために迎えに行った。

「エスカルゴく、次の仕事……と言っても、兎達の仕事監視するか、悪戯姫の相手をするかなんだけどな。」

「わかった。フラン、行こうか。」

「うんっ！」

エスカルゴとフランは部屋から出てきた。……じゃあ、悪戯姫のところに行くか。

「そういえば炎火。」

「ん？なんだ？」

エスカルゴが部屋に向かつてる途中、話しかけてきた。仕事に関する

ることかな？それとも、個人的な要件かな？

「サラとスカーレットって何食べてるんだ？」

「……あ、そういえば2人の食事用意してなかったな。」

「炎火、早く飯……。」

「キユオ……。」

スカーレットはポケットから、サラは頭の上からご飯をねだる。俺はサラとスカーレットに竹炭を渡す。すると、スカーレットとサラは嬉しそうに竹炭を食べる。

「スカーレットとサラの食事って一体何なんだ？」

「炭だな。スカーレットは普通にご飯食べるけど、やっぱり炭の方が好きらしいな。聞いたところ、こいつらにとっては『甘くて腹に溜まりやすい好物』らしい。」

「へえ……。」

「さて、着いたな、悪戯姫の部屋。」

「じゃあ、頑張るかー！」

俺はそこから、色々大変だった。まず、全員が落とし穴の罠にかかりフランの暴走を止める羽目に。俺とエスカルゴがボロボロ。兎達の仕事監視でてるが逃走。エスカルゴの速度上昇の電気ショックにて捕獲。てるボロボロ。そんなこんなで1日が過ぎていった……。こんな日常、これから一ヶ月……泣きそう。

「炎火、大丈夫？」

「う、うん、大丈夫……さて、もう暗いし寝るか！」

俺は心配そうに俺のことをみる妹紅を安心させ、眠りについた。今のうちに休んでないと……。

## コラボ編⑥ 新しい面倒ごと

エスカルゴ達がここに来てから1週間。エスカルゴ達は着々と仕事を覚えていった。中々筋がいい。色々と用事も頼むようになったし、人里でも評判が良いようだ。そして、朝。

「ふわぁ……。」

俺は目を覚まし、いつもの通り妹紅を起こして顔を洗い、エスカルゴ達を起こして兎達を起こして朝ご飯作り……。初めてこの量を料理した時は真面目にビビったなあ……。そして、朝ご飯を作り終え、兎達に取りに来させ、朝ご飯を配り、朝ご飯を食べた。ここまではいつも通り。しかし、ここから違う。

『雷武器『雷銃』！からの……雷銃操法『スパークショット』！』

「スペル二連!?けど、その程度じゃ当たらないぜ!雷の方向調整できるようにした方がいいと思うぞ!」

「ふ、2人ともレベルが高いって!私避けるので精一杯!」

『鈴仙頑張つて!』

「声を揃えて言わないで!」

「鈴仙だらしないよー!」

「炎火頑張つて〜!」

いつもは俺、妹紅、鈴仙の3人でやってる庭での修行。しかし、今回はエスカルゴ、フランを加えてやっている。流石吸血鬼。身体能力が高く、手強い。だけど……。

「スペルカード発動!炎符『ファイアフィールド』!!」

俺はスペルカードを発動し、炎のフィールドを展開する。地面はランダムで炎が噴き出すようになっていて、俺の炎の威力が上がる。つまり、俺にとって有利な空間を作り出す。

「スペルカード!炎符『ファイアーマシンガン(全方位Ver.)』!!」

俺はスペルの弾幕を全方位に発射する。炎のフィールドの効果を威力ではなく数に回した。なので、弾幕の密度は濃く、しかもランダムに噴き出す炎と炎の弾をばら撒きまくる。

「きやー!」

まず、鈴仙が被弾する。俺はそれに気にせず弾をばら撒き続ける。「うわあっ!?!」

エスカルゴは弾ではなく炎のフィールドによる炎の噴き出しによって攻撃を喰らったようだ。俺は弾幕を撃つのをやめる。俺はあえて妹紅とフランに弾幕を当てないよう、注意して撃っていた。自分の彼女と他人の彼女に手をあげるなんて外道のやることだ。え? 鈴仙? いつもやってるからOK。

「炎火お疲れ〜♪」

妹紅は俺に飛びついてくる。俺はそれをしっかりと受け止める。妹紅、可愛い。異論は認めない。認めたくない。

「エスカルゴ、大丈夫?」

「大丈夫大丈夫、そこまで痛くないから……。」

「大丈夫か? エスカルゴ。まあ、弾の数に炎を回してたから威力ないのは当然か……。」

俺達が修行の後の雑談を繰り返していると、空から何かが高速で落ちてくる。それは俺達の前に落ちると、強めの風が俺達を襲う。……大体誰が来たのかわかった。あんな速度で飛んでくるのは1人しか知らない。

「何のようだ文……っていつでも、お前の要件はいつも一つだったな。」

「こんにちは炎火さん。それと彼女さんと鈴仙さんに……エスカルゴさんとフランさん!」

「で、何の用だ?」

「それは勿論……。」

文はいつも使ってるペンと手帳を取り出す。この時点で俺の予想は確信に変わる。

「取材させて頂けませんか?」

『断る。』

「ワーマイナサンナカガイイデスネー。」

文が取材の願いを出し、全員、息を揃えてそれを拒否する。当然だ。「そんなこと言わずに、ね? 妖怪の山では色々やってくれたみたいで



「ちよつと地底まで付いてきて！」  
……どうやら、あの時より面倒臭い事に巻き込まれそうだ。



## コラボ編⑦ 地底へ

「地底?」

「そう!着いて来て欲しいんだけど……。」

最近、急に温泉が湧き出した場所がある。まあ、それ単体だったら何の問題もない。しかし、温泉からは怨霊と言って、冥界にいる幽霊や亡霊とは違う霊が一緒に出てきているらしい。そして、その怨霊は本来地獄にいるらしい。そして、早苗はそれに心当たりがあるらしい。なんでも、守矢神社の神様2人が早苗を無視して温泉計画を進めていたらしい。で、これを怠惰巫女は異変と決定し、異変解決へ行く……のだが、1人じゃまためんどくさいことになりそうとかいういつも通りの怠惰的な理由で俺のいる永遠亭に来たらしい。早苗はそれに協力するらしいが……。

「なんで俺なんだよ。魔理沙と一緒に行けよ。」

「嫌よ、魔理沙うるさいし。」

「残念だが私はここに在るぜ。」

どこからか声が聞こえ、上を見る、すると魔理沙が上から箒に乗って飛んできた。大方、霊夢と早苗を追いかけてきたってところだろ。

「私もついていくんだぜ!」

「はあ……つたく、俺もついていくよ。その怨霊がいるのは、人里の人にとってもよくないだろうしな。」

「なあ炎火……。」

「ん?なんだ?」

珍しくエスカルゴが話しかけてくる。最近俺の方から話しかけることが多いから、ちよつとびつくり。

「俺も連れてつてくれないか?」

『え?』

「エスカルゴが行くなら私も〜!」

『え?』

「炎火が行くなら私も行く〜!」

「いいぞ〜♪」

「やったく♪」

『そこは疑問に思わないのか!!』

なんだこのコントは……!というか、エスカルゴが自分から行くなんて驚きだ。前はフランが行きたいと言ったからエスカルゴも妖怪の山に行つたんだが……。自分から言うなんて……。まあ、地底なんで行くチャンスあんまりないだろうから、面白そうと思うのは、分かるな。

「いいわよ。数が多い方が楽し……。」

「おいこら怠惰巫女。その発言前にも聞いたぞ。」

「れ、霊夢さんってこんな性格なんですね……。」

早苗は俺達との会話に追いつけてないようだ。まあ、そうだろうな。ここにいるやつ全員。殆ど早苗と会話してないからな。

「じゃあ、明日行くわよ!私も準備したいわ……。」

「じゃあ、俺達は体を休めようか。明日に備えて準備準備……。」

「私もミニ八卦炉の手入れしたいんだぜ。」

「じゃあ、とりあえず解散。」

霊夢達はとりあえず自分の家に帰っていった。さて、俺達は仕事に戻り、とりあえず今日の分の仕事を終え、自分達の部屋に戻った。

「炎火。」

「ん?どうした?」

「明日頑張ろうね!」

「そうだな!じゃあ、体を休めようか。」

「うんっ♪」

俺達は眠りにつき、体を休めた。

翌日

「みんな、準備は大丈夫か?」

『大丈夫〜!』

俺達4人はとりあえず仕事を終えて、永琳先生に外出許可をもらった。流石永琳先生と言ったところだ。ちなみに俺の持ち物は、永琳先生に大分前に貰った回復薬などの薬。あと、携帯食料だ。

「さて、じゃあ行くこうか。」

「でも、どうやって行くのよ。私地底の入り口なんて知らないわよ。」

この怠惰巫女……!!下調べも無しに来やがって……!!ああ……、ま  
ずはそこからなるのか……?あ、一つ解決案が……。

「ゆーかーリーさーん!!」

「はいはい、紫さんですよ♪」

俺は紫さんを選んでみる。すると、紫さんは俺達が集まっている中  
央の地面から、スキマで現れた。絶対に驚かない。自分から呼び出し  
たんだ。驚いてたまるか。流石に、全員驚いているようだが……。

「で、紫さん。地底の入り口まで連れてって。」

「いいわよ。はい、このスキマ。」

紫さんは俺達の目の前にスキマを作り出す。多分、このスキマが地  
底の入り口行きのスキマだ。

「ありがとう紫さん。助かったよ。」

「どうも。いつも炎火には下級妖怪が人里に手を出さないように手  
伝ってもらってるからね。」

「ボランティアでね。しかも、エスカルゴが来てからやってなかった  
んだねどね。」

俺はたまに人里近くの森をパトロールして、下級妖怪が人里に手  
出さないようにしてる。まあ、下級妖怪は鈴仙達ほど強くはないし、  
数が多くても広範囲で攻撃できるから特に問題はなかった。

「あと、一つだけ注意してね。」

「ん?何?」

「地底には鬼や妖怪の住処よ。無闇に手を出したら危険だからね。」

そうか……。萃香は博麗神社で居候してるけど、萃香の話にたまに  
出てくる『星熊 勇儀』は、地底に住んでるんだっけ……。それ以外  
でも、鬼は下級妖怪なんかより圧倒的に強いに決まってるな……。

「わかった。気をつけるよ紫さん。」

「じゃあ、行って来なさい。全員気をつけてね。」

『わかった!』

俺達はスキマの中に入っていく。スキマを抜けた先は、大きな穴が

空いている場所だった。ここが地底への入り口か……。全員がこっちに来ると、スキマは閉じた。

「じゃあ行くぞー！」

『おおー!!』

俺達は地底の入り口へと飛び込み、穴の中を飛んでいく。穴を抜けた先には……。大きな地底の街並みが広がっていた。

## コラボ編⑧ キスメとヤマメ

「ここが地底か……!」

俺は驚いていた。地面の中に、こんなに広い空間があつて、そこ「街」が広がっているとは思わなかった。最近、転生前のことをめつきり思い出せないことがある。最近はそんなことはないが、実際に見ると驚いたり、感動したりすることはある。

「うへえ……。」

「ん? どうかしたか? エスカルゴ。」

エスカルゴだけではなく、みんな汗を流している。みんな調子でも悪いのかな?

「え、炎火、暑くないのか?」

「え? 全然? ……ああ、そういうことか。」

確か、ここは旧地獄。まだ昔の灼熱地獄の名残りがあるかなんかで暑いんだっけ。俺は能力のお陰で暑さに慣れまくり、冬とかも炎でなるとかなる。多分、スカーレットもサラも暑いと思つてないはずだ。つまり、暑い寒いがわかりにくくなつてる。でも他の人……特に吸血鬼はキツイだろうな。

「みんな、少し待つててくれ。」

俺は少し集中する。俺の能力で熱くなくて、秋の気温ぐらいの温度の炎を作り出す。この普通は存在しない炎を作り出すの、意外と難しくて習得するのに一ヶ月くらい時間がかかった。今じゃ簡単に作り出せるが。俺は炎を練り終え、全員に触れていく。そして、全員の体に炎を纏わせる。

「お? 暑くない。むしろ涼しい。」

「炎火、ありがとう♪」

「まあ、これぐらいしないとね。その炎は俺が気を失いさえしなかつたら消えないから多分大丈夫……なはず。」

俺が最後言葉を濁した理由は、ここは地底。妖怪や鬼がたくさんいるから、今までとはわけが違う。もしかしたら、俺がやられるかもしれない。俺がそんなことを考えていると、2人の少女が現れる。片方

は桶の中に入っていて、白い服、緑の髪でツインテール。釣瓶落とし、キスメ。そしてもう1人は、茶色い服に黄色いリボンと髪。そして頭には茶色と黒のリボンが付いている。土蜘蛛の黒谷 ヤマメだ。

「あなた達、何の用？」

「異変解決。」

「怠惰巫女の手伝い。」

「それのお手伝い♪」

「俺も巫女の手伝い。」

「それのお手伝い♪」

「面白そうだからなんだぜ。」

「神奈子様と諏訪子様のしたことの解決に……。」

「ここは地底よ。出ていって。」

「で、出ていけー！」

前でヤマメが強気に、その少し後ろ斜めで臆病そうに言うキスメ。だけど、そんな言葉を俺達が聞くわけない。

「こっちは仕事なのよ。通してもらおうわ。」

「そっちがその気なら私だつて容赦しないよ！」

ヤマメが何かをばら撒くような動きをする。すると、俺以外のみんなが苦しみます。一体何が!?

「妹紅!大丈夫か?つて、凄いや熱?!それに息が荒い……。」

そういえば、ヤマメの能力を病気を操る程度の能力か……。吸血鬼もかよ……。あれ?なんで俺は病気にかからないんだ?あとサラとスカーレットは苦しんでいる様子はないし……。あ、そうか。

「なんであなたは私の能力が効かないの!?!」

「こっちも理由は大体理解した。理由は俺の能力だ。」

「あなたの能力?」

俺の能力は炎を支配する程度の能力。つまり、能力がオートで熱殺菌してるんだと思う。そういえば、こっちに來てからやたら病気にかられないと思つてたら、そういうことか。

「みんなを元に戻せ！」

「嫌よ。帰るつていうなら治してやらないこともないわ。まあ、私は

治すことはできないけどね。」

「お前をさっさと倒してみんなを治さないと……！みんな、後ろに下がっていてくれ！」

『わ、わかった……！』

「私が簡単にやられると思うなよ！キスメ、やるよ！」

「うん！」

！  
2人は弾幕を放ち始める。しかし、こんな弾幕でやられると思うな

「炎符『ファイアフィールド（空中Ver.）！！』」

俺は球体の炎のフィールドを作り出す。地面からの炎の噴射は、空中での小さい爆発に。みんなはフィールド外に出している。これなら……。

「お前を本気でやれる。」

「……………!!?」

最近の俺の修行の成果を見せないとな……。久しぶりにあの飛行方法……!!炎の噴射で空を飛び始める。俺は炎の噴射で縦横無尽に飛び、弾幕を躲す。そして、久しぶりのスペカを発動させる。

「そこだ!!炎脚『レオキック』!!」

足に炎を纏い、超高速で蹴る。キスメの桶に命中し、思いっきり吹っ飛ぶ。どこに落ちたかわからない。が、妖怪だ。あの程度で死ぬわけではない。一応、手加減はしているし。

「むう!!瘴符『フィールドミアズマ』!!」

ヤマメはスペルを発動し、俺を攻撃する。しかし、俺はその間を躲しながら接近する。そして、俺は一度出力を最大にして、一瞬で後ろに回り、羽交い締めにする。

「これでお前の負けだ。お前の敗因は……俺の恋人を苦しめた。炎爆符『ウルトラダイナマイト』!!」

俺は自身の体に炎を纏い、自爆する。そして、爆破で気絶したヤマメを体を再生させて回収する。ここははるか高い空中。地面に下ろしに行くより、まずみんなの方からだ。

「みんな、これを飲んでくれ。噛んでも大丈夫。」

「炎火、これ何？」

「永琳先生特性即効性の対病薬。」

みんな、苦しみなながらもそれを飲む。すると、みんな苦しまなくなる。流石永琳先生特性の薬。薬が効くまでの時間と効果も最高だ。

「じゃあ、みんな行こうか。」

『う、うん。』

俺は肩にヤマメを担いだ状態で街の方に行く……前に、再び噴射を使い、キスメも回収する。そして、隣に並べて寝かせておく。まあ、これぐらいはしてあげないとな。

「さあ、異変解決頑張ろう！」

『お、おおー！』

あの戦いの時、全員、「炎火を本気で怒らせちゃダメだ……。」と思っ  
たらしい。



## コラボ編⑨ 鬼の四天王

俺達はキスメとヤマメを倒し、地底に降り立った。そして、街に入ろうとしていた。

「上から見ていたけど、結構大きそうだな。」

「人が多くて暑そうだな。炎火の炎がなかったら異変解決以外で絶対来てないと思う。」

「暑いって感覚忘れちゃったんだよね……。」

「仕方ないよ。だって炎火、最高の出せる炎の温度何度だっけ？」

「えっと……ちようど一兆度だったと思う。一兆度とかになると大変。周りに温度が漏れないように圧縮しないとダメだから……。」

俺の最高温度を使う時は2つのスペルぐらいかな。獄炎拳『ノア・インフェルノ』と……もう一つはまだ使ってないし、別にいいか。俺達は街に入ろうとした。すると、1人の少女が妨害する。金髪で、茶色と紫等の色のペルシャ服を着た少女。橋姫、水橋 パルスィだ。

「あなた達、男と女のペアで妬ましい……。」

おお、生妬ましい。地味に聞けて嬉しいが、今はそんなこと言っていられない。怨霊が地上に沸き出さないようにしなければならぬから。通してもらわないと……。

「俺達ここを通りたいんだ。通ってもいいか？」

「ダメよ。博麗の巫女とその連れは通すなって地霊殿の友人に頼まれててね。」

「そんなこと私を知るわけないでしょ。さつきと通しなさいよ。」

「だったら……あまり好かないけど、力尽くでもここは通さないわ！」

チッ！やっぱり、簡単にはいかないな。パルスィは弾幕を放つてきて、俺達はそれを回避していく。というより、明らかに挑発怠惰巫女の発言のせいだな。こいつ……！ほんといつも通りだな！そういえば、地霊殿の友人って言ってたな……。あの大きいお屋敷か。

「エスカルゴ、頼めるか？」

「わかった！」

「フランもエスカルゴを手伝う！」

俺達はエスカルゴとフランの二人組と、それ以外の面子に分かれ、パルシイの隙を伺い、街に入る。

「俺達が相手だ！」

「信用されてるなんて妬ましい……！」

よし、ここはエスカルゴ達がなんとかしてくれるだろう。俺達は街に入っていく。俺達は大きい屋敷、地霊殿を目指す。けど、不安な点が2つ。一つは怠惰巫女の怠惰過ぎる行動。まあ、さつき怠惰行動したから、絶対にするんだらうけど……。あと一つは萃香の言つてた鬼、星熊 勇儀だ。まあ、そうそう出会うなんてことは……。

「おいそこの男！」

俺は後ろから声をかけられ、振り返る。そこには、白の服に青色の紅葉のデザインのスカート。そして、金髪に頭から生えている大きな赤い角。間違いない、語られる怪力乱神、星熊 勇儀だ。……出会うちゃったよ。最悪だよ。

「お前、焰 炎火だよな？」

「あ、ああ、そうだが。」

……とても嫌な予感がする。とても、嫌な予感。

「お前、強いんだろ？ 博麗の巫女に並ぶ實力を持っている人間……とても興味があるんだよ。だから、私と戦ってもらえないかな……？」  
「やっぱり、そうなるか……。でも、断ると断つたで面倒なことになりそうなんだよな……。……受けるしかないのか……。」

「わかったよ。みんなは先に行っていてくれ。」

『わかった。』

霊夢、魔理沙、早苗は地霊殿の方へ歩いていった……。が、妹紅はここに残った。

「妹紅。なんで残ったんだ？」

「この鬼……かなり強いだろうから、私も手伝うよ。」

「危ないから先に行っていてくれ。」

「大丈夫だよ。なんせ……不老不死だからね。」

「そうだったな。」

「そっちは2人か。少々不本意だけど……。楽しくなりそうだから構

わないか。それじゃあ、行くぞっ!!」

勇儀はそう言うと、超高速で拳を繰り出してくる。俺と妹紅はギリギリ反応し、なんとか避けたが、パンチによる風圧が俺と妹紅を少し、後ろに吹き飛ばされる。

「すまん。お前には退場してもらおうぞ!!」

「ッ!? キャアアアアアアアアア!!」

妹紅は先程のパンチによる風圧で少し体勢を崩し、勇儀は思いつきり拳を繰り出す。妹紅はギリギリ腕で防いだが、妹紅の腕は吹き飛ばされ、建物も御構い無しに吹き飛ばされ、壁に激突する。いくら不老不死でも、無事では済まない。

「さて、これで一対一……ってあれ?」

俺は既に妹紅に寄り添っていた。妹紅は腕を失っていて、白い服に血が付いている。不老不死であるため再生するとは言え、とても酷い様子だった。これは俺が同意して開始した決闘。それはちゃんと頭の中で理解していたはず。しかし、どうしても俺はどうしても怒りが抑えられなかった。大切な恋人が、こんな酷い姿にされたことが。

「妹紅……ちよつと眠っててくれ。サラ、スカーレット、妹紅を頼む。」

「キユオ〜!」

「炎火、気をつけてください……。」

俺は妹紅の頭をゆつくりと撫でる。妹紅はサラとスカーレットに任せよう。俺は立ち上がり、貫通した建物の瓦礫の上を歩いていく。この勝負、勝たないといけない。妹紅のために。

「これで一対一だ。私を絶望させないでくれ……よっ!!」

勇儀は一気に距離を詰め、超速のパンチを繰り出す。さっきのパンチより速い。が、俺は右腕のパンチでそれを迎え撃つ。右腕はもう無い。故に、壊れない。俺のパンチと勇儀のパンチが衝突する。その場に強力な風圧が発生する。2人とも後ろに仰け反る。いつもの俺ならそれで吹き飛ばされているはず。

「すごいねお前、私の拳と渡り合うなんて。」

「普段の俺ならありえないだろうな……けど……柄にも無く、キレてるんだよ。だから、容赦はしないぞ。」

勇儀は身震いした。楽しい。そんな感情が勇儀の中にあつた。勇儀と渡り合える程の実力者は中々おらず、久しぶりに自分と同じくらいの実力者と出会い、戦いを楽しもうとしていた。俺は、落ち着いていて、同時に怒り狂っていた。この後のことなんて知るか。フルパワーで霊力とか体力とか考える気は無い。周りにも観戦してる妖怪達がいるみたいだ……。エスカルゴ達もいるみたいだ。だが、今の俺には考慮する余裕はない。

「獄炎拳『ノア・インフェルノ』。獄炎剣『インフェルノ・ドラゴン』。」  
俺はスペルで右手にフルパワーの炎で拳を握り、左手にフルパワーの炎で作った剣を握る。剣には火龍と不死鳥の模様が描かれている。相手は鬼の四天王の一角、これぐらいしないと勝てない。

「炎噴射『ジェットブースター』。」

俺は更に、炎の噴射による移動を強化するスペルを使う。この状態がどれほど続くかはわからない。消費が激しすぎる。

「行くぞ!!」

勇儀は思いつきり拳を握ってパンチを繰り出し、俺は炎の噴射で剣を振り下ろす速度を限界まで上げ、剣を振り下ろす。拳と剣が打ち合う。勇儀の手がジュツと音をあげる。当たり前だ。俺の本気の炎の温度。つまり、一兆度。これに触れると普通は蒸発する筈だ。この程度で済むのは、化け物つてことだ。拳と剣が打ち合い、隙を見せたところで、右手で思いつきり炎の噴射で速度を昇華させ、殴る。ジュツと音と同時に勇儀は吹っ飛ばされる。勇儀は建物に激突し、建物が崩壊する。

「……ハハッ、ここまでやるとは思わなかったよ。」

瓦礫の中から勇儀が出てくる。……流石に無理か。俺の体はあともう少しで限界を迎え、俺は倒れてしまう。だったら、次の攻撃に全て注ぐ。

「これで最後だ。獄炎溜撃『ラスト・インフェルノ』!!」

「そうか、私も最後だ。四天王奥義『三步必殺』!!」

俺は超溜め時間のある剣と拳で繰り出すスペルを。勇儀は、一歩ごとに威力が上がるスペルを。最後の一発を俺に当てる気だろう。

だったら、全力を全力で迎え撃ってやる……。

「5……4……!!」

「一步……!!」

俺は溜め時間のカウントを、勇儀は一步踏み込む。

「3……2……!!」

「二步……!!」

観客も息を飲む。互いの最強の技が打ち合う瞬間。

「1……0……!!」

「三歩……!!」

俺の溜め攻撃と三歩目の勇儀の拳がぶつかり合う。その場には大きなクレーターができ、観客は風圧で吹き飛ばされる。近くの建物も壊れたようだ。俺の攻撃と勇儀の攻撃は少しの間拮抗し……そして……勇儀は吹き飛ばされた。勇儀は妹紅とは比にならないほど吹き飛ばされる。

「勝っ……た……」

俺は勝ちを確信したと同時に、気を失った。

コラボ編⑩ 地底の奥深くへ……

「ん……んん……ハッ！」

「あつ！炎火！大丈夫!？」

「妹紅!!大丈夫か!？」

「うん、大丈夫！」

俺は何処かわからない部屋の中で目を覚ます。誰かの家?というか、地底なのか?地上なのか?というか、どれくらい気を失っていたんだ……?

「妹紅、ここはどこだ?」

「ここは私の家だよ。」

俺は妹紅ではないもう1人の声を聞いて起き上がる。そこには星熊 勇儀が立っていた。……正直会いたくない。妹紅を傷付けたとかではなく、吹っ飛ばしてしまったので、なんとなく気まずい。しかし、そんな不安はすぐに消し飛んだ。

「いやあく、お前……じゃなくて炎火があんなに強いのは思わなかったよ!人間に……いや、勝負に負けたのは何百年振りか忘れてしまったよ。戦ってくれてありがとう!」

勇儀は俺に手を差し出し、握手をする。あれ?握力が強くない?幽香さんはめっちゃ痛かったのに……。ちゃんと手加減してくれてるのか……。勇儀さんは悪意があつて妹紅を殴ったわけじゃないから……まあ、許すか。っていうか、特にもう怒ってないしな。

「俺、どれくらい気失つてた?」

「一晩だ。炎火は私との戦いで無理な霊力の使い方したみたいだな。」  
そうだった。最高温度を右手に纏い、さらには左手には剣を握らせました。最高温度は霊力が消し飛ぶ。そんなを結構な時間維持してたな。つて、一晩も地底にいたのか。

「みんなは?」

「向こうの部屋。地霊殿に行く前にここで泊まってるよ。炎火が起きるのを待ってたよ。私も寂しかったんだから……。」

そうか……。妹紅には迷惑掛けたな……。俺は妹紅の頭を撫でる。

すると、妹紅は嬉しそうな顔をする。そして、俺の頭の上にはサラが、ポケットの中にスカーレットが飛んでくる。

「キュオ〜♪」

「やっぱりここが落ち着きます〜♪」

サラとスカーレットは今居る位置が1番落ち着くらしい。さて、待ってくれてるみんなのところ行きますか……。俺は布団から抜け出し、みんなのいる部屋に入る。

「みんな、迷惑かけたな……。って、なんか全員バテてる……。」

『うへえ〜……。』

「一体何があった？」

「え、炎火……。早く炎頼む……。」

「あつ！そうだった！」

俺はすっかり忘れていた。ここ地底は元灼熱地獄だったな。だから、地上と違い気温が高い……。らしい。妹紅も暑いっちゃ暑いけど、そこまで、サラとスカーレットはそもそも暑いという感覚を知らないように、俺は暑さに慣れすぎた。だから、気温が高くなつたとかが感じにくい。しかし、他のみんな……。特に吸血鬼の2人は熱に弱い。

「早速……。ってあれ……。？」

「え、炎火。どうしたんだぜ？」

「霊力が……。ない……。」

『え……。……。』

俺は勇儀との戦いで全部の霊力を使い切った。一晩休み、体力は回復したが、霊力が全然ない。このままじゃ、全員暑いままだ……。そうだ。俺は永琳先生から貰った薬を入れるポーチの中から一粒薬を取り出す。俺はそれを飲む。

「にっがっ!？」

驚く程苦かった。今まで、何度も薬を飲んだらしたことはあつたが、今までとは桁違いの苦さ。しかし、その効果はすぐ現れる。俺の霊力が驚くほどの速度で回復し、ついにはフルに回復する。俺が飲んだ薬は永琳先生特性の霊力回復薬。確かにすぐに効くし効力も凄いつて言つてたけど……。ここまでは……。俺はすぐに炎を作り出

し、全員に触れていく。

「や、やっとこの暑さから解放されたわ……。」

「こ、こんな暑さ二度と味わいたくないです……。」

一同は暑さに対する悪口を漏らしていく。はあ、あまり地底で気を失わないようにしなければ……。さて……。ここに長くあるわけにもいかないしな。

「勇儀、ありがとうな。こここの家に泊めてくれて。」

「いいよいいよ！私だって楽しませてもらったからな！」

俺達は勇儀の家を後にし、地霊殿に向かった。勇儀は、また遊びに来いと誘われた。じゃあ、また行かせてもらおうかな。そして、地霊殿の門の前に着いた。……。そうだ。俺は特殊な炎を作り、纏う。よし、準備完了だ。俺達はそれを開け、地霊殿の扉を開け、中に入る。

「結構広いな……。」

「そうね……。」

広さは……。永遠亭とか紅魔館と同じくらい？すると、奥から一人の少女が現れる。ピンク色の髪に水色の服と薄いピンクのスカート。そして、赤い目の開いた第3の目。地霊殿の主、古明地 さとりだ。

「私は地霊殿の主、古明地 さとりです。」

さとりは自己紹介をすると、第3の目で俺達を順番に見ていく。

「博麗の巫女に魔法使い、風祝の巫女と吸血鬼カップル、蓬莱人に……。え!？」

その第3の目が俺を見つめた瞬間。さとりは大きく驚く。俺はそれを見てニヤついてしまう。俺はさとりの能力を知っている。さとの能力は心を読む程度の能力。生まれついてから心を読むことができ、心を読むことが普通だった。だから、俺は読めなかったら動揺すると思ひ、干渉を拒む炎を作り、俺に纏った。この炎の欠点は、他人に纏えないこと。だから、俺一人だけ読むことが出来なかったのだ。

「こんな人が一緒にいるなんて……。危険です！帰っていただきますよ！」

さとりは弾幕を放ち始める。はあ、こんな出来事何回目だろう



……。今回は俺は戦闘しないでおう……。。

「霊夢！魔理沙！早苗！頼んだぞ！」

「俺達は炎火達と先に行っているから！」

「はあ!?もう!しょうがないわね……!!やるわよ!」

「ちようど戦いたかったところだぜ!負けるわけにはいかないんだぜ!」

「私もお二人に負けないよう頑張ります!奇跡よ!」

俺達は3人にさとりを任せ、先に進んでいった。この先には、ここよりもっと嫌な予感がするからな……!」

## コラボ編11 地底の八咫鳥

俺達は霊夢、魔理沙、早苗の3人にさとりを任せ、先に進んでいた。多分、ここに何かがあると思うんだけど……。一体どこなんだ？俺達はひたすら走り続けた。だが流石屋敷、デカイ。

「なあ炎火。」

「ん？なんだ？」

「お前、さつき何考えていたんだ？さとりの時……。」

「ああ、俺は特に何も考えてない。ただ、心を読むことが出来なかっただけだろうな。」

「ええ……。意味わかんない。」

そんなことを話し、走っていた。すると、1人の少女を見かける。黒と濃い緑のゴスロリの服に、赤い髪にツインテールで黒いリボン、そして、頭に猫耳のようなものが生えている。火車、火焰猫 燐だ。燐は俺達を見つけ次第、俺達の前に立ちふさがった。

「あんだ達！待ってくれ！」

「すまん、俺達はさつきとこの異変を解決させなきゃいけないんだ。」

「そのことなんだけど……！」

「え？どういうこと？」

「あんだ達！お空を止めておくれ！」

『え？』

俺達は、お燐の後ろを走っている。なんでも、友達のお空が力を急に増してきて暴走し始め、温泉が湧いていた理由は間欠泉で、お燐が地上にSOSを出していたみたいだ。地底でもこの暑さは異常らしい。お、俺にはわからない。そして、奥の奥、元灼熱地獄そのものだった場所、そこに俺達は入っていった。

「あははー！せかいせいふくだー！」

「おくーう！馬鹿なことやめなー！」

ひ、久し振りに暑いって感じた……。こここの部屋だけ異常に温度が

高いな！空中には、背中に大きな翼。白い服に胸には目玉のような赤い宝石があり、緑のスカート、左足には『分解の足』、右足には『融合の足』、そして右腕には、『第三の足』が付けられている。地獄鴉の霊鳥路 空だ。この子に、あの神2人は手を加えたのか……。

「え、炎火……。あ、暑くないか……？」

「チツ！やりたくないんだけど……！」

俺はみんなに纏わせている炎の温度を更に下げる。そして、俺を含む全員に纏わせる。さ、流星に霊力消費が激しいな……！

「妹紅！エスカルゴ！フラン！サラ！スカーレット！やるぞ!!」

『了解!!』

「キユオ〜!!」

「はいい!!」

「邪魔するな〜!!」

俺達は一斉に弾幕を放ち始める。お空は右腕の第三の足に力をチャージする。あの力……。核!!そして、お空はそれを発射する。俺達はそれを回避するが、着弾した場所は大きな爆発が起きる。絶対当たりたくないなあ……！

「クツ！炎火！雷が効かない！気温が高すぎる！」

「こつちの攻撃も向こうの攻撃で消えちゃうよ!?!」

打つ手全然ない……。!!すると、お空は再び大量の核弾を発射している。俺はなんとか能力ではね返すが……。疲れる。あまりこれは使いまくるのは無理だな。

「ああもう!!面倒臭い!!電気通らないなら超近距離だ!!雷鎧『サンダーアーマー』！」

すると、エスカルゴは攻撃が効かないことに痺れを切らし、鎧を纏って接近していく。ギリギリで核弾を躲し、接近して行く。俺達もそれを援護していく。

「今だ！『キユツ』としてバ……」

「来るなあああ!!」

エスカルゴの攻撃が、あと、もう少しのところまで、近距離から核弾を当てられ、鎧が消え、吹き飛ばされる。フランはエスカルゴを空中

でキャッチする。

「エスカルゴ！大丈夫？」

「あ、ああ………いつて………！」

！  
厄介すぎる……。あの守谷の神2人は後でどうしてやろうか……

「いけー！焰星『十凶星』!!」

お空は10個の大きな核弾を作り出し、発射してくる。俺達はそれをなんとか回避していく。が、その内の一つに妹紅が被弾してしまう。

「ぎゃあああああ!!」

妹紅は爆発で吹き飛ばされ、壁に激突する。俺はそれを見るとすぐさま妹紅に駆け寄る。

「妹紅！大丈夫か!?!妹紅!!」

「だ、だい………じょうぶ………まだ………戦える………!!」

打開策が全然ない………一か八か、あれに賭けてみるか!!

「みんな！5分時間を稼いでくれ！そしたら、なんとかなる!!」

『わかった!』

「サラ、スカーレット、妹紅の言うことを聞くんだぞ！」

「キュオー！」

「わかりました！」

俺はその場所で立ち止まり、炎を練り始める。この炎はシンプルだが難しい………なんとか早く作らないと………!!みんな、核弾を回避して、弾幕を放っていく。

「あの人、避けないなら撃つちやえ!!爆符『ペタフレア』!!」

お空は俺に狙いを定め、超巨大な弾を撃つてくる。やばい………!でも、ここで止めるとここまで時間を稼いでくれたみんなに悪い………!

「サラ！力を貸して！火龍『獄炎の鉤爪』！」

「キュオー………!!」

妹紅の掛け声に応じて、サラは爪を思いっきり振り、炎の鉤爪を発射し、俺の目の前で衝突し、爆発する。俺は吹き飛ばされそうになるが、なんとか耐える。ここでやられちゃダメだ！

「あと……もう少し……！」

「もー！邪魔しないでー！！核熱『核反応制御不能』！！」

お空は倒せないことにイライラし、スペルを発動し、大量の巨大な核弾を作り出す。あれに当たったらひとたまりもない。お空はそれを発射していく。回避すると、そこから中で大きな爆発が起こり、熱風が吹き荒れる。

「うわっ！」

「おつとつと……！」

その時、熱風で妹紅とフランが体制を崩す。あともう少し……！もう少し……！

「フラン！！」

「キュオー！！」

エスカルゴがフランを、サラが妹紅を守りに入る。そして、その方向に、大量の核弾が発射される。

『うわああああ！！』

その時、大きな爆発が起き……たと思われた。

「はあ……はあ……間に合った。お待たせ。反撃開始だ。」

俺は5分間練っていた炎。それは超低温、絶対零度並みの炎だ。炎の温度を限界まで上げるのはまだ簡単。しかし、低くするのはかなり大変だ。俺の今限界まで下げられる温度、-100度。これが俺の限界。俺が普通の赤ではなく、水色の炎を部屋に広げると、部屋は凍り、核弾は消え失せた。これが俺にできる対抗策。俺は全員に纏わせていた冷たい炎を、暖かい炎にする。超低温の炎を使いながら暖かい炎を纏わせるのは、大変だな。

「よーし！行くぞー！！雷速『クイック』！！」

エスカルゴは雷で急加速し、お空に接近する。お空は弾幕を発射するが、部屋の温度が下がって居るため、先程に比べて明らかに弱体化している。

「雷武器『雷斧』！！雷斧『雷撃一振』！！」

エスカルゴは手に出現させた斧でスペルで思いっきり振り下ろす。お空は耐えきれず、地面に叩き落される。

「うう……！さとり様の為にも……！」

すると、部屋の扉が思いつきり開いた。そして、2人の巫女、魔法使い、そして、お隣が入ってくる。

「助太刀するわ……って寒っ!!」

「こ、凍えるんだぜ……！」

「ああ、こめんごめん！」

俺は霊夢達に暖かい炎を纏わせる。すると、霊夢達は歯をガタガタ言わせていたが、それがなくなる。……そろそろ、体の方がやばい。霊力もあともう少し……。

「全員、スペルで一気に決めるぞ！」

「了解!!」

「負けるかー！核熱『核反応制御不能』！」

お空は再び先程と同じスペルを発動する。しかし、俺達も負けてられない。

「霊符『夢想封印』!!」

「恋符『マスタースパーク』!!」

「大奇跡『八坂の神風』!!」

「不滅『フェニックスの尾』!!」

「禁弾『スターボウブレイク』!!」

俺とエスカルゴ以外のみんながスペルで攻撃し、お空の弾幕をかき消し、ダメージを与えた。

「ううっ…………！」

『これで最後だ!!スペルカード発動!!』

俺とエスカルゴは力を合わせる。すると、水色の炎と雷が吹き荒れる。俺とエスカルゴの即席で、しかし超強力なスペル。

「獄氷炎&獄雷『吹き荒れる地獄の氷炎雷』!!!」

荒れ狂う炎と雷は、混ざり合い、重なり、互いを高め合い、お空に激突する。すると、お空は吹き飛び、気絶する。終わった。今までで一番大変だった。

「はあ……終わっ……た……？」

「！おい！炎火っ！」

俺は視界が暗くなりながら平衡感覚を失う。最後に見た光景は、仲間達が、俺に駆け寄ってくれた光景だった。

## コラボ編12 宴会の知らせ

「……………んん……………」

俺は目を覚ました。あれからどれぐらい寝てた？もしかして、また何ヶ月も寝てた？いや、それは流石にないな。体を動かそうとすると、何かが体を拘束してるのに気付いた。俺は布団の中を見てみる。すると、妹紅が俺の体を抱きしめて寝ていた。暖かいし、正直めっちゃ可愛いし嬉しいけど、仕事があるから起きなくちゃ……………」

「妹紅、妹紅、起きてくれ。」

「んん……………？あ、炎火。おはよう♪」

「妹紅。俺どれくらいの間寝てた？」

「一晩……………」

一晩か。でも、あの時は昼ぐらいだったから……………まあ、結構寝てたってことだな。そこまでやばいってわけではないけど。

「ごめんな？仕事あるからちよつと話してくれないか？」

「わかった……………」

妹紅は目を覚まし、目を擦る。寝起きには弱いらしい。俺は起きた瞬間、目がすつきりしてて、眠気もない。つまり、寝起きがいい。転生する前も、あんまり寝起きが悪いとかなかったなあ……………。俺は

「ふわあ……………炎火あ……………おはよう……………」

「キユオ……………」

「スカーレット、サラ、おはよう。」

スカーレットはサラも起きたようだ。スカーレットとサラ、かなり仲がいいみたいだな。サラはスカーレットを上に乗せることを全然拒んでない。だが、スカーレットは俺のポケットの中に、サラは俺の頭の上に乗る。俺は少し溜め息をつく。やっぱり、2人ともこの場所が定位置だな。俺は部屋を出て、エスカルゴ達の部屋に向かう。

「エスカルゴ、フランシー、朝だぞ〜！」

「んん……………エスカルゴオ……………」

「……………んん？ああ、炎火おはよう。つて、フラン……………。(汗)」

エスカルゴはフランにギュ〜つと抱きしめられていた。……………なん



か、同じような光景を、さっき自分の部屋で見たな……。

「さて、エスカルゴ。いつもの仕事だぞ。」

「わかったわかった。フラン、起きてくれ。仕事だぞ。」

「ふわあ……おはようエスカルゴ……。」

フランは欠伸をして体を伸ばす。さてと、いつも通り仕事をこなすか……。俺達は兎達を起こして、朝飯を作る。そして、兎達に呼びかけ、自分達で食事を運ぶ。この手順、すっかり慣れたな……。そして、朝ご飯を食べ終わる。そこから、俺達は兎達の仕事を監視しながら縁側で休んでいた。すると、永琳先生がこつちに珍しく来る。

「炎火、話があるからこつち来て。」

「あ、はい。わかりました。」

俺は永琳先生に言われて、その場を離れる。一体なんなんだろう？ 少しばかり移動し、永琳先生がいつもいる部屋に入る。

「それで、なんですか？」

「炎火、異変後は何があるかわかってる？」

「あ……。」

そうだ。俺達は異変を解決したんだ。そして、異変後には、あの地獄が待っている。それ自体には問題はなくて、準備でかなり死ぬる。

「そう。宴会よ。」

「はあ……それで、どれくらいの人数くるんですか？」

「ざっと300は来るわね。」

「はあ!？」

今まで、宴会は大体100人ぐらいの人数だった。それであの料理の量と労働量。それなのに、今回はざっと3倍。それに、これ以上増える可能性もある。これは……過労死の予感？ いや、死んでたまるか。準備に全力で手伝ってもらおう。怠惰巫女に絶対手伝わせてやる。

「宴会はいつですか？」

「来週の月曜日よ。」

「って！あと3日じゃないですか!!」

「まあ、頑張ってちようだいね。」

「ええ……。」

前回の時は1週間。それに対して今回はその二分の一以下……。ダメだ、殺しに来てやがる。っていうか、いつもそうだけどなんで最初に永琳先生に伝わるんでしょうね……。まあ、いいか。今はそれどころじゃない。

「じゃあ、エスカルゴ達に伝えて来ます。」

「ええ、あなた達は今回の宴会の主演だからね。」

また主役か……。もう、慣れた……。いけど、慣れない。これだけは慣れない。これもあの怠惰巫女のせいか。こき使つてやる。俺は部屋を出て、元いたエスカルゴ達のいる場所に行く。

「炎火、どんな話だった?」

「ああ、今から言う。全員ちゆうもーく!!」

俺がそう言うと、妹紅とフラン、そして兎達が俺の方向を見る。

「月曜日に宴会がある!日曜の夜から準備を開始する!人数は300人超えるぞ!多分……妖怪超多め!!」

『はあああああ!!』

兎達は一斉に反応する。今までの宴会、兎達もかなり働いており準備はかなりの労働らしい。

「エスカルゴ。」

「な、なんだ?」

「料理の手伝い頼むな♪」

「エエエエエ……。」

いつもエスカルゴには料理を手伝ってもらってるが、初日は死にかけてたな……。確か、30人分で。今回は300人……。うん、俺から見ても終わってる。

「だから、今日から休み!!準備に備えて休んどけよー!」

『はーい!』

兎達は仕事の道具などを片付け、休み始める。まあ、これくらいのこととしてはあげないと。さて、俺達も休もうか……。ではなく、俺はこの後、久し振りに人里の警備に行くことになっている。紫さんに頼まれたから、行かなきゃいけない。

「じゃあ、俺ちよつと人里の警備の仕事行ってくる。」

「え？じゃあ、俺も連れて行つて貰つてもいいか？」

「ああいいぞ。エスカルゴがいてくれると心強いな。まあ、そこまで妖怪達は強くないよ。」

「了解了解。じゃあ、行こうか。」

俺とエスカルゴは人里に向けて飛び始める。迷いの竹林を越えて数分後、俺達2人は人里に到着する。警備をする前に、人里の自警団本部に向かう。

「こんにちわ。」

「どちら様で……つて、炎火さんですか。」

「俺ともう1人、警備に当たるからよろしく。」

「わかりました。団長に言っておきますね。」

「ありがとうございます。」

俺はそんな会話をし、自警団本部を後にする。勝手にするわけにはいかないから、ちゃんと言わないといけないんだが、まあ、そこま怠惰巫女を相手にするよりかはマシだから、全然良い。

「じゃあ、やろうか。」

「わかった。俺、よく分からんから教えてくれよ。」

「OK。」

俺とエスカルゴは空を飛び、人里の周りを警備する。そこまで妖怪が現れるわけでもないし、現れたら、俺の炎かエスカルゴの雷で殺さず退治する。脅すのが目的。殺す理由はない。

### 数時間後

「そろそろ帰るか……？」

「そうだな。そろそろ夕食作らないと……。」

俺とエスカルゴは夕方に近づき、帰ろうとしていた。すると……二度と聞かないだろうと思っていた声が聞こえた。

キイイイイイーン!!

「うるさあああああ!？」

「誰だ数百年に一回とか言ったやつ……!!」

前は妹紅と聞いた高い金属音。しかし、今回は前より短く、音の高さが高く、音が大きかった。前は十数秒に対し、今回は数秒だった。音が止み、俺達は耳をふさぐのをやめた。

「一応、あっちの方向から聞こえたな。」

「え!?あの状況でわかるの!?!」

「ま、前の時もそうだったし……。」

俺とエスカルゴは音の聞こえた方角に飛んで行く。すると、そこには1人の女の子が横たわっていた。黒髪のロングで身長は……150後半ぐらいか……?多分人間だ。

「!!エスカルゴ!!さっきの音で妖怪が来るぞ!!」

「了解!!」

俺とエスカルゴはその場で臨戦態勢にはいる。そして、数十体の妖怪が全方向から来る。この子を守らないと……!」

「雷武器『雷斧』!!」

『炎剣『聖なる青い炎の剣』!!』

俺とエスカルゴは武器を作り出し、守りながら妖怪達を攻撃して行く。

数分後

「ふう……終わった……。」

「とりあえず、永遠亭に連れて行こうか……。」

俺が女の子を持ち上げ、永遠亭に向かう。

「(ん)……は……?」

女の子が目を覚ました。俺は晩御飯を作り終え、見守っていた。あれから……大体2時間ぐらいかな?

「俺は焰 炎火っていうんだ。君は?」

「わ、私は………清水……凜乃です……。」

俺はその日、また不思議なことに巻き込まれた。

## コラボ編13 騒がしい宴会

俺は、この凜乃って子から色々聞いた。と言っても、彼女は自分の名前と年齢しか知らないようだった。いわゆる記憶喪失だ。とりあえず聞いた限りでは、自分の名前と年齢に誕生日そして、一般的な知識ぐらいだった。まあ、聞いた限りだし、まだ何かあるのかは知らないけど……。基本的なことは覚えてるんだね。年齢は16らしい。とりあえず、凜乃は永遠亭で預かることになり、世話役は……。いつもの通り俺です。もうちよつと他人に任せてもらえませんか？俺世話役多いんですけど……。そして、あれから2日……。そう、日曜日の夜だ。

「全員準備開始ー！！！」

『りようかーい！！』

俺達は妖怪の山の来ている。今回の宴会は妖怪の山全体で行われるらしい。俺達は妖怪の山から直接手伝いの依頼が来たので、兎達と妖怪の山の天狗や河童で宴会の準備をしている。今回の宴会は朝から行われる。人数が人数だ。俺とエスカルゴ、そして咲夜は集まった。サラとスカーレットは妹紅に預けてある。

「2人とも……。やるぞ……。ー！」

「野菜炒めは任せろ……。ー！」

「今こそ料理の腕を見せる時だわ……。ー！」

「じゃあ、開始ー！！！」

俺達3人は宴会に向けて調理を開始した。エスカルゴが野菜炒め等の炒め物。俺と咲夜さんはそれ以外を作っていく。300人分……。しかも、幽々子さんも来る……。この作業……。かなり死ぬるぞ……。ー！！

### 一時間後

「これ終わりが見えない……。ー！！」

「挫けるなエスカルゴ！！これまだ50人分も終わってないぞ！！」

「え、炎火……。私も挫けそう……。ー」

「諦めるなあああああ!!」

俺達は調理を開始して1時間。お互い挫けそうな心を支え合い、調理を続けているが……。うん、正直終わるかわからない。て、手伝ってくれる人がいたら……。!

「さ、3人とも、手伝いましょうか?」

『よ、妖夢ー!!』

ここで妖夢参戦。手伝いに来たら俺達が料理で苦しんでいるのが見えて手伝ってくれるそう。これで4人!まだなんとかなる!

更に2時間後

「こ、こんなにつくるですか!?!」

「これで多分半分ぐらい……。妖夢の主人の食欲がやばいんだよ……。」

「な、なんかすみません……。」

「保温で体力が少しずつ削られる……。」

「頑張れ炎火ー!!」

俺は調理した料理を全て能力で殺菌しつつ保温している。しかし、この作業の長さで俺の霊力と体力は少しずつ、しかし確かに削られていた。正直、結構辛いです。

「あと1人いないのか……?」

「鈴仙は向こうで兎達の手伝いしてるし……。」

「あ、あの……。」

俺達が調理をしながら項垂れていると、後ろから声が聞こえる。この声……。妹紅でも、鈴仙でもない。最近新しく知った声だ。

「わ、私も一応料理できますよ……?」

「り、凜乃……!!」

ここで意外な人物、清水 凜乃が登場。2日程度世話をしてきたが、料理ができるとは知らなかった……。とはいえ、人手があるのは非常に嬉しい。

「じゃあ、手伝ってもらえるか?」

「はい、わかりました。」

そして、俺、エスカルゴ、咲夜、妖夢、凜乃の5人で残り半分ほど

の料理の調理を再開した。

更に二時間半後

『お、終わった……………。』

300人（1人例外あり）分の料理を俺達は作り終えた。全員、この多すぎる労働を終え、座り込んでいる。こんな大規模料理、一生味わいたくない……………。というより、俺は保温でかなり霊力削られてます。多分、最大量の半分くらい、またあの特性霊力回復薬でも飲もうかな……………。

「はあ……………さて、俺はここで保温してないといけないけど……………みんなはどうするの?」

「俺はフランと一緒にいようかな。ずっと料理してたし。」

「私は紅魔館に一旦帰るわ。許可が出ているとはいえ、長い間メイド長がいけないのはよくないもの。」

「私も白玉楼へ帰ります。」

「凜乃はどうする?」

「え、えつと……………炎火さんと一緒にいます。1人だと寂しいでしょう……………」

「ん……………それもそうだな。ありがとう凜乃。」

俺と凜乃以外の3人は目的の場所に行き、俺は凜乃と話しながら保温し、その場所で待機していた。そして、俺と凜乃はその場で朝まで待っていた。

朝

「すう……………すう……………」

「ね、寝てしまった……………」

凜乃は俺にもたれかかった状態で寝てしまった。まあ、一晩中起きていたんだろうし、料理も手伝ってもらったから疲れたんだろう……………。正直、俺もめっちゃ疲れた……………。しかし、この宴会で寝るわけにはいかない。主役って言われたし、ちゃんとしないと……………。まあ、実はと言うと、昼の間に寝ただけだな。1番フランとエスカル

ゴが寝つきが良かったな。吸血鬼だから、夜になるより昼に寝るのが種族としては正しいのかも。そして、宴会開始2時間前にまでなった……。

「凜乃、起きろ。」

「ん……ね、寝ちゃいましたか。おはようございます。」

「おはよう。凜乃、妹紅呼んで来てくれる?」

「はい、わかりました。」

凜乃は立ち上がり、妹紅を呼びに行く。凜乃はどうしてここに来たんだろう? 凜乃も外の世界で亡くなった……? まあ、わからないし、あまり深く考えなくていいか。数分後、凜乃は妹紅を連れて来た。

「炎火、どうしたの?」

「サラとスカーレットいる?」

「私とサラ兄はここにいますよ。」

俺が妹紅にそう聞くと、サラと、サラに乗ったスカーレットが妹紅の後ろから飛んでくる。

「この保温を任せてもいいか?」

「わかりました。サラ兄、頑張ろうね!」

「キヤオ〜♪」

俺は自分での保温を解除し、サラとスカーレットは保温を開始する。よし、これで俺も自由に行動できる。

「じゃあ、俺は兎達の様子でも見てくるかな……。」

「炎火〜私もついてく〜♪」

「了解、凜乃はどうする?」

「え、えつと……ついていってもいいですか?」

「俺はいいぞ。妹紅、いいか?」

「いいよ♪」

こうして、俺と妹紅と凜乃の3人で様子を見に行く。……正直、心配なんだよな、兎達……特に、てるとか……。まあ、鈴仙がいるからちゃんとしてくれるとは思うけど……。俺達は開始が近づいた宴会会場に向かった。妖怪の山全体だから、かなり広いな……。

「あ、炎火さん!」



「おお、鈴仙どこにいる?」

「向こうで働いてると思います。」

「ありがとうございます。」

俺は近くにいた兎から鈴仙がどこにいるか聞き、鈴仙のところに行く。すると、さっきの兎の言ったところで、鈴仙が働いていた。

「よう鈴仙。どうだ?」

「炎火……てる探して来て……。仕事せずに多分サボってる……。」

「あの兎めえ……。妹紅、凜乃、ちよつと待っててくれ。ちよつと痛めつけてくる。」

「いってらっしや〜い。」

俺は妹紅達と一旦別れると、全力でてるを探し始める。絶対に炎牢獄の刑だ……。!!俺は数分間、妖怪の山を探し回った。すると……。

「げっ!!見つかった!!」

「てるいいいい!!サボってんじゃねええ!!」

てるは俺を見るとすぐさま逃げ出し、俺はそれを追いかける。準備中だし迷惑はかけられない、すぐに捕まえないと……。数分間、俺はてるを追いかけていた。くそつ、流石兎すばしっこい……。すると、そこにエスカルゴとフランが通りかかる。

「エスカルゴ!てるを捕まえてくれ!」

「ええ?わ、わかった!雷速『クイック』!」

エスカルゴがスペルを発動し、高速で移動しててるを捕まえる。流石エスカルゴ、一瞬で捕まえてくれた。

「てる〜?」

「ヒイツ!」

「反省しろ!炎牢『獄炎牢獄』!!」

俺はてるを炎の牢獄に閉じ込める。効果は10分間。それぐらいの時間で大丈夫だろ。

「暑い暑い暑い暑い!!」

「それが解けたらちゃんとして仕事することだな。」

「お前中々えげつないことするな……。」

「いつも通り。」

「ええ……。」

俺とエスカルゴとフランは、妹紅と凜乃が待っている場所に行った。兎達の報告で、てるはちゃんと仕事をし始めたようだ。そして、俺達は宴会の準備を手伝った。

### 宴会開始30分前

宴会の準備が終わり、続々と人が集まってくる。人里の人は妖怪を恐れているようだが、なんかがあつたらみんながなんとかしてくれると思うから、大丈夫だろ。永遠亭のみんなも来たようだ。

「うう……緊張する……。」

「エスカルゴお前緊張しすぎだろ……。」

「なんで炎火は緊張しないんだよお……。」

「慣れた。」

「ええ……。」

異変解決組は集合していた。異変解決した人は主役だから、一旦集まっておかないといけないから面倒だ。

「乾杯の音頭はどうする？」

「いつも通り炎火でいいんじゃないかね？」

「おい魔理沙。」

「異論はないわ。」

「俺も任せる。」

「炎火頑張れー！」

「頑張つてねー！」

「結局こうなるのか……。」

俺は溜息をつく。俺じゃないといけない理由とかあるのか？まあ、どうせいつもやってるからとかいう理由だろうけどな……。そして、宴会開始5分前になった。

「そろそろかあ……。」

「炎火、私も楽しみですー！」

「キュオ〜♪」

「お前らはそこにいるのか……。」

「ここが1番安心できます。」

「キュオー！」

「はいはい……。」

そして、宴会開始時間だ。俺は宴会会場の中心に立っていた。

「今回も無事異変解決できました！そのことを祝して……かんぱーい!!!」

『かんぱーい!!!』

こうして、宴会は開始した。

「炎火、これからどうするんだ？」

「色んなところ回ってくるよ。エスカルゴもそうしたらどうだ？」

「そうだな、お互い楽しもうぜ！」

「おう！」

俺はエスカルゴと別れ、色んなところを回っていく。今回の会場は広いし、回るの大変そうだな……。俺が最初に寄ったのは……白玉楼の2人のところだ。

「妖夢、幽々子さん、楽しんでますか？」

「楽しんでますよ。幽々子さんが食べすぎですけど……。」

「この料理、前より美味しくなってるわ〜♪」

「そりやどうも。隣、いいか？」

「いいですよ。」

俺は妖夢と幽々子さんの隣に座る。さて、俺も食べるか……。炒め物はエスカルゴのか……。俺は一口食べる。流石エスカルゴ、炒め物は変に上手いな。他の料理は全然しないけど……。

「ねえ、この料理って誰が作ったの？」

「それは……多分、凧乃だと思います。」

「凧乃？」

「最近うちで保護した女の子です。」

「あの子、結構料理に慣れてましたよ。」

「へえ〜、その子によろしく言っといてくれる？」

「わかりました。じゃあ、俺は次のところに移動します。」

「はあ〜い。」

俺は妖夢と幽々子さんに見送ってもらいながら別の場所に移動を開始した。次は……おつ。俺はあるグループを見つけ、そこに駆け寄る。

「あつ！炎の人！」

「焰 炎火な。どうだ？楽しんでるか？」

俺は地霊殿のメンバーのグループに俺は寄った。異変の時は全然話が出来なかったから、ちよつと興味があつた。

「あの……あなた。」

「炎火だ。えつと……古明地 さとり……だっけ？」

「はい。なんであの時……私は心が読めなかったんですか？」

「ああ……俺はちよつと、内面的な干渉を防ぐ炎を纏ってたんだ。」

「……なるほど、本当みたいですね。すみません。勝手に危険な人物だと決めつけて襲い掛かってしまつて……。」

「いえ、もう気にしてませんよ。……ん？」

俺は何かの気配を感じて後ろをしてみる。しかし、特に変わった気配はなく、誰も後ろからは俺のことを見ていなかった。

「ねえお兄さん。」

「おわっ！」

俺が後ろを確認していると、左からいなかつたはずの1人の女の子が話しかけて来た。黄色を基本とした服に緑が基本のスカート、白い髪に、黒い帽子。そして、青い目を閉じた第三の目。地霊殿の主の妹、古明地 こいしだ。いつの間に俺の隣に……？

「こいし、炎火さんを困らせちゃダメですよ。」

「はあ〜い。ねえ、このお料理お兄さんが作ったの？」

「え？ああそうだけど……なんで知ってんの？」

「見てたから！」

まさか……あの調理の場所にいた？あんなカオスな空間見られてたとは……。まあ、見られてたとして恥ずかしいことはないし、大丈夫か。

「炎のおにーさん！」

「んあ？つて俺は炎火！名前ぐらい覚えろ！」

「うにゆ〜?え、炎火?」

「そう、炎火。」

融合の足、分解の足、第三の足、胸のペンダントを外したお空は、俺とそう話した。そういえば、取り外し可能なんだっけ……。とか、生うにゆ〜?初めて聞いた。地味に嬉しい。俺はその後、少しの間地霊殿組のみんなと宴会を楽しんだ。たまに鬼がやってきたりして、結構楽しかった。

「さて、俺はこれぐらいにさせて貰おうかな。」

「ええ〜?もう行つちやうの?」

「先日はありがとうございました。」

「気にしなくていいよ。それより、俺にとっては仲良くしてくれることの方が嬉しいよ。」

俺はそう言い、その場を後にした。さて……次はどこに……って、なんか電撃が見えたな……。エスカルゴが何かやってるのか?俺は電撃が見えた方に行ってみる。すると、そこでは人や妖怪が集まっていた。……どうやら、エスカルゴと幽香さんが戦っているようだ。本当に戦闘好きだなあ……。

「雷神『Thunder☆Fall』!!」

「元祖『マスタースパーク』!」

すると、エスカルゴと幽香さんのスペルがぶつかり合い、衝撃が周りに伝わる。俺はそれをいち早くそれを察知し、炎の壁でそれを消滅させて、観客を守る。

「隙ありよ。元祖『マスタースパーク』。」

「しまっ……!」

いつの間にか移動していた幽香さんの極太光線がエスカルゴに命中、勝負は終わったようだ。

「エスカルゴ、大丈夫か?」

「……あー!悔しい!!」

俺はエスカルゴに治癒の炎をかける。吸血鬼だし、早く回復するだろ。すると、フランが駆け寄ってくる。って2人!?そ、そうか、こっちのフランとエスカルゴの方のフランで2人いるもんな……って、判

別つかない!!

「スカーレット、どっちが永遠亭にいる方かわかる?」

俺がスカーレットに聞くと、スカーレットはぷはあつとポケットから顔を出す。

「えつと……左の人です!」

「ありがとうな、スカーレット。」

「えへへ。どういたしまして♪」

スカーレットは嬉しそうな顔をする。なんか、無垢だな……。

「おい炎火く♪」

「うわっ、萃香!? って、お前どんだけ酒飲んだんだ!」

「えく? そこまでだぞく?」

「絶対嘘だ……。」

「それより、こつちで楽しもうよく♪」

「うわあ引っ張るなー!」

俺は突然現れた萃香に引っ張られて一つのグループに連れてこられた。メンバーは……萃香、紫さん、幽香さん、霊夢、魔理沙、勇儀……凛乃!?……不協和音感有り余る。凛乃、きつと無理矢理連れてこられてんだろうなあ……。

「やあ炎火。久しぶり。」

「幽香さんどうも。さつき、エスカルゴと戦ってたみたいですけど、どうでしたか?」

「んく……前の炎火より少し強いくらい?」

「ええ……でも、俺だって成長してますよ。」

「じゃあ、やる?」

「やる気ありません。勝てる気がしません。」

「あらそう?」

本当に、今戦って勝てる気はしない。確かに強くはなったかもしれないけど、力の差は大きかったらなあ……。

「でも、私には勝ったじゃないか。」

『え?』

勇儀さんのその発言に、萃香と紫さんと幽香さんが同時に驚く。あ

れ？聞いてなかったの？霊夢と魔理沙は流石に知ってるよな。だって俺気絶してたもん。

「だ、だってあれはちよつとりミッターが外れてたというなんなんかいかな……。」

「確かにリミッター外れてたわね。クレーターがとんでもなかったもの。」

「ああ、本当に凄かったぜ。」

「でも、あの勇儀に勝つなんてやるじゃん！」

「あ、ありがとう……。」

「なんだか、褒められるのはこそばゆい。っていうか、そんな情報が知れたら……。」

「なら、私と戦っても問題ないな！やるぞ！」

「ええ……？」

というわけで、俺と幽香は戦うことになった。観客は既に集まっている。そして、観客に被害がいかないよう、紫と霊夢が结界を張っている。おつ、エスカルゴ回復したのか。

「じゃあ、やろうか。」

「はあ……やるしかない！全力で行くぞ！！獄炎剣『インフェルノ・ドラゴン』！！」

俺は右手に最高温度の炎で作った剣を作る。右手なら、火傷の心配はないな。なんせ右手自体が炎だし。幽香さんは高密度の弾幕を放ってくる。俺はそれを回避したり、剣で壊したりする。剣に触れた弾幕は一瞬で消滅する。

「幻想『花鳥風月、嘯風弄月』！」

「更に高密度に……！！だったら！解除！！スペルカード発動！炎符『ファイアーマシンガン』！！」

幽香さんはスペルを発動するが、俺もスペルを発動し、弾幕を相殺していく。そして、相殺できなかつた分はちゃんと回避する。けど、このままじゃ決着がつかない……！！俺はスペルを中央に集中させて、抜け道を作る。あと……少し……。」

「今だ！！獄熱戦『ライトニング・ノア』！！」

俺は腕を組み、光線を放つ。今撃てる遠距離最高威力の技だ。

「元祖『マスターズパーク』!!」

幽香さんも極太光線を放つ。そして、俺の光線と衝突。しばらく拮抗し、そして……爆発した。俺も幽香さんは吹き飛ばされ、結界にヒビが入ったようだが、割れはしなかったようだ。

「はあ……はあ……ああく……!」

俺は地面に大の字で転がる。幽香さんも大の字で倒れていた。これはつまり……引き分けか……。うーん。中々自身があったが、まだ引き分けか……。

『炎火ー!!』

みんなが俺に近づいてくる。俺はみんなの助けを受け、立ち上がる。

「幽香、大丈夫?」

「……ふふ、強くなったものね……。」

幽香さんは紫さんの助けを受けて立ち上がったようだ。周りからは歓声が聞こえる。どうやら、楽しめてもらえたようだだった。

「すう……みんなー!!もつと盛り上がっていいこー!!」

『おおー!!』

こうして、楽しい宴会の時間はどんどん過ぎていった。そして、楽しい宴会は、日曜日の深夜……日を跨ぐギリギリで終了した。そして、俺の思い出がまた一つ増えた……。



## コラボ編最終話 出会いあれば別れあり

「……………」

俺は目を覚まし、目を擦る。今日は宴会から約半月だ。この半月の間もエスカルゴ達と過ごしていて、とても楽しかった。仕事も手伝わしてもらって、とても楽しかった。しかし、エスカルゴ達には本来の家族がいる。今日は、エスカルゴ達がここに来てから、一ヶ月。そう、今日はついにエスカルゴ達が帰る日だ。俺は起き上がり、妹紅を起す。

「妹紅、起きてくれ。朝だぞ。」

「むにゃ……………んん……………」

妹紅は体を起こし、目を擦って俺を見て、そして首をかしげる。まだ寝ぼけているらしい。やっぱり可愛いな、妹紅は。

「今日はエスカルゴ達が帰ってしまう日だから、ちゃんとするって昨日言ってたじゃないか。」

「ああ……………そうだった……………」

妹紅は眠そうにして欠伸をする。サラとスカーレットは……………。

『……………』

まだ寝ているようだ。起こしてあげないとな……………。

「サラ、スカーレット、朝だぞ。」

「キユオ……………」

「炎火、おはようございます……………」

サラは体を震わせて翼を伸ばし、スカーレットも体を伸ばす。ここにいるやつはみんな寝起きがいいな。自慢ではないが、俺も一応寝起きの良さはいいと思うぞ。いつもの通りサラは俺の頭に、スカーレットは俺の服のポケットに入る。

「さて……………あいつらを起こしてやらないとな。」

俺は立ち上がって扉を開けて部屋を出て、エスカルゴ達がいる部屋の前に立つ。……………こうやって起こすのも、最後なんだな。そして、俺はエスカルゴ達がいる部屋に入る。エスカルゴとフランは、仲良く手を繋いで寝ていた。

「エスカルゴ、フラン。朝だから起きろ。」

「むにやあ……………」

「ふわあ……………炎火、おはよう……………」

エスカルゴとフランは手を繋いだまま起きる。本当に最後まで仲がいいな、この2人は……………」

「最後の仕事だけど、今まで通り、ちゃんとやるぞ！」

俺は張り切って声を出した。正直、この時俺は、無理をして元気に振る舞おうと思っていた。エスカルゴ達に暗くなって欲しくないからな。

「ああ、そうだな。」

そして、俺達はいつもの通り、兎達を起こし、朝ご飯を作り、そして配り、自分達も朝ご飯を食べ、そして食べ終わる。普段ならここからは殆ど自由。だが、今回は違う。俺達全員は庭に出る。そこには、既に様々なメンバーが集まっていた。永遠亭のみんなや、霊夢に魔理沙、妖怪の山で俺達と戦ったやつに、地底で俺達と闘った奴ら。そして、萃香、幽香さん、そして紫。みんなが集まっていた。

「紫、準備は？」

「昨日、徹夜で頑張ったわ。いつでも返すことができるわよ。」

「ありがとう。」

そして、色々なメンバーがエスカルゴ達に別れの言葉を伝えて行く。なんやかんやで、エスカルゴには世話になったからな。そして、最後に俺と妹紅に出番が回ってくる。

「……………いよいよお別れだな。」

「そうだな、炎火。……………トラブルから始まったことだけど、楽しかったぜ。」

「ああ、俺もだぜ。」

「私も楽しかったよ……………！炎火……………！妹紅……………！」

フランは少し涙目になってる。妹紅も。しかし、俺は泣かない。泣かないと決心した。

「それじゃ……………」

「ちよつと待ってくれ。」

『?』

俺のからの制止にエスカルゴとフランは首をかしげる。俺はズボンのポケットから、3つのペンダントを取り出す。ペンダントは炎の形を象っている。

「これは、俺と妹紅から、お前達、フラン、レミリア、エスカルゴの吸血鬼にプレゼントだ。ちよつと……特殊な効果付きでな……。日除けの効果付きだ。これが、俺達2人の感謝の気持ちだ。」

「!!……ありがとう、炎火、妹紅。」

「ありがとう!!」

「じゃあ……俺達は行くよ。」

「……ああ!元気でな!」

「元気で過ごしてね!」

俺達はエスカルゴとフランに別れの挨拶を告げると、紫はスキマを展開する。……あれが、エスカルゴ達の世界に繋がってるらしい。

「じゃあな!!ここでの生活楽しかったぜ!!」

「ありがとうねー!!」

そう言い、エスカルゴ達はスキマの中に入っていき、姿を消した……。そして、スキマは閉じられた。

「……さて!仕事に戻りますか!」

こうして、俺の特別な一ヶ月の日常は、幕を閉じた。そして、再び俺のいつもの日常の歯車が動き出した。

## コラボ編 再開の兆し

「ふっ！はっ！」

「ははっ！炎火さん中々やりますね！その格闘術やりにくいです！」  
「思いつきで3日前からやり始めたんだけど……なっ！」

エスカルゴとフランが元の幻想郷に帰ってから3日。俺は紅魔館の門の前で、美鈴と能力を使用せず、自分で作った、つまり我流の武術で美鈴と戦っていた。まあ、武術を極めた美鈴に勝てるわけもなく、ずつと負けてばかり、しかし、自分の武術が定まってきたような気がする。俺の武術は一言で言うと、『火龍』。サラの動きを見ていたらアイデアが思いつき、やってみようと思っていたわけだ。

「火龍の尾・薙ぎ!!」

俺は思いつきり美鈴に横蹴りを入れる。しかし、その攻撃は美鈴の腕に防がれる。が、本命はこっちじゃない。

「火龍の息吹!!」

俺は蹴りを入れた体制のまま、両腕で思いつきりパンチを繰り出す。入った！俺はそう思った時、美鈴は簡単にもう片方の腕で受け止める。

「惜しいところですが、これで終わりです!!」

美鈴のパンチは俺の腹に思いつきり入る。そして、俺は後ろに吹っ飛ばされた。ああ……めっちゃ痛い……。吐くかと思った……。重すぎだろ美鈴のパンチ……。

「だ、大丈夫ですか？」

美鈴は吹っ飛ばされた俺の方に近づいてくる。どうやら、美鈴はやりすぎてしまったようだ。まあ、こんな程度でへこたれてちゃ、異変解決なんて無理なんだがな……。

「大丈夫大丈夫……つつつ……。」

俺は痛みをこらえながら立ち上がる。……そろそろ、日が暮れてきたな……。そろそろ帰って、兎達の晩御飯作ってやらないとな……。

「美鈴、そろそろ帰るよ。ありがとうな。」

「そうですか！お気をつけて！」

俺は美鈴と別れて、永遠亭に帰ってきた。うーん……もつと強くなる方法……炎じゃなくて、霊力纏うのって、簡単なのだろうか？また霊夢辺りに聞いてみようかな。

数分後

「ただいま。」

「おかえり炎火。早く飯作れ。」

「黙れイタズラ兔。さっさと作るから待ってろ。」

俺は話しかけてきたるに適当に返事をし、晩御飯を作り始める。うーん……やっぱ、エスカルゴがいてくれた方が良かったなあ……。まあ、頑張るしかないか。俺は晩ご飯を作り終え、全員に配って自分も食べた。そして、美鈴との鍛錬で疲れたのか、すぐに寝てしまった。「ん……あいたっ！」

俺は起き上がり、体を伸ばす。すると、体の関節やら筋肉やらがやたら痛い。……どうやら、昨日の美鈴とのやつが、まだ残ってるみたいだ。あく……今日妖怪退治の依頼があるのに……。ま、そこまで支障にはならないでしょ。なるべく能力で倒せばいいしね。

「さて、起こしに行きますか。」

俺は部屋から出て、兎達が眠っているであろう部屋に向かう。

「さて……と……！」

俺は能力を使って部屋を暑くする。大体、部屋の中の気温40度ぐらいで全員起きたようなので、俺は解除し、部屋を元の温度に戻す。そういえば、エスカルゴが隣にいるときにこれやったら、「お前鬼畜すぎるだろ……。」って言われたな。あの時60度ぐらいまで一気に上げたからなあ……。

『なにするんですか!!』

「あはは、おはよう。全員さっさと着替えろよ。」

俺は兎達にそう伝え、部屋を出る。そして、次はキッチンに向かう。そして、部屋の中に入り、エプロンをつける。さて……調理開始だ……。

数十分後

俺は料理を作り終え、全員に配り終えた。さて、俺も自分の部屋で食べるとするか……。俺は料理を持って、自分の部屋に戻っていった。

「あれ？なんだこれ？」

俺は自分の部屋に戻ると、ふすまに手紙が挟んであった。永琳先生とか、鈴仙が挟んだんだろうか？俺は廊下に料理を置き、手紙を読んでみる。

『焰 炎火へ』

久しぶりだな！と言っても、2日や3日の話だが。

1ヶ月、本当に世話になったな。

急ではあるのだが、俺らの帰還を祝う宴会を行うから、是非炎火と妹紅にも来て欲しい。

(ちなみに、こっちの紫さんの方が力が強くて、繋げるのに1ヶ月もかからなかったぜ。)

来たる満月の日……つまり今夜だな。

午後6:00に、永遠亭玄関前に迎えに行く。

炎火のことだから、仕事はとつくに終わってるよな？

あと、この紙にはある仕掛けがある。

その仕掛けが何か……お前にはわかるはずだ。

雷速の吸血鬼 エスカルゴ・スカーレット』

……なるほど、エスカルゴからだったか、6:00か……妖怪退治の時間と、結構ギリギリだが、まあ、なんとかなるでしょう。仕事……まあ、永遠亭の仕事は終わったな。これは妖怪退治はボランティアだし、まあ、当たってるな。さて、仕掛けか……。俺は紙をじっくりと観察する。……うん、大体わかった。俺は能力で炎を出し、紙を炙る。いわゆる炙り出してやっだ。俺が紙を炙ると、予想通り文字が出てくる。

『追伸』

これ読めてるってことは、上手く炙れたってことだな。流石炎火だ

ぜ。

早速本題に入るぜ。

炎火。俺と戦ってくれ。

この3日で、俺はまた強くなった。

本気では無かったらしいが、霊夢のこと倒したぜ。

別れ際の、幽香さんのアドバイスのおかげだ。

あと、お前からたくさん学ばせてもらった。

そこで、自己流にアレンジを施した。

もちろん、妹紅やフランを巻き込む訳じゃない。

俺とお前、男同士サシの勝負をしよう。』

……なるほど。つまり、俺とエスカルゴの2人で決闘か……。そう  
いえば、エスカルゴと戦ったのって最初の実力調べの時だけだな  
……。エスカルゴ、強くなったのか。っていうか幽香さんアドバイス  
してたのか。……さて、そういうことなら、とりあえず妖怪退治まで  
部屋で休んでるか……。

## コラボ編 再開の前に……

俺はエスカルゴに呼ばれたことを妹紅に伝えた。勿論妹紅もついていくことになり、準備をしているそうだ。現在の時間は4:00。後2時間後にエスカルゴが来るんだが……俺にはやらなきゃいけないことがある。それは、妖怪退治の仕事。さっさと終わらせたいが、今日は少々面倒。いつもは人里近くに迷い込んでくる妖怪を退治する程度だったが、今回はグループの退治。どうやら、妖怪のグループに商人が襲われたり、子供がさらわれたりしているらしい。目撃者によると、他の妖怪と比べて強い妖怪が一体いるらしい。多分、用心棒的な奴なのかな？そんなわけで、人里に迷惑をかけている妖怪のグループの退治。それと、まだ子供はさらわれたままらしいので、子供達の救出。エスカルゴと決闘する約束があるから、なるべく力を消費したくないんだが……。俺は永遠亭を出る。そして、まず人里に寄る。

「あつ、炎火さん。妖怪退治ですか？よろしくお願いしますね。」

「うん。任せといてくれ。じゃあサラ、スカーレット、行こうか。」

「はい。」

「キユオ〜！」

俺は飛び上がり、森の方へ行く。妖怪グループは、森の中に住んでいる、という情報は知っているが、それ以上はわからないらしい。そこで、スカーレットの出番。

「スカーレット、お願い。」

「はい！………あつちですー！」

スカーレットの能力、『火の声を聞く程度の能力』で場所を調べます。スカーレットのこの能力は、火の声を聞く能力。それは、ただの火ではなく、命の火が宿る者の声を聞くこともできる。つまり、自然の声が聞こえるのだ。妖精らしい能力だな。俺はスカーレットの誘導に従い、走っていく。

「アア？誰だ前。」

「通りすがりの炎使いだ。覚えておけ。」



俺は妖怪達のグループを発見する。さて、さっさと片付けたいところだが……。予想以上に数が多いな。霊力消費は抑えたいんだが……。

「曲者だ!!倒せ倒せ!!」

「スカレット!サラと協力して倒しておいてくれ!」

「はい!サラ兄!頑張ろっか!」

「キユオー!」

俺はサラとスカレットと離れ、妖怪達を倒していく。妖怪達は基本的に武器を持ってかかってくる。俺はそれを間一髪で避けながら、炎を両手に殴って倒す。

「ウオオオ!!」

後ろから一体が斬りかかってくる。それを察した俺は右足に炎を纏って、炎の噴射で速度を上げて咄嗟に後ろを蹴る。妖怪は蹴りによって吹き飛ぶ。俺は足の炎を解除し、再び躲しながら妖怪達を殴り倒していく。……。しかし、数が多い。規模でかいのがこんな森の中にいたのか。まあ、人里の人は森にあんまり入らないから発見されないのも納得な気がするが……。

「炎符『ファイアーマシンガン』!」

俺は炎でマシンガンを作り出し、一斉に発射。威力を落として弾数を多くする。数ある妖怪達は避けることもできず、どんどん相手を倒していく。

「隙アリー!」

「!?おわっ!」

後ろからの接近に俺は気付かず、後ろから攻撃される。それを炎の噴射で無理矢理体を飛ばし、回避する。しかし、回避に意識を集中したため、スペルは中断されてしまう。

「……出てきたか。」

俺の目の前に出てきた妖怪は、他の妖怪よりも一回りは大きい。多分、これが妖怪達の用心棒ポジションの妖怪か。悪いが、倒させてもらおう。

「炎剣『聖なる青い炎の剣』!!」

俺は炎を出現させ、斬りかかる。妖怪は拳を振り下ろす。俺はそれをサイドステップで躲し、剣に斬りかかる一瞬に多くの霊力を注いで斬る。すると、用心棒妖怪は地面に倒れる。体が大きいせいとか、地面に少しの揺れが生じる。さて、後は残りの妖怪か……時間も無くなるし、あまり使いたくはないけど、使うか……。

「サラ！行くぞ！火龍『本来顕現』！」

「グオオオオオオオオ！」

俺はサラを火龍本来の姿にする。俺はサラの背中に乗る。スカレットは……サラの頭の上に乗っているようだ。サラは爪で引つ掻いたり、炎を吐いたり、尻尾で薙ぎ払ったりする。体が大きいので、一回の攻撃でたくさん妖怪達が倒されていく。そして数分後、全ての妖怪を倒した。これで、しばらくは悪さをしないだろう。

「サラ、帰ろうか。」

「グオオオオオオオオ！」

サラは俺を乗せたまま飛んでいく。俺が飛ぶより、この姿のサラの方が断然速い。

「ただいま。」

永遠亭の前にサラは着陸し、俺は背中から降りる。すると、サラが縮み、元の姿に戻ると同時に、俺の体に疲労がどつとのしかかってくる。……これ、エスカルゴとの戦いの時までには治るかな？今の時間は……げっ、5時20分。永琳先生に薬もらおうかな……。俺は消費した霊力を回復させるために永琳先生の仕事場に歩いていく。その途中で、サラとスカレットはいつもの定位置に着く。なんやかんやで、この光景にも慣れたな。

「永琳先生。」

「ん？……ああ、炎火君か。妖怪退治の仕事は終わったのか？」

「はい。それで……霊力回復薬もらえます？消費してしまつて……。」

「……ごめんだけど、ちょうど今切れちゃつてるのよ。今日中は……ちよつと無理よ。」

「そ、そうですか……。ありがとうございます！」

「いいえ。私こそ役に立たなくてごめんなさいね。」

「大丈夫です。では。」

俺は永琳先生の仕事場を後にする。うーん……。しかし、靈力がへつたままつていうのは手痛い……。仕方ない。頑張るしかないか。俺は永遠亭を出て、歩いて竹林の中に入って行く。妹紅を迎えに行かなきゃならないからな。

数分後

コンコンコン

「妹紅。迎えにきたぞ。」

「あつ！炎火！待っててね！」

俺は妹紅の家の前で、妹紅の言う通り待つ。女の子だから、準備に時間がかかるのだろうか？まあ、別にまだ時間はあるし大丈夫か。

「おまたせ〜♪」

「おうつ。大丈夫か？」

「うんっ！大丈夫！」

「じゃあ、永遠亭に行くぞ。」

「は〜い。」

俺と妹紅は手を繋いで永遠亭まで歩いていく。迷いの竹林はかなり複雑だが、慣れたし、妹紅もいるから大丈夫。

数分後

「着いたな。」

「どうする？時間まで時間あるよ？」

「じゃあ、ここで待ってるか。」

「うん！」

そして、俺達はエスカルゴを永遠亭の前で待つことにした……。

## コラボ編 向こうの宴会

6時55分。俺達（3人十一匹）は、エスカルゴのことを待っていた。すると、目の前にスキマが現れる。

「!?おま……ホントにエスカルゴなのか!？」

「あ!エスカルゴだ!」

「おう!!俺だ!!」

目の前にエスカルゴ……と怠惰巫女!?くそう!何故ここにあの怠惰巫女が……!……あ、この霊夢はこっちの霊夢とは別の霊夢なんだよな。失敬失敬。……本当に向かうの霊夢は怠惰じゃないよな?」

「久しぶりだな!」

「キユオ〜♪」

サラは嬉しそうに鳴く。サラ、中々にエスカルゴとフランとも仲よかったからな。嬉しいのも納得。あれ?スカーレットは……あらま、寝ちゃってる。そういえば、スカーレットは声を聞くと眠くなるんだっけ……。まあ、頑張ってくれたしよしとしよう。

「まあ、2、3日程度だがな!さ、スキマが閉じるから、急いで中に入つて!」

「ああ!」

「先行ってるね!」

「おう!」

俺達はエスカルゴに誘導されて、スキマの中に入る。あつ、紫さんだ。向こうの性格ゆかりんとは違うことを期待させていただこう。

「あなたが焰 炎火ね。よろしく。じゃあ、私はやることはやったから帰るわね。」

「あつ、はい。」

そういうと、紫さんは別のスキマで何処かへ行ってしまった。すると、エスカルゴと霊夢もこっちに来る。

「おー……やっぱ、こっちの博麗神社も変わらないな。」

「そうだね。」

「来たぜく。」

「おう。」

「おつ、エスカルゴも来たか。」

俺はスキマを抜けた先、博麗神社の境内を見渡す。やっぱり、幻想郷が違っても、博麗神社は一緒なんだな。すると、霊夢がこちらに近づいてくる。

「初めまして。博麗 霊夢よ、よろしく。」

「焰 炎火だ。よろしく。」

俺は霊夢と自己紹介をする。こっちの霊夢とは初対面だからな。そういえば、俺がこっちの霊夢と初めて会った時は、異変解決だなあ……。懐かしい。右腕がこうなったのもあの頃ですね。さて、自己紹介も終わったから行こうかな。

「じゃ、行くか！」

「おく！」

「うん！」

エスカルゴの掛け声に、俺と妹紅は返事する。おつ、サラウトウトしてるな。そつとしておいてやろう。

「私少し遅れるわ。」

「オツケ。」

あ、霊夢遅れるんだね。こっちの怠惰巫女と違い忙しいのか？こっちの霊夢はどの時間帯で行ってもお茶を飲みながら煎餅かじってるからな。お前それ以外になにしてるんだって言いたくなるね。あ、たまに新聞読んでるな。親父かあいつは。俺とエスカルゴと妹紅は紅魔館に向けて飛び立つ。霊力で飛ぶか。炎の噴射で飛ぶと早いけど音が発生するからな。いつか地面にダイブして攻撃とかできるかな？

「炎火と妹紅から貰ったペンダント、あれずつとつけてるぜ！ほら。」

そう言つてエスカルゴは俺と妹紅にペンダントを見せてくる。そういうえば、確かにエスカルゴに何も日光によるダメージは見られないな。

「そつかー。ここまで喜ばれると思ってなかったな。……とところで、あの炙り文字……。」

「!!……気付いたか。」

「もちろん!」

「まあ、書いてあった通りだ。このあと……宴会の会場で戦って欲しい。」

「ああ! いいぜ!」

「よっしゃ!」

「あと、霊夢倒したってホントか?」

「まあな。本気じゃなかったらしいけど……。」

「それでも凄いぞ?」

これは本心。いや、俺霊夢と戦ったことないけどさ……。でも、幻想郷最強と言われるんだし、まあ、かなり強いと思うけどな。……また霊夢と戦ってみようかな。修行の一環として。

「そうかなあ……。本気の霊夢倒してこそ……だと思っただけだな……。ま、幽香さんのおかげだよ。ホントあの人すげえ……。」

「それを実行出来たエスカルゴもすげえと思うけど。」

確かに幽香さんと戦ってたな。確かマスパ食らって負けてたな。それで、アドバイスもらってたな。ってかそれでかい。どんだけ習得早いんだ。

「そうかなあ……。おっ、館、見えてきたぜ。」

「あ、ホント……って、なんだあのクレーター!?!」

「……気付いた?」

「〃気付いた?〃じゃなくて! あんなの気付くに決まってるだろ!」

霧の湖の方に指を指した。そこには大きなクレーター。……隠そうとしたのかあ……。あれは無理だろ……。デカすぎるわ。何をどうしたらあんなのが出来るんだよ!……。あ……。多分最大出力で俺が攻撃したらクレーターじゃなくて水が蒸発するかも……。俺の方が大惨事だな。間違ってもクレーター作ろうとするのはやめておこうか。

「だよなあ。」

「湖と繋がってるし……。なんであんなったんだ?」  
「力を解放したらああなった。」

「解放……？誰が？」

「俺が。」

「エスカルゴが……？」

「ああ。」

え？俺死ぬの？いや薄々気付いていたけどさ。やっぱお前か。つていうか霧の湖増えたじゃん。ラッキー。あれ？俺今日戦うんだよな？

「ま、まさか……。その力を俺にぶつける訳じゃないだろうな？」

「まさか！それは無いぜ。あんなんぶつけたら、何時間も眠っちゃうからな。……今は力が満タンだから、もつと眠ることになるかも。」

あのね、そんなん食らったら確定演出で俺は御陀仏だ。むしろ骨すら残らん。吸血鬼だと何時間も眠るってことか？つていうはお前耐電性能あるじゃねえか。俺お前の電撃全然食らってないんですけど。並の人間並なんですけど。炎に強いのは能力と慣れですから。

「うああ……。」

「戦うのが楽しみだ。」

「お、俺もだ。」

……あれ？俺の命日トウデイ？いや駄目だ！生きるぞ俺は!!畜生。なんで今日に限ってフルな状態じゃないんだよ……。許すまじ妖怪グループ。

俺達は紅魔館の中に入る。ゲストらしいから、バレずに頑張ってる中に入りました。初めて知った紅魔館の裏玄関。流石スカーレットの名を持つ吸血鬼。

「炎火、妹紅。2人はゲストとして呼んでるから、少し待っててくれ。」  
『わかった。』

そうエスカルゴは俺達と別れる。……うん。もう緊張なんてしないよ。いつも通り気楽に行こうぜ？いやもう前に立つのに慣れるのは正直嬉しくない気がするが……。

「炎火。」

「ん？」

「楽しもうね！」

「……そうだな！」

『カンパーイー!!!』

外からそう可愛らしく、大きい声。……レミアアの声か。あんな大きな声出せるのか、レミアアって。なんかお嬢様としてのレミアアが少し崩れたような。大丈夫。一流の大工が修復してくれます。すると、エスカルゴが俺達の方にやってくる。

「お待たせ。行くぜ！」

「おう！」

「うん！」

俺はある部屋に案内される。ほうほう、ここが宴会部屋か。そういえば俺がフランとすれ違った時驚いてたな……。事前に聞いていたら驚かないはずだが……。まさか、伝えてないっ!? 流石に恋人のフランぐらいには伝えとけよ。

「俺とフランが異世界に飛ばされていたときに、世話になった人に来てもらいました!!!」

エスカルゴ、叫ぶなあ……。絶対喉とか痛いだろ。まあ、頑張ってくれてるのは嬉しいな。

「炎火、頼む。」

「お、俺!？」

「ほら……自己紹介みたいな……ね☆」

「わ、わかった。」

ね☆じゃねえよ。急だわ。性格も雷になったのか? いつ現れるかわからないってか? っていうか俺はこの世界の宴会でも俺がこうやって前に立たなきゃいけないんだな。

「別の幻想郷から来ました、焰 炎火です! 本日はお招きいただき、ありがとうございます!」

俺は前から離れ、エスカルゴとチェンジ。



「……こんな感じ?」

「おう!それじゃ、改めて……カンパニー!!!」

『カンパニー!!!』

こうしてエスカルゴが乾杯の音頭を取り、宴会が開始された。俺は妹紅と一緒に、どうしようか迷っていたら、こっちのレミリアが俺の方に近づいて来た。あ、そういえばレミリアの分も渡してたな、ペンダント。

「初めまして。紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ。よろしくね。」  
「焰 炎火だ。よろしく。」

俺はこっちのレミリアと挨拶を交わす。最初は苦手意識あったなあ……腹に穴開けられて、腕無くされたからなあ……。まあ、今じゃ全然気にしてないけど。

「この度は妹と彼が世話になったわね。礼を言うわ。」

「いや、そんな……。……え?彼?」

「そうよ?」

あ、あれ?もしかしてフランとエスカルゴって恋人じゃなかった? いや……そんなことはないはずだ……。だってめっちゃイチャイチャしてたから。じゃあ一体どういうことなんだ?

「エスカルゴは私とフラン、あと鈴仙の彼氏よ。」

「はあああああああああああ?!!」

ええええ!!フランとレミリア!それに鈴仙の彼氏という三股状態!?!何!?ハーレム!?ハーレムなのか!?!そんなにモテるのエスカルゴ!?!うーん……。流石エスカルゴだ……。!(?)

「まあ、皆で仲良くやってるわ。」

「へ、へえ……。」

な、仲良くできてるのがすげえ……。普通彼女と彼女の喧嘩が始まると思うんだがなあ……。そ、そこもエスカルゴの実力?なのかな? 「ペンダントありがとうね。大事にするわ。」

「あ、ああ……。ありがとう。」

ペンダントは気に入ってもらえてるんだ。よかったよかった。頑張った甲斐があつたぜ。じゃあ、楽しみましょうかね。そこで俺と妹

紅はエスカルゴ達と別れて、宴会を楽しんだ。

数時間後

「よ、炎火。」

「おうエスカルゴ。」

エスカルゴが話しかけて来た。ああそっか。あれをやわなきやいけないのか。

「そろそろ……やるか？」

「ああ、やろう！」

「ルールは……そうだな……。スペルカード数は無制限で、どちらかが動けなくなるまで……でいいか？」

「いいぞ！」

というわけで、外へ出ました。いやあ……戦うから、流石に被害を出すわけにはいかないからな。あ、霊力回復しきってない。うわあ……本気でやるからにはこのハンデはかなり手痛いんですけど……。が、頑張るか……。観客もたくさん集まっている。この光景！見飽きた！宴会の度にかの光景見てね？いや、そんなことはないか……。観客集まる光景はたくさん見たということは確かだな。そんな中、霊夢も集まっていた。

「霊夢、結界お願いできるか？」

「え？なんでよ。」

「俺と炎火の戦い……このままやったら観客はおろか館も無事では済まないからな。大きめの頼む。」

「それはヤバいわね。わかったわ。」

「サンキュ。」

エスカルゴが頼むと、霊夢は結界を張る。あらあ……期待大ですか？プレッシャーを感じます。っていうかまさか勇儀ぐらいのスクールと思ってる？あれはキレてたしあれぐらいの実力でできるとは思わないがなあ……。俺とエスカルゴは戦うために距離を取る。さて……やりますか。

「炎火ー！頑張れー！」

「エスカルゴー！負けないでー！」

妹紅やフランの応援が聞こえる。恋人に応援されちゃ、頑張らないわけにはいかないな。辺りの空間は張り詰めた空気が支配する。この空気は長く感じたくはない。先手必勝でいかせてもらおうぜ！

「行くぜエスカルゴー！炎符『ファイアーマシンガン』!!」

俺は大量の炎の銃を出現させ、炎の銃弾をばら撒きまくる。エスカルゴの様子見なら、これぐらいで十分だろ！

「つしゃあ！雷符『Midnight☆Thunder』!!」

エスカルゴがスペルを発動すると、エスカルゴから闇の霧のようなものが発生し、俺達を包む。すると、俺の視界は完全に遮られる。

「んなっ……なにも見えねえぞー！」

「さあ、闇の雷が襲うぜー！」

「相殺すりゃ良いんじゃないのか!？」

俺は辺りに大量の炎の銃弾をばら撒きまくる。見えないなら全方向に撃ちまくれ！数撃ちや当たる大作戦。

「おっ、闇が晴れた。」

作戦はしたようで、段々闇が晴れていく。わっ、光が眩しい。

「雷撃ち終えたら闇も晴れる仕様だからな。」

「へえ、便利なもんだ。」

「まあね♪」

「なら次は……炎剣『聖なる青い炎の剣』!!」

俺は炎の銃を消して、手に青い炎で作られた剣を出現させる。これ、Ver. 関係なく、悪魔やアンデッド特攻あり。吸血鬼にはもってこいだ。

「クツ……！雷鎧『サンダーアーマー』!!」

エスカルゴはその身に雷の炎を纏う。まあ、警戒して防御姿勢になったってことだな。だが、それは十分に読めていた。

「そう来ると思ってたぜー！炎鎧『地獄の衛兵』！」

俺もエスカルゴのように鎧を纏う。灼熱の炎の剣と鎧を装備する姿は、さながら地獄の衛兵のような姿。

「チツ……！雷武器『雷刀』！ハアアアツ!!」  
「うおおおおお！」

俺達は何度も互いの武器で攻撃し、打ち合っていた。そして、互いの武器の耐久値も限界に迫っていた。

「くっそー……流石炎火だ！」

「お前もな！エスカルゴ！」

今は俺ばかりが攻めていてエスカルゴは防御に必死な状態……。このまま攻めていけば勝てる！

「雷牢『雷神の牢獄』!!!」

「な、なんだこれ!?!」

エスカルゴがスペルを発動すると、俺達を雷の檻が囲む。

「この前妖怪の山での宴会で、てゐにこんな感じのやってたよな。そのの改良版だ。」

あゝ……やってたな。てゐにいつもやってるし、あまり気にしてなかったなあゝ……。

「でも、囲んだだけじゃ意味ないぜ？」

「それは違うな。まあ見てな。」

「？」

あれ？そういけば俺てゐに……。エスカルゴがパチンツと指を鳴らす。すると、少しずつ檻が小さく縮んでいく。あっ！これで霊夢倒したんじゃ!?!

「おい!?!なんだこれ!?!」

「さあどうする?」

「こんな事したらお前も……!」

「俺は雷には耐性がある。炎火……お前が、熱いっていうのを忘れたようになる。」

「!!」

そりや能力系に耐性つくのは当たり前だよなあ……。俺熱いの忘れたってレベルじゃないからな？最近ノア・インフェルノに耐えられる

ようになったからな。さて、確か電気って……。

「ハアアアアア!!」

「!?」

俺は周りの温度を急激に上昇させる。確か、温度が上がると電導性が悪くなるはず。つまり……。

「極炎拳『ノア・インフェルノ』!!」

俺は超高熱の炎を右手に纏い、思いっきり檻を殴りつけた。すると、殴ったところから少しずつヒビが広がっていく。あと……もう少しで……!!

「チェックメイトだ、炎火!!!」

「!?」

エスカルゴはそう言い、もう一度指をパチンツと鳴らす。すると、雷の檻が急激に小さくなる。まずいつ! 防御間に合えっ!!

ドオオオオオン……

「炎火あ!!」

妹紅の悲鳴が聞こえる。ああ……ツ……めつちや痛い……。妹紅の声無かったら多分倒れてたな。さて、鎧は消えたな。防御ダウンだが、維持するための霊力は流石にもういい。この一撃で決着だ。

「これで最後だ!! 決めてやる!! 極炎溜撃『ラスト・インフェルノ』!!」  
「なら、俺も最後だぜ!! 満月よ、俺に力を!! 紅眼『吸血鬼の本質』!!」  
らの……絶技『天翔雷霆零槍』!!」

俺とエスカルゴは最大の溜め攻撃を繰り出す。そこで、二つ不安要素が。実は現在使ってるこの剣。耐久値がほぼ無い。つまり、ぶつかり合いで壊れる可能性が。それと、霊力の残量。さっきの温度急上昇でゴリゴリ削られ、こっちも枯渇しそう。最大の威力で放てるかどうか……。

「5……4……1」

「うおおおお……!!」

俺がカウントを刻むたびに、技に込められる霊力が多くなる。

「3……2……!!」

「うううう……!!」

あと……もうちよい……!!

「1……0!!」

「つしゃオラアア!!喰らええええええ!!」

俺の攻撃とエスカルゴの全力の攻撃がぶつかる。お互いの力は拮抗し、湖のクレーターよりも大きなクレーターが発生し、霊夢の張った結界にヒビが入る。

「うおおおおおおお!!」

「いけえええええええええ!!」

お互いの力が拮抗する中、俺はあることに気づいた。剣が……壊れるっ!!

「ぐっ……!!」

「!？」

「ぐああああああああああ!!」

俺はエスカルゴの槍に貫かれる。体に強い電流と同時に激痛が走る。妹紅が見てるんだ……負ける……わけ……には……。俺の思考はそこで途切れた。

## コラボ編 グッバイ!!

「ううん……う？いつつ……。」

俺は目を覚まし、周りを見る？あれ？なにがあつたんだっけ？ああ。エスカルゴと勝負して負けたんだっけ。あの時新しい剣を持ち替えてたらなあ……。体を動かすと痺れが走る。うーん……あれからどれくらい気を失っていたのだろうか。宴会、まだ終わってなかつたらいいなあ……。

「あ、炎火!!」

「おう、もこいうおわああああ!!?」

妹紅は目を覚ました俺を見た瞬間強烈なタツクルを俺にお見舞いする。行動は可愛いけどね、うん、可愛い。でもね、威力がやばかつた。また気絶するかと思った。

「うわああああ……よがっただああああ……。」

「あーあー……心配してくれてありがとう、妹紅。」

俺は妹紅の頭をゆつくりと撫でる。そうだよな。妹紅は俺のことを心配してくれたんだよな。撫でてる時の妹紅可愛い……。髪サラサラ……。

「妹紅。」

「ん？なに？」

妹紅は涙を拭い、俺の方を見る。

「俺は……どれくらいの間寝てた？」

「うーん……30分くらい？」

「そっか。ありがとう妹紅。」

「うんっ♪」

そっか……30分くらいか……。そこまで寝ていなかったんだな。俺はここで不審な点に一つ気付く。霊力が完全に回復してる。ほんの30分程度の時間寝ていただけだったら枯渇していた霊力が全回復するなんてありえない。

「なあ妹紅。」

「ん？どうしたの？」

「靈力が全回復してるんだけど……何か知らない？」  
「えつと……。」

妹紅は顔を赤くして体をもじもじさせる。

「お薬……飲ませた。」

「薬？ああ、永琳先生特製の靈力回復薬……って、俺どうやって飲んだんだ？」

「わ、私が飲ませた……／＼／＼」

「え？妹紅が飲ませたってどういう……。」

「その……口移しで……／＼／＼」  
「!？」

おおう……なるほど、そういうことですか。うわく……。あれ？つまりファーストが治療ってこと？なんか知らない間にそういうことが起こってるのはあれだけ……まあ、妹紅ならいっつか♪

「その……いや……だった？」

「いや。ありがとう。妹紅。」

俺はまた妹紅の頭を撫でる。さて……。折角の宴会だし、楽しまなきゃいけないよな。折角の別世界の宴会だ。このままここにいるだけっていうのはなんか勿体無いからな。

「妹紅。」

「ん……う？なあに？」

「宴会、楽しもうぜ！」

「！……うんっ！」

というわけで、妹紅と2人で宴会会場を回ることになった。さて、どうしますかね……。じゃあ、こっちの永遠亭のところにも行きま  
すかね。

「ねえ。」

「はい？」

「この声……すごい聞き覚えあるなあ……。」

「こっちで一緒に飲まない？」

というこで、永遠亭のみんなを探していたら、鈴仙に話しかけられた。向こうから誘われました。鈴仙に案内され、俺と妹紅はそれに



ついていき、移動をする。移動した先には、永遠亭のメンバーと、妹紅がいた。あ、慧音先生もいる。そういえば、向こうの慧音先生と全然交流ないな。まあ、いつか知り合うでしょ。

「ごめんなさいね、こちらに呼んでしまつて。焰 炎火さんと、向こうの世界の藤原 妹紅さん。」

こつちの世界の永琳先生が、そう挨拶してきた。他人行儀な永琳先生全然慣れねえ……。でも、昔こんなだったよな？もう忘れてしまった。

「いえ、そんなことないですよ、永琳先生。」

「あらそう、なら良かったわ。」

「じゃあ、一応自己紹介してもらえますか？」

「え、あ、はい。」

と言うわけで、自己紹介をすることになりました。まあ、俺はイレギュラーな存在なわけだし、ちゃんと自己紹介しなきゃいけないのかな。まあ、さっさと軽くやりますか。

「じゃあ俺から。名前は焰 炎火。向こうの永遠亭に済ませてもらっている。能力は『炎を支配する程度の能力』。得意なことは……家事全般。そして、この妹紅と付きあわせてもらつてる。」

「やっぱり、あなた達つて付き合つてるのね。」

と、鈴仙がそう言った。いや、こつちからしたらお前とエスカルゴが付き合つてる方が衝撃なんだがな。まあ、そこは突つ込まないでこう。吸血鬼姉妹が関わつてるのは怖い。

「それはさておき、楽しみましょうよ。折角の宴会ですし。」

「そうね、楽しみましょうか。」

「あ、私エスカルゴのところ行つてくる。」

というわけで、俺達はしばらくここで宴会を楽しんだ。こつちの妹紅はあれだな。なんかツンツンしてるね。イメージが違う……。まあ、これはこれで合つてるような違うような……。……まあ、人によつて違うよね！千差万別！みんな違ってみんな良い！！……。良くない奴は良くないけどな。ほら、転生前はイジメとか犯罪とか一杯あったし。それに比べてこつちは平和だなく。てゐ？知らん。てかこつ

ちのてゐも変わらねえなあ〜！悪戯が大好きだなおい！

「さて、俺達は移動するよ。ありがとう。楽しかったよ。」

「あら、もう行くのね。楽しかったわ、ありがとう。」

「バイバイうさ〜。」

「ばいばいね。」

「バイバイ。」

俺達は永遠亭のみんなと別れ、別の場所に移動を開始した。ずっとあの場所にいるっていうのは、なんか違う気がする。もっと、たくさんの人と楽しみたいからな。その後、色々な場所を回った。精神干渉妨害した状態でさとりさんに会ったら驚かれました。二度目なので慣れたよ。まあ、気味が悪い感じだったっぽいけど、最終的には仲良くなれたかな？あと、料理美味しいね。流石咲夜さんです。あの料理スキル、ほんと流石だなあ〜……。俺は妹紅とブラブラしていた。そろそろ宴会も終了かな……。流石に夜だし、妹紅も眠そうだからな。すると、エスカルゴが俺達の方向にやってくる。

「おつす。」

「お、エスカルゴか。」

「宴会、楽しんでくれたか？」

「もちろんだ！」

「身体、大丈夫か？」

「まあな。まさか負けるなんてな……。。」

「へっ…必殺技食らっても立ってたくせに…。やっぱ、お前は強いよ。俺も、お前に負けないくらい強くなってみせる。だから…これからもよろしくな。」

「おう！」

俺とエスカルゴは固い握手を交わした。うーん、あそこで負けるとは思わなかったしなあ……。まさかパクリであそこまで追い詰められるとは思わなかったなあ……。まだまだ世界は広いってことか。まあ、別世界なんだけどな！

「紫さんをお願いすればいつでも行ける。そっちの生活リズムは…1ヶ月も過ごしてたからな、大体は把握してる。」

「そりや頼もしいぜ。」

「ねえ炎火、そろそろ……。」

妹紅が俺に眠そうにそう言ってくる。流石に眠いよな。俺の部屋で寝かせてやるか。

「そうだな。エスカルゴ、頼む。」

「おうよ。……紫さくん！」

「はあ〜い。」

そう言うと紫が地面から出てくる。こっちでも変わらんのか紫は……。まあ、驚かないんですがね。いつものことだし、慣れてしまった。エスカルゴは……驚いている。まだ慣れてないんだな。確かに向こうでも慣れてなかったしな。

「来たわよく。」

「お願いします。」

「お安い御用よ。」

そう言うと紫さんはスキマを開く。これが……帰り道。

「じゃあな！」

「おやすみく。」

「おう、じゃあな！おやすみ、ゆっくり休めよ！」

「またな！」

「ああ！」

俺と妹紅はエスカルゴと別れの言葉を言い、スキマの中に入っていく。そして、目の前には、見慣れた建物、永遠亭。後ろを振り向くと、スキマはすーっと閉じていった。

「……楽しかったな。」

「うん。……ふわあ〜……炎火あ……眠い……。」

「はいはい。」

こうして、不思議な吸血鬼との宴会は終わった。短い間だったけど、凄く楽しかった。……さて！こっちでの生活！頑張るか！

## part 24 能力の発覚

「えいつー! やっ!」

「いいぞく、その調子だ。」

今俺が何をしているかというのと、凜乃と剣の修行をしていた。これの起源は数日前、エスカルゴとの宴会が終わり、朝が訪れ、妹紅を家に帰して永遠亭に戻ってくると、凜乃が俺に駆け寄ってきた。

「炎火さん。お願いがあります。」

「ん? どうした? 凜乃が俺に相談なんて珍しいな。」

「あ、あの……私に『戦い』を教えてください!」

「へ?」

ということで、凜乃に戦いを教えることになった。理由は、「私も見ているだけじゃなく、お手伝いがしたい。」とのこと。俺は全然気にしてないって言ったが、凜乃が全然引き下がらなかったので、戦いを教えることにした。いきなり試合とかは流石に女の子にさせるのは危ないので、木剣で教えることにした。

「えい! やっ!」

「……ふっ!」

「あっ!」

俺は少し力を込め、凜乃の剣を弾き飛ばす。うーん……なんていうか……凜乃に合っているって感じがしない。なんかぎこちないし……。一回遠距離武器でも持たせてみるか? 弓とか。

「凜乃。武器交換だ。ちよつと待ってるよ。」

「は、はい!」

俺は凜乃にそう言い、倉庫の方に向かう。確か、倉庫の中に弓があったはず……。あれ? なんで弓なんか倉庫にあるんだろうな? あ、永琳先生弓使いでしたね。納得納得。あ、あつた。俺は弓と矢筒、それと弓矢を数十本矢筒の中に入れ、凜乃のところまで戻る。

「お待たせ凜乃。」

「これ……弓……ですか?」

「うん。俺向こうにいるから一回撃ってみてくれ。」

「え!?!でもこの弓矢本物ですよね!?!」

「大丈夫!・当たりそうになつたら勿体無いけど燃やすから。」

俺は凜乃にそう言つて十数メートル離れる。まあ、流石に最初だから上手くいくわけないでしょ。

「わ、わかりました……。ゆ、弓つて重いですね……。」

「まあな。まあ、頑張つて射つてくれ。」

「は、はい!」

凜乃は弓を構え、弓矢を思いっきり引く。そして、その手を離すと、高速で矢が飛ぶ。その矢は俺の約1メートル右横を飛んでいき、後ろの木に刺さつた。これは……才能あり?最初にしては結構飛んだな……。

「うーん……もうちよつと右……?も、もう一回いきまーす!」

「おう!・気抜くなよ!」

「は、はい!」

凜乃はそう返事すると、もう一度弓を構え、弓矢を思いっきり引く。滑らかな弧を描き、俺の方に飛んでくる。俺はそれを右に動いて避ける。弓矢は後ろの地面に突き刺さつた。うーん。あれ?初めて?もうこれはオリソピックとかで優勝できるレベルなんじゃね?

「凄いぞ凜乃!」

「あ、ありがとうございまーす!」

さて、こんな修行はこれぐらいで限界だろう。実践方式でやるしかないな。あ、でも能力ないし、霊力も全然なのに大丈夫だろうか。あ、後で永琳先生に相談してみるのもいいな。さて、実践といたらあれしか考えれないな。

「凜乃!・ちよつとこつち来て!」

「は、はい!」

俺は凜乃を呼び寄せ、木と地面に刺さつた矢を抜く。そして、凜乃に回収した弓矢を渡す。

「凜乃、ちよつとごめんな。」

「は、はい?・なんでしようか……つてええ!?!」

俺は凜乃のことを抱き抱え、飛行を開始する。

「到着つ……と。凜乃、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です……。」

俺が来たのは広い平野。遮蔽物はなく、風が吹き抜ける。

「な、なにをするんですか？」

「一対一。」

「……………え？」

「俺との一対一だ。大丈夫、死にはしないから。」

「えええええええ!!？」

「じゃあ行くぞ！炎符『ファイアーマシンガン』！」

俺は凜乃との一対一を開始する。ほら、これの方が早く成長できると思ったから……。弾幕は薄めで、威力も弱く、弾速も遅くしてある。

凜乃も戸惑いながら、頑張つて俺の弾幕を避けている。うん、才能はあるっぽい。頑張れー凜乃ー。

「きやあつ!!？」

凜乃は一回目、俺の弾に当たった……が、一つ違和感が。当たるとき、普通は俺の弾は小爆発を起こすが、凜乃に当たった瞬間ジュツという音がした。こんな音することは無いんだけどなあ……。凜乃も、全然ダメージなさそうだし。

「えいっー！」

凜乃は弓矢を連射してくる。勿体無いが、炎の壁を出現させる。矢は炎の壁目掛けて飛んでいき、そして……貫通。

「うおっ!!？」

俺はジェット噴射で急いで回避。矢をギリギリ回避する。……それにしても、色々とおかしいぞ？そんなことを考えていると、次々に矢が飛んでくる。調べるには……。

「はあっ!!？」

俺は思い切つて凜乃の矢を手で受け止める。うわっ！なにこれ冷たっ!!？なにこれ水!!？……そうか、これが……。つて、やばい！まだ飛んでくる！

「凜乃ー！ちよつと止まってー！」

「え!?は、はいー！」

凜乃は弓を構えていたのを解く。俺は凜乃の方に近づいて行く。

「凜乃。戦っていてわかったことが2つある。」

「ふ、2つ?」

「ああ。まず一つ目は、お前には凄い弓の才能があること。」

「ええ!?そ、そんなこと……。」

「いいや、だつてお前2発目で狙いの中だろ?それともう一つ。」

「あ、あともう一つは……?」

「それは、お前の能力。お前、気づいてないみたいだけど目、青いぞ。」

「え、ええ?」

「ほい、手鏡。」

俺は凜乃に手鏡を渡す。え?なんでそんなもの持つてるのかつて?気にしたら負けです。そう、戦い始めてから凜乃の目が青くなってるのだ。凜乃もそれに気付いたらしく、口を開けて目を見開いている。

「そして、矢に水が纏われている。さつき頑張つて掴んだら水だった。だから炎の壁も貫通したんだと思う。」

「あ、あれつてそのせいなんですね。」

「うん。多分……『水を宿す程度の能力』かな?」

「それが私の能力……。」

「さて、今日はこれで終わりかな。明日は能力について調べてみようかな。」

「はいー！」

俺は凜乃のことを抱えて永遠亭に帰った。凜乃については、まだまだ謎が多いな……。

part 25 凜乃の急成長

「よし！まずは能力を自分の意思で使えるようにしよう！」  
「はいっ！」

昨日、凜乃の能力が発覚したので、朝のいつものお仕事を終えた後、凜乃の能力について修行しようと思う。まずは能力を使う前と使っている時の違いを調べるために、自分自身の力で能力を使えるように修行を開始した。

「さて、昨日は自分の意思ではなく、自然に発動したからなあ……。とりあえず、発動しようとして強くイメージしてみて。」

「は、はいっ！」

「あ、目は開いていてね。発動してるかわからないから。」

「が、頑張りますっ！」

そう言うと、凜乃は手を握って、強く集中する。すると、目の色が黒色から少しずつ水色に変わっていき、ついに瞳が全て水色になる。

「よし、いいぞ凜乃。なんか、自分で変わったと思うことはあるか？」

「え、えっとく……。体の中で、水が流れるような感じがします。あと、体が軽いです。」

「じゃあ、解除できる？」

「や、やってみます……。」

そう言うと、凜乃は再び集中する。すると、目の色が水色から、元の黒色に戻っていく。

「あ……。体が少し重くなった……。」

「よし、能力の発動と解除はできるな。じゃあ、次は身体能力でも測ろうか。」

「はいっ！」

というわけで、50メートル走。能力を使わず走った結果は6.0。速いなあ……。まあ、俺も色々鍛えられたから同じくらいだけどねー！そして、発動中での結果、5.0秒。……ウサイン・ボルト？速え、めっちゃ速え。流石にウサイン・ボルトは無理だわ。

「はあ……。っ、疲れました。」



「お疲れ凜乃。はいお水。」

「あ、ありがとうございます。」

凜乃は俺から水を受け取り、ゴクゴクと水を飲み干していく。……ハッ！み、見惚れてしまっていた。予想を遥かに超える色っぽさ。

「ぶはあ……ありがとうございます！」

「うん。じゃあ、次行こうか。」

次は握力。能力発動前は両手の平均20kg。さて、能力発動中は……。結果、25kg。うん。握力も上がるようだ。次は柔軟性。発動前は、普通の人と同じくらいだった。さて、能力発動中は……？その光景を見て、俺は驚きを隠せなかった。いや、これ体操の選手も驚きだぜ？体全部伸ばしてピターってしてる。これが……女の子……じゃないだろ能力能力。

「り、凜乃。」

「は、はい。側転とか、爆転ってできる？」

「えー……や、やってみます。」

凜乃は立ち上がりまずは側転をし始める。凄い完成度。綺麗な側転だあ……。マジで体操の選手かな？そんな冗談は置いといて、次は爆転。……これも綺麗な連続爆転。凄いなあ……。これ、格闘術に活かせないかな？

「ど、どうですか？一応、失敗はしませんでしたか……。」

「凄いぞ凜乃！めっちゃ綺麗な側転と爆転だったぞ！」

「あ、ありがとうございます！」

「さて、じゃあ次は弾幕の練習。はい、能力解いて。」

「あ、はい。」

凜乃はそう答えると、瞳の色が黒に戻る。ふむ、慣れてきたみたいだ。もっと慣れたら、いつでも一瞬で発動することができるのはいいな。

「じゃあ、弾幕。これができないとスペルカード作れないしな。」

「はい。それはいいんですが……なんで能力解くんですか？発動してる方がやりやすそうなんですが……。」

「ほら、能力使わずに修行した方が、能力使った時修行の成果が出やす

いぞ?」

「そ、そういうものなんですか?」

「そういうもの。凜乃。まず、手を前に出して。」

「はい。」

俺は凜乃にそう言うと、凜乃は右手を前に突き出す。

「それで、まずは基本の球状の弾幕を出してみようか。力を突き出して腕に集中させて。」

「は、はい!」

凜乃は目を閉じ、静かにそこに佇む。……凄い集中力だな。これも、凜乃のいいところなのかも知れない。すると、凜乃は一発、水色の弾を発射する。よし、成功だ!

「どうだ?凜乃。」

「コツは掴めました!」

「じゃあ、連射とか、同時発射をやってみようか。」

「はいっ!」

これで、凜乃は弾幕修行をすることにした。同時に最高で5発、10秒間に約30発だった。……うーん……なんか……イマイチ……。まあ、十分に強いんだけどなあ……。実戦となると、不十分な気が……。

「そうだ。凜乃。弓使って弾幕撃てるか?ほら、霊力の弓矢とか作れる?」

「えー……あ、できました。」

「!?」

あつさり!?びっくり!あれ?俺の初戦闘もこんな感じだった気がする……。まあ、気にしないでいいか。さて、弓を使ったの弾幕の結果ですが……。同時最高10発。連射、10秒間に50発程度でした。……うん、武器って大事だね。さて、これはあくまで能力を使わずにの話だ。

「じゃあ、能力使ってみて。」

「あ、はい。」

凜乃がそう答えると、一瞬で目が水色に変化する。……完全に慣れ

たかー……。飲み込み早くね？才能だったら凜乃の方が圧倒的に上な気がする。俺の強さは時間をかけて身につけた感じだからなあ……。

「じゃあ、さつきと同じように同時発射の最高数と10秒間の連射数測ってみようか。」

「はいー！」

さて、能力使用時も、一応武器を使っていない時と使った時に分けよう。武器を使わないで行った結果。同時最高は8発。10秒間の連射数は大体45発。弓を使うと同時最高15発。連射最高数大体75発。え？なんでそんなに細かくわかるのか？俺の視力は2・0なんです！結果的にはちょうど1・5倍。

「凜乃。なんか結果以外にある？」

「えつと……。さつきよりも疲れます……。倍ぐらい……。。」

なるほど。やっぱり能力使ったら体力の消費は激しいな。つまり、簡単に言くと、弾幕の戦闘力は1・5倍。体力消費は2倍ってことか。さて、今日はこれぐらいでいいかな。……。うわっ！もう昼かよ。

「……。昼飯でも作るかー。」

「あ、じゃあ私手伝います。」

「……。凜乃。てゐるか輝夜様来たら相手しといてもらえる？てゐるに関しては弾幕放て。」

「ええ!?!そ、それって大丈夫なんですか!?!」

「良い。俺が許可する。」

「は、はい。わ、わかりました。」

「さて、作りますかー。」

俺は台所へ向かい、昼食を作り始める。

「えいつ!!」

「ぎゃあああああ!!」ピチューン

……。どうやら、修行の成果が出たようだ。

part 26 妹

兄さんが死んでから、ちょうど今日で2年が経った。私は学校を休み、父さんと母さんと一緒に兄さん、焰 炎火のお墓にお墓まいりに来ていた。……正直、まだ兄さんが死んだということが受け入れられない。いつも明るく、ウザいバカ兄さんが、死んでしまったことが私と父さんと母さんは、兄さんのお墓がある墓地に来て、お墓の前にしやがみ、線香に火をつけ、手を合わせる。

「ううっ……炎火……」

母さんはお墓の前で手を合わせながら泣いている。父さんも、顔が見えにくいのが、泣いているようだ。……それに比べ、私は泣いていない。泣いたら、兄さんが死んだことを受け入れてしまう気がする。だから泣かない。御墓参りを終え、家に帰り、自分の部屋に私は閉じこもった。あれからずっと、心に穴がずっと空いている。私は、2年前に撮った私と兄のツーショットの写真を見つめる。……この写真の私とバカ兄さんは、とても元気に笑っている。

「……兄さん……」

私は堪えきれず、目から涙を溢れさせる。兄さんは優しくかった。私がどんなにイタズラしてもあまり軽くデコピンするぐらいだったし、勉強だって教えてくれた。ほんつとうにバカでアホに兄さんだけけど、私にも、みんなにも優しくかった。死ぬときだって、轢かれそうな子供を助けて死んだ。兄さんらしい最後だった。私にとっては、唯一無二の存在だった。

「うわあああああ……」

私は声をあげて泣く。去年のこの日も泣いてしまった。泣かないと決めた筈なのに。抑えられない。今日さえ泣かなきゃ良かったはずなのに。他の日なら泣かないはずなのに。私は必死に堪え、泣き止んだ。

「部活行こうかな……」

私は部活には間に合う時間なので、用意して部活に向かう。ここでジツとしてる気分にはなれない。

「父さん母さん。部活に行ってくる。」

「……わかったわ。」

「気をつけるんだぞ。」

「うん。」

私は父さんと母さんに部活に行くことを言い、私は家を出た。

「ねえ。」

「ん？何？」

私は部活を終え、片付けをしていた。すると、友達が話しかけてくる。

「大丈夫？練習中もずっと元気なかつたけど……。」

「……大丈夫だよ。それより、早く片付けよ。」

「うん……。」

私は黙々と片付けた手を緩めず、片付けを続ける。部活中は元気に振る舞おうと思っていたんだけど、やっぱりいつもより元気がなかったらしい。

片付けを終え、家までの帰路を私は歩いていった。帰り道も、兄さんがいたらすぐなのになあ……。そんなもう叶わないようなことを思いながら私は帰る。兄さんがいた時は一緒に喋りながら帰っていたので、もつと楽しくて、短い時間だった。けど、今は苦痛な時間が長く続く。やっと思いで家に着き、自分の部屋に入って荷物を置き、ベッドの上に寝転がった。……やっぱり、ジツとしての落ち着かない。私は外に散歩に出る。……そういえば、兄さんも1人で外を散歩してたなあ。私も昔はこんなことしてなかったのに……。

「あ……猫。」

「にゃー。」

目の前に、黒い猫が一匹。そういえば、兄さんも猫好きだったなあ……。どうして、こんな時にも兄さんのことを考えてしまうんだろ

う。黒い猫は私のことをジッと見つめた後、目の前を逃げるようにはなく、目的地に向かうように歩いていく。……まるで、私を何処かへ連れて行きたいようだった。……ついて行こうかな。私はその猫のことを追いかけることにした。猫は角を曲がるときも、私のことを見てから角を曲がる。……私はずっとその猫のことを追いかけ続けた。私は、なんとかギリギリ帰れるほどの遠い場所に來ていた。(どこまで行くんだろ……。)

「……にゃー。」

まだ猫は進む。路地裏の中を進んでいき、薄暗い道を歩き続ける。そして、ようやく路地裏から抜ける道へ。その先にある光が路地裏を照らしていた。

「はあ……つてあれ？」

路地裏を抜けると、街の中……の筈なのに、そこは森だった。やばい。ここは危険な気がする。私はそう思い、路地裏に引き返そうとした。しかし、後ろに路地裏はなく、木々が立ち並んでいるだけだった。(……どこ……どこ……?)

すると、どこからか、何かが近寄ってくる音が聞こえる。暗い森の中で辛うじて見えたそれは、人型だが、異形の生物。まさに、怪物。それが二体、私の方にやってくる。

「ニン……ゲン……。」

その怪物達は私の方に近づいてくる。

「オイシ……ソウ……。」

美味しそう？……まさか、私を食べるの？

「クウ……。」

一歩ずつ、私の方に近づいてくる。私は怖くて、足が動かない。

「アア……。」

怖い……。

来ないで……。

怪物達は足を進める。

怖い……。

嫌……。

死にたくない……。

「助けて……。兄さん……。」

「炎符『ファイアーマシンガン』!!」

すると、森の上から炎の弾が飛んできて、怪物達を襲う。すると、1人の男が空から降りてくる。その男は、二体の怪物を目の前に、恐れもせず、立ち塞がる。

「ジャマスルナ!」

「ソイツハオレタチノエモノダ!」

「そんなこと俺が知るか!」

男は腕を突き出す。その男に、二体の怪物は突っ込んでいく。

「炎砲『サラマンダーの息吹』!!」

その男は突き出した腕から極太の炎の光線を放つ。その光線に、二体は巻き込まれ、光線が止むと、二体の怪物は、気絶していた。男は振り返り、私の方を見る。怪物を簡単に倒した異能の力を持っている男は、見覚えがある。小さいころから優しくしてくれて、ずっと一緒に過ごしていて、そして……。2年前に亡くなった男。

「……。怪我、ないか?」

「……。うわああああん! 兄さああああん!!」

私は自分の兄である男に抱きつき、大きな声を上げて泣いた。

part 27 焰兄妹

「♪」

夜になろうとしていた時、俺は空で散歩していた。散歩いいよ。うん。風も気持ちいいし、気晴らしにもなる。今日は俺が幻想郷に来てからちょうど2年。……父さんに母さん、それに灯乃子はどうしてるのかな？元気に過ごしてるかな……。俺はそんなことを思いながら空を飛ぶ。

「ん？あれは……？」

俺は森の方を見ると、あるものに気づく。森の中に、1人の女の子が。夜は妖怪が活発に活動する時間。あまり1人で入るとは思えないのだが……。……違う！あれは襲われている!?俺はそれを見た瞬間、助けに向かう。その途中。小さな声だったが、確かに聞こえた。「……助けて……兄さん……。」

と。その声は、もう、2度と聞くことがないだろうと思っていた声。このままだと間に合わない！

「炎符『ファイアーマシンガン』!!」

俺は妖怪二体に向かって弾幕を放つ。咄嗟に撃って威力は全然ないが、足止めになったようだ。俺はその女の子の前に立ち、妖怪二体と対峙する。……多分、下位妖怪だな。まあ、多分楽勝だな。

「ジャマスルナ！」

「ソイツハオレタチノエモノダ！」

「そんなこと俺が知るか！」

俺は腕を前に突き出し、右腕に霊力を集中させる。これ、文に使ったつきりだな。妖怪二体は俺に突っ込んでくる。……距離近くなるし、威力落とすか。

「炎砲『サラマンダーの息吹』!!」

俺は右腕から炎の光線を放ち、妖怪達に命中させる。光線を撃ち終えると、妖怪達は気絶している。……さて。俺は後ろに振り返り、少女の顔を見る。この顔に、先程の声。間違えるはずもない。二度と会うことはないと思っていた俺の妹、焰 灯乃子だったのだ。



「……怪我、ないか？」

先程の戦闘のせいで怪我をしていないか確かめる。

「……うわああああん！兄さああああん！！」

灯乃子は俺に抱きついて来て、号泣する。俺はそんな妹を、そっと抱きしめた。

「落ち着いたか？」

「………うん。とりあえずは。」

数分間、灯乃子は泣き続け、やっと泣き終わり、その場に座り込んでいた。お互いに聞きたいことはあると思う。少しの間、静寂がこの場を包む。

「………ここはどこなの？」

灯乃子は俺にそう聞いて来た。そら、そう思うわな。知らない場所に来たら。

「ここは幻想郷。忘れ去られた者たちが集まるところだ。」

「どうして兄さんはここに居るの……？その……2年前死んだのに……。」

「……俺は死んだ後、神様に生き返らせてもらってここに来た。ほら、転生ってやつだ。」

「……ずっとここで暮らしてるの？」

「ああ。」

「……そうなんだ。」

そのまま灯乃子は黙り込んでしまう。さて、今度は俺が質問する番かな。

「灯乃子はどうしてこんなところにいるんだ？」

「……黒猫追いかけてたらここにいた。」

俺はそれを聞いてずっこけそうになった。それあれだろ、迷子になる典型的パターンじゃないか。お前はガキか。お前もう16だろ。

「……とりあえず、永遠亭まで行くか。」

「？永遠亭って何？」

「今俺が住んでいるところだ。」

俺は灯乃子にそう答えると、灯乃子をお姫様抱っこで抱える。

「ちょ、ちよつとー!」

「こうじゃないと一緒に連れてかないんだよ。我慢してくれ。」

俺は灯乃子を抱き抱えたまま、永遠亭まで飛んでいった。……飛んでる最中、スリル系が大好きな灯乃子は目を輝かせて景色を眺めていました。

「はい、到着。」

「ここが兄さんの住んでるところ?……でかいね。」

「否定できない。」

俺は地面に着陸し、灯乃子を降ろす。さて、面倒臭いあの悪戯兎に見つからなければいいが……。俺は永遠亭の中に入り、自分の部屋まで向かっていった。……面倒臭い兎に見つかりました。

「あー!!」

「うげっ……。」

「みんなー!!炎火が女を連れ込んできたー!!」

「人聞きの悪いこというなっ!!」

「はあ!!?」

「なんですって!?!」

「面白そう!!」

「鈴仙と永琳先生反応しないで……。あと輝夜様!面白そうってなんですか!面白くないです!」

『どういうこと!?!炎火!!』

「己ら話を聞けええええ!!」

く少年説明中く

「なるほど、つまりその子はあなたの妹だと。」

「そういうことです。」

「全く驚かせないですよ……。」

「殆どてゐのせい……って、あの兎逃げやがったな……！」  
「いつものことですよ。」

俺は深く溜息をつく。こんなに疲れる説明は初めてだ。さて……  
最も重要な話題に切り替えなきやな。

「灯乃子……お前。これからどうするんだ？」

「私は……。私は、兄さんと一緒に居たい。勝手にどっかに行くのはもうやだ。」

「……いいのか？だって父さんと母さんもいるんだぞ？」

「あの2人は夫婦だからいいもん。」

「ええ……。」

そういう物の捉え方しますか……。まあ、昔からうちの親が喧嘩したことなんて一度も見たことないがな。……正直、父さんと母さんにはかーなり悪いが、可愛い妹のことをほっとくほど兄として腐ってないがな。……息子としては腐ってるって言わないでね。

「……わかった。永琳先生。」

「わかってるわよ。部屋はたくさん余ってるから、そのうちの1つは好きに使ってもいいわよ。」

「！ありがとうございます！灯乃子、行くぞ。」

「はーい。」

俺と灯乃子は部屋を選びに行く。さて、どの部屋がいいのかな。本  
当に部屋余ってるから、選ぶのは難しいなあ……。

「ねえ兄さん。」

「ん？どうした？」

「兄さんの部屋ってどこ？」

「え？ああ、案内してやるよ。」

俺は灯乃子に言われ、自分の部屋に灯乃子を案内する。……どうして俺の部屋をどこか知りたんだろう？あ、用事とかの為かな？

「……」

「……この左右の部屋って空いてるの？」

「左は空いてるな。」

ちなみに、右の部屋はというと、凜乃が使っている。ここを決定するとき、「隣俺の部屋だけどいいのか？」っと聞いたが、「ここがいんです！」って押し切られたな。

「じゃあ左の部屋私を使うー！」

「ええ!?隣俺の部屋なんだぞ!?!」

「いいんじゃない!前の家でもそうだったし。」

「た、確かに。」

「じゃあ、ここの部屋使うねー。あ、勝手に入ってこないでね。」

「はいはい。」

そういうと、灯乃子は部屋の中に入っていく。……また、俺の周りが騒がしくなる……。

part 28 兄の生活

私は幻想郷という場所に迷い込み、死んだはずの兄さんと出会った。なにやら、神様によって生き返り、この幻想郷という場所にいるらしい。そして、私は幻想郷に迷い込み、兄さんの住んでいる『永遠亭』という屋敷に私も住むことになった。

「おーい。灯乃子、起きろー。」

「うーん……今何時ー……?」

「6時。ほら、起きろ。」

「はーい……。」

私は兄さんに言われ、布団から出る。……やばっ!? 私全然服着てないじゃん!! っていうかあのアホ兄さん入ってきて……あ、部屋の外からだった……。っていうか、兄さんってこんなに寝起き良かったっけ? いつもは欠伸ばっかりしてた記憶あるんだけど……。私は服を着て扉を開けると兄さんが部屋の前で立っていた。

「おはよう。灯乃子。」

「うん、おはよ……。早いね、兄さん……。」

「職業柄慣れた。ほら、顔洗ってこい。」

「はあ……。」

私は兄さんに言われて洗面所に顔を洗いに行く。……兄さんってここで働いてるんだらうけど、どんな仕事してるんだらう……。私はそう思いながら顔を洗う。……水冷たい。私は顔を拭くと部屋に戻る。

「灯乃子。朝ご飯ここに置いてくから食べとけよ。」

「えっ!? いつ作ったの!」

「お前を起こす前から。ほら、冷める前に食べる。」

「は、はーい。」

私はそう答え、朝ご飯を持って中に入る。そして、兄さんが作った朝ご飯を食べ始める。……なにこれ美味しい!? プロレベルだ……。これ兄さんが作ってるの? 料理はたまにしていたけど上達し過ぎでしょ……。っていうか私を起こす前? いつから兄さん起きてるの?

今日は兄さんの仕事の風景でも見ようかな……。

「うちそうさまでした。」

私は朝ご飯を食べ終わり、台所に片付けに行く。……このお屋敷、おつきいなあ……。私は片付け終わり、兄さんを探す。……あ、いた。

「兄さん。」

「ん？灯乃子、どうした？」

「今日、兄さんの仕事見てていい？」

「いいぞ。」

私は兄さんに許可を貰って、兄さんの仕事を見ていることにした。

「まあ、兎達の監視は兎の一匹に任せてるからなあ……。そうだ、凜乃の特訓でもするか。灯乃子、こつちに来てからの兄さんの力、見せてやる。」

「力って、昨日の炎？」

「まあな。まあ見とけ。」

「はーい。」

兄さんは私にそう言うと、凜乃？って人の部屋に向かって行く。そういえば、兄さんの部屋の左の部屋はその凜乃って人だったなあ。どんな人だろう？部屋の前に着き、兄さんが扉を叩く。

「凜乃ー。いるかー？」

「いますよー。どうしましたか？」

「特訓するぞー。」

「はーい。」

扉の向こうから可愛らしい女の子の声が聞こえてくる。……どんな人だろうか？ワクワクしていると、扉が開き、中から1人の女の子が。……?!?!?!何この人めっちゃ可愛い!!黒いサラサラの髪に青い服。頭の大きい青いリボンに、超整った顔。そしてモデル顔負けのスタイル。……兄さんはこんな人といつも暮らしてるの？いいなあ、羨ましい……。兄さんと凜乃さんは庭に出て、軽く準備運動をする。凜乃さんは弓を持っているけど、兄さんは何も持っていない。

「凜乃ー。手加減なしで来いよ。」

「はい!!」

「灯乃子、勝負始めっ！って言ってくれない？」

「あつ、うん。じゃあ、勝負始めっ！」

私はそう言うと、凜乃さんは弓を兄さんに向かって連射していく。兄さんはそれを回避せず、炎の壁を作る。……炎の壁!? そんなの作れるの兄さん!? 弓矢は炎の壁に当たると同時に燃えてしまう。

「凜乃ー！能力無しだったら負けるぞー！」

「わかってますよー！」

凜乃さんはそう言うと、目の色が青くなる。

「水符『全弾連射（フルバースト）』!!」

そして、青いエネルギー?の矢を8本同時に、そして1秒間に8×5、40発発射していく。っていうか何あれ、矢の雨?そして、それを兄さんはひよいひよいと避けていく。なにこれ、次元が違う。こんなの日本にいたら即自衛隊にスカウトじゃない?

「炎剣『聖なる青い炎の剣』!!」

兄さんは右手に青い炎の剣を出現させる。……ってえ!? 熱くないの!? 赤い炎じゃなくて青い炎!? あれ? 兄さんなんで右手だけ黒い手袋しているんだろ? ってうわく……矢を剣で弾いてる……。あれ? でも結構苦しそうな表情してる。

「やっぱ成長早いな!凜乃!!」

「まだまだですよ!!」

そう言いながら2人は戦闘を続ける。……かつこいい。私は2人の戦闘を見ててそう思った。私もあんな感じになれるのかな? なれたらいいなあ……。……兄さんの妹だし、なれるかも……。

「そろそろ終わらせるぞ!!炎脚『レオキック』!!」

兄さんは襲いくる矢を躲しながら空中に飛び上がり、右足に炎を纏って飛び蹴りを行う。その右足は矢を破壊しながら凜乃さんの方向へ襲いかかる。

「きゃあっ!!」

凜乃さんに兄さんの蹴りが当たるその直前。兄さんは右足の炎を消して上に上昇し、攻撃を加えるのを回避する。

「ふう……。やるじゃないか凜乃!かなりの成長スピードだぞー！」

「まだまだですよ。炎火さんに比べたら……。」

「あはは……。まあ、俺だって毎日頑張ってるし、簡単に追いつかれたらちよつとシヨックだなあ……。」

兄さんと凜乃さんは楽しそうに会話をする。……この2人つてまさか……。

「ねえ……。」

「ん? どうした? 灯乃子。」

「2人つて付き合ってるの?」

「ええ!」

付き合っていたらこの2人がこんなに仲良しなのも私の中で納得するから、私はそう思った。

「ないですよ。だって炎火さんには……。」

「あーあー!! とりあえず、凜乃と俺は付き合っではないよ。」

「あ、そうなんだ。なーんだ。」

安心したような、ちよつと残念なような。そんな気分だ。……でも、本当に彼女さんとかいないのかな?

「でも、凜乃さんじゃなくて、別の彼女さんは?」

「あ、それは、えつと……。」

「ふふふ。」

兄さんは少し慌てだし、それを見て凜乃さんは笑っている。……もしかして、本当にいる? 私はそれを兄さんに更に質問しようとしたその時。

「炎火く♪」

「おうわっふ!」

突然現れた女性が、兄さんを後ろから抱きつく。……美人。白いカッターシャツにお札? みたいなのを描かれているもんぺ。そして、とてもながい綺麗でサラサラな白い髪に白と赤のリボン。……何故こんな人が兄さんに抱きつくの?

「兄さん。その人誰?」

「えつと……藤原 妹紅って言って俺の……彼女。」

「妹紅です♪よろしくね♪」



「……え？え？ええええええ!!」

本当に彼女さん!? っていうかこんなに美人な人が兄さんの彼女なの!? 何があつてこうなつた!? っていうか本当に彼女いた!?

「炎火、この子誰?」

「俺の妹。」

「へえ、妹……ん? 妹? 炎火妹なんていたの?」

「う、うん。」

「へえー! あなた名前は?」

「焰 灯乃子です。兄がお世話になってます。」

「うん、こちらこそよろしくね。」

私と妹紅さんはお互いに挨拶をする。礼儀正しい人だなく……。父さん母さん、兄さんは死んだ後でも元気にしてましたよ。

part 29 妹は悩む

灯乃子が幻想郷に幻想入りしてから1ヶ月が経った。永遠亭のみんなとも仲良くなり、かなり馴染んでいるようだ。……まあ、それ以外の人と全然会っていないがな。まあ、俺も外に出るときってらいつたら、買い出しが妖怪退治の時だけだな。ちなみに最近では灯乃子が心配しないように夜中に妖怪退治に行っている。昼間に行くより、妖怪達は力を増しているが、凜乃にも手伝って貰っていて、怪我なく終わっている。そんな中、新しい1つの悩みが。それは……。

「♪あづえっ!?!」

「あはは♪兄さんかかった♪!」

「ははは♪やっぱり炎火に悪戯するのは楽しいわね♪!」

「またお前らか!!っていうか輝夜様も混じるの久しぶりですね!」

『逃げる♪!』

「待てや己らああ!!」

悪戯組に灯乃子が混ざってしまった。これによつて悪戯組にキツイお仕置きをすることが出来なくなってしまった……。妹にはキツイことができない……。てめめ、そこを狙ってくるとは。個人的になんかしてやる。……ダメだ晚饭抜きしか思いつかない。今度それ決行してやる。うん、そうしよう。

「水符『水弾拳』!!」

「おうおっふ!?!」

凜乃は俺に向けて高速のパンチを繰り出してきて、俺はそれを間一髪で避ける。俺は凜乃と戦闘の特訓をしていた。弓を使うとなると、接近に弱くなる。なので、それを補うために格闘術の特訓をしていた。……正直な感想。強い(確信)。能力を宿していないと格闘術はあまりだけど、宿していると豹変する。属性的な相性もあるだろうけど、いや絶対それだけじゃない。防御はせず、攻撃を食らう時以外は全部受け流してくる。そして、とにかく一撃が重い。受け止めたら、

俺は水の効果でダメージを受けてしまう。なので、回避するしかない。……本格的に凜乃が俺の天敵になってきた。まあ、凜乃と戦う時なんてこういう特訓の時だけだと思うけどな。

「ちよつと痛いけどごめん！炎符『フレアハンドガン』！」

俺は手を銃の形にして凜乃の隙を伺って懐に潜り込み、超至近距離で発射する。

「ぎゃっ！」

凜乃は腹部に俺の弾幕を受け、少し後ろに後退する。ちよつと俺は凜乃のことを心配するが、ただのノックバックだったようだ。威力もかなり手加減してたし、水を宿していて炎耐性がかなり上がっているようで、全然平気な顔をしていた。

「凜乃、大丈夫か？」

だが、一応心配なので、凜乃に大丈夫か聞いておく。何かあったら嫌だし。

「全然大丈夫ですよ。やっぱり、炎火さんは凄いですね！」

「凜乃も凄いぞ。ここまで強くなるなんてな。あつさり俺なんて超えちゃうかもなく。」

「そんなことないですよ！私が水を扱うから有利な戦いになっているだけで……。」

実際、凜乃の才能は凄い。弓の軌道予測も矢の速度も完璧だし、格闘術の上達もめっちゃ早い。本当に、才能はピカイチだからな。

「私からしたら2人も超人だよ……。」

屋敷の方から声が聞こえ、振り向くと呆れた顔の灯乃子が俺たちの方を見ていた。その頭には、サラが乗っていて、肩にスカーレットが座っている。この一ヶ月でこいつらとも灯乃子は仲良くなった。最初見たときは驚きすぎて開いた口が全然塞がらなかったが、今では仲良くしている。

「灯乃子……それ兄に言うことか……?」

「兄さんだし別にいいでしょ?」

「その超人の妹だということも忘れてないか?」

「もしかしたら、灯乃子さんも能力を持っているかもしれないね。」

凜乃は唐突にそんなことを言う。確かに灯乃子は俺の妹だけど、俺の場合入手経路が完全に特殊だしなあ……。それは無いとは思いうんだけどなあ……。

「そ、そんなことないんじゃないかな？」

「ありえるかもしれませんが？ 幻想郷ですし♪」

急にどうした凜乃。いつからお前は風祝の巫女みたいなことを言いだすようになったんだ。

「さて、そろそろ夕方だし、買い出しにでも行ってくるか……。」

「あつ！ 私もついていくー！」

俺は特訓を終え、人里に買い出しに行った。

私は布団の中で考えていた。兄さんのように、私もそんな能力を持っているのかな？ そういえば、兄さんは転生したんだっけ。その時に能力を手に入れたんだろうなあ……。だったら、私が手に入れることなんて無理だよな……。でも、兄さんの役に立ちたいなあ……。最近、夜中に何処かに出掛けてるみたいだし……。ああもう！ 早く寝よ！

「…………あれ？ こんどころ？」

私は気がつくのと真っ白な空間の中で立っていた。本当に何もなし。ここ、どこ？ 永遠亭……ではないよね。こんなところ見たことないし。

『こんばんわ……ですね。』

私は後ろから声を掛けられ、振り返る。そこには、白いワンピースを着ていて、綺麗な黒いストレートの髪の毛の超美人な女性が、そこに立っていた。

「えつと……あなたは誰ですか？」

『あなたのお兄さんの知り合いですよ♪さて、ずっと立っていないで座ったらどうですか？』

「え？」

私は振り向くと、高級そうな椅子が置かれていた。何もなかったはずなのに……。再び振り向くと、女性も高級そうな椅子に座っていて、私とその女性の間にはテーブルが、その上には2人分の紅茶が置かれていた。私は椅子に座り、その女性のことを見つめる。

「えつと……あなたは誰ですか？」

『神様です。』キツパリ

「……………へ？」

『だーかーらー、神様ですよ？』

この人は何を言ってるの？神様って……いないと思ってるわけじゃないけど急すぎて……。もしかして、夢？私は頬をつねってみる。……痛くない。ということは夢か！

『確かに夢の中ですがこの内容がただの幻想ってことではないですよ？』

「え？わ、私何も言ってる……。」

『神様ですから、心を読むなんて造作もないですよ？』ニコツ

ほ、本当みたい……。だって、そんな簡単に心を読むなんてできるはずがないもん……。

「そういえば、兄さんの知り合いつてどういうことですか？」

『あなたのお兄さんとは認識があるんですよ。そうですね……。貴女が元いた世界から、今の幻想郷に行かせたのは私です。』

「そ、それってつまり……。」

死んだ兄さんを幻想郷に転生させたってこと……？

『そうですよ♪能力を与えたのも私なんですよ？』

「へ、へえ……。」

兄さんの能力って、本当に転生するとき手に入れたんだ。あんな凄いや能力を授かれるって、神様って本当に凄いな……。

「それで、私にどんな用ですか……?」

『あなた、能力が欲しいんですよね?』

「!」

『どうして、欲しいんですか?』

どうして? 欲しいって言うより私はどうなんだろうって……でも、確かに欲しいのかもしれない。だって……。

「兄さんの役に立ちたいから……です。」

『……本当に兄妹仲がいいんですね♪』

「……はいっ!!」

『では、あなたに私が能力を授けてあげましょう。あなたのお兄さんに比べたら劣るかもしれませんが、その方が兄妹としてはいいでしょう。』

「あつ、あの……ありがとうございます!」

『ふふつ、炎火と仲良くしてくださいね。ほら、そろそろ時間ですよ。』

「……はいっ!」

私は紅茶を飲みきり、後ろを振り返る。すると、一つのドアが存在していた。私は椅子から立ち上がり、ドアへ近付く。そして、ドアを開くと、私は光に包まれる。

『ふふつ……やっぱり、楽しい兄妹です♪』

神様は楽しそうに笑みを浮かべた。

part30 私と神様

「ん…………ふわあ…………。」

私は目を覚まし、体を起こす。…………夢は夢だったのかなあ…………。

(夢じゃないですよ♪)

「うわあ!？」

私は周りを見渡す。私以外誰もいない。幻聴?それだった私ついに頭がやばいことに…………。

(幻聴じゃないですよ?)

「えっ、ええ?じゃあなんで?」

(あなたが私の夢を見たお陰か、意思疎通が可能になりました♪あと、別に喋らなくても頭の中で会話できますよ?)

そうだったんだ……。じゃあ、やつぱりあれはただの夢じゃなかったんだ……。っていうか、神様と意思疎通できるなんて凄い?のかな??

(凄いと思いますよ?こんな事が出来るとは思っていませんでしたし。)

(あ、そうなんですか…………。)

(そうですよ♪)

思ってたより神様言動が軽い……。年上のお姉さん優しいお姉さんみたい…………。

(あら、ありがとうございます♪)

(ど、どういたしまして…………。)

考えてること筒抜けだ……。まあ、夢の中でもそうだったし、神様って本当に凄いなあ……。私はそんなことを思いながら立ち上がり、着替え始める。顔も洗い、私は部屋に戻った。兄さんが朝ご飯持って来てくれると思うから…………。

(炎火のことは見るのは久しぶりですね…………。)

(兄さんとは喋れないんですか?)

(あなたが特別だから喋れてるだけで、炎火と喋れません。)

(あ、そうなんですか。)

本当に、神様と喋れてるのは特別なんだ……。まあ、神様とそう何人も喋れたらおかしいもんね……。

「灯乃子ー？起きてるかー？」

「あつ、うん。」

兄さんが扉の外から部屋の中の私に向かって喋りかけてくる。一瞬喋り方を忘れちゃった……。心の中で神様と喋ってたらこんなことになってしまうのか……。

（メリハリが大事ですね。）

（そうですね。）

「開けてもいいか？」

「いいよ。」

私が部屋の外にいる兄さんに許可を出すと、扉が開き、兄さんが入ってくる。やはり、兄さんもちやんと着替えている。

（久しぶりに見ましたね……。前に見た時より、かなり雰囲気違います……。）

（あ、わかります。）

確かに、久し振りに兄さんを見た時、いつも過ごしていた時と比べれば、少したくましくなった……。って感じかなあ……。

「あつ、サラちゃんとスカーレットちゃんまだ寝てるの？」

「いつものことだろ？」

「確かにね。」

私と兄さんは一緒に笑う。サラちゃんは兄さんの頭の上で、スカーレットちゃんはポケットの中で気持ちよさそうに寝ている。朝から寝てるのに、昼寝をするときも多い。前からそうだったらしい。

（火龍と火の妖精ですか……。仲が良さそうですね……。）

（フレンドリーな子達ですよ。兄さんが召喚？したらしいです。）

（へえ、かなり能力を使いこなしてますね……。）

（戦闘なんて化け物です……。）

「ん？どうした？灯乃子。」

「あつ、ううん。なんでもない。」

兄さんに怪しまれちゃった……。まあ、気にしないようにしておこ



うか……。

「朝ご飯持ってきたぞ〜。」

「あつ、うん。ありがと〜。」

兄さんは部屋の外に出て、朝ご飯を持ってくる。凄いな〜……。今日も美味しそう……。また兄さんに料理教えてもらおうかな？兄さんは朝ごはんを置くと部屋の外に出て行ってしまった。

（へえ……。炎火って料理上手なんですね。）

（向こうにいる時もたまに作ってましたけど、ここまで上手ではありませんでしたね。）

そういえば前に兄さんに「なんでそんなに料理上手になったの？」って聞いたたら「ここで作ってるからも、一回に死ぬほど作る時があったからかな……。」「って、遠い目をしながら言われたことがある。（へえ、そんなことが。）

「じゃあ、いただきます〜す。」

私は朝ごはんを食べ始める。……。んん！やっぱり美味しい！プロ？そんなわけないか。私の兄さんが料理のプロなわけないね。

「〜ちと〜うさま。」

私は朝ごはんを食べ終え、台所に片付けに行く。そして、台所で食べ終えた食器を洗い終わり、庭の縁側まで歩く。

（神様。本名とかってあるの？）

昔からのちよつとした疑問。今話せるのなら、聞いておきたい。（勿論ありますよ。神なんて本名だったら嫌ですよ。）

（教えてもらっていいですか？）

（いいですよ？別に本名で呼んでもらっても構いませんし。）

（ええ!?そ、それはなんかちよつと悪い気が……。）

（気にしないでください♪）

やっぱりこの神様軽い。フレンドリーな方がいいけどなんか調子狂うなあ……。)

（もつとフレンドリーな方がいいですか？）

(えっ!? あっ、大丈夫です!)

(いいんですよ? 私これ素じゃないんでやりにくいです……。)

どんだん神様のイメージ像が崩れてきてる……。崩落が止まらな  
いよお……。私にとつて神様って……。

(私の本名は天 月渚 (アマノ ルナ) です。気楽にね? 灯乃子♪)  
(う、うん。よろしく、ルナ。)

その時、私の中で神様のイメージ像は完全に崩れ去りました。塵一  
つ残さずに。

(ねえルナ。)

(何? 灯乃子。)

やはり慣れない。神様よ、それでいいんですか? まあ、いつか。ね  
? 許可貰ったし。ね? ん? え? 私にもわからん。

(私の能力って……何?)

(『熱を操る程度の能力』だよ。使ってみたら?)

(う、うん。)

私は両手を前に出し、試しに右手に高熱、左手に冷熱を発生させて  
みる。すると、右手が凄く熱くなり、左手が凄く冷たくなる。右手は  
火傷しそうなぐらいなのに火傷せず、左手は凍りそうなのに凍らな  
い。

(使ってみてどう?)

(不思議……。)

私は思いつきで右手と左手を合わせる。すると、爆発のような空気  
の膨張が起き、私は後ろに吹き飛ばされる。

「きゃあっ!」

私は後ろに吹き飛んで転んでしまう。すると、ドタドタという音が  
廊下に聞こえ、その方向を見ると、兄さんが私の方に来ていた。

「灯乃子、大丈夫か!」

「う、うん。大丈夫。」

兄さんは私のことを心配してくれている。やっぱり、優しい。

「全く……なにやってんだ?」

「あ、あはは、ちよつとこけちやつて……。」

「全く……気をつけろよ?」

兄さんは私にそう言っただけかへ行く。

(いいの? 本当のことを言わなくて。)

(いいの。)

私は兄さんの背中を見ながら、ルナにそう言った。

part 31 環境の変化が激しい

起きたら布団の中に幼女がいた。……いやいや、断じて誘拐とか娘とかじゃない!!しかも、普通の幼女じゃない。色んな意味で。さつき起きたら、なんか布団の中が異様に暖かかったからめくってみると、赤い翼と尻尾を持った、赤い髪の幼女が、裸で俺の横で寝てた。……うん、普通におかしいですね。っていうか誰？

「えつと……君は誰？」  
「……………」

目の前の幼女は俺のことを見つめたあと、俺に体を擦り寄せて嬉しそうな顔をする。え？え？意味がわかりません。一応言つとくが口リコンじゃないから安心して。

「え……ん……か……。」  
「ん？そうだ。俺は炎火だ。お前の名前は？」  
「……………」

ん？サラ？俺は周りを見渡す。……サラいない。うわ、本当にサラか？っていうか、喋り方かなりぎこちないな。……そうだ、サラの好物をやったら食べるのかな？

「ほら、竹炭だぞ。」  
俺は竹炭を一つ幼女になったサラに渡す。サラはそれを受け取り、  
「〜♪」

ボリボリ食べ始める。うわっ、なんか変。人間が炭食べてるのがめっちゃ変。というか本当に好きだな炭。めっちゃ美味しそうに食べている。

「もっ……………」  
「ん？もっど？はいはい。」

俺はサラに更に竹炭を渡す。すると、ボリボリ竹炭を食べ始める。……ハッ！服！服！まだみんなより早起きする習慣あってよかった！仕事やんなきゃだけどこれはそれよりも最優先事項な気がする。

「……………はあ、永琳先生に相談ですな。」  
「……………」

サラは首を傾げながら竹炭を食べる。可愛い。

「永琳先生イー！」バーン

「えっあつ!?……なんだ、炎火ね。で、何か用事かしら?」

俺は永琳先生の仕事場に突入。やはり永琳先生は起きていた。一体何時から起きてるんだ?いつもあんまり気にしてなかったが、ちよつと気になる。

「あの……お願い事が……。」

「ん?なにかしら?」

「ほら、入ってきて。」

俺がそういうと、翼と手で色々隠しながらのサラが部屋に入ってくる。

「……あなた、ついに犯罪?」

「絶対に違います話を聞きましたようか永琳先生。」

〜少年説明中〜

「それで、服を作ってもらえないかということね。」

「はいそうです。」

「わかったわ。じゃあ、この子の服を作ってるから、あなたは何かで時間を潰してなさい。」

「わかりました。」

俺は永琳先生にサラを託し、朝ごはんを作り始める。さて、今日も腕によりをかけますかね。

「完成。」

俺は全員分の朝ご飯を作り終えた。うん。明らかに手際が良く

なっている。調理時間短い。もう暇な時間多いからお菓子作りにも手を染めてしまおう。いつかな！

「凜乃く。」

「あつ、はーい。」

俺が凜乃の部屋の前で呼びかけると、凜乃が出てくる。

「朝ご飯出来たから持ってきたぞ。」

「ありがとうございます。……あれ？今日は頭にサラちゃん乗せてないんですね。」

「気にしないでおくれ……。」「？」

ちなみにちゃんとスカーレットはポケットの中にいます。起きてません。寝てます。

「じゃあ、俺灯乃子の部屋に行くから。」

「はい。わかりました。」

俺は凜乃にそう言い、灯乃子の部屋に行く。と言っても、数歩歩くだけなんだけどね。10秒もかからんな。

「灯乃子く。」

「き、来た……。はーいー！」

灯乃子にも呼びかけると、灯乃子も出てくる。……が、なぜか緊張しているような顔だ。なんだろう？いつもはこんなじゃないのに。

「朝ご飯、持ってきたぞ。」

「う、うん。あのね……。」「

「うん？」

「能力手に入れた。」

「ふーん……。うえ？..」

はい意味がわからない。はあ!?灯乃子が!?能力!?あーあ普通の人間はこの世界にはいないです。怠惰巫女も人間だっけ？あいつは怠惰超えてるし幻想郷最強だしかも人間やめてる。

「ど、どうやって?..」

「神様に貰った。」

「はい?..」

「神様に貰った。あと、神様とお喋りできるようになった。」

「はい？」

今日は意味がわからないこと多いよ？っていうか神様何やってるですか……。

「はあ……こんなに驚くことでも慣れてしまってもんなんだな……。」

「ど、どうしたの？兄さん。」

「ああ、大丈夫大丈夫。」

急展開になぜか順応出来ただけです。ホント、幻想郷にいると何があるかわからんね。っていうかそろそろスカートレットさん起きてくれないですかね？

「それじゃ、朝ご飯ちゃんと食べろよ。」

「うん。」

俺はそう言っただけで部屋を立ちのく。さて、俺も朝ご飯食べようかな……。

「ふう……。」

俺は朝ご飯を食べ終えて食器類を片付けた俺は、縁側でゆったりしながら兎達の仕事の風景を見ていた。はあ……色々あるなあ……。サラが幼女になっていたり灯乃子には能力手に入れたって言われて神様と話ができるって言われたり……。神様って、俺を転生させてくれたあの女性だよな？まあ、灯乃子に神様になんか伝えてもらうか。

「炎火君。」

「へ？あ、永琳先生。」

「ちよつと来て。」

「あつ、はい。」

俺は永琳先生に言われ、永琳先生がいつも居る仕事部屋に入る。

「おお……。」

そこにいたのは、赤いワンピースを着たサラがいた。

「久し振りに頑張ったわ……。」

「えん……か……どう……？」

「えっ？あつ……かわいいぞ？」ナデナデ

「♪」

サラが俺の方に走ってきて、そう聞いてきたので、俺は頭を撫でると、目を細めて嬉しそうな顔をする。……ロリコンじゃないからな!? 「で？炎火君。どうするの？」

「勿論俺の部屋で様子見ますよ……。俺の龍ですし。」

「そうね。なんか相談あったらいいなさいよ？」

「はい。サラ行くぞ。」

俺がそう言うと、サラが俺の背中に飛び乗り、頭を俺の頭の上に置いてくる。本当。こんなところ変わらないなあ……。

「あつ、灯乃子。神様によりしく伝えといてくれないか？」

「あつ、うん。」

俺は灯乃子にすれ違いざまにそう言い、自分の部屋に戻った。



part32 突然の訪問

「えん……か……おん……ぶ……。」

「ええ？はいはい。」

「あつ！サラちゃんずるい！炎火く私も〜！」

「わかった後でやってあげるから……。」

「今日も俺は世話を焼いていた。妹紅とサラにおんぶおんぶとせがまれ……。俺は一体何なんだ……。う？あと、ちよつとサラが喋るのに慣れた。意思疎通しやすいくけど、何故朝起きたら布団の中にいるんですかねえ……。？そのせいで最近妹紅が俺の部屋に泊まることが多くなりした。俺の部屋に住むレベルです。恋人だし別にいいんだけどね。むしろ感激。」

「ほら、妹紅もう夜だから帰らないとじゃないから」

「え〜、今日も泊まる〜！」

「流石に長い。まあ、また明日の朝会いに行つてやるから。」

「うう……それなら……。」

妹紅のことを洩々帰らせる。流石に一ヶ月くらいは長い。長期休暇レベル。流石に長いです。部屋に妹紅の衣服類置かれてて困惑しています。下着くらい隠してくれてもいいんじゃないですかね……。

「じゃあね〜。炎火〜。」

「うん。また明日な。」

「ばい……ばい……。」

俺とサラは家に帰つていく妹紅に手を振つて別れを告げる。さて、晩御飯を作りますかね〜。

ドオオオオン……

「んん!？」

俺は突然の轟音に驚き、目を覚ます。急いでいつもの服装に着替える。サラが布団の中に入っていたのは気にせず、永琳先生のところに行く。

「永琳先生！何がありました!？」

俺が駆けつけると、永琳先生が弓を手に持ち、肩で息をしていた。

「はあ……はあ……月から敵が……輝夜が……。」

「!!」

俺は空を飛び、竹林を越える。嫌な予感がする。妹紅に……何かあったら……!!俺は妹紅の家に着いた。玄関のドアは突き破られていて、中に人気がない。

「妹紅!!」

俺が家の中に入って呼び掛けても妹紅は出てこない。何度も妹紅の家の中を探しても見つからなかった。俺はその後、永遠亭に向かった。永琳先生から情報を聞き出さなければ。

「今回……現れた敵はどこ誰なんですか?」

俺は永琳先生にそう質問した。妹紅と輝夜はそいつらのところで捕まっている。ならば、早く助けださないといけない。しかし、その敵を知ってるのは永琳先生だけである。俺はキレている。妹紅を連れ去りやがって……。

「……月よ。」

「え?」

「月からの使者が輝夜を連れ去って行ったわ。多分、妹紅も連れられていたのね。」

「……ありがとうございます。」

そうか、月か。………確か、裏側?だったな。今宵は新月。月は見えにくいが快晴なので見えないことはない。

「……炎火、どうするつもりなの?」

「……勿論、月に乗り込みます。」

「言っておくわ。やめておきなさい。」

永琳先生は俺に対し、真剣な表情でそう俺に言い放つ。知ってる。月の戦力がどれほどのものか。でも……。

「俺は行きます。妹紅のことを、そのままにしておける筈がありません。」

ん。」

「……そう。今のあなたには、何を言っても聞かなさそうね。」

「理解してもらえて嬉しいです。」

「でも、どうやって行くのかしら？」

「能力で無理矢理行きます。なので……霊力回復薬、何個か貰えませんか？」

「いいわよ。消費する機会もないし、ある分持って行きなさい。」

「ありがとうございます。」

俺は永凧先生から、霊力回復薬の入った袋を貰った。さて……こうしてる間にも、妹紅がどんな目に遭ってるかわからない。早く行って、救出しないと……。俺は庭に出て、深く、深呼吸する。夜だから、あいつらは寝てるといいな……。

「炎火さん！」

「兄さん！」

「えん……か……！」

「炎火さん！」

凧乃と灯乃子、そしてサラとスカーレットが俺の方に近寄ってくる。……はあ、見つけられなくなっただけだなあ……。なんで起きちゃったのかな？

「兄さん！今から月に行くんでしょ!？」

「……はあ、誰に聞いたんだ？」

「永琳先生！」

あつれ〜？俺永凧先生と会話してたの五分ぐらい前なんだけどなあ……。盗み聞きでもされてたか？

「私達も連れてって！」

「ダメだ。」

「なんで!？」

「危険過ぎる。お前達には怪我して欲しくないんだよ……。」

「大丈夫ですよ。」

凧乃がそう言った。

「炎火さんが守ってくれるでしょ？」

「……………はあ……。はいはい。わかったよ！連れてつてやるよ！連れてきやいいんだろ！全員掴まれ。」

俺がそう言うのと全員俺にくつつく。右腕に灯乃子、左腕に凜乃、背中にサラ、ポケットにスカーレットが。全員を保護しながら向かうとしたら……………まあ、今は霊力を大量に使っても大丈夫か。

「全員。絶対に離すなよ!!」

『おー!!』

「じゃあ、行くぞ!!」

俺はまず、能力を使わず、高く高く上昇していく。そして、ある以上のところまで飛んで行くと、それ以上景色は変わらなくなる。多分、博麗大結界である。

「ちよつと無理か使い方するが……………」

俺は空中に大きな炎の円を描き、大量の霊力を能力を使って使用する。すると、円の中の景色が変わっていく。

「今からジェット飛行するから、しっかり掴まってるよー!!」

「ええ?」

景色の中の円が変化し終わると、空気が思いつきり流れていき、俺は全員を包むように周りが見える程度の強化な炎の保護膜をはり、思いつきり炎を噴射して進む。

「きやあああああ!!?」

灯乃子と凜乃の悲鳴が聞こえる。ちなみには炎に酸素を使われたりせず、俺の霊力のみを依り代にしてるから、問題ない。俺達がいるのは宇宙空間のまったただ中。後ろには青い地球が浮かんでおり、前方には新月の月がある。

「わあ……………綺麗……………」

「本当ですわ……………」

「お前ら旅行に来たわけじゃないぞ……………」

俺は2人にそう言う。サラは……………また寝てる……………。こんな状況でも寝れるって、凄い胆力だな。意味がわからない。

俺は数十分間飛び続けた。もう霊力もそこを着きそうだ。しかし、もう少して月面。ここで止まるわけにはいかない!

「凜乃! 灯乃子! サラ! スカーレット! そろそろ着陸するぞ!」

『おー!』

4人は元気に返事する。いきなり戦闘になるそうな気もするが……こいつらなら大丈夫だろ。

「よし、着陸!」

俺達は月面に着陸する。……あれ? 空気がある。なんでだ? 普通なら宇宙空間の中だから空気はないはずなんだけども……。まあ、あつた方がありがたいな。

「誰だお前ら!」

どこからか声が聞こえる。銃を持ち、制服のような服装を着た、うさ耳人間。

「ごめんだけど、ここを通してもらうよ。」

「貴様達地上の穢れた者だな!? ここを通すわけにはいかない!」

プチッと俺の中の何かが切れる。穢れた? 巫山戯んな。こちとら好きでこんなところに来てるわけじゃないんだ。それにお前らが穢れない種だとかそんなことは知らない。人間を……舐めるなよ!!

「4人共! 強行突破!!」

『おー!!』

俺達は妹紅救出のための強行突破を開始した。

Part 33 突き進め。恋する人間とその仲間達

「水符『全弾発射（フルバースト）』!!」

「熱冷符『エアダイナマイト』!!」

「うわああああ!!」

凜乃は弓で霊力で作られている水属性の矢を広範囲にかつ大量に速射している。前よりも威力とかが上がってる？敵の銃弾を貫通したり、一発だけで相手を地に伏せさせている。灯乃子は……………うん。正直舐めてたのかもしれない。空気を急激に冷やし、その後急激に加熱して熱膨張の爆発で敵を吹き飛ばしている。その間に俺は1つ薬を服用する。水なしで飲みにくいけど、頑張って飲むしかない。飲み込むと、霊力が急激に回復していく。流石永琳先生の霊力回復薬だ。

「……………」ドガツバギツ

「ぐわああ!!」

「貴様！よくもうわあっ！」

サラはスペルなどを使わず、腕にエネルギーの爪で敵を殴りかかったり、銃弾を尻尾で防ぎながら薙ぎ払って相手を吹き飛ばしている。……………うん。まあ、流石火龍だよ。見た目とは全然違う。

「敵陣では油断大敵だぞー」ドドドドドド

敵の月兎が俺に銃を乱射してくる。油断大敵？油断なんかしてるわけないだろ。

「双獄炎剣『双聖蒼炎剣』」

俺は両手に蒼い剣を出現させる。そして……………。

「オラオラオラオラオラオラオラ!!」

「ええっ!?そんな……………銃弾を斬るなんて……………」

俺は炎の力で最大限まで速度を上昇させ飛んでくる銃弾を斬っていく。すると、銃弾の雨が止む。弾切れしたらしい。月兎は急いでロードをする。しかし、俺はそれを見逃さない。その間に一気に距離を詰めて斬り伏せる。

「キュツ……………」

変な声を出して月兎は倒れる。流石に殺してはない。気絶しただ

けだ。同じように、他のところから飛んできて、全て斬って溶かし、弾切れになったところを叩く。

「はあっ……はあっ……ッ！」

「うわああっ！」

灯乃子が息を切らしながら爆発を引き起こす。灯乃子は戦う機会もなかったし、俺と凜乃とサラに比べたら、スタミナがない。しかも、普段使わない能力を連続で使って少ない霊力の消費も大きい。だから、かな。負担が溜まっているらしい。

「はあ……はあ……。」クラッ

「隙ありだ!!」ドドドドドドド

疲労が溜まった灯乃子は一瞬、体がよろける。それを月兎の1人が隙について銃弾をばら撒いていく。

「灯乃子っ！」

灯乃子に銃弾が直撃する直前、赤い翼が灯乃子を覆う。翼は銃弾を全て弾き、灯乃子のことを守る。弾が切れ、俺はその隙に少々遠いが気にせず距離を詰め攻撃する。

「ありがとう、サラちゃん。」

「……うん……。」

灯乃子を守ってくれたのはサラだったようだ。ファインプレーだ。

「サラ！灯乃子と一緒に戦っていてくれるか!？」

俺がサラにそう聞くと、サラは頷く。灯乃子はこれで心配なさそうだ。俺はふと、凜乃の方を見る。そして、啞然とする。ちなみにこの時だけ高熱の炎を纏ったので銃弾は俺に届かず溶けている。

「……………」ヒュンッ！ヒュンッ！

「な、何故目を閉じたまま銃弾を回避して接近してこれるの!？」

「そこっ！水符『水弾拳』!!」

「ぎゅむっ……!!」

凜乃が銃弾を回避しながら的に接近し、凶悪な格闘技を喰らわせたのを見た。目を閉じたまま。多分、心眼？みたいなもの？波導かな？水の流れがわかるなら、波導も使えるってことか？いやなんで波導を使えるって決めつけてんだ俺……。

「水符『多弾一点集中』!!」

「!?きやあつ!!」

拳を繰り出した凜乃はその次に弓を構えて、複数の矢を同時に放つ。その矢はばら撒かれず、敵の一体にのみ命中する。これは酷い。当てられた敵は衝撃で吹っ飛ばされる。この戦いが終わったら、全員治療してあげよう……。

「そこまでだ!地上からの侵略者!」

俺達は声の方向を見る。そこには、2人の少女が。片方は紫色のポニーテールで、黄色のリボン、赤紫と白の服に、刀。もう1人は金髪で、帽子にピンクのリボン。紺色と白の服。綿月 依姫と綿月 豊姫。月の綿月姉妹だ。正直厄介だ。あまり女性と戦いたくは無いだが……。

「お前達!ここに何の用だ!」

妹の依姫が俺にそう聞いてくる。

「俺の恋人を返してもらうために来た。できれば戦闘はしたく無いんだが?」

「私の部下達に手を出しておいて何を言う!」

周りを見ると月兎の死屍累々(誰1人として死んでない)。うーん、防衛してたらこんなに倒してたのか……。

「こんなに倒してしまったのはすまない。けど、君達じゃないけど、俺の恋人が月のやつに攫われてるんだ。俺は恋人を返してもらえれば俺達は帰る。」

「……………断る。」

「なに?」

「どんな理由にしろ、地上の人間がここに来ることは許されない。それに、やられた部下達の敵、取らせてもらう!」

依姫はそう言うと、俺に刀を抜刀して、高速で斬り込んでくる。これが、抜刀切りか。俺はそれを両手の剣で受け止める。……ッ、なんて重い攻撃だ。俺は依姫の脇腹になんとか蹴りを入れる。女の子を蹴るのは好きでは無いが、そんなことを言ってる場合では無い。

「姉上!」



「わかってるわ。」

豊姫が俺の方向を向いて扇を薙ぐ。すると、俺に強烈な悪寒が走る。

「炎風『獄熱風』!!」

俺は急いで豊姫の方向に強い威力の持つ炎の風を巻き起こす。すると、炎の風は何かと激突し、俺は吹き飛ばされる。……これが、森を一瞬で素粒子レベルで浄化する風ってやつか。……めんどいな。

「愛宕様の炎!」

依姫がそう言うと、依姫は炎を出現させる。

「これは小さく見えても愛宕様の力。すべてを焼き尽くす神の火なの。これほど熱い火は地上には殆どない。」

俺はニヤリと笑う。さて、能力のこの使い方はだいぶ久しぶりだな。確か、妹紅と最初に戦ったときぐらいか?

「その炎が自分に牙を剥くってことも考えろよ?」

「?何を言っているんだお前は。」

俺は依姫の使っている炎に意識を向ける。

「……来い。」

「……?何を……!?!」

依姫の炎は俺の方に吸い寄せられ、俺の手の元に来る。

「愛宕様の力が消えた……!?!」

俺はその炎を握る。そして手を開くと、既にその炎は消えていた。「中々に熱い炎だけど……残念ながら、俺の炎も地球上には存在しない。」

「!?!」

依姫は少し怯えた顔をする。さて、さっさと通らなきゃな……。妹紅がこの間にどんな目に遭っているかわからないからな……。

「あなた……一体何者!?!」

「自己紹介がまだだったな。焰 炎火。通りすがりの炎人間だ。」

「クツ……! 祇園様の剣!!」

依姫がそう言うと、俺のことを刀が囲む。なるほど、確かに厄介けど……。

「正直、これも俺に対しては無意味。」

俺はその刀に触れる。すると、刀はどろりと溶けて、地面に流れる。まあ、一応十万度でやったけど、別にいいだろ。

「ぎ、祇園様の剣が……。」

「どうする？降参するか？正直あなた達と戦いたくは無い。」

「くっ……舐めた真似を！炎雷神よ、7人の兄弟を従え、この地に来たことを後悔させよ！」

依姫がそう言うと、降雨と落雷が発生する。そして、俺に炎の竜が襲いかかってくる。そして、俺のことを炎の渦が襲い、雷も俺のことを襲ってくる。

「……さて、終わらせますか。」

「!?」

俺は全身に力を集中させる。そして、力を……解放!!

「炎符『超炎成身』!!」

俺は炎の渦を殴る。すると、降雨、落雷、炎の渦が消える。俺の目は赤く、所々から炎が出る。

「……!?あ、姉上！」

「ええー！」

依姫が豊姫にそう呼びかけると、豊姫は扇子を扇ぐ。

「その程度お!!超炎風『超極熱風』!!」

俺は先程よりも強烈な風を吹かせる。そして、激突……。すると、俺ではなく、豊姫が吹き飛ばす。

「あ、姉上！このっ!!」

「残念だけどこれで終わりだ!!双炎剣技『焰斬り・速』!!」

俺は超高速で両手に握った剣で依姫を斬りつける。そして数秒後、依姫は他に伏せる。俺は自分の状態を解除し、剣を消滅させる。俺は、肩で息をしていた。正直、あの状態はキツイな……。一粒、靈力回復薬を飲む。そして、凜乃達の方を見ると、俺の方を見ていた。とりあえず、倒すか追い返すかをし終えたらしい。

「凜乃、灯乃子、サラ。ここは頼めるか？」

「はい、大丈夫です。」

「うん、大丈夫。ルナもいるし。」

「る、ルナ？」

「あ、神様の名前。」

……神様。何やってんだろ……。まあ、本人がフレンドリーに接せてていいんだらうけど……。

「サラは大丈夫か？」

「……………！」コクコク

「わかった。じゃあ頼んだぞ！」

俺は3人にこの場を任せ、蓬莱人2人の救出へ向かった。

part 34 その心を貫き通せ

俺は依姫と豊姫の姉妹を倒して、敵の本拠地に来た。警備の人がいて助かった。分りやすいったらありやしない。月の兎？可哀想だけど致し方ない犠牲です。……………ちゃんと言治療してあげないとなあ……………。その為には早く妹紅を連れ帰らないと……………。

「なんだお前！」

「ごめんな、ちよつとゴリ押しで通るぞ。」

「ピギツ……………」

少し高速移動をし、後ろに回り込んで当て身。すると、警備の月の兎は倒れてしまう。さてと……………。俺は扉を蹴る。勢いよく扉は開き、俺は中に入っていく。

「ふっふっふ……………来た来た……………。ついにお前らの出番だぞ……………」

「ハイ……………ゴ主人様……………」

「ゴ主人様ノ仰セノ通りニ……………」

たくさんスクリーンのある部屋で、笑みをこぼす男が座っており、黒髪の着物の女性と、白髪の赤と白の服をきた女性が立っていた……………。

「うーん……………この部屋は？」

俺は部屋を探索していると、一つの部屋を見つけた。他の部屋と扉は一緒だが、なんだか雰囲気が違う気がする。俺は扉を開き、中を開く。そこには、大量のスクリーンが置かれている部屋。……誰かがいた形跡があるけど、もういないみたいだな。こんなとき、スカールレツトがいれば……と思ったが、自然物は全然ないから無理か……。早く見つけないと……。

（約十分後）

「……多分、というか絶対ここだな。」

俺は他の扉より人一倍でかい扉の前に立っていた。俺は一つ深呼吸をする。少し、恐怖もある。けど、やるしかない。絶対に、妹紅を取り戻してやる！俺は両手で重々しく扉を開く。奥には、1人の男が1人。

「ふっふっふ……ようやく来たか。待ちくたびれたぞ。それにしても、綿月姉妹を倒してしまふとは驚いたな。」

「……お前が今回の事件の首謀者か。」

「いかにも。私の名前は八百 瑠輝。よろしく。」

「お前とは親睦を深めるつまりはさらさらない。お前は、俺がここに来た理由ぐらいわかるだろ？」

「恋人と世話役として世話をしてるやつを取り返しに来たんだろ？」

「わかってるならさっさと返しやがれ。」

「それはもう無理な話だな……。」

男はパチンツと指を鳴らす。すると、別の扉から2人の女性が。片方は見慣れた黒髪ロングに、見慣れた和服。もう1人は、白髪に、赤と白のリボンと白シャツと赤のもんぺの、俺が愛している女性。その2人の目には、自我の光はない。蓬萊山 輝夜と、藤原 妹紅。片方は、俺が世話をしている童話の中の姫。片方は、俺が恋した女性。2人とも、目に光がない。

「この2人は私が洗脳させてもらった。」

「!?なんだと!!」

「2人とも……特に、お前の恋人は洗脳するのに時間がかかったがな……。」

「……………ッ!!」

俺は力強く拳を握る。こいつだけは絶対に……許さない!

「さあ、2人とも!あいつを殺せ!」

『ハイ、ゴ主人様。』

妹紅と輝夜は俺に襲いかかってくる。俺は横に飛び回避した。そして、輝夜が再び襲いかかってくる。それを俺は……

「ふっ!!」

「キユウ……………」

腹に思いつきり蹴りを入れる。すると、輝夜はそのまま地面に落ちた。多分これで洗脳は解けたな。……………暫く目を覚まさなさそうだけど……………」

「お前……躊躇しないんだな。」

「輝夜は慣れてる。」

普段から悪戯されてお仕置きしてるような感じだから、特に抵抗はない。けど、問題は……………」

「そうか……………しかし、恋人に攻撃することはできないだろう?」

瑠輝がそう言うと、妹紅は俺に殴りかかってくる。俺はなんとか受け止める。俺は、妹紅に攻撃できない。まだ訓練とかに付き合ってくれてたときは大丈夫だったはずだ。しかし、途中から妹紅のことを攻撃できないので、妹紅は訓練に参加しなくなった。それからどんな、手を挙げることができなくなった。

「妹紅!目を覚ませ!」

「……………。」

俺が呼びかけても、妹紅は何も反応してくれない。

「……………。」

「ぐはっ!」

妹紅は拳を受け止めている俺の腹を思いつきり蹴ってきた。俺は手を離し、後ろに少し後ずさる。妹紅はそのまま前進してきて、俺に

腹パンをしてくる。

「はあ…はあ…妹紅！目を覚ましてくれ！」

「……………」

妹紅は何も反応しない。虚ろな目のまま、俺のこを見つめる。その目からは、自我を感じず、ただの人形のようなだった。俺はそんな妹紅を見て、怒りが湧いてきた。妹紅を連れ去り洗脳した溜輝と、妹紅を守れなかった俺に。

「いいぞお!!もつとやれ!!」

妹紅はその声に応じて、俺にどんどん攻撃してくる。それを俺は、反撃できずに躲すことしかできなかった。俺はどんどん体力を消費していく。しかし、妹紅の動きは、一向に衰えない。多分、洗脳されてるせいで疲労とかを感じなくなってる。

「……………」

「!?!」

一瞬疲れて体が止まり、妹紅の蹴りが命中する。壁に叩きつけられ、全身の骨が碎ける音がした。左腕も脱臼している。俺は吐血する。そろそろ本当に……。…みんなには悪いけど、この方法を取るしかないな。

「……………」

「はっはっは!!死ねえええ!!」

妹紅は拳を繰り出す。妹紅の手は、高速で俺の方に高速で飛んできて……。俺の腹を思いつきり貫通した。

「…………ゴフツ…………」

俺は血を吐く。妹紅にかけないようにして。妹紅はその手を抜こうとする。しかし、その前に、俺は妹紅を抱きしめる。これが俺の最後の抵抗。

「も…………う…………自由に…………生きて…………くれ…………」

俺は定まらない思考の中、必死の思いで作った精神的干渉不可の炎で作りあげたりボン。それを、妹紅の頭につける。

「にあっ…………てる…………ぞ…………も…………こう…………」

「…………あれ?…………は…………?」

俺は妹紅が自我を取り戻したのを確認すると、テレビの電源を消したかのようにプツンと視界が途切れ、意識を失った。

私は家でゆっくりしていると、誰かわからないやつらに当て身をされ、気を失ってしまっていた。その間、夢ではないけど、現実でもない、暗い暗い場所にいた。そこに、知らない男が入ってくる。その男は私の体を奪おうとした。私は抗った。けど、抗いきれなかった。男に私の体は奪われ、私の意識はそこから消えた。

「……………あれ？……ここは……………？」

私は意識を取り戻すと、何も知らない空間にいた。そして、私の腕は……………何故か、私が恋した男性のお腹を貫いていた。



「……ハ……ハッハッハッハッハ!! ついに死んだぞお!! これで地上は恐るるに足らず!! そして、この美しい女性を!! 私の玩具として利用することができるぞ!! ハッハッハッハ!!」

後ろで知らない男が笑っていた。近くに気絶した輝夜が転がっている。

「炎火! 炎火!!」

私は炎火から腕を抜き、肩を揺さぶって声をかける。しかし、私の愛した炎火は、反応してくれなかった。お腹から大量の血が流れ続けている。頭に違和感を感じ、触ってみる。すると、何かがつけられていて、見てみると、赤く、可愛らしく、何故か炎火みたいな温かさがある、リボンだった。

「な、何故洗脳が解けている!?!」

「……………」

私は後ろを振り向く。炎火が死んだのは……こいつのせい……私には……こいつを……。

「絶対に許さないいいい!!」

私はその男の首を掴み、地面に叩きつける。ピキツとヒビが入る音がする。頭蓋骨にヒビが入ったんだろう。そのまま腕を掴み、炎で燃やす。男の右腕が燃え尽きる。

「もう……やめ……」

「絶対に殺してやる……………!!」

私は男を踏みつけ、最後にもう一度地面に頭を叩きつけようとした………が、それはあることに遮られる。

「……………」

何かに足を掴まれ、後ろを振り返ると、炎火が、私の足を掴んでいた。まるで、「殺してはいけない。」と言っているように。炎火は、命を奪うことをとても嫌っていた。命は大切にするもの。炎火はそう言っていたことがある。私は男を離れた。そして、炎火を抱きしめる。

「炎火が死んだら意味……ないでしょ……!」

私は少しずつ、涙を流す。あの男の仕業にしても、私は、恋人を、こ

の手で、殺してしまった。

「……グスツ……炎火あ……死なないでえ……えつぐ……。」

私は炎火を強く抱きしめる。何か……死なせないために何か……。

「ついたぞ、ここだー!」

「あつ妹紅さ……に、兄さん!!」

「炎火さん!!大丈夫ですか!」

すると、部屋の中に灯乃子ちゃんと凜乃ちゃんが入ってくる。それにもう1人、紫色の髪と刀を持ったポニーテールの女性。

「妹紅さん!ここわかりますか!?!月ですよ!」

「え……月!?!」

なんで炎火達は月に?というか、なんで私はここに?

「……まだ生きてる!でも、このままじゃ!」

灯乃子ちゃんはそう言う。でも、こんな傷じゃどんな治療をしても意味が……。

「1つ……生き延びらせる方法が。」

ポニーテールの人がそう言う。

「!?教えて!!早くしないと炎火が!!」

「……蓬菜の薬です。」

「!?!」

蓬菜の薬。大昔、私が飲んだ、不老不死になる薬。でも、あれは永琳にしか作れないはず……。

「1つだけ、昔八意様が作った蓬菜の薬が私の手元にあります。どうしますか?」

「勿論、飲ませ……。」

私はそう言おうとして、言うのを止める。私はこの薬のせいで、色々な苦しみを味わってきた。親しくなった人との別れが、何度もあった。そんな苦しみを、炎火に味わって欲しくない。けど……。炎火と別れるのだけは嫌!!恋人だから!死んでほしくない!!

「飲ませる!!薬を願ひ!!」

「……わかりました。どうぞ。」

紫髪の人は私に、一粒の薬を渡す。それを私は口に含む。そして

………炎火の口に移す。口移し。私は舌で薬を炎火に押し込む。

「じ、情熱的……。」

灯乃子ちゃんはそんなことを言ってるが、今は気にしてる場合じゃない。私は炎火から口を離す。数秒の間。私には、その時間がとても長く感じた。そして、炎火の傷が、どんどん癒されていく。一分近く経つと、完全に治る。そして………。

「………ありがとう妹紅。そして、ただいま。」

「………おかえり炎火ああああ!!!」

私は号泣しながら、炎火に抱きついた。

## コラボ3rd エスカルゴの妻と子供

俺達は月から戻って来た。どうやら俺は、死にかけて、妹紅によって蓬萊の薬を飲んで蓬萊人になってしまったようだ……。でも、正直全然悪く思っていない。妹紅の今まで不老不死による苦しみを、俺も背負ってやることができる。この話はあまり広がっていない。というか広がらせない。文？そんなやつ知らん。黒焦げになった女鳥なら知ってます。

「炎火、買い出しに行つて来てくれない？あと、何人が誘つて。」

「わかりました、永琳先生。」

俺は永琳先生に買い出しを頼まれた。妹紅と凜乃と灯乃子、あとサラも連れて行くか。俺は3人を誘って買い出しに出かけた。……てる、サボらないかなあ……。

『ただいまー。』

俺達は買い出しから帰って来た。ちゃっかり妹紅もいるが、全然気にしない。というか、むしろ嬉しい。妹紅と一緒にいる時間が多い方が、嬉しいからな。

「炎火く、エスモゴツ」

てるの声が聞こえたが、途中で誰かに遮られたようだ。っていうかあの悪戯兎またサボってんのか!?

「なんだ？またサボってんのかて……うわあ!?!エスカルゴじゃないか!!」

「よっ、久しぶり。お邪魔してるぜ。」

てるの口を塞いでいるのは、別の幻想郷から迷い込んできた男の吸血鬼、エスカルゴ・スカーレットだった。

「い、いらっしやい……。」

正直困惑しかない。もうこっちの幻想郷に来るの3回目ぐらいかな？というか、タイミングが結構ジャストだな。まあ、俺の仕事の時間とかは把握してるっぽい？

「あれ？鈴仙がもう1人？」

「こんにちわ。」

俺は鈴仙がもう1人いることに気付いた。なんだかいつもの鈴仙と雰囲気が違う？あ、そっか。

「ああ、エスカルゴの彼女の方か。」

「えへへ……。」

エスカルゴの方の鈴仙は少し顔を赤らめる。エスカルゴと付き合っていることが嬉しいのだろうな。まあ、そりやそうだよな。恋人なんだもの。

「ホントだ！久しぶり！」

「うん！久しぶり！」

妹紅も久しぶりエスカルゴと会えて喜んでるようだ。まあ、驚きはしたけど、嬉しいからな、俺も。

「エス……カル、ゴ？」

「う、うん、そうだよ。えっと、君は？」

「サラ……。」

「!?」

サラがそう言うと、エスカルゴは口をあんぐりと開け、目を丸くしていた。そうでした。エスカルゴはこのサラとまだ出会ったことがなかったんです。

「ほ、ほう……。とりあえず、深くは聞かないでおくぜ、炎火……。」

「助かる……。」

正直、俺でもなんでこうなったのかわからないからな。聞かれると説明がかなり難しいというか不可能だろ。だって俺もわからないし

サラに聞いても分からなかったんだからな。とりあえず、その場は落ち着いた。

「あのっ、エスカルゴさん、お久しぶりです！」

「おお、凜乃じゃないか。久しぶり。」

エスカルゴと凜乃はお互いに挨拶する。そういえば、凜乃はエスカルゴがまだこっちにいるときに迷い込んできたんだよな。多分、外の世界から迷い込んで来たんだろうなあ……。でも、どうしてこっちに来たのかはわからない。……。いつかは、凜乃は記憶を取り戻すのかな？

「……………」

「……………」

「……………こんにちは。」

「……………こんにちは。」

エスカルゴと灯乃子はお互いに、何故かぎこちなく挨拶をする。あ、そっか。エスカルゴと灯乃子は初対面だっけ。

「そうだ、言い忘れてた。エスカルゴ、そいつは俺の妹なんだ。」

「妹!？」

俺の発言に、エスカルゴはとても驚く。まあ、俺に妹がいることは知らないんだっけ。まあ、言ったことないもんな。言う必要もあの時は無かったし。

「焰 灯乃子です。よろしくお願いします。」

灯乃子はエスカルゴに、丁寧な挨拶をする。まあ、年上？だから、敬語は当たり前か。

「ご丁寧にも。吸血鬼のエスカルゴ・スカーレットだ、よろしく。タメでいいよ。呼び捨てで構わない。」

「わかった。私のことも呼び捨てでいいよ。」

「OKだ。」

「ところで、さつきから聞きたかったんだが。」

「ん？」

俺は、さつきからずっと、かなり気になってることをエスカルゴに質問した。

「お前の膝に寝てる、その子は……？」

エスカルゴの膝では、すうすうと寝息を立てて寝ている小さな女の子がいた。鈴仙のような顔立ちと髪の毛。そして、吸血鬼のような翼が、背中から生えていた。

「そう、今日はこの子についての用事があったんだよ。……巫月、起きなさい。」

エスカルゴは、膝で寝ている巫月という名前らしい女の子の頬を優しく突つつく。すると、その巫月という子は、目を覚まし、軽く欠伸をする。

「ん……おはなしおわったの？」

「まあね。さ、自己紹介だ。」

「わかった……。」

巫月ちゃんは、向こうの鈴仙と、エスカルゴの間にちよこんと座る。……なんか、この光景、親子とその子供だな。

「みつき・うどんげいん・すかーれつとです……よろしく……ふわああ……ねむいよお……。」

巫月ちゃんは眠そうにエスカルゴに抱きつく。なんか、微笑ましい光景。

「あら……。えーと、勘のいい奴ならわかってるだろうけど、この子は俺と鈴仙の娘だ。」

『ええええええええええええええ!!』

俺と妹紅は、全く同じタイミングで、大きな声を出して驚く。考えてみればそうだ。優曇華院にスカーレット。誰が父親で誰が母親か一瞬で想像がつく。

「驚くわよね。」

「そりゃ驚くだろー!というか、フランは!?レミリアは!？」

「フランやレミリアとは今までと変わらずだ。子供作ろうなんてしてないぜ。」

「そ、そうか……。」

驚きしかねえ……。というか、いきなりそんなこと言われたらびつくりするに決まってるだろ。

「ねえ兄さん。エスカルゴって何人彼女いるの？」ボソツ

灯乃子は俺に小声でそう聞いてくる。多分、エスカルゴには聞こえてるだろうな。吸血鬼は地獄耳らしいから。……デビルイヤーは地獄耳。

「え？確か3人……だったよな？」

「多つ……。」

フランとレミリア、それに目の前の鈴仙の3人だったはず。……外の世界だったらマジで誰かに裁判にかけられても全然いいはず。認めてるのがとても驚き。

「うんそう、3人」

「5人よ。」

「あつ、おい。」

『はあああああああああああ!!』

鈴仙のカミングアウトで衝撃の事実が発覚しました。5人!!5人!!5人!!ガチハーレムがいつの間にか誕生していた!!驚きしかない!というか他の2人も許可もらって付き合ってたんだろうなあ……。

「おいエスカルゴ!今度は誰に手を出したんだ!」

「あ、文と霊夢……。」

「へ、へえ……文と……れ、霊夢ううう!!あの怠惰巫女か!」

「ま、まあな……あはは……。」

そういえば、こっちの霊夢は更に怠惰を極めて来たなあ……。俺に何回買い物頼んだことか……。

「女たらし……。」ボソツ

「おいっ……。」

それは多分本人までもが思ってるレベルで周りに思われてることだ。言わないでさしあげてくれ。……エスカルゴ、これを男から言われてたらキレるんだろうなあ……。

「だって、5人も彼女作るなんておかしいでしょ。女たらしじゃなかったら何なの?」

「やめろっての。」

いつから灯乃子はこんなに口が悪くなったんだ?まあ、俺のいない



間に変わっていても、文句は言えないな。俺がいなくなったんだし。「…まあ、そう言われても仕方ないよな。そんなのは誰よりも俺がわかっている。…それでもこっちは話し合いで解決している。余計な口出しは無用だぜ。これ以上増やそうとも思っていないし、増やしたくない。」

…まあ、そうだろうな。けど、お前のこれ以上増やしたくもなあって発言、かなり説得力無いからな？多分告られて断れなかったパターンが成り立ってますねこれ……。

「ふーん。泣かせたらタダじゃ済まさないわよ。」

「わかっている。泣かせない為に…自分を犠牲にしてるんだよ、俺は。」

『……………』

全員が黙り込み、この場はかなり気まずい空気が生まれる。灯乃子の言っていることは正論ではある。けど、エスカルゴにもエスカルゴなりの事情があることは、少しの間一緒に過ごしていた俺も、妹紅も理解できていると思う。そういう性格のやつだからな、エスカルゴは。

「彼女は1人…それが普通だもんなあ…。人間は…。」

「吸血鬼に、人間の何がわかるの?」

「いや、わかるよ。元人間だし。」

エスカルゴの何気ないその発言に、向こうの幻想郷メンバーを除く全員が、目を丸くする。

「え…お前が元人間?冗談だろ?」

「こんな冗談言って何の意味があるよ?」

そしてエスカルゴは、自分が幻想入りした過去を話し始めた。高専と言った後に寺子屋、と言ったのは妹紅達に伝わるようにするためだろう。というか、高専生だったのかエスカルゴ。まあまあ頭良くないと入らないよな?高専って。

「寺子屋帰りに薬…ねえ…。」

「高専生だったの…!?超頭良いんじゃない?」

「俺はそれでも下の方だったけどな。」

エスカルゴはそう言ったとき、少し嫌そうな顔をした。…エスカ

ルゴは、相当外の世界の生活が嫌だったらしい。俺は………………。まあ、今は考えないでおこう。

「吸血鬼化したエスカルゴを幻想郷に連れてきたのは紫さん、か…。ホントあの人はよくやるよなあ。」

「そうだな。俺の弟まで連れてくるしな。」

「えっ、そうなのか？」

エスカルゴに弟がいたことがおどろき。お互いに下の子が居たんだな。

「弟はヒビキつつーんだが、天狗になる薬とやらを飲んで白狼天狗になったんだ。そして、俺と同じく紫さんの力によって幻想入り…。今は白狼天狗最強と謳われ、犬走 椀と付き合ってる。」

「へー…凄いなあ…。」

白狼天狗ねえ……。妖怪の山には全くいいほど行っていないからなあ……。鬱陶しい新聞記者としか天狗は接点がないっ！……。エスカルゴは、俺達に親しい人にしか話さないようなことを話してくれたよな。今まで、灯乃子にしか話したことなかったこの話。いつそ、この場で話してしまおう。

「エスカルゴが幻想入りした経緯を話してくれたし、俺も話すとしてしよう。」

俺がそう言うと、妹紅を含め、全員が俺の方を向く。まあ、そりやそうだよな。

「ザツクリ言うと、一回死んで、神様に転生させてもらったんだ。」

「ええ……死んだのか。」

えっと……車に轢かれてだな。まあ、人の命を助けたし、後悔はない。

「死んだと思ってた兄さんが、私が迷い込んだ先であるこの幻想郷で、元気に暮らしてたと知った時はとても驚いた。」

正直なところ、俺の方がびっくりした。いきなり妖怪に襲われてるし……。行くのが遅かったら、もう灯乃子はここにはいなかったかな。

「死……か。死ぬのは嫌だな……。」

「そりやそうだよなー。でも、吸血鬼はそう簡単には死なないだろ？病気なら永琳先生が治せるんだし。」

「そう…だな。でも俺はそんなに長生きは出来ないかもしれない。この幻想郷から帰って、何回も死にかけたぜ？3回位かな。」

「お前程の実力者がか？」

カルゴ「ああ。地霊殿に遊びに行こうとした時は勇儀さんの相手をして…腕とか色々吹っ飛んで、骨とかバツキバキに折れたりしたけどギリ勝った。」

「おいおい……。」

さき、3回も……。と思っただけど、俺も死にかけた経験あるからなんも言えねえ。ちなみに、俺の右腕、治そうと思ったら治せるけど、戒めとして、治さないようにしている。

「なんで人間の炎火が勇儀さんに勝てたのか不思議でならねえよ。」

「あれは……リミッターが外れてたって感じでさ……普通の状態では勝てないよ。」

今ではどうかは分からないがな。あの人の怪力はほんと怖いよな。勝てる気がしなくなってきた。

「リミッターねえ……。キレてても自分をコントロール出来るのが羨ましいよ。」

「…何かあったのか？」

エスカルゴはそれを俺に話してくれた。どうやら、文が天狗達に拘束され、助けに行ったところ、真つ二つに切られたようだ。で、再生したと。意味がわからん。で、エスカルゴはキレたらしい。暴走して、地面は抉れ、森は一部消し飛び、山も少し抉れたらしい。抑えなさいよ(汗)。

「それで、また記憶が途切れて…気付いたら紅魔館のベッドの上だった。後から聞いた話だが、引き分けに持ち込んだらしい。」

「そんな事あったんだな…。今度修行として天魔に挑んでみようかな？」

「悪い事は言わねえ。やめろ。死にたくないだろ。」

エスカルゴが、俺に声を鋭くしてそう言い放った。

「そりゃ死にたくないけど、向こうだって手加減くらいするだろう？」  
訓練程度の戦闘だったら、本気でやることはないだろう。そう思っ  
て俺はそう言ったが、

「文とはたてから聞いたが、手加減してても自分のテンションが上が  
ると力を解放するんだとよ。俺ん時もそうだったな。勇儀さんが文  
以上のスピードで移動し、尚且つ剣まで使うとしたらどうだ？もちろ  
ん素手でも超強いんだぞ。」

「バケモンだろ。」

俺は思ったままそう言った。そんなんチートやチート！あつ……  
ごめんなさい大気圏突き抜けたことある俺が言うことじゃありませ  
んでした。エスカルゴはその後、不慮の事故から幼児化して、その状  
態で天魔に挑んで勝利したらしい。エスカルゴの話だと、能力等はそ  
のまま、体は小さくなったので、避けやすくなり、勝てたらしい。  
「へー……2人の戦うところ見てみたいな。」

会話の途中で、灯乃子がそう呟いた。やめてくれ、俺が死ぬ。いや  
もう死なないんだけど。

「ダメだね。今は、分身に力使ってるから4分の1の力しか残ってな  
い。」

「分身って……どこに？」

「俺らの幻想郷に、俺ら3人の分身を置いてきたんだ。こつち来るつ  
て言ったら他の皆もついてくるだろうしね。」

分身か……俺もやったことあったな。対狂気フラン戦で。あ  
の時はやばかった……。

「あれ？そういえば何しに来たんだっけ？」

「炎火、妹紅。このペンダントと同じやつをもう1つ……巫月の為に  
作ってはくれないか？」

「わかった。時間かかるけど大丈夫か？」

「夕方の6時に迎えが来るんだが……間に合うか？」

「うんー！」

俺と妹紅は立ち上がる。この作業、別室でやらないと危険だから  
なあ……。

「炎火……。」

すると、サラも一緒に立ち上がる。サラもいてくれると助かるな。さて……

「てゐはそろそろ仕事に戻ったらどうだ？」

俺はてゐにそう言った。こいついつもサボってんな。

「は、はーいー！」

てゐはそう返事すると、仕事場の方へ走っていった。俺達も別室へ移動して、作業を開始した。

◆？

「おまたせ。」

「できたよ。」

俺と妹紅とサラは作業を終えて、エスカルゴ達のいる部屋に戻ってきた。

「おお、2人共！巫月、出来たぞー！」

エスカルゴは喜びながら娘のほおを突っついて起こす。

「…ふわああ…。ぺんだんと…できたの？」

「できたよ。はい、どうぞ。」

俺は巫月ちゃんの上にペンダントをかけてあげる。

「ありがとう！」

「どういたしまして。」

「みてみて！えすかるごとおそろいだよ！」

巫月はそう言いながら喜ぶ。うんうん、子供が喜ぶんでいるのほとてもいいね。

「ね、そろそろ…。」

「だな。炎火、俺らはそろそろ帰るよ。」

「おう。」

エスカルゴ達は、屋敷の外に出る。俺達も、見送るために屋敷の外に出る。

「急で悪かったな。今度は手紙か何か書くよ。」

「わかった。確かにそうしてくれた方が助かる。」

「また、色んな話聞かせてね！」

「はいよ。」

どうやら、灯乃子はエスカルゴと仲良くなることができたようだ。仲悪いと俺が困るから、なんか安心したぜ。

「どくもく。」

すると、紫が姿を現した。絶対に驚かん。というか真面目な話慣れたんだよなあ。

「ほら、もう閉まっちゃうわよ。」

紫はそう言ってエスカルゴ達に早く通るように呼びかける。次元にスキマ開くって負担すごそうだしな。

「あ、はい！それじゃまたな！」

「バイバイ！」

「ばいばい！」

エスカルゴ達は、手を振って別れを告げる。俺たちもそれに反応して、手を振って返事する。そして、スキマは閉じてしまった。

「行っちゃったね。」

妹紅がそう呟いた。

「そうだな。さて、仕事仕事ー！」

俺はいつも通りの日常に戻った。

part35 男を魅惑してしまう女の子

私は、もう生きてるのが辛かった。

私の名前は林野 蜜音(はやしの みつね)。私は、何故かはわからないけど、無意識的にフェロモン?をかなり多く分泌してしまう体質らしい。私はこの体質に、感謝したことは一度もない。

この体質が現れたのは、私が小学六年生のころ。プールの授業のとき、着替えて出てきた私を、体育の先生が襲ってきた。何も抵抗できずに、誰もいないところで襲われ、私は、されるがままだった。色々な検診を受けて、フェロモンが多く分泌することがわかった。

私は中学高校と、女子校に通った。けど、私はトラウマのせいであまり人と接しなくなった。私は、生まれた時から虫達と話すことができた。虫は私を襲うことはないし、虫達は友達だったので、それもあって更に人と関わりが少なくなり、イジメられた。

学校に行ったら花が挿されている花瓶が置かれていたり、机に落書きをされたり、その机や椅子を捨てられていたりされた。日に日にイジメはエスカレートしていき、私はもう、限界だった。

私は海の堤防で、海を見ながら立っていた。これで、私は楽になれる。私はそう思って、私は海に飛び込んだ。体を浮遊感が包む。非常に息苦しい。けど、これで解放される。私はそう思い、目を閉じた。





「ん……んん……。」

目を覚ますと、そこは森だった。私は海に飛び込んで死んだはず。けど、生きてる。服はずぶ濡れではないが少し濡れている。つまり、私は海には飛び込んだ。けど、死ななかつたということになる。すると、足音が聞こえる。

「……………誰？」

私は真つ暗闇の森の中、足音の方角に対してそう問いかける。すると、闇世の中から、異形の生物が数匹現れた。異形の生物は、狼のような姿をしていて、口からは涎を垂らしている。

「ウオウ!!」

「きやあつ!!」

異形の生物は、私に対して飛びかかってきた。私は上半身を起こして、横に転がる。その異形の生物は、私がいた場所にもういた。異形の生物は、何をしようとしているのかわかった。私は立ち上がり、全力で走り始めた。

「バウツバウツ!!」

そう簡単に獲物を逃す野生の生物はいない。当たり前だけど、異形の生物は私を追いかけてきた。死のうとして海に飛び込んだのに、死にたくなくて逃げている私を、私はとんでもなく自分勝手だと思った。でも、結局死にたいと思ったのは、嘘だったのかもしれない。

「はあ……はあ……!」

私は全速力で走り続ける。けど、その体は後ろから何かに押されて勢いよく倒れこんだ。そして、うつ伏せで倒れている私の体の上に、数匹の中の一匹がのしかかってきた。

「へっへっへ……。」

異形の生物の犬のような呼吸の声に、近くに落ちてくる涎で、私はとても怖くなって、体を強く動かした。けれど、高速は解けず、依然

として強く押し付けられる。

傲慢かもしれない。けど、お願い。神様。私に『生きる力』をください！死にたいと思うことがない力をください！！

『グラスホッパー』

私の頭の中に、そんな単語が現れた。そして、私の足に少し電流のようなものが流れたように、痺れが走った。そのあと、痺れが消えたと思ったら、大きな力が私の足に溢れてきた。

「えいつ!!」

「キャンッー」

私は限界まで体を捻って、押し付けている異形の生物にバツクキツクを繰り返す。すると、あれほど強く押さえつけられていたはずなのに、軽く吹き飛んでしまった。私は急いで体を起こし、立ち上がる。「グルルルルル……。」

異形の生物達は、牙を剥き出しにして、先ほどよりも敵意を示している。グラスホッパーって……バツタ？だっけ？そんなことを考えていると、3匹同時に飛びかかってきた。私は反射的に右脚を使って思いっきり回し蹴りを繰り返していた。

「おりゃあ!!」

3匹のうち、右2匹には距離が足らず当たらなかったが、ブオンツ!!と音と一緒に風圧が発生して、吹き飛ばしてしまった。そして、足が移動してる間に、ちょうど命中する場所にいた1番左にいた個体に、途轍もなく嫌な音を発して命中する。

「キャンッ!!」

すると、そのまま吹き飛んでいき、木に激突した。ピクピクして、動かない。

(ぐめんね……。)

私は心の中で謝りつつ、まだ残っている2匹に目を向ける。よくまだ理解してないけど、この『グラスホッパー』の力を使えば倒せることはわかった。なら、ここで倒して逃げるしかない。そうすれば、生きることができる。

「えーい!!」

私は2匹のうち、右側にいる個体に移動を開始して地面を一蹴りする。すると、地面は抉れ、一蹴りだけで距離を詰めることができた。私は自分のスピードになんとか思考を追いつかせ、頭を蹴り上げる。すると、頭を一番上にして体ごと空中に浮いた。そして、落下を開始して、私は落下に合わせて右から左に蹴りつける。すると、左にいる個体にぶつかる。

「んっ!!」

ぶつかって目を絡ませている2匹はまとまっている。私は地面を蹴り、大きく跳躍する。空中で1回転したあと、怯んでいる2匹に狙いを定め、飛び蹴りの体勢を取る。かなりの勢いで加速し、そのキックは、まさにラ○ダーキックと命名されても不思議ではない威力で2匹に命中。重い音を上げて、2匹纏めて命中し、大きく吹き飛び、遠くで気に重くぶつかる音がした。

「はあ……はあ……勝てた……。」

私は立ったままそう呟いた。すると、この力を使い始めて5分。足に今まで感じたことのない激痛が襲ってきた。

「あああああ……!」

私は痛みに耐えきれなくなり、意識を手放してしまった。

part 36 魔法と虫

ある夏の日の朝。やることがないから私はものが散らかった家を出た。暇だし、霊夢のところにも遊びに行こう

「うへえ〜……早朝でも暑いんだぜ〜……。」

夏は魔法の森はただでさえ湿気が多いのに夏のせいでいつもより暑いんだぜ。私は箒にまたがり、空を飛び始める。空を飛んでると風で涼しくて気持ちがいいんだぜ。とりあえず霊夢のところでお茶でも飲もう。そんなことを考えていたら、魔法の森ではないが、胞子は恐らく届く場所に、1人の女の子が横たわっていた。私は降りて、その女の子の元に駆け寄った。

「おい！大丈夫か!？」

その女の子は息苦しそうに息をしていて、汗を大量にかいていた。近くには、狼型の妖怪が、木にぶつかり息絶えていた。

（そんなことより……早く運ばなきゃなんだぜ！）

私は急いで箒の後ろに女の子を自分の家まで全速力で運んだ。



不思議な夢を見た。暗い暗い、何も見えない真っ暗な空閑に、私は1人で立っていた。すると、目の前の暗闇から、3人の私が現れた。1人は、仲よさそうに、手にトノサマバツタを乗せている、目が緑の私。1人は、体の周りを元気にオオスズメバチが飛んでいる、目が黄色の私。1人は、肩に大きめのカブトムシを乗せた目が赤い私。

「……………これから、宜しくね。」

「……………」コクリ

私達は前に足を進め、重なり合った。

◆?

「ん……………」

気がつくと、私は見知らぬ天井が目に入り、地面ではない、柔らかなところに横になっていた。……………なんだか、不思議な夢を見た気がするのだけど、全く思い出せない。

「おっ、目を覚ましたんだぜ。」

すると、私の左側から声が聞こえた。そっちの方向に振り向くと、黒と白の服を着た、金髪の女の子が座っていた。ここの家の子なのか？

「えつと……あ、ありがとうございます。」

私は金髪の女の子にお礼を言った。確か、私は足の痛みには耐え切れなくて気を失ったので、恐らくこの子が私をここまで運んでくれたのだと思う。この女の子は、私よりも小柄なので、とても大変だったと思う。

「全然大丈夫なだけ。それより、お前はなんだぜ？」

「あ、えつと……林野 蜜音です。」

「そうか！私は霧雨 魔理沙！普通の魔法使いだ！」

「普通の……魔法使い？」

魔法使いという単語に、私は酷く混乱していた。魔法使いってあれ？エ○スペクトパト○ーナムとか言って魔法使うやつ？

「えつと……冗談……ですか？」

魔法を使えるなんて常識的に考えて有り得ない。普通の魔法使いって、魔法使いの時点で全く普通じゃないし……。

「あっ！お前もしかして外来人か！」

「えつ……？えつと……よくわかんないけど、多分そうです。」

「なるほど！じゃあお前に魔法を見せてやるぜー！」

そう言っつて、魔理沙さんは私の腕を引っ張って外に連れていこうとした。私はそれにつられてベッドから足を下ろした。すると、私の足に大きめな筋肉痛が私を襲い、思わず顔をしかめた。

「ん？どうしたんだぜ？」

「あの……筋肉痛で痛くて……ゆっくり移動してもらってもいいですか……？」

「そうか、わかったんだぜ。」

魔理沙さんはそう言っつて、ゆっくり移動してくれた。私は、魔理沙さんの言う魔法を見るために外に出た。

◆？

「んー、ここらへんでいいかな……。」

魔理沙さんのお家から少し離れた場所。魔法の森というらしいこの場所には、この森独特きのこの胞子があつて、耐性のない人だと体が麻痺して動けなくなるそうですが、何故か私は大丈夫みたいです。

「それじゃあいくぜー！」

「あ、ちよつと待つてくださいー！」

私は足が痛いけどなるべく早くちよこちよこ歩いて、近くに草に駆け寄る。そこには、数匹の虫達がいた。

「ちよつと危ないから、向こうの方に言つてくれる？」

すると虫達は口々に「わかった。」と言つて向こうの方に移動していった。

「すみません、お待たせしました。」

「お前……虫と喋れるのか!？」

「?そうですけど。」

「すごいんだぜ!!」

すると、魔理沙さんは私の肩を掴んでブンブン前後に振り回す。

「と、止めてください……。」

「あ、ごめんなのだぜ♪」

魔理沙さんは私から手を離して、ペロリと舌を出す。女の私がいいうのものなんですけど、かなり可愛いです。

「それじゃあ、私の魔法見せてやるのぜ!!」

そう言つて、魔理沙さんは帽子の中から機械？のようなものを取り出す。あれは……金属？でも、見たことない色だなあ……。学校でも習ったことないやつだ。魔理沙さんはそれを両手で持ち前に掲げる。「マスタアアアア……」

すると、手に持っている機械が少し展開する。

「スパアアアアアク!!」

次の瞬間、魔理沙さんの持つ機械から、極太の虹色のレーザーが発射される。その景色はとても綺麗だと思つたけど、威力は青ざめる程だった。地面は少し抉れ、近くにあつた木は薙ぎ倒されてしまった。これって魔法なの？つて思うほどの高火力でした。

「どうだ？私の魔法は！」

「凄いです！とつても綺麗でした！」

「だろ！」

魔理沙さんは元気な顔で満面の笑みを浮かべる。いいなあ……。私と比べて、すごく明るいのが。

「あ、そういえば。」

「ん？どうしました？」

魔理沙さんは手の機械を帽子にしまつて、私の方を向いた。

「お前、外来人だろ？これからどうするんだ？」

「……えつと……」

つまりところ、私は別世界の住人なのだ。だから、簡単に自分の家にも帰れないし、いじめられるのもう嫌なので帰りたくない。

「じゃあ、私の家に住むか？」

「え？」

「私の家散らかってるだろ？だから片付けしてくれるやつが欲しかつたんだぜー。それに、お前面白そうな能力持つてるしなー！」

「……………」ポロポロ

「え!?ど、どうしたんだぜ!?そんなに嫌だったか!」

「いえ……………」

私は途轍もなく嬉しかった。まさか、こんなに優しい人がいたことに感動したし、こんな私を止めてくれる優しさにも、私は涙を零して



しまった。

「ど、どうしようもないダメな人間ですが……よ、よろしく願いしますっ……!」

私は涙を零しながら、深々と頭を下げて、魔理沙さんにそう言った。魔理沙さんはとても慌てた様子で、おどおどしていた。

「わ、わかったから泣かないでくれなっだぜ……。」

「は、はい……。」

私は頭を上げ、涙を手で拭いながらそう返事した。やっぱり、男口調だけど、優しい人だ。こうして私は、魔理沙さんの家に住まわせてもらうことになった。家事全般を任されたけど、なんとか知識を活かして頑張ります!

part37 家事係蜜音さん

「おーい！ちょっとこっち来てくれなんだぜー！」

「は、はーい！」

私は魔理沙さんに呼ばれ、服の整理を少し中断して、魔理沙さんの方に行った。魔理沙さんの家に住まわせてもらってから、早5ヶ月が経ってしまいました。私はあまり人との関わりはあまりありません。特に男性の方は。うっかり自分の体質のことを忘れて人里に行くと多くの男の人に襲われた時は大変でした。魔理沙さんがいなかったら本当にどうなってたか……。また今度、男の人ですが信用できる人に会わせていただくとかなんとか。魔理沙さんが信用する人なら、私も信用できます。

「蜜音、そこらへんにある本取ってくれ。」

「……はあ、魔理沙さん、ちゃんと整理してください……。」

そこには、色々な道具や物が乱雑に置かれていた。毎日散らかった物を片付けているのに、直ぐに散らかる道具達。……最初のころ、よく地面がぼぼ見えない状態となっていたこの家を片付けることが出来たなあと、振り返りました。

「めんどくさいんだぜ♪」

「はあ……この本ですか？」

「それそれ！ありがとうな！」

魔理沙さんは笑いながら私にそう言った。私は再び服の整理に戻った。割と魔理沙さんは服を持つてるので、大変といったら大変ですけど、割と慣れてしまいました。

「今日は能力の訓練しないのか？」

「あー……今日はしないですかね。」

ここに来てから、家事と並行して行ってること。それは、能力の扱いの訓練です。ここに来てから、私は3種の虫さんの力を借りることができるとわかりました。

『グラスホッパー』

バツタさんの力を借ります。脚力を大幅に強化してくれて、移動速

度、ジャンプ力、キック力が格段に跳ね上がる。最大使用時間は5分。副作用は足の激痛です。

『ワスプ』

スズメバチさんの力を借ります。スズメバチの羽と、毒針の働きをする槍を作り出し、飛行能力の仕様と、毒の仕様が可能になります。最大使用時間はこれも5分。副作用は体力低下に吐き気、頭痛、目眩です。

『ビートル』

カブトムシさんの力を借ります。1番の戦闘向きで、全体的に肉体を大幅に強化してくれます。そのおかげで、攻撃力の上昇と、防御力の上昇です。最大使用時間は3分。副作用は全身の激痛です。

私は週に3回、使いこなそうと訓練を行ってます。といっても、大した変化は起きてませんが……。

「あ、そういえば今日アリスの家に蜜音連れて行くんだった。」

「ええ!?そういうことは前に言ってください!」

「あはは、ごめんなんだぜ。」

魔理沙さんから突然の外出宣言をされ、私は急いで服の整理を終わらせ、準備をする。アリスさんは魔理沙さんのお友達です。前にも会わせてもらいましたけど、優しい人っぽいです。お人形さんが人みたいに動いててびっくりしました。

「私はもう用意したんだぜ。」

魔理沙さんはいつの間にかいつもの服装に着替え、片手に箒を持って私のことを待っていた。

「当たり前ですよおおお!!」

私は叫びながら服を着替えたり、髪を整えたりして、出かける準備を猛スピードで進めました。

◆？

「はあ……はあ……。」

「な、なんかごめんなんだぜ。」

私は急いで用意を終わらせ、家の外で疲れていました。魔理沙さんしよっちゆうこういうことがあるので、慣れないといけないのかもしれないけど……。

「本当ですよ……今度からちゃんと事前に教えてくださいね！」

私は魔理沙さんにそう言った。でも、5ヶ月間ほぼ毎日言ってるよ  
うな……？気にしたら負けですよね、うん。

「あはは、わかったんだぜ。じゃあ、アリスの家まで行くんだぜー！」

「は、はい。」

私は魔理沙さんの箒の後ろに乗る。すると、魔理沙さんの箒は浮上を開始する。これは慣れた。アリスさんの家に向けて出発しました。

◆？

「それじゃあ、またなアリス。」

「ええ。蜜音ちゃんもまたね。」

「はい。ありがとうございます、アリスさん。」

私達はアリスさんの家を出て、アリスさんと別れました。結局、魔理沙さんはアリスさんにお茶に誘われていただけでした。アリスさんは家事とかの話で結構話が合うので話してて楽しいです。

「じゃあ、帰るんだぜ、蜜音。」

「あ、はいー！」

私は魔理沙さんに促されて、箒の後ろに乗る。そして、箒は宙に浮き、前進した。帰るまでの数分間、特に喋ることはないの、私はこの空を飛んでいる感覚を楽しんでいた。

「おわあっ!?!」

「きゃっ!?!」

突然、箒が体勢を崩し、私達は地面に落下した。私と魔理沙さんは、辛うじて地面にうまく着地した。

「ま、魔理沙さんどうしたんですか!?!」

「襲撃っぽいな……!?!」

すると、周りから人型、しかし人ではない、異形の生物が姿を現した。魔理沙さんから以前教えてもらった、妖怪という存在。私にとっては、あの狼型の妖怪以来、5ヶ月ぶりの遭遇。

「蜜音は下がってるんだぜ。」

「え、でも……。」

妖怪の数は、ざっと見て5、60体はいる。これを1人するのは、かなりキツそう。

「蜜音の能力は副作用が強いからな。今は私に任せるんだぜ。」

「……はい、わかりました。」

私は魔理沙さんに言われた通り、後ろに下がり、魔理沙さんにこの場を任せる。魔理沙さんは帽子からミニ八卦炉という機械を取り出し、戦闘体制に入った。

part38 虫の意地

「オラオラアー！」

魔理沙さんは叫びながら星型の弾幕というものを出して妖怪達をどンドン倒していきます。全方向にばら撒かれるので、私は物陰に隠れてその様子を見ています。当たったことあるんですけど、めっちゃ痛いです。

「グオオオオオ……。」

「ガアアアア……。」

妖怪達は、断末魔を上げて倒れていく。死んではないようで、倒れたまま、少しピクピク動いているのが見えました。すると、魔理沙さんは、1枚、カードを取り出す。

「スペルカード発動！恋符『ノンディレクショナルレーザー！』」

魔理沙さんがそう言うと、小さい星弾と大きい星弾が放たれ、それと5本のレーザーが魔理沙さんの周りを回転するように放たれる。それにより、更に妖怪達を倒す速度が上昇した。けど、妖怪達もみすみすやられる訳はなく、私達を墜落させた低密度の弾幕を、妖怪達は同時に放っている。塵も積もれば山となる。1人1人の弾幕は薄いけど、大人数だと流石に高密度になり、魔理沙さんは擦り傷を体にならずに負っていく。

「くっ……い……そろそろ決めないとまずいんだぜ……！」

そう言うと、スペルカード？の効果時間が切れたらしく、弾幕の発射が終わってしまった。魔理沙さんは、正面にミニ八卦炉を構え、初めて私に見せてくれた、スペルカードの発動準備をする。

「スペルカード発動！恋符『マスターアアア……』」

その手に持っているミニ八卦炉は、発動に合わせて少し展開される。

「スパアアアアアク！！」

次の瞬間、ミニ八卦炉から、極太の七色のレーザーと、弾幕が放たれる。その極太の光線は、前方にいる妖怪を纏めて巻き込み、光に包まれる。七色の極太光線は収まり、光に巻き込まれた妖怪達は他に伏

せていた。

「はあ……はあ……！」

魔理沙さんは肩で息をしていた。流石に多数の妖怪達と戦ったら、かなり消費してしまうのだろうか。けれど、そんな魔理沙さんに御構い無しに、次々と妖怪達が湧いてくる。ふと思い、空を見てみると、見事な星空、つまり夜になっていた。つまりは妖怪達の活動時間。数が多いのも納得できる。

「大丈夫ですか!?!」

「蜜音は下がってるんだぜ!!」

魔理沙さんは必死の顔で私にそう言い放った。けど、妖怪達の塵も積もれば山となる弾幕のせいで、所々に擦り傷が出来ていた。

「見過ごすわけにはいきません! 私も戦います!」

私は頭の中で『グラスホッパー』と唱える。すると、誰かの声かわからない声が、『グラスホッパー』と言い、私の頭の中に響く。すると、私の足に力が溢れるのを実感した。

「やああああ!!」

私は大きくジャンプして魔理沙さんを乗り越え、妖怪達に蹴り込む。ジャンプした際の飛び蹴りで、1体が吹き飛んでしまう。私はぴよんぴよん妖怪達中をの飛び回り着地と同時に思いつきり回し蹴りをして妖怪達を殲滅する。

「全然減ってない……！」

1度の蹴りで、何体も倒してるはずなのに、数が減ってる気がしない。それどころか、更に増えてすらいる。

「いつ……!?!」

私の体に、何発か弾幕が当たる。激痛が当たった場所に走る。そのせいで、空中にいた私は、体勢を崩し、地面に落ちてしまった。それと同時に能力が解除されてしまい、足に弾幕が当たった時以上の激痛かわ私を襲った。私の周りに妖怪達が群がって来る。それは姿を崩し、男性の姿に見える。それは、理性を失い、私に襲いかかって来る男の人達。私は地面に衝突して動けない体を必死に動かそうとする。けれど、体は動かず、男の人達は私に近づいてくる。



「いや……！来ないで……！」

そう言っても、男の人達は一切私の言葉を聞かず、私に近づいて来る。すると、七色の極太光線が、男の人達を包む。私は地面に倒れていたのので、光に包まれずやり過ぎす。光が消えると、妖怪達が地に伏せていた。

「だから危ないって言ったんだぜ……！」

「ま、魔理沙さん……。」

私の目の前に魔理沙さんは歩いてきた。しかしその直後、魔理沙さんは膝から崩れ落ち、私にもたれかかってきた。服はもうボロボロで、弾幕を掠ったときにできたであろう切り傷もとても痛々しい。

「ちよつと魔力切れだぜ……。私はちよつと休ませて貰うんだぜ……！」

すると、糸が切れたように魔理沙さんは目を閉じ、全体重が私にのしかかる。どうやら、魔理沙さんは気絶してしまったようです。

「やらなきや……！」

足の激痛に耐えながら、私は立ち上がる。このままじやられる……！そうだ、足使わなきやいんだ！頭の中で私は『ワस्प』を唱える。すると、私の中で誰かが『ワस्प』と唱え、私の背中にスズメバチの羽が生え、近くに黄色と黒の槍が現れる。私は右手で魔理沙さんを抱えて、左手で槍を持つ。そして、羽に力を入れて、空を飛び始める。流石に高く飛ぶことは今はできないので、低空飛行です。

「あああああああ!!」

私は叫んで妖怪達を槍で刺しながら方向なんて考えずに、逃げることを考えて高速移動する。刺された妖怪達は、時間を置いて苦しみ始める。

「どけえええええ!!」

私は叫んで更にスピードを上げて槍で相手をどんどん刺して、毒か傷で妖怪達を地に伏せさせ、道を切り開いていった。それを繰り返して数分。

「今だあああ!!」

道が少しだけ開き、私はそこを羽を全力で動かし、私は妖怪達から

逃げた。そして、私は少し離れたところで、羽と槍が消えて、私は魔理沙さんが怪我しないように、私が下になって、滑り込んだ。

「うっ……!?!」

すると、『ワスプ』を使った副作用で強い吐き気と頭痛、目眩が私を襲った。吐きそうになったけど、魔理沙さんがいたので、頑張って抑え、下になった左半身の痛みを堪えて、私は座った。ここは……：多分、妖怪達からみて、魔理沙さんの家の反対側に来てしまったようです。なので、あの大量で倒しても出て来るので周りにも潜んでいるので、帰るには一直線に突き進むしか方法がありません。

「んん……：蜜音……。」

「ま、魔理沙さんー！」

魔理沙さんは目を覚まして、体を起こした。眠っていたのが、少しの間だったので、私は少しホッとしました。

「……チツ、魔力は回復してないみたいだぜ……。」

魔理沙さんは舌打ちして、俯いてしまった。アリスさんもここまで助けに来れるとは思えない。つまり、ここでまだ戦力として働けるのは……：私だけ。

「……：魔理沙さん。」

「ん……：？なんだぜ……：？？」

「私、アリスさんを呼んできます。」

「!?!無茶なんだぜ!」

「……：魔理沙さんはここで待っていてください。」

私は魔理沙さんの制止を無視して、少し引いた足の痛みを堪え、走り出す。後ろから魔理沙さんの声が聞こえるが、私は無視をしてしまった。数分間走り、妖怪達のいる場所に到着した。妖怪達は、戻ってきた獲物を再確認する。妖怪達の中には、大型の妖怪が数体いた。

「魔理沙さんの役に立つ!だから負けない!『カブト』!」

私が叫ぶと、謎の音声が私の頭の中に響く。すると、体に黒いスーツが現れ、空中に出現した赤のボディと金のフレームの鎧が、腕と足、そして胸に装着される。

「うわああああ!!」

私は妖怪達の群れの中に突っ込んでいった。

part39 救援

「やあっ！」

私は妖怪のうちの数体纏めて拳をぶつけた。すると、痛々しく、重い音と一緒に殴られた妖怪は、他の妖怪を巻き込みながら吹っ飛んでしまった。キック力は『グラスホッパー』には流石に劣るけど、全体的な戦闘力を見ると、やはり1番強力です。

「グオオオ……！」

前から妖怪達も攻撃して来ます。しかし、肉体も頑強になり、装甲も加わった私の体には、あまり効果はありませんでした。

「やあっ！」

私は攻撃してきた妖怪に左足の蹴りを繰り出します。左足が命中し、そのすぐ右にいた妖怪と共に吹き飛び、そしてその吹き飛んだ直線上にいた妖怪も巻き込み、妖怪は吹き飛ばされてしまいました。

「……………グアルツ!!」

その後ろから妖怪の鋭い爪の攻撃。装甲に命中に、火花を散らして私に命中しました。さほどダメージはありませんでしたが、不意打ちのせいで身構えられてなく、衝撃がかなりのせいで少し前に体勢が崩れてしまいました。

「グアア……！」

「え？きやつ!？」

私は体をボスらしき体格の妖怪の手のひらに掴まれました。力強く私を掴む。体格の差があり、痛みが私の体全体に走ります。

「グオアツ!!」

「きやああああ!!」

私はその大きな妖怪に力任せに投げられました。木を貫通する音と、私がつつかる音を数回聞いた後、強く木に打ち付けられ、私は下にズルズルと落ちました。

「うっ……まだ……！」

まだ意識は失ってない。妖怪達は私に向かって来ています。そして、私のところに着くと、妖怪達は舐めるように私の体を触ってくる。

それはまるで、男の人が私を触るような感覚がして、悪寒が走りま  
した。

「触らないで!!」

私はその妖怪を思いっきり蹴飛ばしました。妖怪は悲鳴をあげて  
飛んでいきます。

「うっ……はあっ……はあっ……!」

私はそのまま自分の体を持ち上げて、妖怪達を見つめる。3ヶ月。  
その時間は生きて来た時間よりも短いけど、今までにないくらい  
充実していました。

「やあああああっ!!」

一回一回の攻撃に想いを込めて、妖怪達に私は殴りつたり蹴つたり  
しました。しかし、倒しても倒してもまだ出てきます。ならば……ボ  
スを倒せば! そう思い、私はボス妖怪に向かって激痛走る体を無理矢  
理動かして走り出しました。

「ウオオ……。」

ボス妖怪は私に気づき、拳を握って強く握りしめ、高く振り上げま  
した。こうなったら、無理矢理でも倒してやる! そう思い、私も拳を  
強く握りしめる。拳は拳でそんな気持ちで待ち構える。すると、そん  
なこと御構い無しに、別の妖怪が私に襲いかかって来た。私はそのせ  
いで体勢を崩した。

「グオオリア!!」

「!?!?ぶっ……!」

まともな防御なんてできずにお腹に命中した。強化された肉体と  
装甲越しにパンチの勢いが伝わって来て、骨が折れる音と、真っ赤な  
血液が口から溢れ出て、地面に数回バウンドした。

「う……く……。」

もう動けるはずもなく、あっけなく3分が経過。スーツと装甲が消  
えてしまいました。私の全身に、投げられた痛みとパンチを食らった  
痛み、それに加えて副作用の全身の激痛、なんとか意識を失わないよ  
うに耐えましたが、最早動くこともできず、視界もぼやけて来ました。

『グエへへへ……。』

たくさん妖怪が笑い声を上げながら私に近づく。すると、妖怪達は私の服を力任せに破いていく。すると、理性を失ったように、私の肌を触ってくる。

『グウエヘエヘエ!!』

(いや……やめて……)

そんな思いも妖怪達に届かず、私を好き放題にして来ます。まだ一線は越えてない。けど、時間が経てば、私の初めてを奪い、好き放題にされてしまうかもしれない。

(魔理沙さん……助けて……!)

私はそう願った。しかし、魔理沙さんはもうボロボロで助けになれるはずがなく、私はここで、人生を終えるのかもしれない。そう思っていた時でした。

「あそこだ!」

「わかった! サラ行くぞ! 炎符『ファイアマシンガン』!」

すると、私の周りが赤い炎で燃え上がる。妖怪達は燃え上がり、消滅してしまう。すると、炎が一部分だけ消え、そこに1人の男性と、全体的に赤く、しかし人ではない見た目ではない少女、そしてその少女にお姫様抱っこをされている魔理沙さんがいた。

「ま……りさ……さん……」

「蜜音、頑張ってくれたな。ありがとうなんだぜ。」

魔理沙さんは女の子に降ろされ、少し怪我しているが、明らかにかなり回復した魔理沙さんが、私に近寄り、私の頭を撫でた。

「魔理沙、その子のことは頼んだぞ。」

「わかったんだぜ。ここは森なんだからやり過ぎないでくれだぜ?」

「当たり前だ、サラ、攻撃がこの2人に行かないようにしてくれ。」

「……うん。わかった。」

サラという女の子が返事すると、男の人は妖怪達の方に歩いていく。妖怪達は、警戒を更に高めたように唸り声を上げる。

「お前らへの怒りは収まらねえが、女の子が危ないんだ。とっとと片付ける!」

男の人はそう言って妖怪達に向かって走り出す。無茶だと、一瞬で

悟った。あんな大群で、怪力の化け物までいるあの妖怪達に、たった1人で勝てるわけがないと思いました。

「まりさ……さん……あれ……あぶないですよ……。」

「ん？炎火のことか？大丈夫だよ。」

魔理沙さんはそう言つて、炎火と言われた男の方を見る。

「炎剣『聖なる青い炎の剣』！』」

炎火さんは手にカードを取り出してそう言つと、右手に青くとても鋭利そうで、しかし、何故かとても熱そうな雰囲気のを右手に持つ。炎火さんは、その剣を大きく一薙ぎする。すると、数十の妖怪が一瞬にして炎に包まれ、消えてしまう。しかし、それと同時にたくさんの妖怪が現れる。

「これ、倒しても出てくるタイプかあ……。よし！こういう時はボスだよな！」

すると、炎火さんは一際大きい妖怪に向かって走り出す。勿論、その間の道筋にも妖怪達は存在する。しかし、炎火さんが薙ぐ剣によって消滅していき、その道筋にはもう妖怪はいなかった。

「炎脚『レオキック』！ヤアアアアアア！！』」

炎火さんは叫んで大きく跳躍する。その高さは、『グラスホッパー』を使った私と同じぐらいだった。そして、炎火さんは飛び蹴りの体勢で怪力の妖怪に突っ込んでいく。その足には炎が纏われており、腕で防いだ意味はなかったようでした。その妖怪は吹き飛び、謎爆発を引き起こした。

「ほら、お前らとつとと帰りやがれ……つて、まだいるのかよ。」

すると、奥から2体も同じぐらいの大きさの妖怪が現れた。けど、炎火さんは大して驚いた様子はなく、落ち着いて構える。

「早く運びたいんだ……終わらせさせてもらうぞ！双獄炎剣『双聖蒼炎剣』！』」

炎火さんは、両手に先ほどよりも強い雰囲気を持つ剣を、両手に出現させました。妖怪達もそれを察知し、危険だとわかったのか全員突撃して来ます。

「はあああああ！！双剣技『焰回転斬り』！』」

炎火さんは左手の剣を逆手に持って回転する。すると、炎が周りに広がり、全ての妖怪が消えてしまった。

「ふう……さて！早く運ばなきゃな！2人ともごめんよ！」

「えっ？きやああああ!!」

炎火さんは私と魔理沙さんを掴んで空高く飛び上がりました。すると、足から炎を吐き出したと思えば、高速で進み始めました。

「ええええええ!!」

「あはははははは!!」

魔理沙さんはとても楽しそうに笑ってました。まるで絶叫系アトラクションではしゃぐ女の子です。私は正直苦手です。乗ったことすらないに等しいですが……。

「ごめんだけど、あと数分耐えてくれ！」

「はははははは!!」

「あははははは!!」

炎火さんはそう言って、更に加速して飛行しました。でも、少し楽しかったかもしれません。



part 40 5年の年月と炎火達

エスカルゴ達が帰ってから、5年もの月日が経った。そりゃあ、5年もあれば色々ありますよ色々。で、俺と妹紅は、結婚しました。ええしましたよ。文句あつか！で、現在5歳になる娘も生まれました。生まれたとき泣いてしまったのは置いといて。

「おとうさく〜ん！」

「ん？どうした沈火。」

仕事がある程度こなし、庭で空を眺めていると、俺と妹紅の娘の焰沈火（ほむら しずか）が、俺の方に駆け寄って来た。名前の由来は……神様がつけたんです。いや、神様がつけた方がいいんじゃない？ということのでつけてもらいました。神様曰く、『これが運命。』らしいです。黒い髪に、青い目、別にどこか悪いわけじゃないのに青白い肌に、黒のワンピースを着ています。

「おとうさん！たかいたかい！」

「よーし！ほーらー！」

俺は沈火の要請で、沈火を持ち上げる。そして、霊力で両腕を強化してたかく放り投げる。軽く10mを超えるぐらい高く上がり、落下を開始する。そして、俺をうまくキャッチする。すると、沈火は笑顔でこつちを見ていた。

「おとうさん、そういえばれいせんさんがおとうさんよんでたよ！」

「ん？ああ、昼ご飯作る時間か。もうそんな時間か。」

「きょうのゴはんなに〜？」

「ふふふ、沈火の好きな焼き魚（事前に炎火が骨を取り除き、ある程度切り分ける）だぞ。」

「わーい！」

沈火はぴよんぴよん跳ねながら喜ぶ。かわええ。さて、そんな娘のためにも、さつさと作ってやりますかね。俺は袖をまくって厨房に向かった。

◆？

『ちそうさまでした〜！』

俺、妹紅、沈火の3人は、同時にそう言った。俺達は兎達やわがま  
ま姫達とは別の少し大きな部屋を借りさせてもらって生活している。  
まあ、元々俺の部屋だったところなんだけどね！全然変わってないね  
！あ、サラヤスカーレットですか？今庭で遊んでるんじゃないですか  
？

「ねえ炎火〜。あとで3人で一緒に遊ばない？」

「おう、わかった。んじゃ、ちよつと仕事（永遠亭全員分の食器洗い）  
終わらせてくる。」

「うん、わかった〜。」

俺はそう言つて3人分の食器を纏め、台所に向かう。そして3人分  
の食器を置き、とりあえず全員分の食器を回収（兎達の場合は知らせ  
る）をする。

「お前ら〜、食い終わったら食器片付けに来いよ〜。」

「は〜い。」

兎達がだるそうな声で返事をして、動き始める。まあ、こんなんで  
も一応しっかり働いてくれる（てゐを除く）から、いいんだけど……。  
俺は部屋を出て、今度は永琳先生の部屋に行く。やっぱり、この廊下

長いよな。なんか慣れたけど、たまに思うんだよね。そんなことを考えていると永琳先生のいつもいる仕事場についた。俺は扉を数回ノックする。

「永琳先生、いいですか？」

「ええ、いいわよ。」

永琳先生の返事を聞いて、俺は扉を開ける。回収しに来た食器は、きちんと重ねられて置かれていた。そういえば、医者とかって昼食とか食べるの早いらしいね。職業病らしい。

「んじや、この食器片付けさせてもらいますね。」

「ええ。そういえば、最近の沈火ちゃんはどうかしら？」

「とつても元気ですよ。妹紅に任せてばかりでなんか悪いですけど……。」

「あなたも仕事があるから仕方ないわよ。」

「じゃあ、俺もう行きますね。」

「ええ。じゃあ頑張つてね。」

「はい！」

俺はそう言つて、食器類を持って永琳先生の仕事場から出て台所に向かった。少し歩いて台所に着くと食器類を置いた。台所には、多くの食器が積み重なっていた。どうやら、この短時間で殆どの兔が片付けたようだ。俺は今度は凜乃と灯乃子のところに行く。あの2人、同じ部屋なんですよ。かなり仲良いのは言わずともわかるはず。

「凜乃、灯乃子、昼食食べ終わったか？」

「あ、炎火さん。今日も美味しかったです。」

「兄さん。また沈火ちゃんと遊ばせてよ！」

どうやら、既に食べ終わったようだ。5年経つて、2人とも成人して、体も成長し、まあ大人っぽくなった。たまにドキッとさせられて心臓に悪い。ええ悪い。灯乃子なんてわざとやるときがある。ちよつと指先熱くして触る程度のお仕置きですがね。

「はいはい。さつさと片付けるぞ。」

俺はさつさと食器類を持って部屋から出る。たまにあの2人にも沈火の面倒を見てもらうことがある。まあ妹紅も一緒なんですけど

ね。え？俺？仕事だよ畜生。

「ありがとうございます。」

「兄さんありがとう。」

「はいはい。」

俺は適当に返事して、部屋を出る。さて、これで終わるか……。え？鈴仙と悪戯姫はつて？流石にこれ以上面倒見切れないので、そこだけ鈴仙に頼んでるんです。これ以上悪戯されてたまるか。

「さて、洗いますかね。」

俺は大量に積み重なった食器を前に、皿洗いを開始した。

◆？

「よし、終わりつと。」

数十分後、大量に積み重ねられていた食器類は、綺麗に片付けられている。自分で言うのもなんだけど、このスピードおかしい。慣れつて怖いね。

「さてと。妹紅と沈火のところに行こうかね。」

俺は台所から移動して、自分の部屋に向かう。いや、庭にいるのか

な？うーん……とりあえず俺の部屋に行こうかね。俺は自分の部屋に向かい、扉を開ける。しかしそこには誰もおらずシーンとしていた。どうやら庭の方に移動したようだ。

「んじや、俺も行くとしますかね。」

俺は扉を閉めて庭の方に移動し始める。すると、庭の方向から誰か走ってくる。段々と足音は近づいてくる。現れたのは、何故か焦ったような表情をした妹紅だった。

「はあ……はあ……！」

「妹紅どうした？」

「炎火……沈火が……沈火が……！」

「なに!？」

妹紅が泣きそうな声で俺にそう言うてきた。俺は靈力で足を強化して急いで庭まで向かった。ああああ廊下長いいいい!!ようやく長い廊下を移動して庭に着くと、沈火の体の周りに怨霊が集まっているのがわかった。

「沈火！」

「おとうさん……たすk」

恐らく「助けて」と言おうとした沈火の体に怨霊が腕と足に装甲が、そしてワンピース形の鎧のようなものに変化して装着された。あれはなんだ？怨霊達を取り憑いたってことなのか……？

「あ……ガギ……ガガ……。」

色々な考えを張り巡らしていたら、沈火が奇妙な声を出して動き始める。まるで、壊れた機械のようだった。

『これは危険ですね。』

「珍しいですね。俺と意思疎通を取るなんて。」

頭の中に、ルナさんまたは神様が俺に語りかけてくる。神様は頼んだり、たまに気まぐれでしか俺と意思疎通を取らない。そんな神様がワントーン低くして警戒を俺に促した。

『炎火。あれは能力の暴走です。』

「能力の暴走……？それは怨霊の方ですか？」

人間だったとき能力を持っていると、怨霊になってもある程度まで

は能力を使用できるらしい。なので、俺はその能力の暴走が、能力を使用できる怨霊のものだと思った。

『いえ、違います。沈火ちゃんの能力です。沈火ちゃんは能力は『怨霊を纏う程度の能力』です。』

「怨霊を……纏う……う……じゃあ、今どうなつてつておわつ!？」

神様に質問しようとする、沈火が突然俺に突っ込んで来て、装甲に覆われた小さな腕が振るわれ、俺はそれを間一髪で回避した。よく見ると、攻撃に使用されていた右腕の装甲は、殴るためにゴツクなっていた。しかし、その直後、そのゴツさはなくなり、元の装甲の形に戻ってしまった。

『さて、ああなつてしまった理由ですが、恐らく能力の発動は自分の意思ではなく暴発でしょう。』

「暴発っ！ですっ！かっ!？」

俺は神様の話を、容赦なく攻撃を繰り返してくる沈火に対し、下手に攻撃すると沈火を傷つけてしまいそうで怖いので、避けながら聞く。どうやら、この装甲腕だけではなく足も変形できるらしく、足も攻撃に特化した形になったり、元に戻ったらをして攻撃してくる。

『はい。なので、制御が効かないのでしよう。なので、大量の怨霊に体の主導権を奪われています。その上、数が多すぎて精神回路に異常を起こしています。』

「このままっ！放っておいたらっ！どうなりっ！ますかっ!？」

『恐らくはあの鎧が解け解放されますが、その前、あと数分で回路が焼き切れて、死んでしまうでしょう。』

「なるほどっ！あの鎧が原因ですねっ！ありがとうございます!？」

俺は全身に霊力を回す。そして、その全身に回している霊力を炎に変化させ、身体能力を急上昇させる。しかし、そのとき異変が起こる。

「イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ  
……………」

「!?!沈火!？」

先程まで活発に俺に攻撃をしかけていた沈火だが、一瞬動きが止まる。そして、本格的に狂ったような発言を繰り返し、動きも一段と

狂ったようになり、変則的になって躲しにくくなった。

「おりやつーぐつ……！」

「アアアアアア!!」

俺は沈火の小さい体を、持ち上げて羽交い締めにした。暴走した沈火は大きく叫び、ジタバタするのを俺は堪えた。そして、鎧を剥がそうとした。鎧を持ち、引き剥がそうとする。しかし、中々剥がれなかった。しかも、鎧の間から血が流れ出て、鎧に覆われていない、青白い肌に赤い血が流れる。

「くっ！」

俺はそれを見て焦り、一旦手を離れた。しかし、なんで鎧を剥がそうとしたら血が流れ始めたんだ？

『ふむ……なるほど。』

なぜ血を流したのか考えながら、霊力を回しながら炎に変換して身体能力を上昇させて、行動を読んで回避するという、まあまあ頭を使う作業をしていると、再び神様が俺の頭の中に語りかけてきた。

「何かわかったんですか？ふっ！」

『どうやらあの鎧は、皮膚とくっついているようです。なので先程あなたが引き剥がそうとしたら血が流れたのです。』  
「……………」

俺はそんなことも知らず、沈火を傷つけてしまったことにとっても後悔してしまった。しかし、このままほっとくと、沈火は死んでしまう。そうすると、妹紅は悲しんでしまう。それだけは避けたい。

「……神様、何か策はありますか？」

『……あるにはあります。しかし、かなり細かい調整ですよ?』  
「それでもいいです。教えてください。」

『……あなたの能力で、鎧のみを溶かすんです。』  
「わかりました！」

確かにそれなら沈火の主導権を握っている怨霊を沈火から剥がすことができる。確かに沈火まで溶かさないように調整は必要。けど、それぐらい簡単だぜ！

「イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ……！」

「沈火……痛いよな……けど、もう少しだけ我慢してくれ……!」

俺は全体的に靈力を回していたのを、移動するために必要な部分に靈力を流した。すると、突然加速し、俺は狂乱し俺と空に向かって攻撃し続ける沈火の後ろに素早く回る。そして、手に超高熱の炎を手中に封じ込む。すると、手のひらが物凄く高熱になる。その手のひらを鎧に押し当てる。すると、鎧がどんどん怨靈に戻り、弾ける。沈火は悶え苦しむように暴れる。俺はもう片方の手で暴れる沈火を抱いて抑える。

「苦しいよな沈火!けど、あと少しだけ頑張ってくれ!」

「アアアアアア!!」

沈火は叫んで悶え、私に向かって拳を作り、俺の腹に思いつきりパンチをする。それは5歳の女の子に出せるパワーの何十倍も強く、硬いパンチで、簡単に俺の腹を貫いた。

「ゴフツ……!?!あと少し……!」

足と腕の装甲は消え、あとはワンピース型の鎧だけ。しかし、さっきの神様の話通りなら、リミットはあと少しのはず。

「くっ……!うおおおお!!」

俺は靈力をフル稼働させて手のひらを更に高温にして鎧を溶かす。すると、ついに鎧が溶けきり、沈火が右手だけが俺の腹にささったまま体が倒れた。俺はそれを血液が減って正直やばい中受け止め、腹から沈火の右手を抜く。沈火の青白い綺麗な手は、真っ赤な血で汚れていた。

「沈火、お疲れ様。」

俺は沈火を抱き締め、お姫様抱っこをする。

「炎火……。」

声がしてその方向を見ると、妹紅が心配そうな顔をして立っていた。俺はそんな妹紅を見つつ、回復用の炎に切り替えて沈火を包みつつ。腹の回復と、穴の空いた服を炎でなんとか形作った。

「大丈夫だよ妹紅。ちよつとごめんだけど永琳先生のところまで沈火を連れてつてくれないか?」

「う、うん!」



俺は妹紅に沈火を渡す。正直、結構霊力とか使って疲れてたりする。まあ、実際問題そんなになんだけれどね。今回全体の数%しか使っていない。まあ、怨霊が沈火の体を支配していたというのなら、全然使いこなせてないってこった。そんなこと考えて数分間、ようやく服の修復が完了した。ちなみにこの作業、慣れてたりする。

「さてと！沈火の様子見にいくか……。」

俺は庭から永遠亭に入って、永琳先生の仕事場にいるはずの沈火を見にいこうとすると、空から何かが降ってきた。

「おおう!？」

「いったあ……あ、炎火か!？」

「そ、そうだけれど……って、お前傷だらけじゃないか!？」

落ちてきたのは、体がボロボロの魔理沙だった。俺は丁度先程沈火の体を治すために切り替えていた回復の炎で、とりあえず魔理沙の傷を癒す。

「炎火！お願いだ！蜜音を……蜜音を助けてくれ!？」

「え、ええ!?ち、ちよつと事情を説明してくれ!？」

魔理沙は短く俺に説明を施した。どうやら、5ヶ月前に家で居候をした蜜音というなにやら特殊な体質を持った女の子が、妖怪の群れに囲まれて、現在1人で戦っているらしい。魔理沙は魔力が枯渇したが、幸い魔力回復薬を一つ持っていて、それを使っても助け出すことは不可能なので俺のところまで来た……ということらしい。

「助けに行くに決まってるだろ！サラ!？」

俺はサラを呼ぶとちよこちよこことサラが歩いてくる。サラに事情を話して協力を仰ぐと、サラは快く承諾してくれた。

「よし！サラは魔理沙抱えて魔理沙から場所聞いて先導してくれ!？」

「……うん。わかった……。」

サラは魔理沙を抱えると、高速で空中の飛行を開始した。俺もそれに続き、蜜音という女の子を助けに行った。

part 4 1 退院

「んん……？」

私は目を覚ますと病室？のような天井が目に入った。私は体を起こすと、体に少し痛みが走った。多分、『カブト』の副作用が残ってるのかもしれない。周りを見ると、複数のベッドがあっただが誰も寝ていなかった。

「……魔理沙さんはどこだろう……。」

あの人が助けに来たとき、魔理沙さんも一緒だった……。だったら、魔理沙さんは無事なはず。だったら、もう帰ってるのかな？

「……よいしょ……。」

私は体の痛みを堪えながら私はベッドから降りた。ここは病室っぽいから、看護師さんかお医者さんがいるはず。私はそう思って病室を出た。今気づいたけど、私病人の着る服にいつの間にか着替えさせられてた。誰がやってくれたんだろ？そんなこと考えながら病室を出た。

「きゃっ!？」

「えっ!?! あっ、蜜音さん、目を覚ましたんですね。」

私は部屋を出ると同時にぶつかってしまった。前を確認してみると、紫の髪に看護師さんが着る白い看護服を着ていて、頭には、大きなうさ耳が生えていた。

「あ、は、はい。」

「私は看護師の鈴仙です。目を覚ましたら連れてくるように言われているので、ちよっと付いてきてもらえますか？」

「は、はい……。」

そういうことで、私は鈴仙さんの後ろについて、大きな和風の屋敷のようなこの長い廊下を歩いている。なんか……今昔が入り乱れる……。

「この部屋です。」

「あ、はい、ありがとうございます。」

「どういたしまして♪」

鈴仙さんは私に眩しいほどの笑顔を見せる。その笑顔はとても柔らかく、優しい笑顔だった。……こんな笑顔ができる人は、幸せなんだろうなあ……。私は部屋と扉を数回ノックする。  
「どうぞ。」

中から大人びた女性の声が聞こえた。私はその声を聞いて、部屋の扉を開けて中に入る。

「あら、初めまして蜜音さん。」

「は、初めまして。あの……あなたのお名前は……？」

「私はここの医者のお八意 永琳です。」

この人がここの医者というのを聞いて、少し驚いたけど、少し納得した。見た目は若い女性けど、雰囲気威厳があるので納得もした。

「さて蜜音さん。あなたの体を少し調べさせてもらいました。あなたは普通の人間よりかなり多くのフェロモンを分泌すること。それと、脳も調べた結果、言語の部分に人以外に虫があるのがわかりました。つまり、あなたは虫と意思疎通を取れる。そうですね？」

「は、はい。」

「そして、三種の虫の力を、一時的に借りることができる。そして、それを使った後には副作用がある……。そうですね？」

「は、はい。」

どれくらいの間眠ってたのかわからないけど、短い時間でたくさんすることがわかってるのを、純粋に凄いと思った。

「あの……魔理沙さんは？」

「ああ、彼女なら……。」

永琳先生が魔理沙さんについて何か言おうとした瞬間、いきなり勢いよく扉が開き、私は驚いて扉の方向を振り向く。そこには、息を切らして立っている魔理沙さんがいた。

「ま、魔理沙さん!？」

「蜜音ええええ!？」

魔理沙さんはそう叫ぶと私にいきなり抱きついてきた。私は思わず顔を赤く紅潮させる。恥ずかしくてたまらない。嬉しいけど、恥ずかしいです。

「ま、魔理沙さあん……／＼／＼」

「あ、ごめんなんだぜ♪」

私が魔理沙さんに抗議すると、魔理沙さんはケラケラ笑いながら私から離れる。悪気はないみたいですけど、かなり心臓に悪いです。

「……ち、ちよつと嬉しかったり……／＼／＼」

「でも、良くなってよかったんだぜ！」

「そ、そうですか……。」

「おい魔理沙あんま廊下を走るなよ。」

すると、開いた扉からもう1人部屋に入ってくる。長い黒髪、こつちに来てから私のでしか見たことがない制服を着ていて、右手には黒い手袋をした男の人。この人は、私を助けてくれた炎火と言われてた人だ。

「お、目を覚まし……!?!」

炎火さんは私を見た瞬間、炎火さんの挙動がおかしくなった。どう見ても私のせいだ。けど、おかしい点がある。今までだったら、一瞬で理性を失って襲ってきたのに、何故か炎火さんはそうではない。数十秒間そんな状態が続いたあと、いきなり炎火さんは自分自身を殴りました。かなり強く殴ったらしく、思いつきり吹っ飛んだ。

「ええ!?だ、大丈夫ですか!?!」

私は思わずまだ痛む体を動かして炎火さんに駆け寄る。炎火さんは立ち上がり、頭を振る。

「ふく……あゝ、この子の体質忘れてた……。」

「えつと……わ、私がいともなるともないんですか?」

「うん、まあね。そういうの纏ったし。」

纏った、とはなんとことだろ。けど、私のこの体質が影響なく、男性と接したのは本当に久しぶりだった。私は久しぶりに男性と会話して、少し緊張していた。

「それよりも……大丈夫か?まだ体痛むんだったら言えよ。」

「え?あつ、はい。」

どうしてこの人が私にそんなことを言うのだろうか。ここのお医者さんは、永琳先生のはずで、治したのも永琳先生の筈なのに。

「ああ、言い忘れてたけど、あなたの体の怪我を治したのよ？」

「え、ええっ？でもお医者さんは永琳先生……。」

「えっと……永琳先生は薬を作るのが得意だから、怪我を治すのは俺の能力でやる方がいいんだよ。ちよつと試しに……。」

炎火さんは手の平を開く。すると、手の中に緑色の炎が現れる。私のはびっくりして少し避けるようにしたけど、魔理沙さん含め、みんなは全く驚かない。すると、緑色の炎は私を包んだ。一瞬、錯覚かどうかかわからないけど凄く熱く感じたけど、どこも火傷してないし、もう痛くもなかった。更に、まだ少し痛かった体の痛みが、スーッと消えていった。

「え、ええっ？」

その光景に、私は驚くことしかできなかった。暫くすると、痛みは全て消えて、逆に体はこうなる前より軽くなった。

「ん、どうだ？」

「体の痛みが消えて、前より体が軽くなりました……。」

「まだ痛み残ってたのか……。結構キツイ症状だな、その副作用は。」

「は、はい。」

正直な話、この副作用のせいであまり能力を多用できない。だから、これを克服しようとしても、そこまでの道のりがキツすぎると思っ、私は諦めた。

「んで、これから2人はどうするんだ？」

「えっと……ど、どうしますか？魔理沙さん。」

「特にやることもないし、帰るんだぜ！」

「そうか、なら、ちよつとにとりのところに行ってくれ。蜜音さ……呼び捨てでいいか？」

「え？あっはい。」

「蜜音の役に立つ物の開発を依頼してるからな。」

「おお！炎火結構優しいんだぜ！」

魔理沙さんはそう言うのと炎火さんの背中をバシバシ叩いた。結構音が鳴ってるけど、あまり表情を変えない。炎火さんはそんな魔理沙さんをジト目で睨んだ。

「魔理沙、お前ちゃんと家事してるんだろぅな？」

「えっ!? あつ、ああ、ち、ちゃんとしてるんだぜ!」

炎火さんの質問に、魔理沙さんは物凄く目を泳がせながらそう答えた。住ませてもらってる私が言うのはあまり良くないかもしれないけど、びつくりするぐらい魔理沙さんは家事をしません。逆に、魔理沙さんが掃除という家事をする原因でもあります。そんな魔理沙さんを見て、炎火さんは大きな溜め息をつきます。

「お前なあ……自分のことを乙女って言うくらいならちゃんど家事くらいしろよ……!」

「うう……妹紅はちゃんとしてるのかぜ!」

か

「よく部屋の掃除してもらってるし、料理作るのもたまに手伝ってもらってるぞ? あと、今は妹紅には育児任せてるしな。」

「な、なに……!?!」

魔理沙さんはそう言って、地面に手をついてうなだれていた。どれだけショックだったんだろう。けど、私は別に気にしていない。寧ろ当然のことだと思っていた。……まあ、すぐに魔理沙さんが家事が苦手だと言うことはわかったが。

「じゃあ、魔理沙さん、行きましょう。」

「わ、わかったんだぜ……。」

魔理沙さんは落ち込みながらも立ち上がり、私は出口がわからないので、魔理沙さんの後ろを歩いて帰ろうとした。

「蜜音さん、ちよつと待って。」

すると、永琳先生が私のことを引き止めた。

「何でしょうか?」

「これを持って行きなさい。」

永琳先生が渡して来たのは、中に数個の粒が入った瓶だった。私はそれを受け取った。

「これはなんですか?」

「これはあなたの副作用を抑える薬よ。あまり数がないから、能力を使うのはなるべく控えてね。」

「あ、ありがとうございます！」

私は深く永琳先生にお辞儀して、部屋を出た。魔理沙さんはニコニコして喋りながら外に出る。私は魔理沙さんが箒にまたがると、私も箒の後ろに乗る。

「じゃあ、行くんだぜ！」

魔理沙さんはそう言うと、箒ごと私達は宙に浮き、高速で魔理沙さんが「妖怪の山」といつていた山に向けて高速で飛び始めた。

## 番外前編 仮面の戦士

蜜音と初めて出会ってから、3年の月日が経った。あれから、日に日にほんの少しずつ、森から現れる妖怪達の数と強さが増していった。最初の数ヶ月は、俺とサラが人里までいかないように対処していた。けど、違和感を感じた。思い返すと、少しずつ妖怪達の力が増していったのがわかった。これ以上妖怪達が強くなると、どうしても高火力のものを使うしかない。しかし、妖怪達が現れるのは森。俺達が扱うのは火。もしかしたら、森に引火するかもしれない。そう考え、俺はにとりさん達河童に、ある『物』の開発を依頼した。事情を話したら、喜んで承諾してくれた。というかめっちゃ乗り気なのが気になった。そしてそこから2年半、俺も協力してそれは完成した。その間の妖怪達はもちろんちゃんとお対処してます。

「うん、何回もテストしてるからか、妙にしっくりくるなこれ。」

「そりやそうなるように調整してるしねー。」

「ありがと、にとり。」

「どういたしまして。ちゃんと使ってやれよ?」

「もちろんだよ。」

「ああ、あと蜜音ちゃんのやつ、もうちよつとかかるかも。」

「わかった。伝えとくよ。それじゃあな。」

「うん、じゃあね。」

俺はそう言って、河童の工房から出ていった。



「なあなあ、妖怪の森って知ってるか？」

グループで会話していると、友達がその中でそんな質問をした。

「知ってる知ってる！」

もう1人の友達は、その質問にそう返し、

「私も知ってる！」

と、もう1人の友達もそう返し、

「俺も！」

俺もそう返した。妖怪の森ってのは有名な話で、いつも大人達が仕事に出る森の奥には、妖怪の森ってのがあって、そこでは妖怪とかいうバケモノが出るって話だ。

「なあなあ！今日それを確かめようぜ！」

すると、この話を始めた俺の友達、タケシがそう言った。

「いいな！」

その意見に、ミツルはそう答える。

「私も——！」

2人のその反応に、カオルは楽しそうに2人に賛成する。

「でもさ、本当だったらどうするんだよ？」

俺は3人ともにそう言った。すると、3人はニヤニヤしながら俺の方を見た。

「それを確かめに行くんだろ！」

「アホだなーヤマトは！」

「それに、本当なわけないでしょー？」

3人は俺にそう言った。馬鹿にしやがって。アホじゃねーし！普通だし！

「でもよ、里の外にどうやって出るんだ？大人と一緒に行くこうとして

も、断られるんじゃない？」

俺は3人にそう言った。すると、また3人は顔を見合わせてニヤニヤしながら俺のを見た。

「なにいつてんだよ！ 抜け出すに決まってるだろ！」

「やっぱりアホだなくヤマトは！」

「普通にやったら無理に決まってるじゃん！」

3人はクスクス笑いながら俺にそう言った。あーイライラする。もうやだ。アホじゃねーし！

「んじや、今夜9時にここ集合なー！」

「わかった！」

「はーい！」

「おう。」

タケシ達と俺はここに9時に集合をすることを約束して、それぞれ自分の家に帰るために帰路に着いた。なんか……よくわかんないけど、嫌な予感がするな。

◆？

「おまたせ。」

「遅いぞー!」

「ヤマト声抑えろ!」

「2人ともだよ。」

俺が9時少し前に着くと、既に3人とも到着していて、暇そうにしていた。お前ら一体いつ来たんだ。俺は遅くねえ。

「んじや行こうぜ。」

タケシがそう言って歩き始める。その後ろを、俺達は静かについていく。どうやら、タケシが抜け出す方法を知っているらしいので、それに俺らは従うことにした。歩き始めて十数分がたった。

「おいタケシ。まだなのかよ。」

「私疲れてきた。」

ミツルとカオルがタケシにそう言った。俺は大体時間がかかると思ってたので、特に文句はない。

「あともうちよつとだぜ。というか、このあと森まで歩くんだからここで疲れてたら無理だぜ?」

「そ、そうだな。俺がこの程度で疲れるわけないだろ。」

「私もまだ頑張れるよ。」

2人はそう言った。というか、森まで数十分はかかる筈だよな……。まあ、大丈夫か。

「着いたぜ。ここの穴だよ。」

『おおっ。』

タケシが見せてくれたのは、人里を囲っている堀に空いている、大人は無理だけど、俺たちなら通れそうならい大きさの穴だった。ここらへんは滅多に人が来なくて、堀も俺らが普段見ているところの堀と比べると、ボロボロのようだった。

「んじや、行くぞ……。」

タケシがそう言って、穴をくぐる。それに続いてミツル、カオル、俺の順番で穴を抜ける。穴を通り抜けるのにそこそこ距離があったから、大きな木を使っていることがわかった。

「んじや、ここからはもっと慎重にいこうぜ。」

「そうだな。ヤマト、ビビるんじやねえぞ?」

「ビビるのはお前だろ？ミツル。」

「とりあえず森まで行こうか。」

『おく。』

俺達は森に行った数回の時に覚えた場所まで、先ほどよりも慎重に、足音を立てないようにして、誰かの後ろについて歩くことはなく歩いていった。他の奴らも一応注意してたけど、なぜか俺が一番警戒してたみたいだった。そして、俺が一番精神をすり減らしながら歩くこと数十分。正直ミツルとカオルうるさい中、

「へへ、やつとついたな。」

「お、おいもう帰ろうぜ。」

急にタケシがそんなことを言い始めた。ふざけるな。ここまできて帰るわけに行くか。

「なんだよタケシビビってんのか？」

「び、ビビってねーし！でも、なんか嫌な予感がするんだよな……。」

「とりあえず行こうよー。」

カオルがそう言った。またミツルとカオルが同時にうるさいことが言い始めたらめんどくさいので、先程まで率先して前に出していたタケシが変わって、俺が一番前を歩いて森の奥まで進んでいった。

「んー……なんも出ないな。」

「やっぱり妖怪の森なんてただの噂だったんだらうって。」

「そうだよ。それなのにタケシは……。」

俺達3人は、タケシの方を見る。この森に入ってからというものの、タケシはいつもとは全然違う様子になってしまった。一番後ろでガタガタ震えている。一体、どうしたのだらう。……でも、嫌な予感があるってこういう意見に関しては、俺も同じことを感じたのでかなり警戒している。そして、それから数分後、それは起こった。

「お、おい。」

「んっ？」

「あ、あれ……。」

タケシが指を指す。指した方向には、夜中の森の中で暗くて見にくけれど、何かが動いているのがほんの少しわかった。

「なんだあれ。人か？」

「私達と一緒にかなー？」

「そんなわけないだろ。」

俺にバカとか言っていたくせにバカ発言するミツルとカオルにそう言つて、念のためくすねてきた懐中電灯を照らす。最初から使いたかったけど、3人がいららないと言っていたので、後で嫌々言われるのは勘弁なので使っていないかった。その光は、それをはつきりと姿を現させた。一番前に、人のような体をしているが、化け物のような体を持つているやつと、そのうしろに、完全に化け物の姿をしていて、一番前のやつより少し小さいやつらが数体いた。あれが、妖怪の森の、妖怪。

『うわあああああ!!』

俺達は悲鳴を上げて走り出した。それに合わせて、妖怪達も俺達を追いかけて来る。懐中電灯で見たときは結構遠い距離だったので大丈夫だと思つたが、浅はかな考えだった。妖怪達は大人ぐらいの差は普通にあるし、身体能力も見た目通り化け物で、どんどん距離を詰めて来る。

「うわあああつ!!」

「タケシ君!!」

後ろでタケシの悲鳴と、カオルのタケシの名前を呼ぶ声が聞こえた。あまり余裕がない中振り向くと、タケシはどうやら、つまづいて転んでしまったようだ。すると、妖怪達は、タケシに群がり始める。

「やめてっ!!離してよ!!うわあ、うわあああああ!!」

その光景は、とても気持ち悪くなって吐き気がして来た。タケシは体を妖怪達にバラバラにされていた。内臓がそこら中に転がっていて、次に妖怪達が、タケシだったものを食べ始めた。俺達は何が起こっているかよくわからなかったが、俺の足元に、何か転がって来た。よくわからないままそれを見ると、恐らくタケシだったので来う血に濡れた目玉だった。

「は、早く逃げるぞ!!」

「お、おう……!」

「わ、わかった……!」

俺がいち早く状況を理解して、2人の手を引つ張って投げ始める。数十秒後、どうやら妖怪達は食べ終えたらしく俺達をまた追いかけてきた。

「2人とも、もつと速く走って!!」

俺がそう言っつて手を離すと、2人とも両手を大きく振って走り始めた。タケシのことは今は考えられない。走って、生きることしか考えられなかった。

「おわっ!」

突然、俺は体勢を崩して前に思いつきり倒れる。鼻から血が出る感覚がわかった。

「ヤマト!!」

「ヤマト君!!」

俺は何事かと思つて後ろを振り向く。すると、一番前にいて、一番身体能力の高かった、少し人に似た妖怪が、俺の足を掴んでいた。その妖怪の顔の表情はわからないが、どこことなく嘲笑っているようだ。

「は、早く2人とも逃げてくれ!!」

俺はなんとか頭が混乱せず、2人にそう言った。2人は苦しそうな顔をしていたが、少しずつ走り始めた。

「離せ!!離せ……このお!!」

俺は掴まれていない方の足で、片足を掴んでいる妖怪の手を何度も蹴る。しかしビクともせず、振動が伝わる掴まれている足に疲労がたまる。それでも、俺は何度も蹴り続けた。けど、他のやつも群がって来て、俺は諦めて空を見た。すると、赤い何か、こっちに向かつてるのがわかった。それは俺の近くに落ちて来て、妖怪もろとも俺を吹き飛ばした。……かと思えば、俺は空中で静止していた。よく回りを見てみると、俺は男の人に抱きかかえられていた。

「大丈夫か?」

男の人はそう言っつて俺のことを降ろす。すると、吹き飛ばされた妖怪達は起き上がって、俺と男の人のことを、狙いを定めたようにみて

いる。

「早く逃げろ。友達も先に行ってるぞ。」

「え、えっと、あなたはどうするんですか?」

「いいから、ほら。」

俺は促されるまま男の人の後ろに行かされる。男の人は、手に機械のようなものを持っていて、それを腰に当たると、金属のようなものが伸びて、腰をガツチリと固定する。

「さて、初運転だ。お手柔らかにお願いするぜ。」

『Ready』

男の人がそう言って、ベルトのようになった機械のボタンを押すと、無機質な音声が聞こえてきた。すると、人みたいな妖怪は、男の人に飛びつく。

「いくぜ……変身!!」

『CHANGE!!FIRE!!FIRE!!』

次の瞬間、身を焼くような熱い風が俺と妖怪達を襲い、飛びかかって襲いかかろうとしていた人みtainな妖怪は、地面に叩き落とされた。男の人は、元の姿ではなく、赤い体に、拍動するように光る線が入っていて、頭を守るヘルメットみtainなものがつけられていた。男の人だった人は、妖怪達に指をさす。

「俺の名前は……仮面ライダースルト!!冥土の土産に覚えていってくれよ!!」

そう言って、妖怪達に向かって走り出した。

## 番外後編 初戦闘と勇気

にとりからベルトを貰った日の夜。俺は妖怪の森を警戒していた。極力俺から手を出すことはあまりしない。人間の天敵だからという理由で簡単に手をだすことはしない。しかし、一応動きは見守る。人里へと向かうことがあれば、それは誰か死ぬことがあるかもしれない。それを防ぐためには、そうするしかないのだ。しかし、最近『ヒトガタ』という妖怪の上位互換の個体が現れてきた。他の個体よりも身体能力が高く、戦闘能力も高い。何度も俺も戦ったが、中々強敵で霊夢達も苦しめられていた。強力な個体が現れば、それだけ地形等に被害が出る確率が高くなる。だから、俺はそれを抑えるためにこのベルトをにとりと製作した。

「ん？」

夜なので割と暗く、見にくいのがわかった。全体を見るためにかなり高く飛んでいたが、滞空する高度を落とす。距離が遠くてわかりにくかったが、その光景が目に入った。妖怪が、子供を食べている。

「っ!!!」

俺はその場に向けて全速力で飛び始めた。食べられている子供以外にも、3人子供がいるようだった。なぜ、こんな夜に子供だけで外にいるのか……。確かに人里には妖怪という存在が認知されなくなっていた。博麗の巫女の役目も、妖怪絡みの事件を解決するものではなく、事件を起こす前に妖怪達を退治する役目に変わりつつある。しかし、安易に人里の外に出てはいけない。この風習だけは守られていたはずだ。人里は広い。なので人里内で生きていくのも十分可能だと思う。

「ッ!!やばいッ!!」

3人の子供の1人が、妖怪達に捕まった。他の2人はその状況に困惑して立ち止まっているが、どうやら、捕まっている子供が逃げるよう促し、嫌々逃げ出したようだ。よっしゃナイスプレーだ！俺は弱めの炎爆『ウルトラダイナマイト』を発動可能にして近くまで飛んでい



き、発動した。

「グギアアアアアアアツ!?」

「うわああああ!!」

熱波で妖怪と子供が一緒に吹き飛ばされる。俺は全速力で空中の子供をキヤツチする。先程捕まっていた男の子は、少しずつ目を開けると、驚いたように周りを確認し始める。

「大丈夫か?」

俺はそう言っちゃんとしてるようにゆっくり地面に下ろした。すると、妖怪達は立ち上がる。まあ、そりゃ吹き飛ばすだけだからダメージはないか。……うわ、ヒトガタまでいるじゃん、こりゃいい。ヒトガタは妖怪達を率いるリーダーみたいな存在。倒せば近くの妖怪達戦意喪失するんだが……その前に倒してしまうのが大体なんだよなあ……。とりあえず、この子を流さなきゃ。

「早く逃げろ。友達も先に言ってるぞ。」

「え、えつと、あなたはどうするんですか。」

おお、優しい子じゃないか。そんなことはともかく、早く逃げてもらわないと怪我をさせちゃうかもしれないから早く逃げてほしい。

「いいから、ほら。」

俺は、子供を少し押しつけて逃げるように促す。これで、少なくとも少しの距離を取って俺の後ろには移動した。俺は妖怪達の方に向き直る。そして、今日試作段階からようやく完成にまで至った、『スルトベルト』を腰に装着する。すると、ベルト部分が伸びて俺の腰をガツチリロックする。

「初運転なんだ。お手柔らかにお願いするぜ。」

『Ready』

スルトベルトのボタン部分を押すと、無機質な電子音が聞こえる。これで準備は整った。すると、ヒトガタは嫌な予感を察したのか俺めがけて飛びかかって来た。

「いくぜ……変身!!」

『CHANGE!!FIRE!!FIRE!!』

電子音と共に俺の体を熱波とともにスーツが装着される。熱波で

ヒトガタは空中にいて防御を取れなかったのか地面に吹き飛ばされた。試験段階で使った時よりも、性能が上昇しているのがよくわかる。脳からの伝達速度も速くて、頭が冴える。体が上手く動く。妖怪達の細かな動作も、視力動作補正でよくわかる。俺は妖怪達にスーツに身に纏った右手の人差し指を向ける。少し失礼かもしれないが、この名前を借りるとしよう。

「俺の名前は……仮面ライダースルト!!冥土の土産に覚えていってくれよ!!」

俺はそう言い終わると、妖怪達を退治するために走り始める。スーツを守ってない時よりも、明らかに走る速度が速い。確か、100mを5・2秒の速度だったはず。

「グルルオオッ!」

「オラッ!」

俺は妖怪の拳を最小限の動きで右に回避して右手で拳を握って胸部分を試しに1/2ぐらいの力で殴ってみる。すると、妖怪は大きく後ろに吹き飛び、殴った部分にはパンチの形の火傷跡ができていた。その妖怪へのトドメとして、全速力でダッシュする。妖怪も嫌な予感を察したのか、迎撃しようとして左脚を動かす。妖怪の蹴りは虚しくも空を切り、替わりに全速力で走った速度を乗せて思いつきり左足を妖怪の腹に命中した。そのまま妖怪は灰になってしまった。

「ギィィィッ!!」

「あぶねっ!!」

俺は左に全力で回転する。元いた場所には、ヒトガタが攻撃行動を終了していた。強烈な殺気放つなこいつ……。まあ、戦いの場だとそれは命取りになる。今みたいに、気配を悟られて攻撃を躲されることだって多くあるはずだ。多分、妖怪達は気配を隠す必要がなかったんだろうな。そりゃ、力であいてを殺していたんだから、隠す必要はないか。

「お返しだっ!」

俺は両手で1発ずつ攻撃直後の隙にパンチを叩き込み、左脚で蹴りを入れる。ヒトガタは後ろに衝撃で後退した。

「ふっ！」

俺はそのまま体を捻って後ろに左脚で回し蹴りを繰り出す。すると、予想通り後ろには妖怪がいて、右方向に吹き飛んでいった。

「ギャアアアア!!」

吹き飛ばされた妖怪の後ろからも妖怪が現れ、俺に右腕を叩きつけてきた。俺はそれを受け止めて右腕をしっかりと掴んで地面に叩きつけた。そのまま俺は空中に放り投げ、左脚で妖怪を妖怪に向けてダイレクトシユートする。

『ギャアアアアア!!』

妖怪2体は衝突して地面に倒れこみ、そのまま動かなくなってしまった。これで、取り巻きの妖怪はいなくなった。残りはヒトガタのみ。

「ギイイイイイヤアアア!!」

ヒトガタは俺に向かって取り巻きとは違って更に速く俺に飛びかかってきた。俺はそれを右に移動して躲しつつ、背中に右脚で蹴りをいれた。そのままヒトガタは地面に倒れる。ヒトガタが起き上がる間に俺はヒトガタとの距離を詰める。

「ギイイツー！」

「はああっ！」

ヒトガタは声を上げながら右、左の順番でパンチを繰り出すが、俺はそれを読んで受け止め、代わりに左、右の順番で胸を殴る。ヒトガタは後ろに交代しつても攻撃の意思を見せ、左脚で俺に蹴りかかってきた。俺はそれを右手で俺の右側に流しつつ、左足で顔を蹴り上げた。

「ギイイイイツ……い！」

ヒトガタは頭を蹴り上げられたことにより怯み、俺に対して明らかに隙を見せた。このチャンスを俺は逃さない。俺はベルトのボタンを押した。

『Chance!』

「これでトドメだ!!フィニッシュ!!」

『FINISH!!FINAL ATTACK!!』

電子音が響くと、両足に対する鼓動のようなラインのエネルギーの流れがだんだん早くなり、その鼓動は全て繋がる。俺はその瞬間大きく跳躍する。そして、空中で一回転し、一回転した勢いのまま、両脚で2連続の踵落としを繰り返す。俺はヒトガタの後ろに着地する。

「ギイイイイイイ……。」

俺はしつかりと立って後ろを向いてヒトガタを見る。ヒトガタは断末魔を上げて俺の方向を向こうとする。しかし、俺のことをしっかりと見る前に、その体は攻撃により熱にやり、灰になってしまった。

俺はベルトのロックを解除して腰から外す。すると、スーツは粒子になって消えてしまう。元々男の子がいた方向を見る。どうやら俺の言った通りちゃんと逃げたようで、もうそこにはいなかった。

「……さて、人里に向かいますかね……。」

俺は飛行を開始して、人里の方にゆっくりと飛行を開始した。明日の昼になったら、今回の戦闘をにとりに教えないとな……。

◆？

俺はミツルとカオルに比べて、遅れて帰ってきた。あの男の人はどうなったんだろ……。あの人も無事なのかな……。人里の出入り口

の門に着くと、ミツルとカオルは既に大人の人に保護されていた。

「あつ!!ヤマト君が帰ってきた!!」

「ほんとだ!!ヤマトー!!」

2人が俺に気付き、遠くから俺に声をかける。2人によって俺の存在が大人達に知られ、大人達のうちの2人が俺に駆け寄ってくる。それは、よく見るとうちの親だった。

「ヤマトー!!」

「ヤマト!!」

俺に近寄つてくると同時に、2人から頭に拳骨が振り下ろされた。久しぶりに食らった拳骨はめちゃくちゃ痛かった。頭の骨が割れるだろ!!

「この馬鹿息子が……!!」

「心配したのよ!」

拳骨を俺に食らわせた後、2人は俺を抱きしめた。苦しい。めっちゃ苦しい。っていうか痛い痛い!!ミシミシいつてる!折れる折れるっ!!けど、俺は何故か嬉しかった。同時に凄く安心した。

「さて、何があつたのか家で聞かせてもらおうじゃないか。」

「だから、家に帰ろうね。」

父さんと母さんは俺の両腕を片方ずつ持って、俺の足が地面から離れた状態で家に連れてかれた。俺は犯罪者か?

「君!」

俺の親が歩き出す前に、後ろから声をかけられた。その声を、俺はさつき聞いた。親に腕を離すように言うと渋々離してくれた。俺は男の人の方に走っていった。

「大丈夫だった?」

「は、はい!」

俺は今気づけば、男の人に丁寧に話していた。普段なら大人の人でも普通に話しているはずなのに。見た目は父さんよりも若くて、背は同じくらいで父さんより痩せてる。

「良かった。あ……お願いがあるんだけど……。」

「な、なんですか?」

男の人はかがんでいたけど、しゃがみこんで、俺に近づくように促す。俺はそれに従って近づくと、口を耳に近づけた。

「さっき俺が変身したの……秘密にしてくれないかな。そしたら、またお礼を渡すよ。」

「うん、わかりました!」

俺は返事をして親の方に向かった。姿が変わったときのあの姿はなんだろう。お礼とはなんだろう。そんな考えが俺の中にあった。けど、2人の秘密。それが俺をワクワクさせた。そんな考え中、俺はまた足を地面から離されて連れていかれた。嬉しくねえ。家に着いた後、眠る前に父さんと母さんに事を話した。ヤマトの提案で妖怪の森の噂を確かめに行こうとしたこと。こっそり4人で抜け出して、森に行ったこと。そして、噂の通り妖怪が現れて……タケシが食われたこと。それを話した。しかし、俺はちゃんとあの男の人が妖怪と戦ったことは話さず、捕まったときに助けてくれて、流してくれたとだけ言った。あながち間違いないから問題はないと思う。親は納得して、またお礼を言おうという結論を出して、俺は眠ることになった。

次の日、俺はドキドキしてすっかり寝ることは出来なかった。俺は朝食を食べながら、親から今日タケシの墓が、今日、仮だけでもできるという話を聞いた。俺は朝食を食べ終わって、いつも4人で集まっている場所に行った。寺子屋は特別に今日は休みになっていた。

「ヤマト。」

「ヤマト君。」

少ししたら、ミツルとカオルが同時にやって来た。2人とも俺と同じ気持ちだそう。ここに集まっているのが、3人ではなく、いつも4人だったら、良かったな……と、俺はそう思った。

「今日の昼に、タケシの墓が完成するらしい。」

「……そうなんだ。」

ミツルの情報に、俺は少し俯きながら答えた。正直なところ、自業自得だと気持ちも多少はある。けど、それ以上にタケシがいないことの悲しみの気持ちがあった。

「今日、私の家族と一緒に御墓参りにお昼行くんだけど、2人はどうな

の?」

「俺ん家もおんなじだぜ。」

「俺も。」

朝食を食べているときにその話は出た。いつできるのかは知らなかったが、できたら一緒に公墓参りに行こうと親2人に言われた。

「んじや、昼前にここで集合な。」

「ああ……。」

「うん、いいよ……。」

俺の出した提案に、2人は少し暗めの声で答えた。理由はわかる。昨日のお昼みたいだからだ。でも、あの時はタケシが対案を出した。でも、そのタケシはここにはいない。だから、暗くなっているんだと思う。俺だって心の中は暗い気持ちだ。けど、ここで暗くなったら、タケシにも、助けてくれた男の人にも悪い。だから、

「2人とも暗いぞー!なんなら昼まで遊ぼうぜ!」

『え……?』

「ほら、向こうで遊ぼうぜ!」

俺は2人の手を引っ張る。さっきいたのは何か話するとき、そして、俺達はいつも何か体を動かして楽しむときに集まる広場に来た。俺は2人を無理矢理遊びに参加させた。鬼ごっこや、缶蹴り、かくれんぼなどをして遊んだ。最初は暗かった2人の顔、もしかしたら、俺も含む3人の顔は、明るくなった。

「じゃあ、また後でな!」

「おう!」

「また後でね〜!」

俺達は一旦、家に帰ることにした。俺がかけた言葉に対する反応は、少なくとも明るくなっていた。俺は家に帰り、親と一緒に昼飯を食べた。食べ終わったら、お墓参りに行こう。そう言われた。どうやら、もう完成しているみたいだ。俺は早々に昼飯を食べ終わって、部屋に戻った。今はまだ2人とも明るい。けど、タケシは俺達の中で一番楽しいやつだった。だから、その代わりをする役割を、誰かが代わりにやらなきゃいけない。

「ヤマト、行くわよ。」

「うん、わかった。」

俺は母さんに呼ばれて部屋を出る。この際押し付けてなんかできない。俺ができることをやろう。俺達は親子で外に出た。外は雨が降っていた。そういえば、朝も曇ってたな。

「ヤマト、自分の傘はちゃんと自分で持てよ。」

「わかってるよ。」

俺は父さんにそう言われて傘を持つ。そして、移動を開始した。お墓に行く前に、まずはいつも集まっている場所に向かった。すると、そこには、もうミツルとカオルの家族がいた。親達は互いに挨拶を合っていた。それが終わると、俺達はタケシの墓に向かった。墓のある場所は、人気のない場所だった。いつもなら人が1人もいないことは不思議ではない。けど、俺達以外にも2人、墓の前にいる人がいた。それは、寺子屋の慧音先生、もう1人は、俺を助けてくれた男の人だった。慧音先生と男の人は、俺達に気付き、俺達の方を見る。

『こんにちは。』

俺とミツルとカオルの3人は、目の前の2人に同時に挨拶をしていた。

「こんにちは。」

「こんにちは、3人も。」

俺達の挨拶に対して、2人も俺達に挨拶する。それに続いて、親達も挨拶していく。俺達そんな親よりも先に、タケシの墓の前に行った。この墓の下にはタケシはいない。だって、タケシは俺達の目の前で妖怪達に食べられた。魂つてやつは、ここで眠ってるはずなんだ。だから、俺は目の前の墓に、心の中でこう言った。

(タケシ、今までありがとうな。)

俺はそう言って立ち上がる。すると、後ろから肩を叩かれた。俺の後ろには、いつの間にか男の人がいて、慧音先生や、親達も既にいた。

「ちよつといいい?」

「うん。」

俺は男の人に呼ばれて、少しお墓から離れた。少し離れたところに



行くと、男の人は俺の方を向いてしゃがんだ。

「あのこと、誰かに話したかい？」

俺はその質問に首を横に振った。約束は約束。親にも事情を話した時には、目の前の男の人のことは話したが、あのことは話してない。すると、男の人は顔の表情を緩くした。

「よし、じゃあこれを君にあげる。約束のお礼だよ。」

男の人は服のポケットから、赤い宝石を渡された。とても綺麗で、とても高そうなものだった。

「なんで僕に渡すんですか？」

「これは君の勇気の証だよ。いいかい？誰かが悪いことをしていたり、されてたりしたら、自分でできることはしっかりとやるんだぞ。友達がイジメられてて、自分で止めることができなかつたら、大人に言えばいい。でも、知らんぷりはしたらダメだからな。」

「うん、わかった。」

「じゃあ、俺は行くよ。」

男の人は立ち上がって、どこかに行こうとする。そういえば、俺も聞きたいことがある。

「ちよつと待ってください。」

俺が男の人にそう言うと、男の人は立ち止まって俺の方を向く。

「名前を教えてください。」

男の人は、少し笑って答えた。

「いいよ。俺の名前は、焰 炎火だ。何かあったら、俺にも言っいいからな。」

男の人は、そう言って、どこかに行ってしまった。俺はそれを数秒間見た後、みんなの元へと戻った。タケシはいない。だから、俺が明るいあいつの代わりになってやる。勇気を振り絞ってな。

## part 42 蜜の糖度を高める為に

「はあ…危なかったあ…」

俺は先程魔理沙に捕まりながらすっ飛んでいった患者、林野蜜音を見つめながらそう呟く。

というかアレ、大丈夫なんだろうか。結構な速度出てるけど能力は副作用あるから使えないからモロなのでは？Gとか風邪とかヤバそう。

「よかったわね、咄嗟に自分を制せて」

「本当に…医療従事者が患者に手を出すとかほんと洒落にならないのですよ」

「下手したら天狗に広められるわね」

「最悪の想定はご勘弁願いたい」

新聞でんなこと広められたら幻想郷で俺の居場所なくなるわ。妹紅と沈火に嫌われたら俺明日から生きていけない…死ねないんですけどね（蓬莱人ジョーク）。

彼女も凜乃や灯乃子と同じように、元々外の世界から迷い込んできてしまった一般人。しかし元々あの体質ということは、かなり人間関係に苦しんでただろうな…。

彼女の体から分泌される、異性を見境なく誘惑してしまうフェロモンに、虫と対話できる能力…。まあ、人との接し方なんて忘れるわな。出会ったのが魔理沙でよかった。妖怪連中と出会ってたらマジでめんどい。

というかマジで危なかったあ…。妹紅と沈火という存在がいなかったら間違いない俺の理性はぶっ飛びマックスハザードオン！になつてたわ。咄嗟に自分を殴ったのは非常にうまあじかと思われ。

フェロモン遮るために炎を纏ったとはいえ…次回からは同じように対応するのは非常に失礼な態度になっちゃうよなあ…。にとりに作成急かしにいくかあ。

「んじゃま、行きますか」

「どこに行くの？」

「ちよつと河童のところ。さっきの患者の件のやつです」

「ああ。尻蹴り上げてでも急がせるようお願いね」

「絶対やらねえ…。んじゃ、なんかあつたらサラとスカーレットに言ってください」

「わかったわ」

うし確認完了。んじゃま、いつちよいきますか！

飛びながら俺は思考する。みんなはながら飛行はやめようね。

「あだっ!？」

頭になにかがぶつかる。あんまり前を注意して見てなかったせいで何かはわからない。

と、このように危険だから気をつけよう！（反面教師）

魔理沙から聞いた話だと、飛蝗、蜂、甲虫の3種類の力を使ったらしい。

飛蝗は脚力、そして甲虫はその硬い外皮による装甲と、人間に例えるとトラックを引きずれるぐらいの力。

そして蜂なんだが…毒と、それを打ち込む為の針が具現化した。しかし、蜂といえは毒だけではなくその群れの習性、そして女王蜂の存在。

そう、蜜音の体質に通う点がある。確かに戦闘面で見した場合飛蝗や甲虫には劣るが…果たしてそれだけなのだろうか？

…ま、こうやって思考するのは似合わんなあ。行き当たりばつたりで生きてる方が幸せだな、俺。だって今似合わぬこととして頭痛いもん。

「ふあっ!？」

またなんかにぶつかった…これが父親かよおおお!!

「にとりく進捗見にきたぞ〜」

「おつ、盟友！盟友じゃないか!」

「きた！盟友きた！メイン盟友きた！」

「これで勝つる！」

「カカカカツ」

「お前ら仲いいな……」

河童の住処である妖怪の山の洞窟の中。俺がそこに訪れると、作業をしている河童達がワイワイ出てきた。

「どうかその人幻想入りしてないでしょ……。あれ？俺が幻想郷にいる間にもしかして幻想入りした？ちよつとそれはs yれにやらんでしょ……」

「んで？作業の方はどうだ？」

俺が河童に頼んだのは蜜蜂さんの体質……異性を異常に誘惑してしまふフェロモンを抑える為の装置、アクセサリーぐらいに納めて作って欲しいといった。

「……いや、わかってる。わかってるさ……これが物凄く無茶振りだっ  
てことは……」

「だって用途が限定的すぎる上に小型化もかなりしなくちゃいけない。河童はオバテクみたいな技術持つてるけど果たしていけるものなのか……」

「んー……注文通りの機能と形状までは完成したけど……やっぱりエネルギー関連がね……」

「え、いけたの？」

「まあね♪いやありがたいがとう盟友。中々考えて試行錯誤するのは楽しかったよ」

「ええ……やっぱ河童は戦闘力はさほどだが戦士とは違う強さがあるな。より現代的な強さだ。」

「んで？何が問題なんだ？電気とか妖力とかじゃだめだったか？」

「そう。やっぱりに人に合わせるとエネルギー源は霊力の方がいいかなあ……。電気だと充電しなきゃだけど発電できるのはここぐらいだし……。妖力だと人の体には合わないかも」

「下手すりゃ悪化……か。やっぱ霊力かなあ……」

「どうかよくここまで考えてくれたな。流石の信頼だ。余裕の会

話だ、内容が違いますよ。

さて、霊力となると俺と霊夢に蓬莱組…早苗…は霊力というより神力とかそっち方面だな。

「うし、霊力で補えるように調整できるか？霊力ならこっちでなんとかする」

「サンプルくれるかい？そしたら…小一時間で出来るよ」

はやっ。電気とか妖力とかとはまたかなりモノが違うのに。

さてサンプルかあ…ま、俺のやつ固めて渡しとくか。

「ちよつと待てよ…」

俺は目を閉じて集中する。霊力を固める。つまりそれは弾幕の「弾」を作り出し、それをもつと固く、硬く、堅く詰め込んで、余計なものも省く。

するとできるものがこちら。なんとあら不思議純白の無色な玉のできあがり。

「ほれっ」

「おわっ！サンプルなんだから丁寧にしてくれなきや私達が後で困るよー！」

「おおすまんすまん。んじや、俺はここで待ってるよ」

「ん。みんなー！これなーんだ！」

「そ、それは！」

「でかした！」

「もう待ち切れないよ！早くしてくれ！」

「よーし！じゃあ作業開始イ——！」

「イエヤアアアアアアアアアアアア！」

……なんだこいつら。

## 加工貿易に混じる不純物

「そろそろ…かな？」

小一時間待てと言われて待つこと多分1時間ぐらい。俺は川で釣りをしながら待っていた。

いや、こうやって釣りしてるときに話しかけてくれるのは全然いい。むしろ他人と話すのは好きだし思いやりを感じる。

だが意味のわからん釣竿持つてくんなッ！

なんだあの重量!? ガチで霊力フル全開で筋力強化しないと振ることができないってなんぞ!? 降った後の勢いで危うくドボンだわ！

その後普通に高性能な竿もらった。外の世界であるような。この落差よ。風邪ひくわ。

よって俺は無駄に高密度な霊力渡して霊力全力全開したせいで割と疲れた。うん。

「見に行くかあ」

釣りを引き上げて、俺は河童達のところに様子を見に行く。

「おお！ 盟友！ ちゃんとできたぞー！」

「お、おう…」

いやそれは確かにありがたいんだが…

「あびやあゝ」

「そうか… そうだったのか… ゲ○ター線とは…！」

「ぬわああああんつかれたもおおん」

「ピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコン」

後ろ死屍累々すぎん？ なんか虚無りかけてるし空手の練習終えたやついるし無駄にカラータ○マーの口真似アホほど上手いやつあるし。

というかやつぱりおかしいよな？ 絶対にウル○ラマンは幻想入りしてない。してるとしたらウル○ラQだよ。…いや、それはそれでお

かしいな。

「なあ、後ろの奴ら大丈夫なのか？」

「ふにゆ？ああ、まあ大丈夫大丈夫！」

「本当か???何名か存在虚無りそうなやついるけど」

「?盟友が心配してるようなことには多分ならないから」

「:な、ならいいんだが:。:なんかあつたら永遠亭に頼れよ、何かと世話になってるから鼻真にするぜ」

永琳先生も許してくれるでしょ。:許してくれるよね?

『さあ、どうかしら』

幻聴が聞こえる!?うわ、言いそう!凄く言いそう!

「う、うん、鼻真する:してみせる:」

「盟友大丈夫か?」

「ただ大丈夫jjj夫問題nヴツ:~!?」

「あつ」

「ア。ーツ!?サラ兄何してるんですかアーツ!?」

な、謎の影が激突して:!?ぎ、ギリギリ倒れなかつたぜ:。

なつ、ぬ、ぬおおおおお!?視界と音がブレるうゝ。

「マスターすみません!サラ兄お願い!」

「ん」

「あいてつ。ぐつ:~:おお」

ち、ちようにいい感じの痛みが俺の意識を正常に:。こ、この感覚、小さい手による強烈なチョップ:~:!

一体誰だ:~:あゝーマジで頭痛い。

「つて、サラとスカーレットか:。つまり犯人はお前らか」

「す、すいません:」

「ごめん:」

流石に反省しているようだし、どうやら故意ではなく事故っぽい。  
ならば許そう。俺はこの程度じゃ狼狽えない。

「め、盟友大丈夫か?」

「おう、なんとか平気だぜ。んで、サラとスカーレットはなんでここに?永琳先生が呼んでるのか?」

「呼んでる」

「サラ兄説明足りないよ…。えっと、人里でなんかあったらしいからマスターを読んでほしいって」

俺を人里の人が呼んでるってことは…自警団案件かな？ぶっちゃけ人里に元々いる人も一般人相手なら簡単に鎮圧出来るとは思うんだが…。

…まあ、俺を呼ぶってことは厄介なことだろうな。博麗神社は遠いしサラとスカーレット遣わした方が早い…か。

「OK。それじゃ、いつちよいきますか」

「あつ、盟友待つて待つて」

「んお？うおつ…と」

にとりが何かを投げると、俺はそれを咄嗟にキャッチする。

それは、イヤリング。しかしイヤリングに刻まれた模様は、どこか近未来的で幾何学的だ。

「それ、依頼されてた物だよ。渡された霊力で1週間は持つようになってるよ。わざわざもう一回取りに来るのも面倒くさいだろ？」

確かに。正直天狗の検問わざわざ通さなきゃならんのがめんどい。数分で終わるけど毎度毎度っていうのがなあ…わざわざズルするのもって感じだな。

「ありがとう。またなんかお礼に来るぜ」

そう言つて、俺は霊力を使って宙に浮く。ゆっくりと浮上している間に、いつの間にかスカーレットが胸ポケットに入り込んでいた。

「サラ、お前は永遠亭に戻ってくれ」

「えっ…」

サラが驚き、そして落ち込むように俯いてしまった。

「あーえっとな？サラが兎達見といってくれないと間違いなくサボるっというか…」

というか今現在進行形でサボってるはずだ。てるとか間違いなく悪戯の準備か悪戯してる最中だな。



「くしゅっ」

「てる風邪ー?」

「悪戯失敗するよー」

「やめるー?」

「い、いや、大丈夫ウサ。それより、アイツが帰ってくる前にこの過去最上級の落とし穴を、ぜーったいに完成してやるウサー!」

「「「おー!」」」

…いやな予感がする。帰った時は警戒しとこ。

「…うん、わかった…」

「ごめんな? 帰ったら竹炭を好きナだけ食べていいぞ」

「ほんと?!」

目をキラキラさせて俯かせていた顔をガバツと前に向ける。

欲望に忠実すぎない? まあ可愛いからいいけど。

「マスター! 私も私も!」

「わかったわかった! スカーレットにもあげるから!」

…また砂糖炭でも作るか。帰ったらエンジンフルスロットルだな。

「んじやいくか! スカーレット、方角よろしく!」

「あいやまかされた!」

どこで覚えたんだその言葉…

「到着…つと」

さて、俺を読んだ原因さんは一体どこだ? できれば既に解決されて欲しいんだが…。

「あつ、炎火さん! 来てくれたんですね!」

周りをキョロキョロしていると、知り合いの自警団の人が駆け寄ってきた。スカーレットはびっくりしたのかポケットの中に引っ込んだが、少しして再び顔を出した。

「一体どうしました? 見た感じそんな緊急事態に見えないですけど

…」

周りを見た感じ、そこまで騒がしいという感じはしない。

大体俺が参加する時って、自警団の人とかが対処できない妖怪とかを追っ払ったり退治したらが多い。

というかこの仕事霊夢が主にやることだろ。あの怠惰巫女め…そんなだから信仰が集まらないんだよ。

「いえ、鎮圧は容易だったんですが…状況がややこしいというか…とりあえず来ていただけますか？」

「わかりました。案内お願いします」

俺は自警団の人に案内されてついていく。

それにしても鎮圧は容易なのに俺案件？…なんか、凄いややこしい気がする。状況的にも人間関係的にも！

「諸事情で自分はここまでです。この先ですので、よろしくお願いします」

「わかりました」

そして、現場に着いた。なんでついていけないんだ？…悪寒が走る。

俺は自警団の人に示されて方向に歩いていく。すると、そこには非常に納得のするシルエツトが存在していた。

「…おい、状況理解したぞ」

「よっ、炎火！」

「…あつ、焰さん」

魔理沙と林野さんがいた。…つまりあれか。

「林野さん…ですね」

「申し訳ありません…」

フェロモンだな…間違いない。

確かに近くにいる自警団の人は女性のみだ。男性が近くにいると危険だから距離を離れたのか。

というかやっぱ優秀だな自警団。主に能力を持ってない人達で構築されが、その代わり判断能力に優れてる。

それにしても本当に難儀なものだな。確か多少の男性恐怖症を

患っていたはずだが、俺に怯える程度で済んでいるのは正直奇跡だ。

「林野さん、ちよつといいですか？」

「は、はい」

俺は林野さんと呼ぶ。やはり俺に怯えているようで、足取りは重く見える。

「私もついていくんだぜ」

「おう、正直助かる。すみません、ちよつと席外します」

「わかりました。事後処理はこちらにお任せください」

自警団の人にその場を任せ、3人切りになる。

林野さんは少し魔理沙の斜め後ろに立つようになっている。

「林野さん、あなたをこれをお渡しします。魔理沙、渡してやってくれ」

「任されたんだぜ」

魔理沙を介して、にとりから受け取ったイヤリングを渡す。

「それはあなたのフェロモンを抑える医療器具です。瞬間的に過度なフェロモンが出た場合は抑えきれませんが、日常生活程度なら問題ありません」

「!!」

いやあやはりダメ元でも行動してみるもんだなって思ったわ。出来ちゃうんだから、こんな超限定的な医療器具。

「あつ、あの、お、お金とかは」

「……あゝ」

そういえば、林野さんも幻想入りした人か。しかも日本人なら確かにそう思うよな。性格も相まって。

「大丈夫ですよ。俺個人からの善意なんで」

言わない方が良かったかな？

「そ、そんなつ…あ、ありがとうございます！」

やつぱ言つてよかったわ…。

いやあ、他人から感謝の言葉を貰えるのは嬉しいんじやゝゝ。気の掛け甲斐があるつてもんよ。

「あつ、1週間後に永遠亭にまた来てください。そのイヤリング、その

ままだと1週間しか持たないので」

「わ、わかりました！」

林野さんは深く頭を下げる。

「……………なんか恥ずツ！うわあ流石に顔には出さんがむず痒いな  
オイ！」

「んじや、私達は帰っても大丈夫なんだけ？」

「ん？ああ、自警団の人には俺から言っておくよ」

「ありがとうなんだぜ。蜜音、帰るぞ」

「は、はいっ」

魔理沙と林野さんは箒に跨り、空高く飛んでいった。

……………林野さんのめちやくそ大きな悲鳴が聞こえたのは気のせいだな。  
な。

「終わった〜？」

スカーレットがポケットの中から顔を出す。

「どうかこいつ寝てたな。目を擦ってるからわかりやすいぞ。」

「ああ、ほぼほぼ終わったぞ。もうちよつと寝てていいからな」

「わーい」

俺は自警団の人に事後報告の為、歩き出した。

家に帰ったら、アホほど大量の炭が失われた。お陰で霊力ほぼ尽きて倒れるように寝たわ。

妹紅の膝枕は柔らかかったです。

「これで終わりです。では、気をつけてお帰りください」

「…はい、ありがとうございます」

ああ…クソ、無駄な時間を浪費した。掛け替えの無い俺の砂金にも等しき時間が、多く失われてしまった。

「…クク」

嗚呼、しかし、とても大きな収穫だ。

あの金髪のやつと一緒にいた娘…おれは俺の手元で輝くのが最も相応しい。

手に入れ、隅々まで俺色に染まるように、犯し尽くしてやるからな…。

その男の舌舐めずりをする顔は、非常に闇深く、月明かりですら映し出せず、幸いにも誰の目にも触れなかった。